
とある少年の英雄目録

ラン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある少年の英雄目録

【Nコード】

N39910

【作者名】

ラン

【あらすじ】

少年は学園都市に住む無能力者の学生、のはずなのだが、超能力が当たり前の学園都市ですら、特異と言われるほどの能力を持っている。それはあらゆる異能の力を発現する能力——『幻想造り』と謳われる能力。これは、幻想殺しでも超電磁砲でもない——幻想造りのとある少年のお話。少年のお話は超電磁砲のとある少女との対決から始まる。

幻想を現実にする者―the - imagine - realizer

学園都市。

そう呼ばれるこの街は、東京西部に位置し、東京のほか、一部を神奈川・埼玉・山梨などにまで及ばせながら、東京都の三分の一を円形に占めている。

総人口は二三〇万弱。その内の八割は学生という少し変わった街。そんな変わった街の学生である、とある少年、竜野勇輔はとある河川敷に居た。

髪の毛、目の瞳の色共に黒く、顔は整っている、街を見ればそこらじゅうにいそうな凡人の一人。

そんな少年が本当にだるそうに突っ立っていた。

既に空は暗くなっており、『学園都市』に住む学生のほとんどは寮に帰宅している時間だろう。

もちろん一人ではない。

何も秋に入って夜風で耳がキンキン痛む今日この頃のこの時間、鞆を持ったまま制服の冬服姿で鞆片手に河川敷でぼけーっと突っ立っているほど竜野は物好きではないし暇でも無い。

そんな竜野の視線の先には、一人の少女が居る。その少女もまた、制服を着たままだ。

ただこれだけの情報を与えられただけでは、学校帰りに女の子を連れて何だよコイツ、彼女の自慢か？と思うかもしれない。

だが、この少女は、竜野の恋人とかそういう甘い関係ではない。

目の前に居る少女は確かに容姿も可愛らしいし、竜野だって男人以上、可愛い女の子と付き合いたいくらいという気持ちはある。だからこそ思う、「はあ、これが恋人とか友達とかそういう類の関係だったらどれだけよかったことか」と。

自信満々とも言うように立っている少女の着ている制服はこの

学園都市において超エリートのお嬢様学校の制服だった。

その学校の名前は常盤台中学。

例え、どんな金持ちだろうが権利者であろうとも、能力のレベルが強能力者以上でなければ入学を許さない超エリート学校。

そしてこの学園都市においては不良^Ⅱ暴力最強という公式は成り立たない。

超能力が科学で証明された街、学園都市では彼女らのようなエリートこそが強者なのだ。

今の所、この学園都市の頂点に七人、超能力者が存在する。

目の前の少女は、その七人の超能力者の一人、御坂美琴。
みさかみこと
能力は電撃使用。
エレクトロマスター

彼女はその電撃使用の能力を使い応用して、主にゲームセンターなどで良く使われるコインを音速の三倍で飛ばす必殺技をそのまま異名で、『レールガン超電磁砲』とまで呼ばれている。

対して竜野勇輔は無能力者。
レベル0

そんな明らかに実力差のあるうえ、学園都市の人口の六割にもなる、ありふれた無能力者の一人の竜野に何を感じたのか、初めて出会った時から勝負勝負と追い回されているのだ。

そして今日、不本意ながらも彼女の期待を裏切る為に勝負する事になってしまった。

もうこれ以上面倒事は御免こうむるから、というのが主な理由だ。

美琴の期待以下の結果を残せば竜野は結局ただの凡人か、と飽きられる為に敢えてその過ぎた期待を裏切る。

この少女と完全に関係を断ち切ってしまうのは何となく惜しまれ

るが、仕方ないだろう。

会ったびに電撃を飛ばされてきてはこちらの命が危つい。

「お前がオレに何を期待してんのか知らねえけど、期待に答えられなくても文句言っなよ」

頭を掻きながら竜野は吐き捨てるように言う。

彼の細い腕や、あまり筋肉のついていない体では想像できないだろうが、それでも喧嘩慣れはしていて、絶対ではないが、ある程度の体格差があっても一対一なら暴力を行使することに慣れている不良を倒すことだってできる。

だが、ただそれだけだ。

「……、」

竜野の言葉に納得がいけないというように、美琴は火花を散らす。まるで苛立ちを能力で表わしているように。

そう彼女にだって何の理由も無く彼を追いかけてまわして勝負勝負と言っている訳ではない。

彼に初めて会った日、全力の一撃ではないとはいえ、美琴の電撃を防いだ。竜野が何か特別な装備をしていた訳ではない。

彼が怯えたように、反射的に恐怖で出したのである。右手が美琴の電撃を完璧に防いだ、あの始めて無能力者^{りゅうの}に完敗した最悪の瞬間。

その時のことを思い出すと同時に美琴は右腕を勢いよく振り上げる。

振り上げられた美琴の右腕の右の掌に電撃が集まっていく。集められた電撃が一つの塊と化す。

「だったら何で、あの日、アンタは私の電撃をかすり傷一つ無く防いだのよッ？」

叫びと同時に振り上げた右腕を振り下ろす。

集束された電撃の塊がまるで槍のように飛ばされる。

雷撃の槍。

その雷速で空気を切り裂き、突き進む青白い槍は竜野に吸い込まれるようにその圧倒的な威力を以って牙をむく。

「ッ??」

竜野は反射で右腕が出る。自然と右手が盾になるように突き出された。

その右手には何の力も無ければ、電撃の槍で焼かれて手は二度と使い物にならなくだろう。

雷光で視界が真っ白になるのを竜野は感じた。同時に、竜野の視界に映る世界が変わり、見えるモノが一般人のそれと変わる。

雷撃の槍の及ぼす攻撃の余波で河川敷の砂が巻き上げられ、砂塵のカーテンとなる。

（やったか？）

美琴は竜野の居た方向から目を離さない。あの少年に勝ったこの瞬間を見逃すわけにはいかない。

砂粒が目に入るのを避けるように目を細めて竜野の居た方をじっと見つめる。

砂塵のカーテンがだんだん晴れていき、見えたのは右腕を前に突き出しながら、瞼を硬く閉じている竜野の姿だった。

「ッ!？」

気に食わないというように美琴は額から火花を散らす。

「……で、そのレベル0のアンタが何度も、私の電撃を受けて立っているのはどういう事なんでしょうかねえ」

竜野は自身が無傷だと言つのを確かめるように、右手を握りしめるのと開くのを二、三回行くと妙に自信に溢れたような顔で口を開いた。

「は…ははは、はあー。死ぬかと思ったー」

声が震えているが。

竜野は無能力者と言ったが、それは学園都市の記録上での話だ。
システムスキャン
別に身体検査を受けていないとかそんな馬鹿げた話ではない。

彼は、“異能の力”を扱える。

身体検査でも不安定でありながらも能力を使っている。

だが、その使用する能力が本人の意思と関係なく、種類が変わり、強弱まで変わるのだ。

考え方を変えれば、あらゆる“異能の力”を扱えてしまう力。

それが、神様の奇跡だったとしても例外ではない。

一時は、研究者の間で『デュアルスキル多重能力者』なのかもしれないという意見が出て、危うく人体実験のモルモットにされる所だったが、何でも学園都市の統括理事長が“竜野勇輔”に手を加える事を良しとせず、行われるかもしれない実験はなくなった。

超能力と判別していいのか分からないと言われている竜野に不思議な事に能力者なら、誰でも無意識のうちに発している特殊な力場、AIM拡散力場が確認できる時とできない時がある。

中学の教師の話によると、AIM拡散力場を発見できずに計測不能となっている生徒が、そんな異常を越えて特異な人間が竜野の他にもう一人いるらしい。

そんな、使ってる本人ですらもイマイチ理解できていない稀有なうえ、奇妙な能力。

それらの話だけでも実験して調べる価値があるのに、統括理事長は竜野に手を加えるのには許可が下りる事はなかったそうだ。

竜野としては、統括理事長が一体どんな人物か詳しく知らないが感謝の一言に尽きる。

特異な能力を持つ竜野だが、身体検査の際、竜野はその発生される能力が微弱すぎる為に、または、まったく能力が発現しないから等のそういう類のレベル0ではない。

この能力をどの強度にランク付けするかさえ難しいが故に与えられた。

Level 0
測定不能。

そしてこのチカラはこう呼ばれている。

『イマジンリアライザー
幻想造り』

幻想を現実にする者。

幻想を生み出す者。

幻想を造る者。

なんて言つと大層な名前だが今、この瞬間は名前負けはしていないと竜野は思う。

この能力は本当に役に立たない。

不良を一瞬で倒せる訳でも、女の子にモテる訳でも、お金が入ってくる訳でもない。

その上、いつも能力が発動できる訳でもないし、竜野の望んだ能力だつて使えない。

使おうとした時たまたま使えても、不良の喧嘩で能力者と出会つた時に、良くて強能力者クラスの出力の能力が使えるだけ。

もし使えても、勢いの乗ってきた所でイキナリ電池切れにでもなったように能力がぶつ切りになったりして、それ故に頼り過ぎれば喧嘩でも致命的にもなる。だからこそ、こんな能力は無い方がマシだとすら思っていた能力。

けれど今思い返せば、美琴と始めて出会つた時は明らかにそれ以上の何らかの力が発動できた。

たまにはそういう事もある。

つまる所、『幻想造り』は宝くじのようなものと竜野は思っている。

外れれば能力そのものが発動できないし、小さな当たりではレベル1、2程度。

で、今回は奇跡的に能力を発動できた。

それも超能力者クラスの電撃を防ぐほどの大きなチカラ。

つまり、今日、竜野は幸運なことに大当たりを当てたようだ。

竜野は自信に満ちた好戦的な表情をつくる。

正直に言えば竜野の“大当たり”はもう期限切れだ。

あの一瞬、電撃を防ぎ終わると同時に能力がプツン、と切れてしまった。

だからこそ竜野は余裕の笑みをつくる。

決してその心の内を悟られないように。

「はあ、こんな時に“大当たり”が出るなんてさ……ツイてなーよな、お前」

竜野勇輔は基本不幸だ。無能力者の不良との喧嘩の時、能力を使おうとしても能力は使用できず、本当にただの無能力者になってしまう程、幻想造り^{たからくし}を掠ることすらない。

だが、こうして超能力者を目の前にした時に強力な能力を生み出すことから、どうやら悪運だけは強いようだ。

ちなみに『幻想造り』は学園都市の“脳を開発する”事で生まれる一般的な学生の持つ超能力とは別で、^{生まれたときから}天然素材。

もちろんこんな能力は、学園都市の外に居た時はまるで発生しなかった。

だが、能力者達の居るこの街に入っ、まだ能力開発すら受けていなかったその時、突然使えるようになった。

そこから考えると、“能力を開発された”とは考えにくい。

まあ、この場では、超能力者、御坂美琴と対峙しているこの瞬間ではそんな事はどうでもいいことなのだが。

「もう止めねえか？ こんな事したって誰も良い思いしないって」

竜野は平和的に解決するために、戦意は無いと、両手をおろして提案する。

だが、竜野の視線の先にいる美琴は納得がいかない。
納得が、いくはずが無い。

己の能力をいとも簡単に右手を突きだただけで防ぐせに、決して本気で立ち向かってこないあの少年の顔色を変えさせるまでは美琴のプライドが許さない。

両手をおろして平和解決を望む竜野に対して美琴はバチバチと火花を散らす。

そっちの方がなくともこちらには戦意は大アリだと言うように。

「私は、アンタをぶっ倒せればそれで良いのよっ？」

返ってきたのは理不尽な答えだった。言葉と同時に、同じく電撃の槍が美琴の右手に形成され、放たれる。今日びゲームのキャラクターでも、もう少しマシな設定があるだろうに。

「なるおツ??」

竜野は電撃の槍が向かってくるのに対して今一度、右手を前に突き出す。

次は幻想造りを使いはいしない。だがそれでも迷わず右手を前に突き出す。

そう言えば、一つ説明を忘れていた。

先程、右手に“何の力も無ければ”電撃で焼かれて二度と使い物になくなる”と言った。

そう、何の力も無ければ雷撃に対して右手を恐怖による反射とはいえ、躊躇なく突き出せるわけがないだろう。

竜野の右手に特殊な力が宿っているからこそ電撃に対して突き出す事が出来たのだ。考えてみれば分かる事だ。もし幻想造りが竜野の身を守る能力を生み出さなければそこで竜野は死んでしまうのだから。

竜野にはある、“異能の力にのみ反応する特殊な右手”が。

バチバチイ？と激しい火花が散る音がした。

右手に当たると同時に、雷撃の槍が引き裂かれ“拡散”した。右手に当たった瞬間雷撃の槍が四方八方に散らばり、竜野に辛うじて当たるのを防いだ。

散らばった雷撃の槍が河川敷の土にぶつかり、攻撃としての意味を為さなくなる。

打ち消しではなく分解、拡散、もしくは掻き分け。

これが竜野の右手の能力。

この右手は完全に対能力者用の竜野のいつでも使える唯一の武器だ。

たまに居る、竜野と違って才能のあるくせ、少し能力に行き詰っただけで諦める不良と喧嘩した時に使える最大の武器。

これがあつたからこそ竜野は能力者との喧嘩でも相手を倒す事ができたのだ。

この右手は『幻想造り』の何ならの力の一部の副次的結果だと思われる。

手には奇跡など、そういった類の意味合いがある。

それは傷を負った時に本能的に手で傷を押さえたり、かばったりすることから見受けられるだろう。これは中世ヨーロッパにおいて、王が患部に触れる事で癒す、「ロイヤルタッチ」として知られるものと同列であり、こういったものは、今も文化の別なく広い範囲に様々な類型として存続している。

自然崇拜として神などの存在も生まれる訳だが、見えない力や気、エレメントと言った概念、これらも手に深くかかわっている。

だからこそ、幻想造りのなんらかの力の一部が右手に集まったと推測される。

もつとも、これは本人ですら知らない理屈で、全てを知っているとすれば学園都市統括理事長、アレクスター・クロウリーたった一人に限られる。

最大、十億ボルトにもなる電撃を防いだ竜野は、ゆっくりと顔を上げて美琴を見る。

そんなに戦いたいなら、しょうがない、今日だけは付き合つてやると言うように、犬歯を剥き出しにして、今日、初めて堂々と正面からの決闘を受ける。

「いいぜ、やってやるよ。来いよ、超能力者^{レールガン}」

竜野が右腕を体の前で構えて静かに言う。

「その言葉を待っていたわ。無能力者^{はけもの}」

竜野はいつも通りの戦闘スタイル。右手とどんな異能の力でも造り出すチカラが武器だ。

不良の喧嘩と同じく、ファイティングポーズをとり、右拳を強く

握りしめる。

美琴はニヤリと常盤台のお嬢様とは思えない好戦的な笑みを浮かべると、体中からバチバチイ??とより一層激しい火花を散らす。雷速は当然ながら見てからでは間に合わない。だから、電撃を放つ前兆があればすぐさま構えるのが常識的だろう。

悲鳴を上げそうになるのを我慢して、急いで右手を突きだす。しかし、竜野に電撃が襲う事はなかった。

「アンタみたいな化け物相手にはセーブする必要なんてないわよね。そうよ、今まで何でもこんなこと思ってたのかしら、『相手は人間、本気を出すのは不味い』なんて……」

本当にくだらない枷を、竜野相手にしていたとでも言うような自嘲するような笑い。

やけに冷静だな、と思った竜野は空の異変に気付く、河川敷の竜野の頭上、夜空が、雷雲で埋め尽くされる。

「あ、あの……これってまさか」

竜野は後ずさりしながらその人が起こしたとは思えない光景を見る。

今回も、怒りがあるのは間違いないだろう。

だからこそ、今度は所詮は手加減された雷撃の槍ではなく、落雷。落ちれば、一つの天災と扱われるその巨大なうえ、強大な力。それを人体で意識して放つ事が出来る異常さ。竜野はその光景にゴクリ、と固唾を飲み込む。

これが超能力者クラスの電撃使い。ただの無能力者とはスペック

の差が大きすぎる。

雷雲を見ただけでも、次に来るであろう雷の威力を想像してしまう。

意識しなくても、一人で軍一つと戦える超能力者とは別格だと改めて思い知らせてしまう。

（まったく、期待を裏切るつもりだったのに……どうしてこんな事になったんだろうな）

竜野は自身の行動を悔いながらこれから使う右手を確認するように一度開いて、握りしめる。雷が落ちてくるであろう真っ黒な雷雲を見上げて、さらに硬く、そしてより強く握りしめる。

火花を散らせながら、美琴が地面を力強く踏んだ。

震脚というには暴力的過ぎる、道端の空き缶でも踏みつけるような動作。

「……ッ？」

直後、本物の雷と同等か、それ以上の一撃が地に落ちた。
ゴオオオオオオオッ？？？、という耳の鼓膜さえ突き破りそうな轟音が竜野勇輔と御坂美琴の戦闘の 始まりの合図だ。

——
レベル⁰ 測定不能と超能力者^{レベル⁵}の戦いが始まる

原石 | f i f t h - e r e m e n t (前書き)

何故か最近多い元素使い。

被ってしまったが大丈夫なんだろうか。

原石―f i f t h - e r e m e n t

スキルアウト
武装無能者集団。

学校には通っているが、夜になると行動を起こす、簡単に言えば不良やチンピラの集団。

潜在的に、学園都市にはスキルアウトが一人程存在しているが、実際に能力者との戦闘用に『武装した集団』は全体の１％に満たない。

路地裏で、スキルアウトの四、五人ほどの集まりの中のリーダーのような人物が携帯電話で誰かと話している。

そのリーダーらしき人物は、金髪のいかにも不良っぽそうな少年。衣服の上にパーカーで下はジーパンという格好の少年だった。

「ああ、もうすぐだ。後は実行するだけだ。『^{レベル5}超能力者狩り』を」

能力者狩りは、スキルアウトが起こす事件の一つで、スキルアウトが能力者から嫌われる要因となっているが、スキルアウトは学区ごとの集団や組織によってその思想や現状は大きく異なる。

基本無能力者の集まりだが、能力者だろうが無能力者だろうが仲間に引き入れて楽しく馬鹿をやっている集団だってあれば、憂さ晴らしに能力者を大勢で囲んで半殺しにしたり、相手が無能力者であっても金を奪う為に暴力を振るう連中もいる。

だが、この場に居る少年の能力者と戦う理由は他の組織とは異なっていた。

その理由は、才能無い弱い人間を得た能力で痛めつける、ただ才能あるだけの人間を倒す為に行っている。そう言った、力しか持ち合わせていない、才能だけで非情なクソ野郎を倒す。

似たような思想を持つ組織として、^{こまはりごとく}駒場利徳率いる集団がある。

その組織とは仲良くやっていて、同盟関係のようになっている。

少年の名前は及川恭也。おいかわきょうや

「ああ、標的は決まった。第三位『ターゲット超電磁砲』」

「おいおい、一応俺も能力者なんだぜ。いいのかよそんなこと教えて」

「アンタは人を“能力者や無能力者”で判断しないだろ。別に俺だって能力者全てをぶん殴ってやりたいなんて思ってる訳じゃないんだって、それにだからアンタは俺とこうやって連絡とりあってくれるんだろ？ 布津道」

「……………そおか、まあ頑張りな」

「ああ、第三位には悪いが、もうこれしかないんだ。無能力者の負の連鎖を止めるには」

及川は静かに言った。

携帯電話を握り潰してしまうのではないかというくらい手に力を込めて。

その瞳は確かな意志を宿していた。

* * *

十一月下旬、防寒対策としてマフラーなどをまく人が少しずつ増えていく時期。

学園都市第七学区。

東京都西部を一気に開発して作られた学園都市。

その学園都市の中でも最も学生が集まり、一際大きい学区だ。

そんな第七学区のとある郵便局にとある少年は災難に見舞われていた。

そう事の始まりはようやく長い列を待ちに待ってようやくATMでお金を降ろせるそう思った時だった。

ただ手持ちのお金も季節と同じく冬に入りつつあったので訪れただけの郵便局だった。ATMの前に少年が立って操作しようとしたその時。

パァン！と一つの銃声が郵便局内に響いた。

そしてその銃声を聞いて少年、布津道隆樹ふつどうりゅうきは悲鳴をあげる訳でもなく、つまらなそうに……退屈そうに言った。

「はあ、メンドクセー」

言葉の後素早く頭を切り替えて布津道は冷静に犯人の仕草や言動をチェックする。

（何だこの犯人は？^{バカ} 誰がどう見ても焦りすぎだろ）

拳銃を持つ手は僅かに震えていて、初犯という印象を与えられる。焦りのせいか簡単に拳銃の銃弾を消費していく。

まず最初に動くなと言の意味で一発。その次に警備員アンチスキルでも呼ぼうとしたのであろう局員に最終警告として一発。

布津道の見立てではあれはただ一般人が体当たりしに行くだけで解決できそうな気さえする。

怪我をすることへの恐怖さえ拭えれば、の話だが。どんな奴でも相手は仮にも拳銃を持っているのだ。

そんな相手にわざわざ自分から突っ込んでいく勇氣ある人間はいないかと思つた時だつた。

ツインテールの小学生くらいの少女が勇敢にも向かつて行つた。

興奮氣味なのか周りの状況を読めていないようだつたのが氣になるがここは素直に褒めるべきだろう。

体勢を低く保つた状態で素早く犯人の男の懷に飛び込む。

小さくて的を絞れなかつたのか、撃つ勇氣がなかつたのか、それとも油断していたのか、男の動きは鈍かつた。小学生の女の子が足を踏みつけて、体勢を崩した所に後ろ回し蹴り。

少女は風紀委員なのだろう、中々に洗練された動き。
ジャッジメント

とはいえ小学生に倒される大人と言うのもなかなか残念な光景だつたのだが。

倒れた男は抵抗しようとしたが少女の全身の体重を乗せた片足で踏みつける事で意識を絶たせた。

犯人の手放した拳銃が偶然にも布津道の足元に滑ってくる。

面白そうなのもあるが他にも犯人の味方がいた時のため拳銃を回収する。

と、拾い上げるのと同時に花飾りを頭にのせている小さな少女が人質になつてしまった。

「チツ？ 何ガキにノされてんだクソがつ！」

倒れた男とは別の方向から声が聞こえた。

（もう一人居たのか。どちらかと言うと最初のは囧だつた可能性もあるが……）

もう一人の犯人は仲間の役に立たなさにあきれたように見て、もう意識を失っている男に怒鳴る。

だが、こちらの犯人はどうも余裕がある。人質をとった事による余裕ではない。手慣れていて、さらにまだ、とっておきがあると言わんばかりの雰囲気をも出している。そして経験の浅さのせいか風紀委員と思われる少女の顔に明らかな動揺の色が表われる。

「初春??」

引き裂く様な叫び声が郵便局内に響いた。

ツインテールの少女は悲鳴にも聞える声で放った言葉だった。

「あ…ばか（それ言ったら余計に状況悪くなるだろうが）」

布津道はやれやれという顔で見るが、冷静に考えてみれば小学生に友達を人質に取られているというのに冷静でいると言う方が無理かと諦める。

それ以上に小学生で何があるか分からない犯人に突っ込んでいったところを賞賛すべきだろう。

「へえ、これお前のお友達なのか。こりゃ好都合」

犯人の方はツインテールの女の子を見下すように見る、それこそ楽しそうに。そこからはまるで焦りが感じ取れず、その上かなり周りがみえているようで下手に先手を打ったりはしない。

（……だろおな）

他にも飛び出してくるバカはいないか、挑発をしている犯人。

簡単な話だ、まだ風紀委員が居る確率を考慮して疑っているのだ。確証はないが、動きからして風紀委員と思われるツインテールの女の子が腕章をしていないところを見ると、今は隠れている可能性は十二分にある。

その風紀委員がここで出ていくものならば、そいつは本当のバカだろう。

手の出しようが無い状況になり本当にその場全員の動きが止まる。

「仕方ねえ、そのバッグの中に工具が入ってる。それでATMを取り外せ」

男は、床に落ちているバッグを指差すとゆっくりとその指先をATMに向ける。

「金庫にたいした額がないのは分かってる。だからこっちの方を頂こうってわけさ」

ナイフを涙目になっているそのツインテールの少女の友達と思われる、花飾りの少女の首に今にも斬りこみそうなくらい近づける。

「風紀委員がお友達を見捨てるハズがないよな？」

もちろん小学生と言う事も考えての発言だろう。

風紀委員と言っても所詮は学生。さらには小学生となるとこの状況で判断能力が失われている事もあるしまだ養われていない確率を入れてのあくまで冷静な発言。

ツインテールの少女も同じで手詰まりと言ったところか。

ここで下手に協力しないあたりは小学生ながら褒めるにあたいする。

どちらも睨みあうような時間が数秒。

数秒後、突如警報と共に防犯シャッターが降りた。誰がやったのかは知らないが今この状況でこの場を閉塞空間にするのは望ましくない。余計な被害を出しかねないからだ。

（はぁ？ 誰だ何してんの意味分かんねえ。人の命より金優先かよここは、まあ構わねえけど）

舌打ちを思わずしてしまう。

警報が鳴ってしばらくすると警備ロボが受付の方から出てくる。

警備ロボがそれなりの速さで強盗犯に攻撃しようとする。

しかし動きは単調でちよっと能力を使えばいや、能力など使わなくても倒せるかもしれない。

が、その警備ロボの動きに合わせてその後ろを体勢を低くして少女も走っているならどうだろうか。

小学生くらいにしては良く考えた策だっただろう。

しかし強盗犯である男から余裕はなくなる。冷静に動きを観察し強盗犯は何かを取り出した。

布津道から見るとそれはパチンコ玉に見えた。

おそらくパチンコ玉にまでは気付いていないだろうが、異変を感じ取った高校生くらいの少女が飛び出してきて警備ロボとツインテールの少女の間に割って入る。

そして高校生くらいの少女がツインテールの少女の前に飛び込み割って入るとほぼ同時のタイミングで警備ロボが爆破される。

爆発で、高校生くらいの少女とツインテールの少女の体が吹き飛ぶ。派手に床に転がっていたので重症かと思ったが、傷はないようだ。

ツインテールの小学生くらいの少女の方だけは。

ツインテールの少女の方は助かったものの、高校生の少女は頭から血を流している。

「何が……は！？先輩！」

床を這いずりまわる様にツインテールの少女は高校生くらいの少女に近づく。

「手の内が…分からない間は突入しない……覚えておきなさい」

鉄の破片が背中に所々突き刺さっており決して軽傷とはいえない。それでも、ツインテールの少女に力を振り絞って声を微かだが出す。

絞り出すようにして出した言葉を言い終えると、気を失ってしまった。

「ど、どうして」

小学生の少女は叫ぶように何故自分を助けたかを聞くもそれ以上の答えは返ってこない。

「おい」

代わりに男の声が聞こえた。強盗犯の声だ。

振り向いた瞬間ツインテールの少女は蹴飛ばされる。

ちょうど顔面の辺りを。

大人と小学生の身長差で丁度蹴りやすい、いい感じの高さになっていたのだから、顔面に蹴りが深くそして重く突き刺さるような勢いではいる。

「オマエ、警備ロボに隠れて何かしようとしたよな」

蹴りによって小学生の少女の体が地面に転がる。

それでもこの状況を何とかしようとする手をもそもぞと動かす。

何かしようとした事に気付いた男は冷酷な顔で蹴飛ばされた事によつて倒れた少女の足首を踏みつける。

踏みつけられた足首から、グキツと嫌な音が鳴る。

ツインテールの少女の声にならない声が局内に響いた。

だが、それを見ても布津道は助けない。

何のアクションも起こそうとしない。

布津道は善人ではない。困ってる人が居たら誰彼構わず手を差し伸べるような人間ではない。

うざい奴には容赦なく自身の力を振るって壊すが、見ず知らずの相手の事を気遣って手を差し伸べてやるようなヒーローでは無い。

別に助ける道理は彼にはない。

どうせ何もしなければ自分は自動的に助かるのだし、その程度の時間なら目の前で起きている事件を見る事で暇つぶしになる。

それにもし、あの男が布津道に危害を加えようとしても布津道には彼を潰す手段など手に余るほど在り過ぎてそっちの方で困るくらいだ。

それだけの力を持っていて何故立ち止まる、と聞かれても彼はこう答えるだろう。

立ち止まっている理由が無かったとしても、なら見ず知らずの人間の為に動く理由もないだろうと。

布津道から少し離れた所で悲痛な少女の呻き声ととやめてくれと訴える花飾りの少女の声。

花飾りの少女は涙目で周りの人間に助けを求めている。

「あのバカみたいに俺もやれると思ったのか？ ナメやがつて」

しばらく足首を踏みつけられると痛みのあまりか呻き声すらなくなつた。

だがツインテールの少女はまた動きだした。

決して屈つしたりはしないと言わんばかりに左手を伸ばして。しかしその左手すらも踏みつけられて今度こそ動きが止まる。

「しつけないな。あんまり手間取らせんなよ」

犯人は容赦などはしない。当たり前だ、失敗すれば捕まるのだから。そこに人を思いやる感情をいれたら成功するものも失敗してしまつ。

故に冷酷だ。元の性格もあるのだろうが。

「も、もうっ、もうやめてください……っ！」

花飾りの少女の引き裂く様な叫びが局内に響く。

ツインテールの少女の動きが止まったのを確認して犯人は視線を外す。

その瞬間、花飾りの少女の足首をツインテールの少女の左手が掴んだ。

空気を引き裂く様な音と共に花飾りの少女の姿は局内から消えた。防犯シャッター越しにその少女の声が聞こえた。

はやく逃げてくれとのことだが返ってきた返事はまだ自分を飛ば

す事はできないと一言。

そして続けて少女は言う。

「それに……まだ事件が解決していませんから」

そう言って睨みつけるように犯人を見る。

その目は絶望の色は無く、諦めるどころかまだ希望があるとすら語っていた。

ただの小学生のくせに、と布津道は思う。

だけど。

だからこそ。

この圧倒的に不利な状況下で“自身の信念と善をみせたこの少女は助ける価値がある。”

鉄球を取り出した強盗犯の意識はほぼツインテールの少女に向けられている。

充分にあのツインテールを助けるだけの価値は見出せた。

これならもう動ける、そして動く価値があると布津道は確信した。そしてたいして距離もない強盗犯との距離を一気に詰める。

「強盗犯さん。その手に持つてる鉄球を離して両手を挙げましょーか」

それは布津道隆樹の声だった。

手には先程拾った拳銃を持っている。その銃口は強盗犯の後頭部に向けられている。

「ああ!？」

男が声に反応して振り返った瞬間。銃声が鳴り響いた。一秒も、一瞬の迷いなく引き金を引いた少年の顔に表情は無い。

「あ、ああああ……」

強盗犯は腰を抜かしている。その銃口からは銃弾が発射されなかった。

火薬の音は彼の能力で小さな爆発を起こした音だった。

銃弾は“抜かれていた”。確かに。

のはずなのに床には明らかに銃弾で撃ったような跡が残っていた。強盗犯の顔が恐怖に塗りつぶされる。得体の知れないモノを見た時の顔だ。本能的に理解してしまった目の前の少年には勝てないと対する布津道はまるで悪意に塗りつぶされたような汚れた笑顔で強盗犯を見る。楽勝なんだよ、クソ野郎が、とでも言うように。

「残念。弾は入ってませんでしたあ。まあ、俺もこの年で殺人犯なんかにはなる気ねえしな」

しかし、強盗犯には分かった、弾が入っていなくても床に跡を残した、その何かが当たっていたらここで尻もちすらついていなかっただろうと。

静かな郵便局の中でこの少年だけが異様な空気を発していた。

いや正確にはそう感じざるをえなかった。

犯人を前にして、怖気づくどころか、余裕の表情で接する少年は異常としか言えなかった。これではどちらが犯人なのか分からない。

「とりあえず、そこで眠ってろ」

小さく呟くと、布津道は銃の引き金を引く。

しかし今度は“火薬の音を真似た小爆発”も“床に銃弾のような

跡を残した何か”すらも発射されず、言うならスカツという擬音がふさわしいくらい、何も起きなかった。

「ははどうした能力は不発か？」

恐怖で満たされていた強盗犯に余裕ができた。

「バカ、ちげーよ、大成功だ」

と、思われた。

その言葉を聞き終わった瞬間、強盗犯の身体を重い衝撃が襲った。どこからではない。その上何時それが来たのかすらわからない。どこかを攻撃されたというよりは体の中心から全体に痛みと衝撃が走ったという方が正しい。

何の予備動作も拳動も反応も少年は起こしていないのにまるで身体の芯から指の先まで全てに均一に重い衝撃が、痛みが襲ったのだ。物理的には表わせない、よく分からない曖昧な力が。目には見えな
い何か。

言うならば説明のできない力。

たったの一撃、いや一撃だったのかすら分らなかった説明できない力は、目立った外傷もなく強盗犯の意識を刈り取った。

まるで、“意識という精神的な芯を折られた”ようなそんな感覚。周りから見れば何故強盗犯が倒れたのかすら分らないだろう。

地面に無様に倒れている男に布津道は静かに言う。

「^{ミス}テメエの不幸はたった一つ、この場に俺が居た事だ」

もう何も聞こえていないであろう強盗犯を馬鹿にすると、布津道は立ち上がり郵便局から立ち去っていった。

彼の異名は『フィフス・エレメント 五大元素』。

学園都市の学校側の認識と記録だけなら彼は^{レベル4}大能力者になっている。

アレイスター・クロウリー曰く、学園都市には大きすぎる力を持つ為に、普段は本気を出さない人間が居るとの事だが、彼は正しくこれに当てはまるだろう。

布津道の能力は人工的に開発されたものとは違い、自然環境の中で偶然能力開発と同じ条件を整えた時に生まれる『原石』。

原石は学園都市の能力者を人口のダイヤモンドとするなら、天然のダイヤモンドと言われている。

世界最高の原石とされる、^{そぎいたくんは}削板軍覇と並ぶ原石。
それが布津道隆樹。

「あー、だりー。“能力使い過ぎた”かもしんねーな」

頭を押さえながら、ふらふらした足取りで彼は寮へと戻る。
慣れないモノは使うべきではないと布津道は思う。

その途中、どこにでも居るような黒髪の少年が前を横切ったのがやけに記憶に残って離れなかったのは何故だろうか。その後ろにバチバチと火花を散らしてぎゃーぎゃー喚く、電撃使いらしき能力者

が居たが そいつは特に気に留める必要はなかった。

茶髪で瞳は黒、光を全てを飲み込むような、まるで人の心の闇を瞳の色に変えた様な黒。

そんな周りとは纏う雰囲気が違う少年は冷えてきた学園都市の道を歩く。

原石―f i f t h - e r e m e n t (後書き)

布津道隆樹という名前は、能力名である五大元素と関わりがあります。

それがどうという訳でもないんですけどね。

感想・評価・指摘・意見等お待ちしています。

気付かぬ者たち

学園都市の学生には生活費として奨学金や補助金がある。

これは実質、能力の研究成果の配分意味合いが強く、レベルが1ランク違っただけで差が出る。

そんな奨学金最低価格を与えられる無能力者の一人、レベル0竜野勇輔は決してお金に余裕はない。

学園都市の食物やジュースは安い。

これはお金の乏しい無能力者の学生には嬉しいことなのだが、そのほとんどは試作品などで、ヘンテコなジュースなどが当然のように売り出されている。安い理由はやはり試作品というのが大きいからだろう。

その代わり、子供の好きそうな物は全て価格が高く設定されているのはこの学園都市の暗黙の了解であり決して気にしてはいけない。寮の家賃や学食が激安なものには無能力者の貧乏学生、竜野勇輔はよく助けられている。

まあ、一度自身に宿っている能力のおかげで、ほんの数日、物好きな研究者に脳波を健康診断程度で数百万程、研究協力金として返ってきた時はビビってしまったが。

それに頼ることなくその数百万もの金額はいまも銀行に預けている。

そんな竜野勇輔は毎週週刊少年雑誌を読んでいるのだが、こんな事でただでさえ少ない持ち金を使うのは惜しまれるので、コンビニで週に二回に立ち読みをしている。

今から丁度、コンビニに行くところだ。

コンビニに入ると、いらっしやいませー、といつも通りの言葉が来る。

時折言っていて虚しくないのだろうか、何か返事した方がいいのかな、などと思ってしまう竜野だがコンビニに入ると一切の食品を見る事なく雑誌のあるコーナーへと向かう。

やはり発売日という事もあるのだろうか、既に三、四人ほどの無銭立ち読み犯が数人いる。

（あ、別に犯罪じゃないよ。お店の人からの評価は良くないだろうけど……）

そんな無銭立ち読み犯達の中に加わり、残っている最後の雑誌を手に取りうと手を伸ばしたそんな時だった。

誰かと手が重なってしまった。

その手は柔らかく、指の細さから、一概には言えないが何となく女の子の手だと分かった。

ドキーンッ？とこういうのには慣れない、なんだかんだで純情な竜野の心臓が跳ね上がる。

手が伸びている方へ横目に見ると、手が重なってしまった少女は常盤台中学の制服を着ているのが分かった。

「い、いや…あのすみませんっ！ まさかこんな所で暇な人間と同じように常盤台中学のお嬢様が立ち読みしているとはいざ知らず、竜野勇輔、一生の不覚です？」

竜野は周りの人が居る事を忘れて、全力で頭を下げる。

割と謝っているようで人を馬鹿にした台詞を混ぜている竜野だが、本人はテンパってるだけなので見逃してやってくださいと言いたいトコだが、相手としては良い印象は受けないだろう。

だが、目の前に居る常盤台中学の制服を身に纏う少女は言った。

「はあ、アンタこんな所で何やってんのよ」

その聞き覚えのある声に竜野は顔を上げると、茶色のショートヘアにヘアピンをつけている少女が居た。

「なんだ、超電磁砲^{レールガン}か、ふうよかった。急に展開される思わぬ出会いだと思っちゃっただろうが」

心の底から安堵の息を吐くと、つい先日、もはや死人が出てもおかしくない戦闘を繰り広げた相手にいらぬ事を言う。

「超電磁砲って……、間違っていないけど私の名前は御坂美琴^{みさかみこと}！ いい加減覚えろっ！」

額あたりから火花を散らしながらも、御坂は手を自身の胸辺りにおいて言う。

「いや、だってオレとお前ってそんな友好的な仲じゃなくねーか？
ってかそういう超電磁砲もとい御坂美琴もオレの名前知らねーだろ」

そう言って今度こそ竜野は週刊少年雑誌を取ろうとするが、美琴の手によって止められる。

「知ってるわ！ アンタの名前は竜野勇輔、柵川中学二年四組、能

力はム力つくことにレベル0」

「げっ、何でそこまで知ってんだよお前。怖っ!？」

淡々と告げる美琴を見て、竜野は後ずさりしながら驚く。

周りの学生が迷惑そうな視線を送っているのに二人は気付かない。

「こんなの、私の能力使って『^{バンク}書庫』にハッキングすれば一発だつての」

「いや、それダメだろ。明らかに犯罪じゃ……」「うるさいっ!」お前の方がうるさい」

美琴は当然のように犯罪履歴を教えてくれるが、竜野としては戸惑い以外の何も生まれない。

というよりこう言うのって聞いた方も結構不味いんじゃない……と竜野は思わず気にしてしまう。

この少女と一緒に居るとそれなりに平和に日々を過ごしている、ただの中学生から犯罪の共犯者へとジョブチェンジしそうな気がしたのでコンビニから早々に立ち去る事を心の中で決める。

「うーむ、どうやらここで立ち読みしようと長居するのはオレの身に理不尽すぎる危機が降りかかってくる気がするので帰るわ。じゃな」御坂」

雑誌コーナーから視線を外してコンビニの出入り口へと目の前の美琴を避けて歩き出すが、美琴の横を通り過ぎたあたりで制服の襟首をぐいっと引っ張られるた。

「じゃなー、じゃないわよ! 私はまだアンタに用があるんだから」

大量の缶コーヒーを詰め込んだ白髪の少年が「？ 何だア」と言っていてこちらを見ている。

店の内装はそこまで傷付いてなく床や天井が少し焼けた程度だったのがまだ幸いだったのだろうか。

「あ……ははは、これって正に………」

竜野は冷や汗で顔面を埋め尽くしそうな勢いで汗を流すと電撃を放出し終えた美琴の手をとり、引っ張りながらコンビニを飛び出して言う。

今聞こえたツンツン頭の少年の言葉を。

「不幸だあーっ??」

腕を引っ張られる美琴は言う。

「え、ちよっ何？」

「ちよっ何？ じゃねーっ！ お前のせいでオレは共犯者へとジョブチェンジしちゃっただろうがッ？」

何故美琴まで引っ張ってきてしまったんだ？と竜野は自身の行動を悔いながらもコンビニから全力で立ち去る。

学園都市を全力で走りながら、本当に何でこんなのに関わっちゃったのだろう？と疑問に思わずにはいられない竜野だった。

* * *

おいかわきよつや
及川恭也は、『準備』をしていた。

このまま日々が過ぎれば、いつしか本格的に始まりかねない『無能力者狩り』を防ぐための『超能力者狩り』。

いつも通りの衣服の下に、『ハードテーピング 発条包帯』を身につけている。

発条包帯とは、パワードスーツ 超音波伸縮性の軍用特殊テーピング。

筋肉を補強し、パワードスーツ 駆動鎧と同じくかなりの身体能力を手にする事が出来る。

言うならば、駆動鎧を軽量化したものだ。その代わりに、安全装置が無いせいで急な激しい動きに肉離れを起こす可能性もあるのだが、相手は超能力者、それくらいのリスクは背負って当然だ。

警備員の武装になるはずの道具だったのだが、そのリスクのせいで廃棄となった極めて体への負担が大きい。その負担を少しでも減らすために低周波振動器を使って、常に筋肉を準備運動を終えた状態くらいにしている。

低周波数治療器は超電磁砲の前では、無力と化すだろうが、初撃だけでも負担を減らせるなら充分使う意味はある。

レールガン 超電磁砲の能力の詳細は調べがついている。

実際に恐ろしいのは必殺技とされる超電磁砲ではなく、その磁力を操ったり電撃を放ったりすることへの多様な用途とその応用性にある。

勝機はある。

（悪いな、超電磁砲。アンタに恨みがある訳じゃねえ。だけど、俺達無能力者が超能力者を倒す事でしかこの才能ががくえんとし全ての世界から生き延びる術はないんだよ……ッ？）

自然と手に力が入る。

足は震えた。

汗が止まらない。

相手は軍一つとだってやり合える超能力者。
怖くない筈が無い。

それでも才能が全ての腐ったシステムを生んだ、この街の常識を
ぶち壊さなければならぬ。

無能力者が超能力者を倒したという事実はそのシステムを打ち砕
くはずなのだ。

だったら、怖かろうがなんだろうが立ち上がる。

『欠陥品の無能力者は能力者の肥やしになるべきなんだよ』

いつの日だったか、まだその時は及川はスキルアウトの組織に入
っていなかった。

無能力者の友人同士で馬鹿をやっていた時、急に数名の能力者達
に襲われ、散々な目に遭った挙句、最後に言われた言葉が忌々しい
事に、今になって頭の中で再生される。

無能力者を欠陥品のように扱う一部だけど増えつつある非情な能
力者を喰い止めるには、その頂点である超能力者を討つ。

才能が無くても本当の意味で生きる事ができる環境をつくる。

その為になら、何度だろうが立ち上がる。

決意する少年の瞳は決して揺るがない。

* * *

「まったく……。何でこうなったんだ」

現在竜野と美琴の二人は、いつかの河川敷に来ていた。電撃のお

かげで監視カメラもぶつ壊れたらしく、しばらくの間、後ろから店員さんの悲劇の声が聞こえたが、こればかりは竜野はどうする事もできないので全力疾走で学園都市を駆け回って着いたのがこの河川敷だった。

夕日を眺めて並んで座りこむ二人は第三者からすれば、恋人に見えたかもしれない。

よくよく見ると、少年の方の目がどこか遠い所を見ているが。

「あ、アンタが悪いのよっ！　いつまでたっても本気で勝負しないし……」

「だってこっちが拳振るおうとするとお前が……」もうそれはいいわっ？」「……はあ、ホント神様は何故可愛い少女にこんな暴力的な性格を与えたのだろう？　もしくは親譲りか？」

突然の竜野のカミングアウトに美琴は一瞬、肩をビクツとさせると、火花を散らし始める。

これは後に判明する事なのだが、人を振り回すスキルが軽く一〇〇を超えていそうな母親が美琴には居るのだった。

「暴力的で悪かったなボケーッ？」

直後、電撃が竜野を襲うが、ビビった竜野は河川敷の坂から転がり落ちる事で何とか回避する。

「せ、背中が……」

腰の曲がったお爺さんのように格好で背中を片手で押さえる竜野は、結構な痛みに呻き声のような声で言った。そのおかげで最大出

力十億ボルトの電撃から逃れられたのは奇跡的と言っても過言ではないだろう。

「本当にアンタム力つくわよねー。普段は隙だらけのくせに、こういう事になると不幸か幸か、なんだかんだで避けるし」

美琴は坂の下に落ちた竜野をに仁王立ちで見下ろす。

「なっ！？ 割と酷い事言いますね、常盤台の超電磁砲は。ってか常盤台のお嬢様って皆がそんなんなのか？」

「ただっと言いながら背中を押さえて坂を上る竜野は、痛みのせいか、それともコンビニ－軒分の電子機器全てを自身の所為ではないとはいえ壊してしまったことを後悔してか、目が死にかけている。」

「何？ もしかしてアンタってお嬢様とかいうのに少し期待してた？ 女の子相手に夢見んなよー、お嬢様つつても大抵はこんなモンよ」

火花を散らしながら当然のように言う美琴を見るといよいよ本格的にそう思えてきてしまう竜野はまだ坂の途中だと言うのにガクツと膝をつく。

当然、バランスが崩れる訳で、ごろごろと転がり落ちて、河川敷の坂の下に戻される。

「ってゆーか、今思ったんだけど別に無能力者が気に入らないならオレじゃ無くてもよくないか？ 少し変わってるてんなら噂に聞く“AIM拡散力場が一切、観測すらされない”無能力者が居るらしいしな。オレの場合は観測されなかったり観測可能になったり、変化したりなんてのだけどさ……」

頭をかきながら立ち上がり美琴を見上げる。

「それってアンタの方がよっぽど異常じゃない……」

「え？」

「え、ってアンタ、AIM拡散力場が変化するって事の異常さ、分からないの？」

そんな事を聞かれても、デカイ能力を放てる超能力者の方が凄く異常だと思っていた竜野には理解しかねる。

「つまり、それって能力の力や種類が変わってるって事なのよ。簡単に言えば例えば超能力者の演算能力と才能を以ってしても不可能な^{デュアルスキル}多重能力者じゃない」

「あー、似たような話された事あったな。そう言えば」

しかし多重能力者と似ている、同じと言われても竜野にしてみれば常時大抵が無能力の『幻想造り』がどうしてもそこまで大した成果を上げられるとは思えない。竜野はこころへんが頭の良い奴との差か、と心の内で思ったのと同時に美琴は諦めたように言う。

「ああー。本当にアンタに私の攻撃が通らないのがムカついてきた」

バチバチイ??と火花を散らす美琴。

「もう勝負は止めませんかあーッ??」

それを見た竜野は危機を覚えて全力で走りだす。

しかし、美琴は“追わなかった”

いや、そもそもいくら、いつも勝負勝負言っている美琴でもあの場面でキレル程短気ではない。超能力者の電撃を防ぎきるくせに、それを決して誇らず、割と普通に話しかけてくるのがム力つくのは確かだが。

走り去る竜野をしつかりと確認すると、周りには既に十数名の不良達が美琴を取り囲んでいた。

（さっきからずっと着けてきてたのにあの馬鹿は気付かなかったみたいだけど、私にはバレバレなんだつつうの）

衣服の上にパーカー、下はジーパンのリーダー格っぽい金髪のいかにも不良と言う雰囲気少年が美琴に言う。

「こんなトコで始めるのは不味いからな、ちゃんとした舞台を用意した」

そう言うのと十数名のスキルアウトは同時に歩き出す。

その全員の目が元から戦う為にやってきたと語っている。

いつものちゃらいスキルアウトとはどこか違々と美琴は違和感を覚えながらも着いていき、着いたのは暗い路地だった。

やけに広く、確かに大勢で喧嘩をしても問題ないくらいのスペース。

路地は埃っぽく、空気の流れは滞っていた。使えなくなった車などもあり、転がっているドラム缶の上に座る金髪の少年がやけにさまになっていた。

ここは、人工衛星になら何とか映るが、警備ロボは絶対にやって

こない、学園都市の死角とも言える場所だ。だが、人口衛星にすら映らないのであれば無能力者が超能力者に勝ったという事実は学園都市側に知られないまま終わりがねない。そんな細かい事情を知らない美琴にとつてはストレス発散のいい機会か程度の思いでこの場に立っているのだが。

警備ロボなどが見回りに来ないことから、人がやってくる確率は低い。

表通りからは少し外れれば着くこの路地だが、こう言った所に来るのは大抵がスキルアウト。

一般人が通る事はありません。
わざわざ自ら危なそうな場所に近づこう人間なんて層々いないものだ。

おそらく付近に警備員でも居ない限り、表通りを通る人間にとつては能力者同士の喧嘩か、くらいで通り過ぎていくだろう。

だが、美琴の顔には余裕があった。
確かにいつもと比べれば多少人数が多いが、超能力者みさかみことがああ無能力者は例外としても、無能力者の集まりごときに負けるはずがない。単独で軍一つと交戦できる超能力者を舐めてもらっては困る。

建物の壁に体重を預けて、冷静に辺りを見る美琴には一切の焦りが無い。

当たり前だ。あつち弱者でこつちは強者。あんな例外が何人もいて堪るか。自身の能力をレベル1からレベル5まで努力によつて昇り詰めた美琴。

だからこそ無能力者の分際で自身の電撃を防ぐあの少年に勝ちたいのだろう。

美琴の電撃を防いでも誇らず、驕らない少年。

あの忌々しい無能力者に比べれば、目の前に居るスキルアウトなど、本気を出すまでも無い。

「よく分かんないけど、丁度ちよつとムシャクシャしてた所なのよ。相手になってやるうじやないっ?」

バチイイ??と激しい火花を散らす美琴を見ても、このスキルアウトは憶さない。

座っていたドラム缶から立ち上がり、金髪の少年は言う。

目の前の超電磁砲^{みさかみこと}だけにでは無い。

学園都市全体、この才能なき者は才能ある者に潰されていくシステムに向かって。

「悪いな、第三位。今から始めるのは喧嘩じゃない……………、革命だ」

無能力者である少年、及川恭也。

非情な能力者から無能力者を守る為の少年の戦いが始まるうとしていた。

気付かぬ者たち（後書き）

感想・評価・指摘・意見等お待ちしております。

無能力者―Level 0

茶髪で、全てを飲み込んでしまいそうな黒色の瞳の少年、布津道隆樹^{りゅうつき}は、薄暗くなってきた学園都市を歩いていた。明確に自身で何処に行くべきかを考えて歩いていた。

『アンタは“無能力者と能力者”で判断しないだろ』

おそらく今日行われるであろう超電磁砲を倒す事で無能力者を学園都市に認めさせ、能力者達の無能力者への評価を変える計画。

『超能力者狩り』

行くべき場所は及川恭也らスキルアウトの喧嘩の舞台。

スペースが広い上、他人に邪魔されず、それでいて人工衛星に映る、学園都市へ無能力者の価値を見せつけるならあの路地しかないだろう。

（クソッ！？ 俺は一体何してんだ。アレはあいつ等の選んだ道だろうが、俺には関係ねえだろ）

この計画はあくまで無能力者が超能力者を倒す事で完了する。

その場に布津道が居れば、それだけで計画が破綻してしまう可能性だつてある。

だが、布津道は歩みを止めなかった。

ヒーローでなくとも手を出す事ができなくとも、知り合いの結末くらい見届けよう、そう思える事ができた。

だからこそ、布津道は歩みを止めなかった。

夜の学園都市を歩く少年の歩みは速かった。

* * *

金髪の少年、及川恭也の一言で美琴を取り囲んでいたスキルアウト全員が一斉に飛びかかる。

拳を握る者、鉄パイプを振り回す者、バットを振るう者。

拳はともかく、残りの二つはまともに直撃すれば、人の意識を刈り取ることだってできる。

だが、美琴は一瞬も物怖じする事なく、溢れるように突っ込んでくるスキルアウトを睨む。

直後、バチバチイイ？と美琴の周囲に激しい電撃が流れる。

それは突っ込んでくるスキルアウト達の意識を一瞬で刈り取る程のものだった。

バタバタと倒れて行くスキルアウト。呆気ない、と美琴は思う。

片目を閉じながら、美琴は制服についた汚れをぴつと振り落とすと、残った一人のスキルアウトを見て静かに言う。

「で、結局アンタ一人になった訳だけど、逃げる？」

大抵スキルアウトに取り囲まれて暴力を行使しようとしてきた場合、美琴は一人残らず焼いて、その意識を奪い去る。

だが、このスキルアウトの中で、この金髪のいかにも不良っぽそうな少年、おいかわきょうや及川恭也は今までのスキルアウトにない雰囲気周囲に放っていた。

「いや、逃げはしねえよ。やっぱり超能力者は才能の塊だなと思っ

てさ、どおりで無能力者がクズに見えるような能力者も出てくる訳だ」

さてと、と及川は静かに言う。

「いくぜ、超電磁砲レールガンツ？」

「!？」

美琴は驚愕した。

ただ突っ込んでくるだけなら楽だと思い、電撃を放ったのだが何の能力も持たないただの人間の肉体でしかないその身体は既に美琴の視界から消えていた。

十数メートルほどは距離があつたにも関わらず、一瞬とも言える速さで及川は消えた。

「こつちだ」

美琴は自身の背中の方からの声に対して背を向けたまま、静かに答える。

「気付いてるわよ」

彼女は常に微弱な電磁波を発していて、そのせいで動物に避けられやすい傾向があるのだが、それは悪い事ばかりではなく、その電磁波の反射波を利用してレーダーのように周囲の物体を感知出来る為、死角からの攻撃にも対応できる。

美琴ほどになると視覚を奪われても、その電磁波のレーダーだけで空間を把握できる。

だから、後ろに回り込まれていた事には気付いていた。

だが、驚くべき事は、超能力を抜けば、ただの人間でしか無い身体であれほどの速度で移動した事。

振り返らず、電磁波レーダーの空間把握で及川に向かって電撃を放つ。

暗い路地が青白い電撃で照らされる。

だが、今度も所詮は無能力者でしかないスキルアウトに避けられる。

後ろで、たん、という音がした時には既に及川は美琴の前へ姿を現していた。

（やっぱり、何らかの能力を使っている訳じゃない。でも、どう考えてもアレは生身の人間が出せる速度じゃ……ッ??）

美琴がバックステップをして後ろに退く。

その直後、空気を切り裂く様な蹴りが振るわれた。
ブオン?という轟音が鳴った。それはもはや生身の人間の蹴りで出せる音ではない。

鋭い刃物のように振るわれた蹴りを美琴は体を擦じる事で辛うじて避ける。

だが、それで安心はできなかった。

轟音が消えたと思った瞬間、蹴りの振るわれた軌道上に衝撃波が発生した。

電磁波レーダーによって人並み以上の反射神経を有している美琴だが、それでもその身体能力そのもの人体の限界を超えていない。
たかが人間の蹴りのはずだが、その人体の限界を遥かに超えた速度で振るわれた蹴りの残した強烈な烈風は美琴の身体を軽々と吹き飛ばす。

吹き飛ばされた美琴の体が頭から壁にぶつかりそうになる。

そのままの勢いでコンクリートで出来ている壁にぶつかれば一溜まりもない。美琴は磁力で地面に自分の体を引き寄せる事で何とか衝撃を殺そうとする。

浮いていたその足が地についた瞬間、足首に相当な負荷がかかったのだろう。激痛が走り、美琴の顔が歪む。靴底に摩擦による熱を感じながらも五メートル程地面を滑ることようやく止まる。

ホッと息をつこうとした美琴だが、及川は美琴を休ませはしなかった。

「……………ッ??」

狙うは短期決戦。

及川をまだ、そこらへんに居るスキルアウトの無能力者だと思い込んでいる美琴を倒すには、全力を出される前にさっさと終わらせる事だった。そうする事で、互いの怪我も最小限に抑える事もできる。

及川はコンクリートの壁を踏むと、ドンッ?と爆発でも起きたような音と共にその名の通り弾丸のようなスピードで突っ込んでくる。美琴は咄嗟に自身の磁力を操る能力を使って全力で路地にあった廃自動車を引き寄せる。

壁を造ったことで一瞬安心した美琴の安息はすぐに奪われる。

ズドンッ?というショットガンでも撃ったのかという音がしたのと同時に、廃自動車を人間の蹴りが貫いた。

「まったく、何でもありね…………」

廃自動車を蹴りが貫いたときに弾けた破片が美琴の腕を浅く切り

込んだ。

腕に赤い線が刻まれ、赤い液体がフーッと流れる。

（これが、無能力者……？ どう考えても何らかの装備をしている
としか思えない。だけど、これだけの軽装で駆動鎧並の機動力と運
動性能をどうやって……？）

蹴りの衝撃波だけで体が吹き飛ぶ程だ、直撃すれば一撃で美琴の
体など粉碎するだろう。

それこそ、あの廃自動車のように体を貫かれて死ぬだろう。

バックステップして、空中に飛び、及川が先程蹴ったコンクリー
トの壁へ磁力で移動する。

驚くべき事に壁にはその足で蹴ったのであろう箇所にはくつきり
と足跡が残っており、その周囲は蹴った衝撃で砕けている。

「まるでクモだな……。だが、どうした超能力者ッ？」

恐ろしいを越えておぞましいほどのスピードで突き進む及川は美
琴への接近を容易に許してしまう。

「……これならどうっ？」

美琴は周囲、声と共に全方位に強力な電撃を走らせる。

容易に突っ込んで来れば、全方位に放たれた電撃は及川を焼いて、
その意識を絶つだろう。

及川は舌打ちをすると直進する体を無理矢理捻じ曲げて地面に腕
を突き出し、手をつき急ブレーキさせ

て残った運動量を横に飛ぶ事で電撃に突っ込んでしまう事を避ける。

「痛うツ……？」

物凄いスピードで突き進でいた方向を無理矢理曲げた事で、地面につけた手が摩擦により焼かれたような痛みが走る。左手を咄嗟に突き出したはいいが、あまりの摩擦力に皮膚がべろり、と剥がれてしまった。

それでも止まらないのは及川の無能力者狩りを何としても喰いとめたいという想いのおかげだろう。

その上、負担をかけ過ぎたせいか、常に筋肉を準備運動を終えた状態程度にしておいてくれる低周波振動器が壊れてしまった。

ここからは『ハードデベイング発条包帯』によって運動能力を上げた事で起きてしまつ、急な激しい運動による肉離れを起こす可能性と向き合わなければならぬ。

安全装置が無い為に体全体に多大な負担がかかる。いつこの筋肉がぶつ壊れてもおかしくは無い。

だが。

だからどうした、と及川は思う。そんな小さな事はどうでもいい。肉体の安全の保証が無いにも関わらず、一切の加減無く地面を蹴る。

美琴へ列車をも追い抜きそうな速度で突っ込む及川。その空気を切り裂く蹴りを振るうと同時に、体に電撃が走り、体が焼かれる感覚がした。

及川は一瞬白目を剥き、意識を失いそうになるが、頭をよぎる一つの言葉が、辛うじてその意識を繋ぎ止めた。

（まだ、やれる。俺は、まだ………戦えるッ？）

そして美琴の方もまったくの無事という訳ではなかった。蹴りの衝撃波が真空刃となって鋭くその脚と腕を切り裂いた。僅かだが、確実に襲う痛みで顔を歪ませる美琴だが、その痛みに声をあげる事さえできずに真空刃の後に来た爆風のような衝撃波によつて吹き飛ばされる。

宙に浮く美琴の体は磁力によつて壁との激突だけは避ける。

それでも毎回強烈な磁力によつて吹き飛ばされる勢いを殺す為とはいえ、相当な負荷が体全体にかかり決して無傷という訳ではない。だが、そんな状況でも相手に全力を出すべきか美琴は迷っていた。

相手は所詮、無能力者。

竜野勇輔を除けば、美琴が全力を出しても殺すどころか、傷一つつけられないような無能力者は居ないハズなのだ。あんなイレギュラーはあの少年一人で充分。

それに、仮にここで全力を出して本気で電撃を放てば、及川やここに倒れているスキルアウト全員が一瞬で灰と化すだろう。

だが、ある程度の手加減では、彼の運動性能に追いつけずに、戦闘が長引く。

（本当にやりにくいわね……、こういうのはッ？）

美琴が火花を散らせるのと同時に及川が立ち上がり、地面を蹴った。

ドンツ？という爆発に似た音と共に迫りくる及川。

美琴は連続して電撃を放つが、それを及川はジグザグに動き、時には壁を蹴り、壁から壁を蹴って動く事でその全ての電撃を避ける。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおッッ??」

咆哮と共にジグザグに動きながらも確実に距離を詰めて行く及川。

（狙った時には既に動いて移動している。移動速度で攪乱されてうまく当たらないッ？）

美琴は舌打ちと同時にもう一度電撃を放つが狙いを定めて撃った時には既に移動してしまっていて避けられてしまう。

今度こそ一直線に向かって来る及川の右手は硬く握りしめられていた。

（やばっ！？ このままじゃモロに衝撃を受け……）

電撃を受けてもその拳は振るわれるだろう。

無駄と知りながらも電撃を全方位に放って、雷撃の盾をつくる。

衝撃に備えてか、痛みの恐怖による反射か、硬く目を閉じた美琴の耳に変な音が聞こえた。

ブッチイイイイツツ??と何かが干切れたような嫌な音。

いつまで経っても来ない衝撃に目を開けた美琴の目の前には、右脚を押さえて地面で蹲っている及川が居た。

「が、がああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああッッ?

「??」

絶叫。

少年の絶叫が夜の学園都市に響いた。

* * *

叫びが聞こえた。

竜野勇輔^{りゅうのゆうすけ}は、てっきり美琴を怒らせたと思い、飛んでくるであろう電撃から逃れる為に全力で河川敷から去ったのだが、しばらくしてもいつもなら飛んで来るくずの電撃と罵声が無いのに気づき、振り返ってみるとそこには美琴の姿は無かった。

もしかしたらどこかで危ない目に、と思ったがそれはまずあり得ないだろう。

彼女はスキルアウトなら軽く電撃であしらうだろうし、どうせまともに勝負をしてくれない竜野に呆れて帰ったのだろう、と予測していた。

内心ほっとした事は絶対に美琴に言わないでおこうと心の中で誓い、夜空の下を胸を撫でおろしながら歩いていた時に聞こえたのが、絶叫。

その叫びはやけに響いていたせいで、どこから聞こえたのかすら分からなかった。

周りの人たちも一瞬気にしたような素振りをしたが、すぐに関わるべきではないだろうと判断したのか、各々の目的の為に歩き始め

た。

だけど、それを放って置く事ができないのがこの少年の性である。別に、大それた理由がある訳では無い。

ただ、困っているかもしれない人間が近くに居る、それだけで動く理由にならないだろうか。

自身の手の届くかも知れない範囲に苦しんでいる人が居るのなら、それを黙って見て、立ち止まっている方がおかしいだろう。

周りの人たちだってそれに一瞬でも反応したと言う事はそうなのだろう。

それを行動に移せるか移せないか、ただそれだけの差だ。

自分なら助けてやれるかもしれないのだ。助けてやれなくてもその苦しみを理解することくらいならできるかもしれないのだ。その苦しみを少しでも和らげてやる事が出来るかもしれないのだ。

だったら危険だろうが不幸だろうが、思いっきり首を突っ込んでやろうじゃないか。

竜野は動く事が出来る。

誰もが事実^{げんじつ}に目を背けて去って行ってしまうこの世界で、竜野勇輔は走りだした。

* * *

脚の肉離れを越えて、筋肉が無理矢理急に激しく動かされる事によって起きた筋肉が裂かれたような痛み。

しばらく続いた絶叫が終わると、及川恭也の声が聞こえなくなつた。

地面に無様に転がっている及川を美琴は軽蔑するような目で見て、背を向けて歩き出そうとする。

あっけない幕引き。

先程まで列車をも越えそうな速度で路地を駆けていた及川の倒れている姿はとても弱々しかった。

結局、これが無能力者と超能力者の絶対的な差。

圧倒的な才能の差。

例え無能力者がどんな装備をしても、どんなリスクを背負っても、超能力者は全力を出さずとも簡単に倒す。

結局、学園都市に無様な敗北を見せて終わった。

——いいのか？

非情な能力者に無能力者の力を見せつけて、いつか起きるであろう無能力者狩りを止める事も及川には叶わぬ願いとなった。

——本当にいいのか？ これで。

無能力者の想いなど、能力者は簡単に踏みにじる。そこに悪意があるうとなかうと。

それでも、今ここで及川が歩みを止めれば、いつしか始まる無能力者狩りを阻止できない。

その引き金を引こうとする事に迷いは無かった。

「……………」

無言で御坂美琴^{レベル5}は及川恭也^{レベル0}に振り向いた。
お互いの視線がぶつかりあう。

直後、轟音が暗い路地に響いた。

無能力者―Level 0（後書き）

感想・評価・指摘・意見等お待ちしております。

三者三様

レールガン
超電磁砲。

メダルゲームのコインにローレンツ力で加速して、音速の三倍以上のスピードで撃ちだす、御坂美琴の異名であり、必殺技。空気摩擦でコインが溶けてしまうので射程は五十メートル程だが、美琴の超電磁砲用の弾丸を作ればそれ以上の距離と速度を叩き出す事も可能。

システムスキャン
身体検査ではまともに測定しようとする、能力測定器が壊れてしまうので手加減されており、それでもさらにプールの水を緩衝材として使わなければ測定ができない程の威力を誇る。

その圧倒的な一撃が、御坂美琴に銃口を向けた少年、及川恭也の拳銃を吹き飛ばすはずだった。

本来なら。

「アンタ……、一体何者？」

美琴の表情には驚愕と共に恐怖があった。

美琴と及川の間に割って入った茶髪の、どこまでも暗い、闇のような黒い瞳の少年が超電磁砲を防いでしまった。その後ろでは先程まで咆哮していた及川は気を失い倒れている。

レベル4では、いくら手加減されても超電磁砲を防ぐのは不可能なハズ。

つまり、この闇のような黒い瞳の少年は、レベル5認定されてもおかしくはない実力を持っているという事になる。

「メンドクサー事になった、知り合いが世話になったな、悪いが潰させてもらっぜ、超電磁砲」

少年の名前は布津道隆樹。ふつどうりゅうき

世界最高の原石、そぎいたくんは削板軍覇に並ぶ実力を持つ少年。
フィフス・エレメント
五大元素。

人に助ける価値を見出さなければ、例え誰であろうと手を差し伸べない少年。

力は持っていても、ヒーローなんかでは無いと自負する少年は、大きなこの世界から見たら、ちっぽけな人間の小さな望みを、それでも確かな光を宿している望みを踏みにじった人間を倒す為に立ちあがった。

「ああ、分かってんだ、お前は何一つ悪い事なんざしていねえ。むしろコイツ等の方が世間的に見れば間違ってるってことも……. けど、違えんだ。善悪じゃねえんだよ、俺の基準は……. よお？」

自身に言い聞かせるように言葉を口にしていた少年が最後の一言を叫ぶと同時に、布津道の周囲から強烈な風が吹いた。

その台風ですら比較できない烈風が美琴を襲う。

その烈風は美琴の体をいとも容易く体を吹き飛ばすはずだった。

だが、美琴も布津道が超電磁砲を防いだのを見た瞬間から、全力を出す事への躊躇は無くなっていた。

本来吹き飛ばされるはずの美琴の脚はしっかりと地についていた。磁力で体を床に全力で引き寄せる事で吹き飛ばされる事を防いだのだ。

その磁力は強力で、全身に烈風を浴びてもバランスは崩れなかった。おかえしと言わんばかりに右の掌に電撃の塊を形成する。形成された電撃の塊を腕を振るって飛ばす。

雷撃の槍。

美琴が全力を出してもいいと認めた相手に放つ、雷速で突き進む十億ボルトの青白い雷撃の槍。

その雷撃の槍は狂い無く布津道を貫く。いや、正確には貫いたように思えた。

先程と超電磁砲を防いだように、同じく防がれた。まるで、少年の前に見えない壁があり、それが防いでいるようだった。

美琴の全力を防いだ少年は何食わぬ顔をして、美琴を見ている。

その少年が右手を蜘蛛の巣でも振り払うように振るうと、莫大な炎の渦が美琴を襲った。

美琴は磁力でそこら中の鉄を集めて、盾を作る。

「げっ!？」

一瞬、ボウツ!という音がしたと思うと、あまりの熱のせいか、盾が溶けて無くなる。

磁力を使つて、壁の高い所へ飛び移る事でなんとか避けたが、磁力で作り上げた盾が無ければ、一瞬で美琴は灰になっていただろう。

（さっきの風といい、今の炎といい、多重能力者!? しかも強度^{レベル}は明らかにレベル4クラス!?）

布津道は拳銃を取り出すと、立て続けに引き金を引いた。

火薬の音は無く、特に変わった様子はない。

壁に磁力で張り付いたまま、首を傾げる美琴の横に、何かが吹き抜

けた。

そう、まるで拳銃で撃ちだされた弾丸のように。

「大した事ないな」

この一言は、別に挑発でも何でもなかった。

ただ、純粹に心の底から思った、超能力者と対峙して率直な感想だった。

彼の五大元素とは、『地』、『水』、『火』、『風』、『空』の五つを示している。

先程から、美琴の電撃を防いでいた、壁のようなものは、風と空を同時に行使する事で生み出した、布津道の中では最大級の盾だ。

郵便局でも使った、弾丸が装填されていないのに見えない弾が射出されたような銃を使った一撃は、風の弾丸が、銃口から出るのをイメージして、演算の負担を少しでも減らす為の手段でもある。実はどの攻撃も何らかによる補助がなければ、高度の負担で頭痛が起きてしまうのが唯一の弱点。結果、補助なしで出せる威力はレベル4が限界。

戦闘で使うのは主に火と風、そして属性同士をつなぎ合わせたり、属性に補強や新たな役割を与えることをできるようにする、空を使う。しかし、空そのものには攻撃力も防御力も無い。

龍樹の空観。

『空』は、存在という現象を含めて、あらゆる現象はそれぞれの関係性の上、成り立っているが論証された。つまり、現象同士をつなぐ関係性こそが、『空』。

弱点に当たるかどうかは難しいが、同じ属性は同時に行使できないという布津道の五大元素の制限がある。空を使う事で一つの属性がレベル5クラスに到達する。

そして、美琴の電撃を防ぐのは、風と空で可能という事が判明した今、全力を出す必要は無くなった。おそらく布津道はこの場から、一步も動く事なく勝利することだつて可能だと判断した。

それほどまでの圧倒的な差があった。まるで、超能力者^{レベル5}の序列第三位と、第二位、一位との圧倒的な差と同じ、勝負にすらならない。勝負して勝とうと思う事が馬鹿馬鹿しいと思えてくるほどの差。

美琴はその言葉を聞いて、壁に張り付いたまま、磁力の力で壁に垂直に立ちあがる。スカートのポケットから、コインが取りだされる。

全身から青白い火花を散らしてコインを指で弾くと、音速の三倍で光の槍と化したコインが布津道に向かって放たれた。

超電磁砲。

今度は手加減なく、コインを使って出せる最大の威力で放たれた超電磁砲。衝撃波だけでも、相当な威力を持つ一撃。数瞬遅れて、本物の雷と同じ音がした。

それでも、一撃は布津道を倒すまでに至らなかった。

それどころか、傷一つ無く、布津道は暗い路地に立っていた。

「なっ……何で、立っていられるのよ」

美琴は焦り始める。

自身の必殺技である超電磁砲すらも傷一つ無く防がれた。確かに美琴の能力は応用性が効く。

超電磁砲だけが全てでは無い。

だが、それでも、自身の異名ともなっているこの一撃を真正面からあかも簡単に防がれては戦意そのものが削り落とされてしまう。

「それじゃあ、勝てねえな……第三位」

布津道の腕を振るモーションで炎と風を空で組み合わせた、三つの属性を使った炎の嵐が不覚にも動きを止めてしまった美琴に向かって放たれた。

爆炎が風によって螺旋状に渦巻いている。轟音が他の音を全てかき消した。

美琴は磁力による壁の張り付きを止めて、地に降りる事で避ける。

降りる際に頭上に異様な熱気を感じた。

爆風によって叩きつぶされるような勢いで地面に脚がつく。

痛みによって美琴の顔が歪む。

「……っ!？」

地に降りる事は読まれていた。あの炎自体、美琴を地面に引きずり落とす為のモノだったのかもしれない。直後、暴風が美琴に向けて放たれた。

ゴオオオオオオオツツ??という音と共にその何者だろうが吹き飛ばし、体を切り刻む程の風が美琴に迫りくる。

美琴は恐怖による反射によって、目を瞑る。

だが、その誰だろうが吹き飛ばし殺すはずの暴風が美琴に直撃する

事は無かった。

「何だあ、テメエは……ッ？」

苦虫を噛み潰したような布津道の声が聞こえた。

「？」

布津道の言葉に疑問を覚えた美琴は目を開けると、少年が立っていた。

黒い髪に黒い瞳のどこまでも普通の少年が、布津道と同じく美琴の電撃による一撃を喰らっても立っている、無能力者のくせに特異な少年が立っていた。

少年、りゅうゆうすけ竜野勇輔は確かに御坂美琴の前に立っていた。

「何してんだよ、アンタ」

右拳を強く、硬く握りしめて。

「ああ？」

布津道は自身の能力を防がれたことに驚きはなく、むしろ能力を引き裂いた少年を気に食わないというような調子の声だった。

「御坂に何してんだって聞いてんだよ——ッ？」

竜野は怒りながら、この状況を不思議に思っていた。確かにさっき聞いた叫び声は美琴の声ではなかった。

目の前の美琴すら圧倒する少年の後ろでは、金髪のスキルアウト

らしき少年が倒れている。

これでは、まるで美琴がスキルアウトを一方的に倒し、その事実
に少年が怒り、守っていたようにすら見えるこの状況に疑問を覚え
た。

「何、知り合いがやられた。メンドクセーけど、ム力ついた、何と
なくソイツをぶっ倒してえ、そう思ったただけだ」

布津道は事実を話さない。今回は結局、どちらも悪と言う訳では
ないのだ。

学園都市を変えようとした無能力者にそれに巻き込まれた超能力
者も、そのどちらも。

だから、情けなどいらない。そんな理由など言っ
て、同情されては及川のやろうつとした事が無駄になる。

そう思った。

そんな真実は知らなくていい。

いや、もしかしたらそれ以上に、布津道の起こした強大な暴風を
右手一本で引き裂いた、この少年と戦いたいと思ったのかも知れな
い。

そう言えば、どこかで見たような少年だった。

何となくだが、興味を惹かれた。

「だから、かかって来な」

挑発の言葉をかけてみる事で少年を試す。

「御坂、お前は下がってろ」

美琴の前に立ち塞がる竜野は、美琴を前に出さないように腕を出す。

「ちよつ、アンタ！ 何カッコつけてんのよッ?? 私はまだ戦え……「下がってくれ……こつからはオレの喧嘩だ」……………」

言葉を遮ってそう断言すると、美琴は珍しく黙りこみ、竜野の後ろへ下がった。

それでも、下がりはしたものの、美琴の不安は拭えていない。

超能力者である、美琴を真正面から捻じ伏せる能力者をこの少年が倒せるとは思えない。

だが、竜野にとってはいつも通りだ。
能力者との喧嘩は慣れてきている。

スキルアウトやスキルアウトではない不良に絡まれている人を助けようとする度に説得を試みて、最後は喧嘩になっても異能の力を引き裂き、拡散させ、掻き分ける右手と、『幻想造り』を使い、そしてそれらに頼り過ぎず驕らずに、自身のその身体で、何とか切り抜けてきた。

今回もまた、誰かを助けようとして動いたら争いになった、それだけの話。

ただ、今回は相手が強いだけ。

その程度では竜野が立ち止まる理由にはならない。

「おもしれえ。ヒーロー気取りかぁ？」

「……………」

無言で拳を構える幻想を造り出す特異な無能力者に、この場をその圧倒的な力を以って制圧する世界最高の原石に並ぶ原石。

どちらも学園都市の手の離れた所で生まれた能力を有する者同士の戦いが始まった。

先に仕掛けたのは布津道。

先程と同じく暴風が轟音と共に竜野を吹き飛ばさんと放たれる。

「——ッ??」

右手を斜めに振るって、暴風を引き裂く。

引き裂かれた風は、その威力を失くして音も無く消えた。

右手を強く握りしめ、竜野は『幻想造り』の能力を使用する。

直後、左の掌に炎が造られる。ぱっと見て、レベル4クラス以上の膨大な炎。

左の掌に造りだされた炎が渦を巻き始める。

（よし、発動できたっ！）

竜野は、確かに能力が造りだされたのを見て、確認する。

「——ッ？」

腕を振るって炎を投げ飛ばすと、布津道も炎を飛ばしてきた。暗い路地が一気に熱に包まれ、明るくなる。

ポオッ?という音と同時に炎と炎が激突して膨大な熱を残して、消える。

まるで、竜野の幻想造りが布津道の能力と同クラスの能力を生み出したようだった。

相対的。

相手の一撃に対等の威力を持った一撃をぶつける

これが幻想を造る能力に相応しい結果だとも言つように。

爆炎の激突のせいで、路地に黒煙が吹き上げ、両者の視界を塞いだ。布津道はその場から動かず、竜野の動きを窺う。

さすがに容易には突っ込んでこないだろうと思つた瞬間だった。咆哮が聞こえた。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおッッ？
？」

黒煙に視界を塞がれているのにも関わらず、右拳を握りしめて、その拳を振るおうと、単純に真っ直ぐ突っ込んできた。

対となる、左の掌には雷の塊が形成されていた。竜野自身も驚いている、まさか連続して大きな能力が造りだされるとは思っていなかったからだ。

左手を振るうと青白い雷撃の槍が飛ばされた。

それは美琴の雷撃と同じ程度の能力を誇っていた。
バチバチイ？という音が路地に響く。

（コイツ、多数の能力を保持していやがるのか——ッ！？ それとも……）

布津道は噂の多重能力者に近い存在の少年に驚くが、あの超能力者と同じでは布津道の風の壁は貫けない。そう布津道は予測する。
超電磁砲の撃つた雷撃の槍以下なら話にすらならないのだ。

布津道の予測通り、雷撃の槍は布津道の風の壁にぶつかると、その防御力に負けて布津道に届かずに消える。

しかし、衝撃の余波で、両者のただでさえ見にくい視界をさらに見る事を困難にした。

だが、いやだからこそ構わず竜野は駆けて、右拳を振るう。

その拳は決して届かないはずだと、布津道は思っていた。

ただの拳は風の壁に阻まれて、届かずに終わる、と。

だが、竜野の拳は風の壁をぶち抜いて、布津道の顔面に突き刺さる。

「があ……ッ!？」

何が起こったのか理解できずに布津道は殴られて、その場に倒れる。

来るとは思っていなかった、いや正確には直撃するとは思っていなかった、ある意味で不意を突かれた一撃はかなり効いた。当たると分かって、それを覚悟した上で受けるのと思ってもいなかった一撃をもらうのでは、痛みに違いが出る。

それ以上に殴られるという感覚自体が慣れないものだった。

風と空の壁を常に全力で意識して発動し続ければ大抵の攻撃は無力化できる。

能力者だからこそなのかもしれない。

それに頼る様になってしまいが故にその体を使って、己が身一つで突撃する事を忘れてしまう。

肉体の耐久力だけなら及川の方が上、喧嘩慣れしている竜野の素人なりに殴り方を覚えた拳は効いた。

だが、倒れた布津道にそれ以上の追撃が来る事は無かった。喧嘩の結末は倒すだけでは無い。逃げる「負け」というのはゲームの世界

だけだ。

実際は、逃げのびて生き残ればそれで勝ち。竜野は、布津道の後ろで倒れている少年、及川を心配して逃げる事にしたのだ。このまま続けて、後ろの少年が重傷だったとかいうオチは避けたい。もしそうなら、さっさと診てもらった方がいいと判断する。

「よしっ！ 逃げるぞ御坂！」

竜野はこれ以上戦いを続けていいとは思えなかった。

何故だか、どちらかが間違つてるとか、理不尽な暴力を振り回していたとか、そういうのとは違うと直感的に思う事ができたのだ。

だから、布津道が立ちあがる前に立ち去る。竜野は、後ろを気にしながらも、美琴の手を引いて駆けだす

「えっ！？ 何で逃げるのよ！」

美琴が後ろで、ギャーギャー喚いていたが手を離してあの場に戻るうとはしなかった。

竜野は、後ろで喚く美琴に構わず薄汚い路地を走る。

暗い路地を抜けて表通りに戻ると、いつも通りの世界があった。

* * *

表通りに出た美琴を寮へ帰して、竜野は自分も寮へ戻る道を歩いていた。

「はぁ……、疲れた」

竜野は心底だるそうに言う。

脚の震えが止まらなかった。冷や汗がたらだら流れている。

今になって全身に鳥肌がたっているのに気付いた。

一歩間違えば死ぬ一撃は美琴との追いかっつこや決闘と同じだが、中身が違った。

本気で殺す気だった。

確かに布津道を殴り飛ばした右拳がやけに重く感じた。

（それでも……あの時、オレが割り込んだのは無意味じゃなかったはずだ）

十一月の終わり頃の出来事だった。

一人は無能力者を救う為。

一人はちっぽけな人間の確かな光を守る為。

一人は自身の意志を貫き名前も知らない誰かを守る為。

それぞれの想いを秘めた、とある三人の少年の邂逅は終わった。

三者三様（後書き）

感想・評価・指摘・意見等お待ちしております・

七月十六日―the-story-starts

システムスキャン
身体検査。

身体検査は能力の検査で、これでレベルの系統が測られる。

学園都市の生徒は普通、この身体検査は定期的に行われ、それを受けている。

七月十六日。

夏休みを控える七月十六日にその身体検査が行われていた。

柵川中学三年の竜野勇輔も当然ながらこれを受ける。

無能力者は能力が一つでも上がれば大喜びし、上がらなければいつも通りか、と少しブルーになってしまふ身体検査で竜野勇輔は戸惑っていた。

（あれ？ 何回やっても一切能力発動しないんだけど……）

『幻想造り』という特異な能力を持つ竜野ははつきりと、どの系統の能力に適性があるか決まっていなない為測りにくく、必然的に大抵後回しにされるのだが、いつもなら、ちよつとは発現する能力も今日はうんともすんとも言わない。

午前で終わる今日の身体検査では終えた人からさつさと教室に戻るせいか、今日は一番最後に測ることとなった竜野の周りには能力を持たない教師達しかいない。しかも、物凄くだるそうな顔で教師たちは竜野を見ている。

（……………帰りたいんですけどぉーっ！）

超能力は下準備無しで発動する為、何の能力も発現できないと相当虚しい時間が過ぎるだけだった。

「もういいぞ、竜野」

まったく能力を造り出さない竜野を見飽きたのか、それとも見兼ねたのか教師の一人が竜野の元へ歩いてきて一言。

何故だろうか。

去年の十一月の終盤。

美琴すら圧倒していた男と勝負をして以来、中々うまく能力が発動してくれない。

実は今日が本当に無能力で終えてしまった身体検査という訳ではなかった。

十一月以来、竜野からはAIM拡散力場すら観測されず、微弱な力すら観測されない、無能力者どころか、真の無能力者の結果を残している。

まだ五月ごろまでは本当に時々のおうえ、微弱だが能力が発動できた。

まったく能力が発動されなくなったのは、六月ごろからだった。

イメージリアライザー

『幻想造り』そのものが無くなってしまったような感じ。

まあ、元々発動しにくい能力だったため、十一月が異様だったのだ、と適当に結論付けてしまえるので、そこまで無能力者というのに不満を感じていないのだと思う。

相変わらず“右手”だけは健在だが。

「……、はい」

悔しいというより、あれだけの教師に見られていたのに、何もできなかった自分が恥ずかしかった。

まあ、“あれから”結構色々あったと竜野は思う。

約一か月ほど前には、同じ柵川中を不良から助け、春には常盤台中学の生徒を不良？から助け、その場を通りかかった美琴に何故か追いかけられたりもした。不良との喧嘩をしていたはずが、いつの間にか風紀委員のお世話になっていたりと言う事もあった。風紀委員のメガネのスタイルが良い？高校生には少しビビってしまったがまあ、何はともあれ身体検査が終わった。後は夏休みまで午前授業。適当に学校行っていれば、気付けば夏休みになっているだろう。身体検査を終えて、教室に戻って鞆を取り校門に出る。校門を出ようとしたその時、公然猥褻の現場を見てしまう。

「うーいーはあーっる？」

この柵川中学の女子の制服である、セーラー服を着た長い黒髪の少女が、頭に花飾りをのせている？少女のスカートをめくっていた。チラッと淡いピンクの水玉模様の何かが見えた気がするが、敢えて気付かなかった事にする。

竜野はあの二人を知っている。

先程言った、一か月ほど前に助けた柵川中学の一年生はあの長い黒髪の少女。もう一人は風紀委員にお世話になった際、スタイルの良い高校生と一緒に仕事をしていた少女だった。

（えっと、確かあの長い髪のが……佐天だっただけか？ あの花の髪飾りの方は、んー……覚えてねえや）

あの二人が知り合いだったとは、と内心想いつつ、なんだか理不尽な出来事に巻き込まれそうな予感がしたのでさっさと寮に帰ろうと竜野は心に誓い、歩みを速める。

（うん、アレは不味いよね。皆の目がもうダメですもん）

かなりの視線があゝの二人には集まっており、女子はひそひそ何かを話しているし、男子は微妙な視線を送りつつ、見なかった事にしようとしているのか、顔を逸らして歩き始めている。

竜野も周りの男子の様に校門を出ようとした、その瞬間だった。

「――！？ あつ、竜野さんっ！」

スカートめくりの現場を通り過ぎた辺りまで、歩いた時、後ろから声が聞えた。

声の主が誰かはすぐ分かった。

さてんるい
佐天涙子だ。

そーっと声の聞えた方向をなるべく体を動かさず、目だけで見ると、めっちゃこちらに手を振っている佐天が居た。

（あー、……幻聴が聞えた）

竜野は数秒立ち止るが、その後、耳を手で押さえて何も聞こえなかった事にして歩き出す。数歩地を踏んで進むと、後ろから走る足音が聞えた。

確実にこちらへ近づいてくる足音だったが、竜野は自分の前を歩いている誰かだと言う事を切に願う。

（あれー？ 何で足音が聞えるのかな、やべーよ幻聴がマジで聞こえるよ……）

「あー、聞こえない聞こえない」

竜野は自身に言い聞かせるように「聞こえない聞えない」を言いながら歩く。

「竜野さんっ！」

「佐天さん、さつきから反応しないし違う人じゃないんですかあ？」

おそらく花をのせているようにすら見える花飾りの少女の声と思われる、甘ったるい声が竜野の耳に届くと同時にガシィ！とがっちり両肩をロツクされ、竜野は前に進めなくなる。

「だぁーっ！ 何なんですかアンタらは？ そんなにオレをスカートめくりの仲間にしたいんですか？ 周りの視線が現在進行形で物ツ淒く気になるんですけどっ！」

竜野が振り返ると、さつきスカートをめくられたダメージが残っているのである。初春が周りを気にして挙動不審になっており、佐天の方はなんかいい感じの笑顔をしていた。

「あつ、見ます？ 初春の」

佐天が両手を不気味に構えて、悪戯っぽい笑顔を浮かべて言う。

「佐天さん、男の人の前ですよ。止めてくださいー」

涙目でぼかばかと拳と言うには弱々しすぎる拳をつくってパンチする初春。

まあ本気で殴る気はないようだし、当たり前と言えば当たり前なのだが。竜野はだるそうに、

「いや、さつき見たからいいや。というよりあの場に居た生徒には全員見られてたと思うぞ」

「見ないでくださあーい！ 忘れてくださあーい！」

初春が顔を赤くして叫ぶが、その姿は怖いというよりは、人を和

ませるような気がする。

そんな初春を少し戸惑った様子で見る竜野は、一つだけ質問してみる事にする。

「そう言えばさ、その初春、さん？　って確か風紀委員だよな」

「はい、そうですけど……それがどうかしました？」

不思議そうに聞いてくる初春を見て、竜野は視線を道に戻す。まあ、去年の話だし、覚えていなくても仕方が無いか、と竜野は思った。

それに、覚えていないというのなら竜野も初春の名前を覚えていなかったのだから。

「んー、やっぱいいや。大した事じゃないし」

それにわざわざ自分から風紀委員にお世話になったことなど言うべきではないだろう。

決して誇れる事ではないのだから。

* * *

「はあ……」

竜野が飲み物を買ってきて、取り敢えず近くのベンチに座って休憩している。喉が乾いていたせいか、缶ジュースを一気に飲み干す竜野の横で大きな溜息を初春が吐いた。

「どうした？ 初春、さん」

「さん付けなくても良いですよ、竜野さんの方が先輩なんですし。佐天さんを助けてくれた人でもあるらしいですし、佐天さんからもよく話を聞いてますし……それにしても酷いですよ……」

もう一度「はあ……」と大きな溜息を吐く初春。

そんな初春とは対照的に佐天は頭を掻きながら。

「ごめんごめん、調子に乗っちゃってさー」

謝る気ないだろ、と竜野に思わせるほど佐天は明るいのか適当なのか分からない口調で、両手を合わせて言う。その後佐天は自身のスカートに手をかけると。

「あ、代わりにあたしの見る？」

「ぶっ!？」

まさかの発言に、竜野は吹き出すのに対して初春は疲れたのか、「いいですよもう、佐天さんは」と言って顔を逸らす。佐天もその気はなかったのだろうし、冗談だったのだろうすぐに手を下ろした。そこで佐天は一番気になってた事を聞くように口を開いた。

「そう言えばどうだった？」

「どうって、何が……初春のか？」

竜野はとんでもなくデリカシーの無い言葉を口にする。

その場の空気が一瞬固まったのを誰もが感じた。ふと、竜野が隣を見ると、こう言っては初春に悪いが、可愛らしく睨んでいた。正確には睨んでいたのに可愛らしかった。佐天も体が凍ってしまった

ように動きが止まった。

「身体検査の結果」

佐天はさっきの竜野の一言を聞かなかった事にしたいのか、コホンと咳払いを一回すると、聞きたい事をピンポイントで聞く。

「あーそっちか。目まぐるしく話題が変わるな、お前ら」

「どちらかと言えば竜野さんが抜けている気がします。……、身体検査なら、全然だめでした。相変わらずのレベル1。小学校の頃からずっと横這いです。担当の先生からも、お前の頭の花は見せ掛けか？ その満開パワーで、能力値でも咲き誇れっ！ って……」

初春が少し声を低くして、担当の先生の台詞を真似て頂垂れるように下を見る。

「んー、その担当の説教にも色々とツツコミたい所だけど、取りあえず元気だしなよ。能力あるならまだいいじゃん」佐天が初春の隣に座って、指でオーケーのサインをつくり「あたしなんてレベル0。無能力者だよ？」

気にしていないとでも言うように佐天は言うが、初春は佐天に能力が無い事を気にしたのか、申し訳なさそうにする。

「でも、そんな事は気にしない。あたしは毎日が楽しければ、それでオッケー」

本当にそう思っているのかは分からないが、ウインクをして初春の顔をのぞき見る。

初春は佐天の様子を見て、嬉しそうに微笑む。

「佐天さん……」

「竜野さんはどうでした？」

「佐天と同じだよ。レベル0」

特に気を落とす訳でもなく、竜野は答える。

佐天も初春も、その態度をどう取ったのか竜野には分からないが、申し訳なさそうに黙る。

（え？　今、暗くなるような場面あった？）

別に竜野自身は能力が無い事を気にしてはいないが、無能力と言う事に不満を持つ者や、居場所が無いと思い込んでいる者がいるのは知っている。

スキルアウトの中にだってそう言う想いの奴がいるんだろうな、と竜野は推測している。

学園都市で無能力の学生と言うのは、それだけで学園都市側の対応も変わる。

先ず、分かりやすいのが奨学金。それから学校のレベル。常盤台中学が一番分かりやすい例だろう。

身体検査でレベル3以上でなくては、どんな権力者でも入学できないエリート校。

対し、竜野や佐天、初春が通っているのは誰でも入れる区立の柵川中学。

確かに周りに能力を持っている人が居ると、無能力者は浮いているような気分になるのかもしれない、居場所が無いと思ってしまう人だっているのかもしれない。

才能と言う壁にぶち当たって、諦めてしまう者だっているのかも

しない。

だけど、学園都市の人口の六割が無能力者なのだ。
無能力者でも、普通に学校に通って、友達を作って、遊んで、普通に過ごしているのだ。

だから、竜野は自分が無能力だと言う事は気にしない。
誰かを助ける為に動いて、助けたす。

決して誇れるようなモノで無い事は分かっている。

結局、相手を傷付けて、その代わりに誰かを助けてきたのだ。単純に賢ければ、もっと多くのものを手にしていたらうし、相手を傷付けなくても済んでいただろう。

それでも、無能力者にだって何かが出来る事を知っているから。
人の価値は能力の在る無しではないと知っているから。
だから竜野は無能力者でも構わない。

「ああ、これからどこか行くのか？ お前ら？」

竜野の問いにはっとしたように二人は顔を上げる。

「あたしはひつこにはじめ一一一のアルバムの発売日だから、それを買うのに付き合って貰おうと初春に声をかけたんですけど」

音楽プレイヤーを取り出して、一一一の曲を選曲しながら佐天は答える。

（うん、正確にはスカートめくったよね。声じゃ無くてスカートめくる事でコミュニケーションを取ろうとしてたよね）

竜野は頭の中で、過去を思い返すが、佐天がスカートをめくっている場面しか思い出せないのだが、どういう事だろうか。

「ダウンロードしたのに、CDも買うんですか？ それにダメですよ。念願叶い、“御坂”さんに会わせてもらえる事になったんです。学園都市に七人しかいない、超能力者（レベル5）、常盤台のエース御坂美琴さんにつ！」

何故か今、初春の口からめちゃくちゃ危険なワードが発せられた気がする竜野は、冷や汗をたらだら流す。そして同時に思った。

（バカなーっ！ アイツと会ったって良い事なんて少ないよー。気付けば勝負申し込まれるようになるぞー）

竜野は心の中で初春に御坂美琴は危険だコールを発信しているが気付かないようで、初春の瞳がキラッキラ光っている。

超能力者と聞いて。佐天は嫌そうな顔をする。

「常盤台の超能力者？ どうせまた能力を笠に着た、上から目線でいけ好かない奴じゃないの？ どう思います？」

佐天の同意を求めるような言葉は明らかに竜野へ向けて言われた言葉だった。

無能力者だからこそその嫉妬が、それとも単に高位の能力者に対して嫌な思いがあるのか、佐天の言葉は能力者を否定するような言葉だった。竜野はとある少女を頭に思い浮かべる。

その御坂こそ、紛れも無く竜野の知り合いの超電磁砲レールガンの御坂美琴なのだが、別に言う事ではないか、と思いつつ質問に対してちゃんとした答えは返さない。

なので、取り敢えず空を見上げて。

「さあな。所でどうしてそんな風に思うんだ？　佐天は」

佐天の気持ちが全く分からないほどでは無い竜野は取り敢えず曖昧な言葉で返す。

「だって、ああいう人たちってさ自分より下の人間を小馬鹿にするじゃないですか？　ム力つくんですよねー、それに常盤台のお嬢様なんて「いいじゃないですかっ！　お嬢様！」……え？」

そう言った初春は興奮気味に未だに瞳がお星さままでキラッキラしている。そんなある意味どっかのリミッターを解除した初春を戸惑い気味に二人は見る。

「いや、むしろお嬢様だからいいじゃないですかっ??」

初春は何故だか分からないが“お嬢様”というのに憧れているようなので、竜野から言える事は一言。

「初春よ。オレは、一人のお嬢様との出会いによってその幻想をぶち殺されたよ……」

竜野はどこか遠い所を見るような目をしながら言う。その目が語るのは苦悩の日々、

御坂美琴との追いかけたこの日々だった。

今、初春の中で理想像として出来あがっているであろう御坂美琴は、竜野の命を奪いかねない追跡者だという事をまだ知らない。

初春の様子を見る限り、彼女の中での御坂美琴とのご対面は絶対であり、決定事項らしい。

竜野は嫌な予感しかしないので、空き缶を偶然通りかかった清掃

口ボの前に投げ捨てて、逃げようと立ち去る。

「と言う事でオレ疲れたから帰……」「こんな機会、滅多にありませんよ。竜野さんっ！ 行きましよう？」「……ってアレ？ 聞いてました？ 初春さん、いえ初春様？ オレはできれば帰りたいって……聞いてる？」

立ち上がった竜野をその御坂に会おうとしている意志表示とでも勘違いしたのか、初春は竜野の背中を押してぐいぐい突き進む。色々言ってみるのだが、初春の前進は止まらない。

（最近の女子は人を強引に巻き込むのが流行りなのか——ッ！？）

初春に背中を押されながら、竜野は去年の秋に出会った、勝負にやたら拘るとある超能力者の顔を思い浮かべる。喚く竜野を初春はきつと喜んでいると勘違いしているのだろう。ぐいぐいと笑顔で突き進む初春。

そんな二人を佐天は結局追うのであった。

七月十六日―the-story-starts（後書き）

時間が一気に飛んで、七月十六日。

原作沿いのスタートと言う事でのサブタイトルです。

時間をかけた割に内容が薄かったような気がするのですがどうでしたか？

感想・評価・指摘・意見等お待ちしております。

とある少女たちの出会い

学園都市の第七学区のとあるファミレスの一席には、二人の常盤台の生徒が居た。

一人は茶色のショートカットの御坂美琴。みさかみこと 超能力者であり、超電磁砲という異名で呼ばれている、二年生にして常盤台のエースとまで言われるほどの実力の持ち主。

もう一人は茶色のツインテールの白井黒子。しろいぐろこ 美琴の後輩であり、風紀委員でもある。能力は発現しにくい空間移動能力者。テレポーター

美琴は頬杖をつきながら、心底嫌そうに言った。

「私のファン？」

黒子の方は、ティーカップを片手に極めて正しい姿勢で応答する。

「風紀委員の第一七七支部でわたくしのバックアップをしてくれている子ですの。……以前からお姉様にお会いしたいと、事あることに」

実は今現在、りゅうのゆうすけ 竜野勇輔を半ば強引に美琴達の元へ連行しているであろう少女こそ初春飾利なのだが、彼女がそこまで会いたいと願っている中々会えない美琴と、偶然か必然か遭遇してしまう竜野は運があるのかもしれない。

それが、幸か不幸かは敢えて言わないでおくが。

美琴は黒子の言葉を聞いて大きな落胆のため息をする。

「お姉様がファンの子たちに閉口されているのは存じていますわ。けれど、初春は分別をわきまえた大人しい子。それになにより、わたくしの認めた数少ない友人、ここは黒子に免じて一つ……」黒子

は言いながら、手帳らしきものを取り出して嬉しそうに「あもちろ
ん、お姉様のストレスを最小限に抑えるべく今日の予定はわたくし
が……ッ」

何故か少しニヤけながら語る黒子の今日のスケジュールが書いて
あるのであろう手帳を美琴が奪い取る。

黒子の顔は相当焦りを感じさせ、ダンツとテーブルを叩く様な勢
いで席を立て美琴に奪われた手帳を自身の手に取り戻そうとする
が、美琴の伸ばした手がつつかえ棒のように黒子の顔を押し、そ
の場に押しとどめる。

人を疑うような目で美琴は手帳を見る。

「なになに、初春を口実にした、お姉様とのデートプラン。その一、
ファミレスで親睦を深め、その二、ランジェリーショップで勝負下
着購入、その三、アロマショップで媚薬購入、その四、初春駆除、
その五、お姉様とホテルへGO……」

この白井黒子と言う人物は、口調も少し古いがお嬢様口調であり、
振る舞いも普段はお嬢様らしいと言えづらい、少なくとも、毎週
週刊少年雑誌をコンビニで立ち読みをしている美琴よりは。

だが、彼女はお姉様^{みさかみこと}至上主義者であり、美琴への想いはダメな方
向の意味で凄い。

手帳のスケジュールについても、この場に二人の会話を聞く第三
者がいれば、こう言っていただろう「何故そのイカれたスケジュー
ルを手帳に書き記して、それを本人の前で見せるような真似をした
？」と。

つらつらと手帳に記されたスケジュールを読んでいく美琴は苛立
ちの混じった顔で言う。

彼女の言いたい事は分かる。

「……つまり、大人しくて分別ある友人を利用して、自分の変態願望をかなえようと……」

「いえ、…あ、あの……」

ダラダラと滝のように汗を流す黒子の顔色は冴えない。対する美琴は齒軋りさせて、怒りを露わにしている。

「見てるだけで……スнгеエ、ストレス溜まるんですけど——ッ！」

もつともだ。

まったくもって当然だ。

黒子の頬をギュツと両手でつまんで引っ張る美琴の力は割と本気だ。

涙目で望まなくとも変顔になっている黒子は、必死に言い訳をしているつもりなのだろうが、言葉になっていない。

美琴がしばらくして、手を離すと、やっぱり痛かったのだろう、黒子は両手で頬をさする。

これ以上やっても仕方ないか、と黒子を見ながら美琴は溜め息一つをして、席に座り直し、また頬杖をつく。

「はあー。まあでも、黒子の友達じゃしょうがないか……」

不本意ながらも、とても言いそうな顔だがそう呟いた。

この後輩から度々変態行動を受けている美琴だが、やはり信頼しているという証拠なのだろう。

その後輩の友達が会いたいと言っているのだ。別に大事な予定が入っている訳でもないし構わないか、と美琴は渋々了解したのだ。

黒子レベルの変態だったら、最悪だが。

「お……………」

しかし、この後輩は美琴の信頼をどう勘違いしたのだろうか。

「ん？」

「おおおお、お姉様あああああああああつ??」

どういつ身体能力をしているのだろうか、黒子は立ち上がると、さっきまで座っていた席をジャンプ台にして、助走無しで、結構な高さまで飛び上がり、美琴の膝の上に降りる。

目をハートにして、興奮気味に抱きつく黒子に呆氣にとられてしまふ美琴。

黒子は興奮のせいか、周りを気にせずに大きな声を出し、それに反応して周りの客が驚きと迷惑が混じった視線を送っている。

はっとした美琴は黒子を引き剥がそうとするが、また呆氣にとられたように美琴の動きが止まった。

黒子が騒いでいる為、相変わらず周りの視線は美琴と黒子の二人に集まっている。

だが、美琴が反応したのはそこでは無かった。
ファミレスの外。

三人の人物が三者三様の反応をして美琴を見ていた。

一人は、少年の背中を押しながら、美琴と黒子を見て顔を赤くしている、いっぱいの花飾りが特徴的な少女。

一人は、少年の隣を並行して歩いていたのであろう、黒い長髪に白梅の花を模した髪飾りをしている少女。

だが、美琴が最も気になったのはその二人の少女では無い。
少年。

無能力者にくせに美琴の雷撃を防ぎきる少年。

黒い髪の黒い瞳で探せばどこにでも居そうな冴えない少年は、美琴と黒子の二人を見て、苦笑いをしながら目を擦り、何かを呟いた。ファミレス内に居る人には何を言っているか分からなかっただろうが、彼はこう言った。

あれ？ 幻覚が見えるや、と。

硬直している美琴に抱きついていている黒子が「まあ、黒子はッ、黒子はどうかになってしまっそう？」と喚いている。

美琴の額辺りからバチィ？と火花が散った。

その後、常盤台のエース、御坂美琴の拳が白井黒子をの頭を捉えたのは言うまでもないだろう。

* * *

数分後、少年少女五人はファミレスの前の通りに集まっていた。

竜野は取り敢えず全員の顔を知っていた。

美琴とは死の可能性すらある追いかけてこをする仲であるし、初春と佐天は先程名前を聞いた事もあるし、茶髪のツインテールの少女も、いつの日か風紀委員関連で会ったような気がする。

「……という訳で、とりあえずご紹介致しますわ」

先程美琴に殴られた頭を撫でながら、黒子はあいた片方の手を初春と佐天の方に向ける。

「こちら、柵川中学一年、初春飾利ついはるかきりさんですの」

「は、はじめまして、初春、飾利です……」

憧れのお嬢様との対面に緊張しているのか、初春は顔を赤くしながら視線を下に向けて言う。

対して佐天。

「どーも、初春のクラスメイトの佐天^{さてん}涙子^{いし}です。なんだか知らないけど着いて来ちゃいましたー。ちなみに能力値は無能力者^{レベル0}です」

「あ、さ、ささ佐天さんっ」

やはり超能力者でお嬢様というのが気に入らないのか、わざとらしく鼻につく様な口調で言う。

初春はそういう態度は不味いと、佐天に発言の訂正を求めて、わたたと慌てる。何となく予想できていた竜野は、特に驚く事なく自己紹介に入る。

「あー、多分知ってると思うけど、柵川中三年の竜野勇輔。能力値は……」

そう言って一旦会話を止めて、佐天の肩に手を置く。

佐天は驚いたような顔をしたが手を置いた本人は気にしている様子はない。

「レベル0」

そう言った瞬間、美琴は気に入らねえ、とでも言いたげな顔をしたが、初対面の相手が居るせいか、直ぐに笑顔に戻る。竜野は美琴の一瞬見せた、気にいらねえ顔を見て一瞬ビビってしまったのは、仕方ないだろう。

竜野としてはいつ電撃が襲ってくるか分からない状況なのだから。

「佐天さんに初春さん……、私は御坂美琴。よろしく」
（何故に友好的な笑顔ーッ!? あなたってそんなキャラでしたっけ?）

佐天のとった態度にも関わらず、人当たりのいい笑顔で答えた美琴が意外だったのか、佐天と初春の顔がポカンという音が一番似合いそうな顔になる。

竜野は御坂美琴と言う人物がこういった性格だったのかを忘れそうになっているが。

「よ……、よろしく……」
「お願いします……」

二人は驚きのせいか、まるでバトンを回すように言葉を二人で繋げて答える。

「恙無く自己紹介も済んだ所で多少予定は狂ってしまいましたが、今日の予定はこの黒子が……ッ!」

四人の間に入った黒子の、これから言うはずだった言葉は発せられなかった。

言いきる前に美琴の拳が黒子の頭を捉えたからだ。

「……ていうか、何でアンタまでここに居る訳?」

頭を抱えて身を屈める黒子を見ていた美琴は竜野へと視線を向ける。

「……………」

やっぱり来たかー、と思った竜野は即座に訳を考えてみると、言葉では説明しにくい事に気付く。

約一か月ほど前に佐天涙子を不良から助けた、それが主な原因で、校門で偶然、初春のスカートをめくっていた佐天に声をかけられた。同行する事になった竜野は、美琴と会う予定の初春に半ば強引に連れて行かれ、現在に至る訳であり、決して自身の意思で来た訳ではないのだ。

どうしてここに居る、と言われてもこの流れは言葉にしにくい。なので、一言。

「流れに身を任せた結果がこれだな……うん」

言葉にして頷く事で竜野は思う。
こうとしか言いようがない、と。

「流れに身を任せたって……」

美琴は呆れたような顔で、竜野の横に居る佐天と初春に視線を移す。

「まあ、アンタなら在り得るわね……」

彼に助けられた学生が多いのは美琴も知っている。

秋に不良に絡まれていた美琴を助け出そうとした少年が竜野だった。

それから度々、彼が不良達に絡まれている学生を助けるのを見かけた。

美琴が知ってる中で常盤台の生徒だけでも六、七人は居る。

彼女達もきつとそういう繋がりなのだろう、と美琴は適当に結論付ける。

（ていうか、セキュリティーをどんなに厳しくしてもああいう連中^{不良}は消えないのよねー）

もしかしたら学園都市の外なんかよりも多いのでは、と美琴は思っ
てしまう。

「????」

イマイチ美琴の言っている事が理解できない竜野は首を傾げているが、コイツはそういう類の馬鹿^{レア}な人種だ、と美琴は竜野の表情を見て諦める。

この世界、心の奥にある感情を素直に行動に移せないのが現実だ。

分かりやすく、彼の行動で例えよう。

不良に絡まれている人を見かけたとする。

絶対と言えるほどの何かがある訳ではないが、その瞬間誰だろうと、心のどこかに助けるべきだ、助けてやりたいという思いがあるはずなのだ。

しかし、相手の数、自分の強さ、暴力を受ける、振るう恐怖が解決する方法があるのに大抵の人は自分には関係ないとその場を見て見ぬふりをする。

解決する方法を知っているのに何もせずに立ち去ってしまう。

だが、竜野勇輔という人間は助けたいという意志を行動に移す事ができる。

力が無くとも、彼は自身が何をすべきかではなく、何をしたいのかを決めて、選んだ道を迷わず突き進む。

つまり、彼は助けるべきだから手を差し伸べるのではなく、助きたいと思うから手を差し伸べるのだ。

そんな人間がこの世界にどれほど居るのだろうか。知り合いや友達ならともかく、まったく見ず知らずの赤の他人。その上、助けたところで返ってくるものは、おそらく感謝の言葉くらいだろう。

何の見返りが無くとも、自身の身さえ顧みず身を投げ出すように赤の他人の危機を救おうとするのがこの少年。

おそらく、この少年に、どうして見ず知らずの誰かの為に動ける？と聞いても彼はこう答えるだろう。

誰かを助けたいって思う事に理由なんていらねーだろ、と。

「はあ、これだからアンタは……」

大きな溜息をした後、やれやれと言った感じに、美琴は肩を落とす。

「というより、二人って知り合いだったんですか？」

「えー、何で教えてくれなかったんですかー？ 竜野さん」

初春と佐天が、竜野と美琴の關係に疑問を持ったのか二つの質問が一気に竜野を襲う。

竜野は戸惑いながらも返答しようとした時だった。

佐天から思わぬ一言が入った。

「じ、実は恋人……だとか……」

佐天が、冗談とは思えない口調と雰囲気と言つので竜野はブツと吹いてしまう。

「あー、それは絶対無いな。どの場面を思い返しても……」

美琴との過去を思い返しても、大抵は追いかけられ、勝負を迫れる場面しか浮かばない。

さすがに本人の前で雷撃をバンバン飛ばしてきて迷惑しているなんて言えないので、取り敢えずその可能性だけは潰しておく。

一瞬美琴の顔がムツとなったがそれに気付く者はいなかった。

その後、美琴の一撃をもらった黒子が回復したのを確認した後、美琴の提案でゲームセンターに行く事になるのだった。

とある少女たちの出会い（後書き）

キャラの口調、違和感ありませんでした？

竜野の口調、というよりキャラが安定していない気がするので、あれ？と思ったら意見をもらえると助かります。

感想・評価・指摘・意見等お待ちしております。

いそべ銀行

「もう、お姉様ったらゲームやら立ち読みでなく、もっとこう、お花とかお琴とかご自身に相応しいご趣味をお持ちになれませんか？」

「うっさいわね。大体お花やお琴のどこが私らしいっていうのよ」

ファミレスの前で決めた通り、ゲームセンターへ向かう道中、白井黒子がまるでお母さんが娘に言いきかせるように御坂美琴に言っていた。

常盤台の二人が並んで歩く、その後ろでは、柵川中学のとある少年竜野勇輔、佐天涙子、初春飾利の三人が並んで歩いている。

「何かさ、全然お嬢様じゃない？」

佐天涙子が想像していた御坂美琴像とはかなり違うのか、前を歩く常盤台のペアを見ながら、そんな疑問を初春飾利に言った。

「上から目線でも無いですねえー」

初春は率直に思った事を言いながら、配られていたチラシを受け取り、その内容を見る。

竜野は常盤台の二人組（主に美琴）からの被害をなるべく避けるため、柵川中のコンビニと並んで会話を聞きながら考える。

（まあ、確かに御坂はお嬢様っていうタイプでは無いわな）

今日のゲーセン行かない？発言もあるし、コンビニの立ち読みでよく遭遇することや、勝負にこだわる姿勢。確かにお嬢様のイメー

ジとはかけ離れているような気がする。

（誰だろうな、電撃姫なんて言う呼び名付けたの。ソイツはおそろくネーミングセンス抜群だな。オレが保証しよう）

遭遇すれば、勝負勝負と電撃を飛ばしてくる、常盤台の姫。^{エース}

人の用すら気にせずに追いかけてまわすお転婆姫。その姿は正しく電撃姫と言つに相応しいだろう。

「竜野さん、今ケータイ持ってます？」

佐天が竜野の前にバツ！と出て来て、下から覗き込むような姿勢で見る。

「ん？ ああ、つてか学園都市の学生には必須の持ち物だろ」

一瞬、不覚にもときめいてしまいそうになった竜野は、心の揺れを隠すため、なんとか平静を保つ。

内心ドキドキしながらも、竜野は制服のズボンのポケットから携帯電話を取り出す。

割とシンプルで、色は白、パソコンのキーボード形式の携帯電話だ。

何か格好良くね、的なノリで決めたものだが、これ寒い時には手がかじかんで使いにくいな、と購入した後に思った竜野だった。

「アドレス交換しません？」

「うん、いいけど……」

正直な話、別に連絡を取り合うような仲になるつもりは無かったのだが、特に断る理由も無いので承諾する。

「あ、竜野さん。わ、私もお願いします」

あたふたしながら初春も携帯電話を取り出す。

「お……おっ」

竜野は、取り敢えず携帯電話を佐天に手渡す。

「……よし、初春！」

「さ、佐天さん。そんな乱暴に扱っちゃ……」

佐天が竜野の携帯電話を初春にパスして、それを危なっかしく受け取る。

初春がアドレス交換を終えると、竜野に携帯電話が戻ってくる。

登録名は基本名字のみで登録しているのだが、今登録された二人の名前はフルネームで登録されてしまった。

竜野は誰から来たのかさえ分かればいいので、全員例外なく名字のみで登録してある。

理由は主にイチイチフルネームを入力するのが面倒くさいだけなので、相手が勝手にしてくれるなら別に構わないが、二人だけがフルネームだけだと、何だか違和感を覚えてしまう。

まあ、登録してあるほとんどが不良から助けた見ず知らずの人なので、それ以来会っていない為に顔すら覚えていないのが多々いるのは敢えて気にしないでおこう。

竜野が携帯電話をポケットに突っ込むのと同時に佐天の短い悲鳴が聞こえた。

横に並んで歩いていた佐天だが、前を先導するように歩いていた何故か美琴が立ち止ったせいで、ぶつかってしまったのだ。

「す……、すみませ……ん？」

「御坂さん？」

「どうなさいましたの？ お姉様」

手に持っているチラシを凝視して立ち止っている美琴を不安に思ったのか三人が声をかけるが反応がない。

「御坂、大丈夫か？ ああ、それ、クレープ屋のチラシだったんだな」

竜野が美琴の持っているチラシと、同じ物と思われる初春のチラシを見て言う。

「あらあ、お姉様。クレープ屋さんにご興味が？ それとも、もなく貰えるプレゼントの方ですか？」

黒子が面白い悪戯を思いついた子供のような顔でチラシを見ながら言う。

竜野も改めてチラシを確認してみると、ゲコ太ストラップとか言う、これ欲しがっているのか、と疑問に思ってしまうようなプレゼントが付いてくるらしい事が判明する。

「な、何言ってるのよっ！ 私は別にゲコ太なんかっ……、だって蛙よっ！ 両生類よっ！ この世界に「なあ御坂、このゲコ太ストラップってさ何かお前の鞆にぶら下がってるのに似てねえか？」……」

竜野は美琴の鞆を指差しながら言う。
顔を赤くして必死に弁解する美琴の鞆にはゲコ太に酷似した蛙の

ストラップがつけられていた。

そして竜野はソレをチラシと見比べながら指をさして言ったのだ。当然、佐天と初春の視線もそこへ向く。黒子は口を手で押さえて、笑いを堪えている。

竜野の言葉で、本当は欲しかったんだ、みたいな視線で柵川中の二人から見られる事となった美琴は下を向いて黙ると額の辺りから青白い火花を散らした。

いつもなら容赦無く電撃を飛ばす美琴だが、さすがに佐天や初春の前で暴れる訳にはいかない為、電撃を飛ばせずに顔を赤くして俯く事しかできなかった。

初春と佐天が苦笑いをしているのに、竜野は首を傾げていたのだ。

* * *

竜野勇輔は汗をだらだら流していた。

結局、クレープ屋へ向かう事になった五人は、クレープ屋の移動販売車が止まっている広場に来ていた。

どうせあんま人いないんだろうな、という気持ちで来た竜野達の幻想はこの広場に着いた瞬間いとも容易くぶち殺された。

周りにはたくさんの方がおり、クレープ屋に並ぶ列も、物凄い行列になっていた。

人の集りの大半は、学園都市の見学に来ていた子供たちだった。その上、その子供たちの保護者も居る為、必然的に人が多くなる。そして偶然にも竜野達五人はその子供たちがこの広場に休憩に来ている時間と被ってしまったのだ。

はじめは五人で並んでいたのだが、タイミングが悪かったみたいですねー、と言って初春と黒子はさっさと涼しい日陰の下のベンチに行ってしまった。竜野に注文を任せて。

（チクシヨー、オレはクレープ買う予定無いのに何故このクソ暑苦しい列に並んでいるんだろ？）

その後ろでは、真剣な目で自分の順番を待つ美琴と、その美琴に順番をかわろうかと聞いている佐天がいるが、暑さによって精神的に滅入ってしまっている竜野の耳には聞こえていない。

しばらく待って、ようやく竜野の順番になった。

「これお願いします」

せっかく並んだのに、頼まれた物を忘れてしまったては馬鹿らしいので、先程貰ったチラシに初春が印を付けておいた、それを指でさして注文する。

「お待たせしましたー。はいどうぞ、最後の一個ですよ」

少し待つと、クレープとゲコ太ストラップが竜野に手渡された。

「どうもー」

別にいらないのだが、先着百名のプレゼントを手に入れたのだ、記念にとっておこうと竜野が思った時だった。

後ろで何かが崩れ落ちるような音がした。振り返ると、うろたえている佐天と、その佐天の視線の先には、常盤台のエース、御坂美琴が地面に伏せていた。

「……………うう」

「どうした御坂？ そんなトコに居ると後ろの人に追い抜かされるぞ」

「り……………竜野さん」

別に狙って美琴をいじめている訳ではなく、天然で美琴の心と想いを踏みにじっていく竜野に佐天は苦笑いする。

「（あの……………竜野さん？ その……………御坂さんはそのストラップが欲しいんですよ）」

佐天は竜野に近づいて耳打ちする。

「（え？ そうなのか？）」

「（本当に気付いていなかったんですね……………）」

「おーなるほど……………よし、佐天は先にベンチ行っていいぞ」

「は……………はい」

そう言つと佐天は竜野を心配そうな目で見ながら初春と黒子の待つベンチへ向かった。

竜野は佐天がベンチの方へ行つたのを確認して、膝から崩れ落ちている美琴の高さに合わせるようにしやがみ込む。

「御坂」

「ううう……………？」

振り返る美琴の目は涙目の上、猫目になっている。一瞬、竜野はいつもと違う御坂美琴オーラに当てられて、後ずさりそうになるが、何とか堪える。

何だか本当に死ぬ一歩手前の呻き声のような声に、ビビりながらもゲコ太ストラップを美琴の掌に置いてやる。

「ほら、これやるから元気出せ」

美琴は竜野がこの行動をとったのが意外だったようで、キョトンとした顔になる。竜野は可哀想な美琴への哀れみなのか、下手な愛想笑いをしている。

おそらくこれが佐天相手だったらまた態度が変わっていたのだろうが、しばらくすると、ゲコ太のストラップを抱くように大事に両手で握りしめ、照れ臭そうに呟く様な、今にも消えそうな小さな声で言った。

ありがとう、と。

正直この反応は竜野の方が予測できなかった。

何故だか竜野と美琴の仲では、一生聞けそうにない言葉が聞えたのだ。

何があつたのか分からないように、ポカンとする竜野と、頬どころか顔を耳まで真っ赤にした美琴との不思議な時間が三秒ほど続いた後、竜野は耳に手を当てると。

「あれ？　今、普段のお前からじゃ聞けない鳥肌モノのトンデモボイスが聞こえたような……。すまん御坂、もう一回」

しかし、この言動は失敗だったらしい。いや失敗して当然だった。美琴の純粹な感謝の一言に対してこう返す学園都市の男など、ど

ここを探しても彼くらいだろう。

「~~~~~ッ？」

美琴から言葉にならない言葉が発せられた後、バチバチイ？と激しく火花の散る音がした。

どうした御坂、と声にしようとした瞬間、竜野の視界を青白い光が覆った。

「~~~~~ッ??」

竜野が美琴の怒りを買ってしまったのだと気付いたのは、青白い電撃が飛んできてからだった。

* * *

御坂美琴は鼻歌交じりに竜野達四人が集まっているベンチにスキップをして来た。

どうやら、ゲコ太ストラップを手に入れた事で調子を取り戻したようだ。

彼女を元に戻した代償……否、自業自得で焼かれた少年、竜野勇輔はベンチに腰をかけて真っ白に燃え尽きているが。

佐天は、竜野の無残な姿を横目に、微妙な罪悪感を感じながらクレープを一口。

隣で初春も美味しそうにクレープを食べている。
ただ、常盤台の二人は妙な事をしているが。

「ほらお姉様あー、遠慮なさらずー」

「いらないうって言うてんでしょ！ 何よトッピングに納豆と生クリ
ームって！」

どうやら常盤台のお嬢様の舌は少し変わっているらしい。
そして多くの人は言う、それは遠慮では無く拒否だと。

「ほらほらあ。あーんっ！」

とても楽しそうに黒子は美琴に自分のクレープを食べさせよう追
いかけまわしているが、美琴の顔は冗談抜きで本当に嫌そうだ。

黒子は心の内でこれを「お姉様と間接キス大作戦」と命名してい
るが、この様子では一生追いかけても上手くいきそうにない。

そんな傍から見たら可哀想な二人を見ながら初春が口を開いた。

「よかったですね」

「ん？」

「御坂さん、お嬢様のイメージとはちょっと違ったけど……、思っ
てたよりずっと親しみやすい人で」

佐天は隣でぐったりとしている竜野を見て思う。

確かにお嬢様と言うイメージは結びつきにくいと。

だが、竜野に対する態度は、自分たちに向けられているものと違
うので、まだ何とも言えない佐天は日本人お得意の曖昧な表現で返
す事に決める。

「どうなんだかねえ……、でも」

佐天は言いながら、美琴と黒子のやり取りを見る。主に白井黒子の方を。

たったひとつ、これだけは言える。

この短い時間の間で、確信した事だ。

「アンタの友達にはついていけないかも」

「はは……ん？」

佐天の言葉を否定できない初春は苦笑いすることしかできなかった。

初春は、苦笑いをしたその時、たまたま視界の隅に入った光景に違和感を覚えた。

「……どうかした？」

「いえ、あそこの銀行なんですけど……、何で昼間から防犯シャッター下ろしてるんでしょうか？」

いそべ銀行。

初春の言った防犯シャッターは下ろされている銀行は、いそべ銀行という建物だった。

その初春の何気ない素朴な疑問を聞いて、馬鹿らしいやり取りをしていた美琴と黒子、初春の隣でクレープを食べていた佐天がそれぞれの動きを止め、振り返った瞬間。

いそべ銀行の防犯シャッターの形が歪んでいき、何かが爆ぜる音と共に防犯シャッターが弾け飛んだ。

いそへ銀行（後書き）

感想・評価・意見・指摘等お待ちしております。

電撃使い―electro-master

いそべ銀行の防犯シャッターが弾け飛び、ドゴオンッ？という爆音が辺りに響いた。

「「「「「？？」「「「「」

その音と同時に、ういはりかざり初春飾利、しらいくろ白井黒子のジャッジメント風紀委員二人組が動き始め、意識が飛びかけていた竜野はベンチから飛び上がり、佐天も驚いたように立ち上がる。

黒子はまだ、一口も食べていないクレープを飲み込むようにして完食するというトンデモ芸をして、竜野や佐天の座っていたベンチを飛び越えて、綺麗な着地をするとスカートのポケットから風紀委員の腕章を取り出す。

「初春、警備員への連絡と怪我人の有無の確認。急いでくださいな」
「は、はいっ！」

初春は黒子の指示を聞くと同時に、警備員への連絡を取り始める。黒子は警備委員の駆けつける前には単独で事件を解決するつもりらしく、風紀委員の腕章をつける。

「オレも行くッ！」

こう言う時だけは勘がいいのか、黒子が一人で事件を解決するつもりだと察した竜野もベンチを飛び越えて、黒子の隣に立つ。

「！？」

だが、黒子はそれを許すつもりはないらしい。

黒子の手が竜野の肩に触れたと思った瞬間には既に美琴の隣に空間移動能力によって飛ばされていた。

「学園都市の治安維持は、わたくしたち、風紀委員のお仕事。竜野さんはもちろん、お姉様もお行儀よくしててくださいな」

竜野さんはもちろん、という言葉には、おそらく無能力者が手を出すなどという意味が含まれていた。

しかし、美琴がそれに対して反論をしなかった為、ここは手を出してはいけないと思い、竜野もそれ以上は何も言わない事にする。

「……信頼してんのな」

竜野は、娘を見守るような顔で黒子を見ている美琴を横目にそう呟いた。

* * *

数回、銀行内からは爆破の音が聞えた。

爆破のせいか、黒煙が外へ吹き出しているのだが、その黒煙に混じって銀行を襲ったと思われる三人の男たちが出てきた。

「オラア！　グズグズすんなっ！」

先頭を走る一人の男が仲間の二人の男たちに言いながら走る。その男たちの顔には僅かに焦りがある。

「お待ちなさいな」

男たちの逃走を阻むように、白井黒子が立っていた。

風紀委員だと言う事を証明するように黒子は男たちに腕章を見せつける。

おそらくこの行動は、大した意味を持たないだろう。

風紀委員だと言う事を相手に知らせても止まる犯人などいないし、それは致命的な瞬間になるかもしれない。

それでも彼女はこの動作を犯人を拘束する為に行うだろう。

風紀委員だと言う立場だからだけではない。

そうおそらくは、

「ジャッジメント風紀委員ですの。器物破損、及び強盗の現行犯で拘束します！」

白井黒子という一人の人間の信じた正義を貫く為に。

「おお……………」

強盗犯の三人組は、黒子の姿を見て馬鹿笑いした。

確かに笑ってしまうだろう。

風紀委員と言えど、小さな少女一人で大の男三人に立ち向かうなんてのは無謀以外の何ものでもない。

その強盗犯三人を見て、黒子はやれやれと言ったような顔をして、一步を踏み出す。

黒子が怯える事なく踏み出すのを見て、楽勝だと思ったのか、

強盗犯の一人の太った男が気持ちの悪い笑い声を出しながら、目の前の風紀委員を潰さんと走りだす。

「オイオイお嬢ちゃん。とつとどつか行かないと、怪我しちゃうぜえ？」

太った男は、腕を突き出すようにして黒子に攻撃するが、黒子はそれに臆することなく体を一回転させて避ける。動きの緩慢な男の服の袖を掴み、くいと引っ張る。

「そう言う三下の台詞は……」

ブレーキが効かずに勢い余った太った男の足を正確に踏みつける。慣性の法則によって自身の重心が浮いた男の腕を掴んだ腕を回すと、男の巨体がまるで魔法を使ったかのように浮き、空中で綺麗に一回転して投げられる。

傍から見れば、黒子が物凄い馬力を持っているように見えるが、これは黒子が身に付けた風紀委員の格闘術の賜物だろう。

そこから、彼女がただ強力な能力だけを振りかざすような能力者では無い事が分かる。

自らの力を思いつきり利用されて投げられた太った男は、地面に叩きつけられると同時に気を失った。

そして敗者と勝者の関係になった黒子は強盗犯に言う。

「死亡フラグですわよ？」

人を馬鹿にするような笑みを浮かべて。

* * *

「すごいっ」

佐天涙子が、白井黒子の動きを見て、そう言った。

あの明らかに体格差のある大男を投げ飛ばしたのを見れば、誰もがそう思うだろう。

御坂美琴もさすが黒子、と本人が聞いたら嬉しさのあまり発狂しそうな言葉を言っていた。

そして竜野勇輔と言う少年も。

「スゲーッ！ カッコいいな白井っ！ 喧嘩とかでたまに格闘術もどきを使う奴もいるけど、アレの方がずっとスゲーッ！」

まあ、これは所詮不良との喧嘩だから、という事だからだろう。たまにナイフやスタンガンを持つ不良とも戦う事があるので、どちらが凄いかは決めかねるが、竜野のは所詮素人なりに鍛えた拳や蹴りが限界で、黒子の使っているのは、確実に犯人を捕える為の捕縛術や格闘術、もどきや見様見真似とは訳が違う。

「ダメですって！ 今広場から出たら……」

警備員への連絡を終えた初春の声が聞えた。

「でもッ！」

声の聞えた方を見ると、学園都市の見学の案内をしていたのであろう女性と初春が揉めていた。

「どうかしたのか？」

「!？」

「男の子が一人足りないんですッ……少し前にバスに忘れ物したって行っただけ……」

「じゃあ、私と初春さんで……」

「あたしも行きます！」

無能力者だから省かれるとか、そう言うのが嫌だったのか、佐天の声は力強かった。

美琴は逡巡しそうになり、佐天の顔を見る。

佐天は、無言で頷く。

「あれ、そう言えばあの馬鹿は？」

気付けばいなくなっていた、あの無能力者の少年が。

* * *

（パイロキネシスト
発火能力者……？）

「今更後悔しても遅えぞ」

強盗犯の一人が、掌の上に炎を発現させてそう言った。
その炎はボォ！という音と共により一層激しく燃える。

「悪いが、消し炭になってもらうぜえ？」

声と共に発現された炎を黒子に向かって投げ飛ばす。

直撃すれば、ただの火傷では済まないだろう。

黒子はその場から一步も動かなかった。空間能力者の黒子は、その炎の当たらない場所へ飛ばばいいのだから、その足で動かずにいる方が相手の不意をつけるかもしれない。

だが、邪魔が入った。

「白井ッ？」

少年の声が聞えた。

直後、少年竜野勇輔は、黒子が避けるはずだった炎を横から何の変哲もない右手で殴りつける。

本来なら、大火傷をしてもおかしくない行動だった。

だが、炎は彼の拳に触れられた瞬間、まるで紙切れでも破る様に引き裂かれ、その炎の威力を失い消え失せる。

「何ッ!？」

発火能力者の男が、自身の目を疑うように驚く。

当然だろう。

自分の能力を、ただの右拳のみで潰す人間など未だ見た事が無いのだから。

その驚きは、決定的な隙となった。特に白井黒子と言う空間移動能力者の前では。

「……ぐがあ!？」

空気を引き裂く様な音と同時に、発火能力者の男の背中に黒子の強烈なドロップキックが入った。

ボタンツと地に倒れる男はまだ諦めずに立ち上がるとする。

が、ヒュンという複数の空気を裂く様な音がしたと思った時には既に彼女の武器である、金属矢によって服が縫いとめられていた。

「テ、テレポーター空間移動能力者！？」

「これ以上抵抗するなら、次は金属矢を体内に直接テレポートさせますわよ」

空間移動能力者な上、この少女は割と腹黒いようだ。

黒子が金属矢を発火能力者の男に見せつけると、能力者の男はこれ以上の抵抗を諦め、舌打ちをして顔を伏せた。

「手を出すなど言っただけですけど、感謝しますわ、竜野さ……ん？」

抵抗の意思を失った犯人から視線を外し、後ろを振り向く。

だが、振り向いたその先には居る筈の竜野の姿は既に消えていた。

そのあまりの移動の速さに、本当は空間移動能力者なんですの？と問いたくなつた黒子であった。

*
*
*

美琴達と学園都市の見学ツアーのガイドの女性は、黒子が強盗犯と戦闘を繰り広げている最中も、居なくなってしまった男の子を探していた。

「そっちは？」

「ダメですー」

バスの中に男の子がいないか探していた美琴が、バスから出て来て、バスの下にいないかを探していた初春に声をかける。

ガイドの女性も広場との境を探すが見つからない。

「もぉー、どこいったのよー」

そう言う美琴の口調には焦りのせいか、苛立ちが混じっていた。

少し離れた場所で、佐天もベンチの下や植物のせいで、隠れていないか、身を屈めて探しているが中々見つからない。

その時だった。

「ああ！？ 何だお前？」

佐天の後ろから強盗犯の一人と思われる男の声が聞えた。

佐天は声が聞えた方を振り返るとお、茂みから出てきたのだろうか、小さな男の子と、銀行の強盗犯の男が居た。

「丁度いい。着いて来いッ！ 早くッ！」

そう言う男は未だに自分がどういう状況に立たされているのか

理解できずに戸惑っている小さな男の子の手を無理矢理引つ張る。
その声はバスから少し離れた佐天からさらに離れた場所からのものだったせいか、バスの近くを探している美琴達は気付かない。

美琴達に知らせようと、佐天は男に気付かれないうちに身を屈めたまま静かにバスに近づく。

だが、その時思ってしまった。

また、無能力者の自分には何もできないのか？ と。

(……あたしだって！)

佐天は美琴達に知らせるのを止めた。

その余裕くらいはあったはずなのに、それをする事を佐天の心のどこかが良しとしなかった。

彼女たちと自分の住んでる世界が違うだなんて思いたくなかったから。

佐天は立ち上がると、迷わずに小さな男の子の方へ向かって走り出した。

怖かった、それでも、それ以上に何もできない自分は嫌だったから。

走りだした佐天は、美琴達の方へ一切振り返る事なく突き進む。

小さな男の子にしがみつくようにして、佐天は強盗犯の男が逃げるのを防ぐ。

最悪逃げられてもこの男の子だけは守って見せるとでも言うように。

「何だお前ッ！？ 離せよッ！」

その男の苛立ちの声でようやく、美琴や初春、黒子がいつの間にか消えていた男の存在に気付いた。

「ダメええええッ??」

「このクソがッ?」

男が佐天を蹴ろうとした時だった。

黒子が例え空間移動しても今からでは間に合わなかっただろう。しかし、その状況におそらく誰よりも早く気付いた誰かが突っ込んできた。

「佐天ええええええええええんッ??」

咆哮が佐天の耳に聞えたと思った瞬間、男との間に竜野勇輔りゅうのゆうすけが割って入った。

約一か月前、佐天が不良に絡まれていた時のように、まるで都合の良い物語のヒーローの様なタイミングで駆けつけて来た。

直後、鈍い音が聞えた。その音は男の蹴りが少年の背中を正確に捉えた音だった。

結構な力があつたのだろう。比較的に細い体つきの少年の体は男の蹴りで地面に勢いよく転がる。

蹴った男は、舌打ちをしながら乗用車へ乗り込む。

「があッ!? ……ぐえッ痛え……」

派手に転んだが、佐天の見た感じではダメージはそんなに無いように、直ぐに立ち上がった。

竜野は蹴られた背中をさすりながらも、本当は結構なダメージが

ある事を気付かれぬように僅かに笑みを浮かべる。

「佐天、大丈夫だったか？」

心配されるべきは竜野の方だと言うのに、竜野は佐天の身を案じる。

「はい、竜野さんのおかげで……」

結局何もできなかった、と佐天は肩を落としそうになるのを堪えて笑顔を見せる。

だが、竜野はそんな佐天の気持ちを察してか否か、こんな事を言った。

「よく頑張ったな佐天。お前が居なかったらその男の子は人質にされてたぞ。勇気あるよ、お前」

予想外の言葉だった。

無能さを思わされるような、ただの心配の言葉ではなく、褒めてくれた事が素直に嬉しかった。

自分の存在を認めてくれたようで嬉しかった。

能力者でも風紀委員でもない佐天にとって、それは新鮮な感覚だった。

「は……はいっ！」

「さて……、後は常盤台の電撃姫が何とかしてくれんだろ」

竜野が頭を掻きながら車道の方を見て、呟くように言った瞬間、バチバチイイイ؟؟ と火花が散る音がした。

佐天も振り返って見ると、車道のだ真ん中では、学園都市の頂点である七人の超能力者の第三位が立っていた。

* * *

「あー……」

黒子はやってしまったか……、とでも言うように美琴を見た。
簡単な話だ。

あの、佐天を蹴ろうとした男は、間接的に御坂美琴に喧嘩を売ってしまった。

「……思いだしたぞ！」

車道のだ真ん中で、火花を散らす美琴を見て発火能力者の男は言った。

「風紀委員には捕まったら最後身も心も踏みにじって再起不能にする最悪の空間移動能力者が居て……」

「誰の事ですか？ それ」

「さらにはその空間移動能力者の身も心も虜にする、最強の電撃使いが……」

発火能力者がありがたい説明をするなか、男の乗り込んだ乗用車のアクセルが力強く踏まれ、無謀にもその最強の電撃使いに突っ込んでくる。

対してその最強の電撃使い、御坂美琴はスカートエレクトロマスターのポケットからゲームセンターでよく使われるメダルを取り出す。

「——そう、あの方こそが学園都市二三〇万人の頂点、七人の超能力者の第三位……」

黒子が言うのと同時に、美琴はメダルゲームのコインを親指で弾く。

青白い閃光が美琴の指先に集束されていく。

弾かれて空を舞ったメダルが美琴の指先に乗る。

指先に乗ったコインを青白い閃光が奔るのと同時に弾かれた。

オレンジ色の光の尾を引いて光の槍のように飛ばされたコインが美琴を轢き殺さんと突っ込む乗用車に向かって突き進む。

音速の三倍で車道を突き進んだ超電磁砲は、五〇メートル程飛ばされると空気摩擦によってコインが溶けてなくなる。

衝撃の余波のみで乗用車が吹き飛ばされ、辺りに吹き散らす突風が美琴の髪を撫でる。

その圧倒的な力を持つ『超電磁砲』は、見るだけで同じ電撃使いを気を失わせるほどだと言う。

圧倒的な力を持って、その場を蹂躪する。

この姿こそが超能力者レベル5に相応しい。

「『超電磁砲レールガン』御坂美琴お姉様、常盤台中学が誇る、最強無敵の電

撃姫ですの！」

宙に舞った乗用車は車道に墜落し、埋まってしまった。

エアバックのおかげで、命は無事なようだが、精神的には大丈夫だろうか？ とその光景を見て思わず心配してしまう竜野だった。

「ま、待ってくれ！　ならアイツは……あの男は……ッ！」

発火能力者は、あまりにも圧倒的な能力を見せる美琴すら忘れて、竜野の方へ視線を向けて指す。

あの、学園都市の外からすれば、常識を越えた力を持つ能力者の能力さえ、右手のみで防ぐあの異常を越えて特異な少年は一体何者だと言っただ、と男は言う。

「……その電撃姫と対決をしても物怖じしないただの馬鹿レベル0ですわ」

* * *

その後、強盗犯は全員警備員によって拘束され、運ばれていった。

佐天は、男の子とその親から感謝され照れていた。

初春は、風紀委員の先輩に事件の報告をして、それで今回の事件は終わった。

日が傾き、紅く照らされる学園都市のとある歩道に座り込む佐天の顔は疲労でいっぱいだった。

そんな佐天の前に美琴が近づいて来て、優しく微笑むと、

「お手柄だったね、佐天さん」

「え？」

「……すごく、カッコよかったよ」

佐天は慣れない言葉をかけられて、僅かに頬を紅潮させる。

「御坂さんも……」「お姉様ーっ！」「……」

黒子が美琴に後ろから抱きついたせいで、良い感じの雰囲気が一気にぶち殺された。

「佐天さん、竜野さん！ 大丈夫ですかっ？」

微妙な雰囲気になってしまった中を初春が心配そうな顔をして駆け寄る。

「まあ慣れてるからな、オレは」

そう言う、竜野の顔は歪んでおり、蹴られた背中をさすっている。

（ギャーッ！ 今になって強烈な痛みがーっ！？）

竜野は心の内で喚き散らしているが、初春が気付くはずもなく、心配の視線は既に佐天へ。

「へーきへーき、竜野さんが庇ってくれたし」

佐天は、それだけ言うと、ある意味で暴走気味の黒子に抵抗して

いる美琴を見て言う。

——御坂さんも、すっごくカッコ良かったです。

電撃使い――electro-master（後書き）

思っていたより長くなってしまった四人の少女と一人の少年の顔合
わせですが、四話使ってようやく終わりました。

訳の分からない文で読みにくいかもしれませんが、これからもよろ
しくお願いします。

さて……どうやって魔術に関与させようか……。

すれ違う者たち―cross-heroes

七月十七日、竜野勇輔りゅうのゆうすけは困惑していた。

懐からお金が無くなってしまったので、コンビニの現金自動預け
払い機Mでお金を卸そうと、夜の学園都市に駆け出し、現在コンビニ
にいるのだが、

「暗証番号が違イマス」

現金自動預け払い機の無慈悲な機械音がコンビニに鳴り響いた。
竜野の目の前で現金自動預け払い機を使用している、いつの日か
見たような気がするツンツン頭の少年がその無慈悲な機械音を聞いて、戸惑っている。

「あれ？ え？」

ツンツン頭の少年は必死に画面をタッチするも、返ってくるのは、

「暗証番号が違イマス」

やはり無慈悲で無機質な機械音。

「はあ？ いや、そんなはずは……何でだ？」

「くっそお……こうなったら他のコンビニで……ってあれ？ 今度
はカードが飲み込まれた!？」

仕方なく、他の場所でお金を下ろす為、カードだけでも取り出そ

うとするツンツン頭の少年だが、カードが出てこない。
「……………だあーっ！不幸だあーっ？」

しばらくの沈黙が続いた後、ツンツン頭の少年は頭を抱えてそう叫んだ。

（やべ、見ているオレが泣きそう）

竜野は不幸な少年の不幸な出来事を順番待ちのせいで終始見ていたのだが、他人事なハズなのに目頭が熱くなった。

そんな不幸な少年に心の底から慰めたくなったその時だった。

少年、竜野勇輔にも不幸がやってきた。

「何やってんの？ アンタ」

そう、御坂美琴と言う名の天災級の不幸が。

* * *

御坂美琴^{みさかみこと}は、今日、ひどく疲れていた。

実は、白井黒子との些細なことの意地の張り合いで偽風紀委員になり、より正確には初春飾利^{このりみい}とあるファミレスに忘れていった風紀委員の腕章を持った美琴を固法美偉^{このりみい}という風紀委員に勘違いされ、とある少女のバッグを探す事になった。

丁度、最近能力者の事件が多くなっている事を知り、その中でも

風紀委員が舌を巻いている事件、グレヒトン虚空爆破事件と言っのを聞いたばかりだったので、そのバックが危険物だと思い込み、街中を約半日必死に探し、最後には噴水に飛び込むまでした結果がただのバックだったというオチだった。

その後、どつと疲れが襲ったものの、コンビニで立ち読みをする為に立ち寄ろうとするのだが、コンビニの入り口付近のＡＴＭを使用しているツンツン頭の少年の後ろに、よく見知った少年が居た。

その黒い髪、黒い瞳の少年を見た瞬間、一気に疲れが吹き飛んだ。コンビニに入ると同時に、美琴は言う。

「何やってんの？ アンタ」

* * *

「ゲッ、昨日の今日でまた御坂!？」

嫌そうな顔をして言う竜野の前では、ツンツン頭の不幸少年が、カードの再発行って時間かかるんだよなー、と一人でブツブツ言っている。

そう言えば、この少年と出会ったのは秋だった、と美琴は思い返す。

始めて見た時には、不覚にも関心したというか、良い意味で変わった奴だと思ったが、彼の口から発せられる無意識の内にデリカシーの欠片も無い言葉を聞いて評価がガラッと変わってしまったのだ。

それ以来は、美琴が追いかける側、竜野は追いかける側の人間となってしまうた。

「アレ以来、結局決着つかずだったけど……、今日と言う今日は決着を着けようじゃないッ！」

「あのー大丈夫ですか？ 少しくらいなら貸せるんだけど……」

美琴のテンションが上がり始めて、熱くなっているのだが、美琴の標的、竜野勇輔は不幸なツンツン頭の少年に声をかけていた。

「私を無視すんなーっ！」

火花を散らしながら、拳をATMにぶつける。

電流を纏った拳が当たった事により、ATMが故障したのか、ツンツン頭の不幸少年の飲み込まれたカードが出てきた。

「おーっ！ 出てきたーっ。かみじょうとつま上条当麻、この恩は一生忘れませんッ？」

よく分からないが、感謝されたのは竜野の方で、感激の涙を流す少年と喜びを分かち合う。

はずだったのだが、直後、警報が鳴り響いた。

ATMの画面を二人揃って見るとそこにはこう表示されていた。

「攻撃性の電磁波を感知」と。

「……………」
不幸だぁーっ？」

二人の少年が一斉に別方向へ向かってコンビニを飛び出した。

上条当麻はもう二度と失わぬようにカードを大切に握りしめて走り去るのに対して、竜野は、取り敢えず真っ先に犯罪者として扱われそうな美琴の手を引いて走る。

結局、超電磁砲の御坂美琴に目をつけられ、標的となった竜野も、ツンツン頭の不幸少年、上条当麻と同じ不幸少年だった。

* * *

「待てやコラーツ？」

「やっぱり助けるんじゃないっ！？」

コンビニから出て、何かと縁のある河川敷まで逃げた竜野が、美琴の手を離れた瞬間。

『今日と言う今日こそ決着をつけるわよっ？』

『えー、もう着いたって。だってオレ、お前からまだクリーンヒット貰ってねえもん、てか喰らったらもうここに居ないし』

『うるさいっ？』

という、あまりにも理不尽な暴力を受けている竜野は、今も学園都市を駆けている。

「もう良くね？ 諦めたらどうですかーっ！？」

竜野は振り返って十メートル程後方を走っている美琴に平和的解決を申し立てる。このやり取りに寿命を縮めている気さえする竜野は何がなんでも逃げ切る、と心に誓う。

「ふざけんなっ！ 取り敢えず一発電撃喰らわす！」

バチィ！と一度火花を散らした後、走りながら腕を振るい電撃を飛ばす。だが竜野勇輔が思ったより速く走っている為当たらない。

致命的な一撃を貰いそうになった時は振り返り、その右手で美琴の電撃を裂くし、走って避けれる一撃はそのまま走り続ける事で避ける。

避けた事で地面にぶつかった電撃は四方八方に散った。

何となく結構ギリギリのタイミングで避けた気がした竜野は冷や汗をたらだらと流して、夏だと言うの肌寒さを感じている。

当たれば死ぬかもしれない一撃が迫っているにも関わらずその一瞬一瞬で正しい判断をし、それを行動に移す。竜野勇輔はこの一点においてはその喧嘩の出来る一般人の域を超えていた。

確実に致命傷だけは避け、相手の攻撃に対処のできる方法を限られた時間内で判断するのは、特に強力な能力を持っていない人間にとってどれほど難しい事か。

ほぼランダムに能力を発現させる能力と、異能の力を掻き分ける右手。

このたった二つの手札だけで、美琴の能力を防ぐのは容易ではない。

おそらく美琴が同じ能力を持っていたても、何もできずに死んでしまっただろう。

「その一発で死ぬって言うてんだよっ！」

毎回思うが、冗談では無い。

約八ヶ月前、始めて真正面から美琴と決闘をした竜野は本当にいつ死んでもおかしくなかった。

鼓膜さえ破りそんな音で竜野に落ちた雷に偶然右手が触れたから

助かった、というより、異能の力を“打ち消す”訳ではないこの右手は、巨大な攻撃の残骸などに弱い。

落雷を“掻き分けた”時は、下が湿った河川敷の土だったからよかったものの、金属製だったら感電死していただろう。

「そう言っていていつも私の電撃をあしらうのがアンタでしょうがっ！」

「チクショー！ 交渉の余地がやっぱり無い！ …… ってえ？ ちよまつ……がぁ！？」

気付けば人目の少ない路地裏を駆けまわっていた二人。

周りの視線が一切感じられない路地裏で一方的に暴れまわっている美琴が電撃を放つとほぼ同時に竜野が曲がり角を曲がるうとした時だった。

誰かとぶつかった。

「……っえ……大丈夫か？」

かなりの速度で走りまわっていたせいで、派手に転んだが、打たれ慣れている竜野はすぐ立ち上がり、相手を特に確認せず、反射的に手を差し伸べる。

電撃が当たらなかったのはほとんど奇跡と言っていていいだろう。

だが、よく見ると、相手の方は倒れるどころか痛みさえも訴えておらず、普通に立っていた。

「へ？」

そして、その容姿は学園都市では、とても変わったものだった。

「うん、それより君の方が痛そうだよ？」

歳は十四か十五、大体竜野と同じ位か、と外見でなんとなくだが判断する。暗い路地裏でも分かるくらい肌は純白、外国人らしく、髪は銀髪。腰ぐらゐまで伸びた銀髪。

そして服装は、要所要所に金の刺繍が織り込まれている修道服？　っぽかった。

ティーカップを思わせる修道服で身を包む少女に疑問をぶつけてみる事にする。

「えーと……、シスターさん？」

シスターさんと思われる女の子の顔は暗い中でもなんとなく可愛いという判断が出来るほどだった。

「うん、それで合ってるよ。まずは自己紹介しなくちゃね、私の名前はインデックスっていうんだよ」

その名前を聞いて、竜野の目が、ダメだ、ついていけねーという目になった。

「えーと、それって明らかに偽名だよな『目次』とでも言いたいのか？」

「うーん、目次じゃなくて『インデックス禁書目録』の事なんだけど……あ、魔法名はDedictus545だね君の名前は？」

どこの星の人ですか？　と問いたくなるほど、良く分からない単語を次々と投下していく禁書目録さんに竜野は戸惑う。

「いや、意味分からないんだけど、言っちゃ悪いけど、大丈夫か？　お前」

「君の名前は？」

どうやら彼女は人の話を聞かない類の人間らしい。

「……、竜野勇輔っていうんだけ「アンタは何ラブコメ展開してんだあーっ!!」……どお!？」

ど? という言葉を残して竜野の体が、先程まで竜野を追いかけていた美琴の後ろ回し蹴りによってグツシャア! という危なげな音を出して地面にぶち倒された。

「まったく、またアンタは……次から次へと手を出しやがって」

「イヤ、手を出したって……そんな経験一度も無いんですけど……御坂さ……ん」

良く分からない事で蹴られた竜野はブチキレてやるつもりで体を起こしたのだが、良く分からない美琴の気迫に気圧されキレずに下手に出てしまう。

そこで、弁解をしてもらおうと、謎のシスター、インデックスに助けを求める視線を向けるが、既にそこにはインデックスの姿はなかった。

(逃げなくちゃ……、迷惑をかけちゃいけないよね)

彼女は逃げ続ける。

視線を感じた、インデックスを狙う者の。

平和な世界に生きている人間を巻き込みたくないと思った。

だから彼女は、助けてと言わない。この苦しみや痛みは自分が受けるべきモノ。それを誰かになすりつける事などできない。

これが彼女の優しさ。

自身の頭の中にある、一〇万三〇〇〇冊の魔導書を守る為、彼女は逃げ続ける。

一年以上前の記憶を思い出す事も出来ない少女は逃げ続ける。

—— 禁書目録という残酷なシステムを背負った少女、インデックス。

* * *

「お帰りなさいませお姉様。寮監の目を誤魔化すのも大変なので、から、夜遊びは程々にして欲しいですのー」

早朝、全身汗だけで、ゼーは一息を切らして寮の自室に帰ってきた美琴を、ルームメイトの白井黒子が寝間着姿で迎えた。

美琴が帰って来た事に気づき、無理に起きてきたのか、黒子は欠伸をもらす。

「別に……遊んでた訳じゃないわよ……。登校時間まで寝させてもらうから朝食パスするからテキトーに理由言っというて……」

それだけ黒子に伝えると、全体力を使い果たしたというように、ふらふらとした足取りでベッドに向かい、そのまま倒れこみ、すぐに眠りについた。

「また竜野さんですか？ あの方が能力とは別の何かを持っている

のは否定しませんが…… お姉様が夜通し追いかけてこするような非常識な行動をとるなんて……、お姉様自身自覚されていないようですが、黒子には竜野さんとの争いを楽しんでいるように見えますのよ」

気持ち良さそうに寝ている美琴を見て、一瞬不安を覚えたが、まさかお姉様に限ってと呟く事でその不安を打ち消す黒子だった。

少年、竜野勇輔も追跡者から逃げ続け、夜が明けてしまった。

「チクショー、一睡もでき無いうちに朝日が昇ってしまった」

忌々しげに竜野は言う、何とか僅かな睡眠時間だけでも確保しようとして柵川中の生徒用の寮へ帰宅して、ベッドに飛び込む。

途中、何度も頭の中でインデックスの顔がチラついた後になって気付いた、訳の分からない事を言っていたし、話をしている最中に美琴に理不尽な暴力を受ける嵌めになったが、もしかしたら彼女のことは嫌いじゃないのかもしれない。

また、どこかで出会う気がする。

いや、会えると良いと思う。

——この日、幻想を殺す者と幻想を造る者、そして科学と魔術がすれ違った。

すれ違う者たち―cross-heroes（後書き）

上条さんは原作通りの場所なのでもかく、インデックスとはかなり強引な知り合い方をしたのですが、実際、七月十七日には学園都市内にインデックスが居たのか少し不安です。

詳しい事知っている方がいらしたら教えてもらえると助かります。

都市伝説

虚空爆破事件。
グラビトン

最近、事件の規模が広がっていき、最初は小さな爆発が起こる程度だったので、迷惑している程度の気持ちで風紀委員も動いていたのだが、ここ数日、それでは済まされなくなってきた。

急激に爆破の威力が上がってきているのだ。
既に風紀委員には負傷者が何名も出ている。

七月十七日、御坂美琴の捜査の後、本格的に虚空爆破事件について風紀委員全体が協力して、事件についての対策会議を行っている。

「一週間前、始めての犠牲者が出たのを皮切りに……」

風紀委員のメガネをかけた、実は物凄いプロポーションの持ち主である女子高生、固法美偉このりみいが言うと同時に暗い対策室のモニタに被害の遭った現場が映し出される。

「連続虚空爆破事件はその威力、範囲を拡大させています。場所も時間も関連性が認められず、遺留品をサイコメトリー読心能力で確認するも、以前手がかりが掴めていません。次の犠牲者を出さない為に警備員と協力して一層の警戒強化と事件の解決に全力を……」

当然、この対策室には、白井黒子しろいこと初春飾利はつはるかも参加しており、話が進むごとに険しい顔になっていく。

アルミを基点として、重力を加速させ、周囲に放出させる、簡潔に言うと、『アルミを爆弾に変えてしまう能力』。

能力名は『シンクトロン量子変速』。

最近の虚空爆破の威力を出せるほどの能力者は、学園都市内の『書庫』には一人しかいなかった。

釧路帷子という人物の一人のみ、のはずなのだが、彼女は約一週間前から現在まで原因不明の昏倒によって、病院に入院しているという事なので違う。

虚空爆破事件の犯人は急速に能力を上げて実力をつけたと言う有り得ない推測まで出始めているほど、最近多くなってきた能力者による犯罪。

同時刻、とある河川敷の陸橋の下、メガネをかけた、冴えない少年が、三人の少年に囲まれていた。

蹴りや拳をこれでもかという程もらったメガネの少年は、金を奪い取られる。

金を奪い取り、満足げに去っていく不良達。

メガネの少年は、去っていく不良達を睨む。怒りの感情が沸々と湧く。

（くそっ！ 何で誰もボクを助けない……、風紀委員の奴らが悪いんだっ。無能なあいつらがッ！）

激しい怒りを心の内に宿す少年。その怒りをぶつける相手すら間違った少年は、いつも不良に虐げられていた。

そして、それを救ってくれない風紀委員への怒りは日に日に大きくなっていった。

メガネの少年、かいたびはつや介旅初矢。

そんな彼が約一週間前からつけ続けているヘッドホンからはとある曲が流れていた。

* * *

「……………」

ピンポン、というインターホンの音が、柵川中学三年、竜野勇輔^{りゅうのゆうすけ}の部屋に鳴り響いていた。

もちろん、一晩中常盤台中学のターミネーター御坂美琴に追いかけまわされていた竜野の眠りは深かった。

だが、既に数十回もこの音を聞かされ、ダンダンとドアを叩く音が聞こえれば目を覚まさらずを得ないだろう。しかもその上、竜野さん、と少女の声が聞えているのだ。

その声を無視し続け、出なければ世間的に竜野の評価がぐっと落ちてしまうような気がする。

「だあーっ！ 分かりましたよ、ええ分かりましたともっ！ 出ますよ！？ 出ればいいんでしょうが！」

ガンツ？ と乱暴に開けられた扉に、黒髪のセミロングで白梅の髪飾りをつけ、柵川中学の制服であるセーラー服に身を包んだ少女、佐天涙子^{さてなみこ}は少し驚き、後ろに二、三步下がる。

ドアを勢いよく開けた時点で、僅かな睡眠時間で回復された竜野の体力は全て使い果たされ、項垂れる。

「くっそー御坂め。まだ学校は二日も残ってるのに一晩中付き合わせやがって……おかげ様で寝不足だぞコノヤロー」

まったく、あの電撃姫は、と竜野は昨晚の追いかけっこを思い出しながら呟いていると、竜野の目の前に居る佐天が元気な声で言った。

「おはよーございます竜野さん」

親友のスカートをめくるといふ変な性癖の持ち主だが、笑顔で元氣よく挨拶をする健気な佐天に対して竜野は、

「おー」

と目の下に大きなクマをつくって、氣だるそうに挨拶をする。

そう、実は佐天涙子と竜野勇輔、どういう縁なのか、かなり近い寮に住んでいるのだ。もう、いつその事一つにしまった方が安くついただろうに、と思うほどの短距離なのだ。

見ず知らずの人さえ、困っていたら助けるが、助けたら後はその人の勝手、という竜野の行動から、建てたフラグは放置する類の人物、とさえクラスメイトの一部に囁かれている竜野が、一か月前に不良から助けただけの関係でしかない、佐天を覚えていたのは住んでいる寮が近かったというのが大きい。

ちなみに本人は、恩着せがましい氣がするので、それ以上関係を持つのを止めているだけで無自覚なのだが、実はそれすらもフラグを建てる要因になっていたりする。

死亡フラグやら、御坂美琴との追いかけっこフラグやら色々あるが。

寮が近くなければ、佐天もわざわざ竜野を起こしに来るはずがない、いやむしろそうであって欲しいと願う竜野。

毎日毎日起こしに来るなんて言うどこぞの恋愛シミュレーションゲームのような展開は無いが、時折こうして竜野の部屋を訪ねてきて、一緒に登校する事がよくあるのは事実だ。

竜野、と言うよりおそらく誰から見てもそこらの女子よりかは可愛い佐天と一緒に登校するのは悪い気はしないし、少し嬉しい気持ちもあるが、やっぱり恥ずかしい気がする、と竜野は思う。絵面だけを見ても。

「あ、着替えなくちゃな……佐天、わざわざ起こしに来てもらっておいて悪いんだけど、先行っていいぞ」

今にも寝そうな顔をして竜野は頭をポリポリ掻く。

「え？ 何言ってるんですか？ 竜野さんもう制服じゃないですか」

「……………」

竜野は下を見ると、自分が制服のズボンをはいている事に気付く、というより、よくよく見れば上も制服のカッターシャツを着ていた。

（あー、そう言えば帰ってからそのまま寝たんだったな……オレ）

「……………」よし、行こーぜ」

結構汚いのだが、どうせ午前で終わるのだ、関係無いだろうと思っ
い外に出る。

学園都市の総人口の約六割を占めるありふれた無能力者の一人である
とある少年、竜野勇輔の一日が、本人にとっては不本意ながら

も始まった。

* * *

「はあーっ」

「イキナリどうした？ 佐天」

登校途中の竜野と佐天は、並んで歩いて、話をしていた。

話題が特に定まっていらない、他愛も無い会話を駄弁り続けている内に、佐天がイキナリ大きな溜息をもらしたのだ。

「いえ、たまに思っちゃうんですよ。初春や白井さんは風紀委員だし、御坂さんは超能力者^{すーいひと}だし、……あたしはなあみたいな」

いつもどこかで思っているだったのだろう、一言一言を口にするのが嫌そうな顔で、相談でもするように佐天は言っと、最後に俯く。

「へー、割と悩むタイプだったのか、佐天は」

佐天の様子を横目に見て、竜野は言う。

初対面や、先日の美琴への自己紹介などから、能力者になりたいんだなー、程度には佐天の気持ちをくみ取っていたつもりだったが、どうやら佐天の悩みは竜野が思っていたモノより大きいらしい。

どういう返事を返したらいいのか迷う竜野を見て、佐天ははっとして顔を上げる。

「……っ！？ いえ、違うんです。ただ、やっぱりあたしにも能力

があつたら、毎日が変わるかなー、なんて」
「能力があつたら毎日が変わる、か」

正直な話、竜野にとってはそれはノーだ。能力なんてなくても、誰にだってソイツにしか分からない事出来ない事があると信じてるから。

だが、無能力者の多くは思っているだろう。能力が欲しい、と。
そつやって何かが変わるのを待っている事を。

何かを変えてくれるのを待っている事を。

だから、その佐天の言葉にはつきりとした返事を、思った事をそのまま返すのは躊躇われた。

（はあ、何て言って返さばいいのか分かんねえ……）

一度、不良達から佐天を助けた事があつた。
だが、その程度では何も変わらないのかもしれない。
この世界の神様が造った摂理も、たった一人の人間の世界も。
だけど、いやだからこそ、何も言えなかった。

たった一つの幻想ウソさえも。

「『レベルアップ幻想御手』でもあつたらなー。超能力者も夢じゃないのに」
「『幻想御手』？ 何だソレ」

「都市伝説の一つですよ。使用者の強度を簡単レベルに引き上げてくれる道具らしいですよ」

さっきの鬱にすらなりそうな雰囲気からは打って変わって、喉か

ら手が出るほど欲しいとでも言うように目をキラツキラ輝かせて佐天は言う。

正直ああいう時、どう言うべきなのか分からない竜野は、いつも通りの佐天に戻ってほっとする。

「あー、なんていうか、低位能力者や無能力者は泣いて喜びそうだが、高位能力者からは批判が殺到しそうな道具だな」

もしそんな道具があつたら、不良やらが学園都市中で暴れまわつて、一日も経たない内に犯罪発生率が跳ね上がるような気がするけど、と竜野は思う。

同時に思う、確かに才能で判断されてしまう学園都市では夢のようない道具なのだろう、と。

壁にぶちあたった者、現実には直面して顔を背けてしまう者、才能の一言で片づけてしまっていた者が求めていた楽してチカラを手に入れる道具。

まあ、自覚してなくても、大した事は何もできないくせに、自分のその拙い手で、何かをしようと必死な竜野にとって、そんな道具は必要ないのだが。

「他にもどんな能力も効かない男とか、あらゆる能力を発現させるデュアルスキル『多重能力者』とか、色々あるんですけどね」

「はは、……笑えねー」

相当な誇大表現されているが、竜野は前者と後者、どちらも当て嵌まってしまっているので、苦笑いするしかできなかった。

どんな能力を効かない男に当て嵌まるとあるツンツン頭の少年が、そんな会話をしている二人の横を通り過ぎている事に気付かずに。

『イマジンブレイカー幻想殺す者』と『イマジンリアライザー幻想を造る者』、二人の少年は今日もすれ違
う。

二人の少年

（僕が、僕を救う）

メガネをかけた少年、介旅初矢は耳掛け型のヘッドホンをつけて、かいたびはつや五感に働きかえるような、不思議な曲を聴きながら、セブンスミストと言う大型デパートのような服屋のある通りの、向かい側の通りを歩いていた。

夏休み前の下校時間は早いとは言えまだ三時頃だというのに通りは、学生達で溢れている。

介旅が通りを歩いていると人通りの多い上、ヘッドホンで曲を聴いていると言うのに、笑い声がやけにクリアに耳に入った。

何気なく、笑い声の聞えた方を見てみると、三人の少女が楽しそうに会話しながら歩いていた。

介旅は足を止めて三人の少女達を見る。

正確には、三人の少女の内の一人の、頭の上に花が乗っているようにすら見える少女、その少女の右腕に安全ピンで着けてある、風マジメント紀委員の腕章を。

介旅は風紀委員の腕章を見て、僅かに顔を歪ませる。

その三人は丁度、介旅の歩く通りの向こうに建っている、大型のデパートのような服屋、『セブンスミスト』へと入っていった。

（僕を救わなかった風紀委員は…… いない）

介旅初矢は、日常的に不良達に虐げられてきた。金銭を奪い取られ、首を横に振れば、容赦無く暴力が振るわれ、抵抗しようとして

も、強度^{レベル}の低い、介旅初矢は何も“できなかった”。

苦しんでいたと言うのに誰も気付いてくれず、僅かにソレに気付いた者たちは皆、目を逸らした。

拳句の果てに、治安を守るハズの風紀委員は気付いてさえくれない。

自分はこんなに苦しんでいるのに、怖かったのに、震えていたのに、痛かったのに、無能な風紀委員は助けてくれなかった。

そんな奴らは、もういない。

介旅初矢の世界から、除外されるべき人間だ。

（僕はこのチカラで、僕を救うッ！）

片手にカエルのぬいぐるみを持つ少年の瞳は狂気で満ちていた。

* * *

「あれ？ アンタは……」

竜野^{りゅうのぶ}勇輔^{ゆうすけ}の目の前には、いつぞやのツンツン頭が特徴的な不幸^{かみじ}少年^{せうねん}上条^{じょう}当麻^{とうま}がいる。

上条は隣にピンクの花柄の鞆を持った、小さな女の子を連れており、現在は上条と竜野が向かい合って尻餅^{しりもち}についていた。

ここまでに至るに、特に大きな理由は無かった。

一晩中、常盤台のエースこと、御坂美琴^{みさかみこと}と一晩中走り回った制服で学校に登校した竜野は、やはり気持ち悪くなってしまったので、学校が終わると同時に、陸上選手もビックリの速さで自宅である、柵川中の生徒が使用する寮へと帰り、すぐに風呂に入り昼食を摂る為にとあるファミレスに行き、適当なメニューを注文し、食べ終え、寝不足を補う為に寮へ戻ろうとし、曲がり角を曲がった時に、目の前の少年、上条当麻とぶつかってしまったのだ。

普通で退屈な平凡な日だった。

おそらく、上条は女の子を連れていたせいで、注意が女の子の方へ向いていたのだろう、当然竜野も早く眠りにつこうとしていた為、注意が散漫になり二人はぶつかった。

このタイミングで、思いつきり真正面からぶつかってしまう辺りは、不幸としか言いようがない。

「えっと……確か、いつの日かカードをATMから取り返してくれた……名前聞いてなかった」

上条は地面に座ったまま、立ち上がった竜野を見上げる。

竜野は尻餅をついたまま、立ち上がらない上条に手を差し伸べる。

「竜野勇輔だよ、上条当麻さん」

上条が自身で名乗っていたので、竜野は覚えていたのだ。

彼の不幸が、竜野の印象に強く残っていたのが大きかったりする。

「そうか、お前、竜野ってんだ。そっちは知ってるっばいけど、一応言っとくな。俺は上条当麻、よろしくな」

よろしく、と言われてもクラスメイトとかそう言う関係では無い

のだから、別にいらなくないか、と思ったが上条が言ったのだから、礼儀なので竜野も言う。

「よろしく……」

「ねえねえお兄ちゃん。はやくいこーよお」

取り敢えずの自己紹介を終えるのを待っていたのか、それとまたの偶然か、区切りの良い所で上条の連れていた女の子が、急かすように上条のカッターシャツの裾を引っ張る。

「おー確か、セブンスミストだったよな」

「うん！」

上条が改めて確認すると、女の子は嬉しそうに頷いた。

その女の子の元気な顔を上条は一回見ると、竜野に視線を戻す。

「……ていう訳なんだけど、竜野も行かないか？ 俺一人でセブンスミストは少し厳しいモノが……」

上条がそう言う理由は、ただ一つ。

セブンスミストは服屋で、店内には多すぎるくらいのコーナーがある訳なのだが、基本女性向けや、子供向けの物が多く、男性向けの服が極端に少ないのだ。

当然、それに比例して客は、女性が多くなり、男性は少なくなる訳で……。

つまり、上条はこう言っているのだ。

お願いだから来てください、と。

とてつもなく強烈な睡魔に襲われていた竜野も、上条とぶつかっ

たせいか、完全に目が冴えてしまっているし、寮に帰ってもゲームをする程度の事しか思い浮かばないので、上条と小さな女の子と同行する事を決める。

「あー……、うん、行くよ」

向かったセブンミストに今、風紀委員を困らせている、グラビトン 虚空爆破事件の犯人が居るとも知らずに。

異常さえ越えた、二人の特異な無能力者は往く。

* * *

「……くしゅんッ!」

「御坂さんも風邪っぽいかなんですかー」

「いや、そんなハズはないんだけど……」

みさかみこと 御坂美琴、ういはるかざり 初春飾利、さてんるいこ 佐天涙子の三人は、セブンスミストの店内にいる。

大型デパート内に服屋が何店もあるこの店は、どちらかと言うと、女性の服や、子供の服などが多く、男性の服は少なかった。

なので、店内に居る学生のほとんどが女生徒で、男子生徒は全体の一割を超えるか越えないかくらいの数しかない。

三人は、四階のフロアに昇っていた。

上に昇るまでが待ちきれないのか、佐天はエスカレーターを駆けあがり、いつも通りの調子、いや普段よりハイテンションで「こっちこっちー」と美琴達を急かしている。

そんな佐天の後ろを美琴と初春が横に並んでいる。

「初春さんは見たいトコある？」

「うーん……私は特に……」「うーいーはーるー、ちよつとちよつとお！」え？ 何ですかあ佐天さん」

佐天は下着のコーナーから初春を呼び、初春は呼ばれたので行く。美琴はいつもよりハイテンションな佐天を見て、ははは、と苦笑いする。

佐天はごそごそとワゴンにこれでもかと程突っ込んである下着の内の大人っぱいを取り出して、

「じゃーん！ こんなのはどうじゃ！？」

佐天は少し色っぱい下着を初春に押しつけるように突き出す。

初春は、顔を真っ赤にして手を目の前でブンブン振り回して拒絶の意を示しながら、

「む、無理無理無理ですー。そんなの穿ける訳無いじゃないですかー！？」

「これなら、あたしにスカートめくられても、堂々と周りに見せつけられるんじゃない？」

良い提案だとも言つような笑顔で佐天は初春に勧めるが、顔を真っ赤にしたまま、初春は首を横に振る。

「見せないでくださいっ！ めくらないでくださいっ！」

当然ながら冗談なので、特に悔いる事なく「あらー残念」の一言

で佐天はあつさり下着を元の場所に戻すと、手を合わせて美琴の方へ向く。

「御坂さんは何か探し物ありますか？」

美琴は顎に人差し指を当てて、少し考える素振りをする。

「そうねえ。私はパジャマとか」

* * *

「そう言えばさ、この前のコンビニん時、竜野の隣に常盤台中学の生徒居たよな」

セブンスミストへ向かう途中、上条は話題を探して、思い浮かんだのがこれだった。

上条の周りには、取り敢えず女の子で可愛ければ誰でもオツケーな上、滅茶苦茶ストライクゾーンが広く、周りの人間を含め、学校の先生からさえも、青髪ピアスと言われている変態と、短い金髪をツンツンに尖らせていて、「にゃー」を語尾に多用する、義理の妹ラブな隣室に住まうロリコン野郎等、少し常識から逸脱した連中しかいないので、割と普通の話題が見つからず、浮かぶのがこれくらいしかなかった。

まあ、斯く言う上条もあの二人の事を言えず、むしろあの二人を合わせた三人で『デルタフォースクラスの三バカ』ふきよせせいりと言われているのだが。

発案者は、上条のクラスメイトの吹寄制理ふきよせせいりと思われる。

「んー、まあ」

竜野は上空を見上げながら言う。

「そうかー常盤台のお嬢様と知り合いか、上条さんもそんな幸せな人間関係を築いてみたいものです」

そう言つて、竜野の隣で肩を落とす上条は、「はあーっ、出会いが欲しい」と呟く。

その言葉に対する竜野の言葉は上条からすれば、異常な物であった。

「いや、アイツはダメだ」

竜野は、何やら真剣な面持ちで言う。

「え？」

「アイツだけはダメだ。アレとの出会いは明らかに死亡フラグ」

そう語る竜野の目は、どこか遠い目をしていた。

（うん、今思えば、何で御坂と関わったんだろう、オレ）

上条は竜野の顔を見て、これは本格的に冗談ではないと思い、話題を切り替える事にしようとするが、その前に竜野は何故か自身の目の下を指で指して上条に見せる。

クマが出来ていた、まるで徹夜明けの受験生のような。

「徹夜でもしたのか？」

率直に思った事を疑問形にして口にする上条。

「ああ、一晚中リアルに死を迎えかねない鬼ごっこをしていた」

「そ、そうか……上条さんは心の底から竜野の無事を祈っておりま
す」

「……………さんきゅ」

「あれ、お兄ちゃん、涙出てるよ？」

「……………これは汗なのです」

美琴のくしゃみの原因はこの二人だったと言う話があったとか
なかったとか。

竜野と上条の本当に他愛のない会話をしながら、しばらく歩くと
大きなビルが立ち並ぶ建物の一つの、大型デパートのような服屋『
セブンスミスト』が見えてきた。

竜野は上条と話す事で、気分が良くなったのか、清々しい顔で（
正確にはつもり）セブンスミストを見上げる。

（何故だろう、嫌な予感がするんだけど）

ぶるつと竜野の全身が震えた。

「どうした？ 竜野」

「いや、何でもない……………」

竜野は一抹の不安を感じながらも上条当麻、そして名前も知らぬ
小さな女の子と共に、セブンスミスト店内へと足を運んだ。

二人の少年（後書き）

評価ポイントが100になりました。

お気に入り登録をしてくれた方、評価をしてくれた方、読んでくれている方、本当にありがとうございます。

少しでも良作になるよう頑張りますので、これからもよろしく願います。

ちなみにデルタフォースの発案者はあくまで作者の予想です。

狙われた風紀委員

「うっわー初春見てよこのパジャマ、こんな子供っぽいの、今どき着る人いないよねー」

作った人のセンスを疑うような口調で喋る佐天の横で、常盤台の誇る電撃姫はひどく動揺していた。

実は御坂^{みさか}美琴は、お姉様至上主義の白井黒子さえも若干引いてしまふほどの少女趣味なのだ。

パジャマを探す為にフロアを歩き回っていると、美琴の少女趣味に見事合致するパジャマを見つけ、感極まった美琴は指を指して「ねえねえ、これ可愛くない？」と言おうとした時。

佐天の口から発せられた言葉がこれだった。

「小学生の時くらいまではこういうの着てましたけど……さすがに今は……」

初春の何気ない一言にさらにズドンと落ち込みそうになる美琴。美琴は、少女趣味に合致したパジャマを見つけた喜びを、二人に悟られぬように指をゆっくりと下ろす。

美琴は顔に出してしまいそうな焦りを隠しながら、手を顎に当てて言う。

「そ、そうよねー。中学生にもなってコレはないわよねー！ うん！ ないない」

動揺する美琴は、否定をしているのに欲しい！ という想いが伝わってきそうな何かがあった。

不自然なくらいオーバーなりアクションを取る、いつもとは違っ

た妙な迫力を持つ美琴を見て、ついはるかぞう初春飾利と佐天涙子さてんるいこは首を傾げる。

「あつ、あたしちよつと水着見てきます」

「水着ならあつちにありましたよ」

「本当？」

そう言つて佐天と初春は、美琴が立っているコーナーから少し離れた水着のコーナーへ行つた。

二人が水着を見に行つたのを横目で確認する。

（いいんだもんつ。どうせパジャマなんだから、他人に見せるものじゃないんだし……）

佐天達は水着に夢中になつていて、美琴は意識から外れているように見えていない。

自身の趣味を全く否定された美琴は涙目で、僅かに顔を紅潮させる。

（よしっ！ 今の内ッ。一瞬合わせて見るだけだから）
「——ッ！」

美琴ご所望のパジャマを手にとり、エレクトロマスター電撃使いの名に恥じぬ、電光石火の早業で、鏡の前にバツと躍り出る。

周りをキョロキョロ見て、誰も自分に視線を向けていない事を確認する美琴は傍から見れば、挙動不審に見えただろう。

嬉しさか、誰にもバレずに合わせる事が出来た達成感からか、美琴の顔はにやにやしている。

「どうした御坂？ 挙動不審だぞ」

そんな美琴に、的を射た意見を言う者が居た。

「うるさいわね！ 私は……………ッ!？」

後ろから声が聞えたのを無視しかけて、気付かぬままスルーしてしまう所だった。

だが途中で、自身を映し出す鏡の中に美琴を見ている少年が居る事に気付く。

「な、なっかつ、ななな……………何でアンタがッ……………!？」

美琴は一瞬、驚きで心臓が高鳴るのを感じ、声の聞えた方へ振り向くと同時に手にしたパジャマを隠す。

もうこの少年にまで自身の趣味を否定されては美琴の心が完全にへし折られてしまう。

「いやー、いつも通り成り行きで」

威嚇するように犬歯を剥き出しにする美琴の攻撃的な態度にはもう慣れてしまった美琴は、超能力者に気圧される事なく頭を掻きながら、また流されてしまった、と竜野は言う。

「……………ていうか御坂、その可愛らしいパジャマ何で隠してんだ？」

「え？ 今なんて……………」

「いや、だからその良さ気なパジャマを何で隠してんの、って言うてるんだけど……………」

執拗に確認する美琴に戸惑っているのだが、美琴はようやく自身の趣味を認めてくれた人に会えた、と内心喜ぶ。

いつもはム力つく無能力者だと思っていたが、この瞬間始めてこ

の少年に出会えてよかったと思う。

「だよねー！ 可愛いよね！ 私のセンスって悪くないよねっ！」

涙目で迫ってくる普段と違う雰囲気的美琴に、竜野は何らかの恐怖を感じ、後退りする。

あれ、御坂ってこんなキャラだったけ？ と。

「ああ、“小学生”とかに似合いそうだなー、ソレ。妹でもいいのか？」

ビシッと何かにヒビが入ったような音がした気がした。

美琴は無言で顔を真っ赤にして、額付近から青白い火花を散らせる。

対する竜野は、またなにかやってしまったのだろうか？ とビビりまくっている。

恥ずかしいのか、それとも怒りか、もしくはどちらもなのか。

その答えを知る者はいない。

おそらく、美琴自身も。

「あ、あのー御坂さん？ 御坂美琴さーん？ 顔真っ赤ですけど大丈夫ですかー？ 熱でもあるんじゃないですか？」

竜野はそれが美琴を怒らせていると気付かずに次々と爆弾を投下していき、美琴の怒りが臨界点を突破しそうになった瞬間だった。

「あ、トキワダイのおねーちゃんだー」

「おーい竜野。どうしたー？」

上条当麻とピンクの花柄の鞆を身につけている小さな女の子。

そんな、とある二人の人物の介入によって、竜野が死ぬと言う最悪の展開は逃れた。

美琴は自身の邪魔をした人物を睨むが、小さな女の子を見て笑顔に戻る。

「あー、鞆の……」

よく分からん展開になりかけていた竜野は取り敢えず危機は去ったと悟り、小さな女の子に心の内で感謝する。

「てゆうか、いつの間にかいなくなつて、ビビったぞ俺」

「ああ、何か遠くから見てて気付いたんだけどさ、周りからメツチや嫌悪の目で見られてたぞ。鞆の女の子を見てた上条が」

それはつまり、上条は、周りから見れば少女を見てニヤついている変態野郎として映っていたと言う訳であり、上条の社会的死を意味していた。

「な…… なな、何でそれを教えてくれなかったんだああああああーっ??」

美琴と話をしていた女の子を引き連れて、上条は、嵐のように去って行った。

竜野が、本当に不幸なんだなー、と上条のの幸福を祈り、すっかり第三者の気分で見ていると、

「さ・て・と…… アンタはどうしましょうかねえー?」

青筋を立てて、ひどくご立腹の常盤台中学が誇る電撃姫が、引き攣った笑顔を竜野に向けていた。

怒りで青白い火花を散らす美琴を見て、竜野は冷や汗をたらたら流す。

「あの、姫？ 待つてえーっ！！上条さあーんっ！！」

竜野勇輔りゅうのゆうすけはこれまでの経験を最大に活かし、脳内で独自に作り上げられた即席御坂美琴取扱説明書の情報をもとに、全力疾走で上条の走り去っていた後を追った。

「あーもっつ！ ホント調子狂うッ！」

数分後、佐天と初春が戻ってきた時には、美琴はがっくりと頂垂れていたそうだ。

* * *

ジャッジメント
風紀委員の第一七七支部に居る、メガネに隠さずともかなりのプロポーションの持ち主このりみい固法美偉と、お姉様至上主義者、白井黒子しらいぐろこの二人が溜息をつく。

虚空爆破事件の犯人の目星がまったくつかない。

爆破に使われた遺留品を見ても一切の手掛かりはない。

出てきたのはアルミ製のスプーンの破片。

まるで、ゴールが無いマラソンを走らされているようで、二人の溜息は大きかった。

「もしかして……手口は同じだけど、同一犯じゃない、とか」

「まさか……」

「言ってみただけ……、あまりにも関連性が見えないから……」

固法は、虚空爆破に使われたスプーンの破片を手でつまみながら言つて、言い終わると同時に指で弾く。

「急ぎませんと、また次の犠牲者が出るかもしれませんわ」

「せめて手がかりを見つけないと……、同僚が九人も負傷しているし……」

黒子はその固法の言葉で、カップを持って飲む動作を止める。
引つかかった。

風紀委員が九人も。

人を負傷させるほどの威力の爆発を起こした事件はいずれも風紀委員が負傷している。

「……、幾らなんでも多すぎませんか？」

黒子が率直に思った事を口にしてみる。
だが、それは思わぬ答えを導いた。

「——ッ!？」

そう、おかしかったのだ。

一週間で、被害に遭った風紀委員が九人も負傷しているなんて。
これではまるで——。

直後、固法の使っている学園都市のMAPを表示しているパソコンが、重力子の加速を確認した。

場所は『seventh mist』。

つまり現在、竜野や美琴達の居るセブンスミストに。

* * *

一方セブンスミストでは、美琴達三人が服を見ていた。そんな中、三人の内のどこからか、ピピピツと単調な電子音が鳴った。

「初春、ケータイ鳴ってない？」

「あ、ホントだ」

初春は携帯電話を取り出し、耳に近づけて通話ボタンを押す。

「はい、もしも「初春っ！」っ!？」

通話に出た瞬間、相当な音量で言っているのか、携帯電話から出る音は割れていた。

大きな甲高い音のせいで初春は耳がキーンと痛み、携帯電話を耳から離す。

声の主は黒子だと言う事は分かったが、いつもと様子が違った。

『虚空爆破事件の続報ですの!』

「え?」

先程まで笑い合ったりして、楽しんでいた三人の顔色が虚空爆破事件と聞いて、変わった。

佐天は話を理解していないだろうが、場の雰囲気と黒子の口調から危機が迫っている事は分かったようで、笑顔は既に消え失せてい

た。

美琴も真剣な面持ちになり、黒子の話に耳を傾ける。

『学園都市の人工衛星が、重力子の爆発的な加速を観測しましたの！』

「か、観測地点は……？」

初春は問うが、黒子は無視して続けた。

どこかで、初春を危険な目に遭わせるのを避けようとしているのかもしれない。

あの、二人が小学生だった時の郵便局の強盗犯の事件のように。

『付近の風紀委員を急行させるよう手配してますの！ 初春、あなたは速やかにこちらに戻りなさい』ですからっ！ 観測地点をッ！！
……第七学区の洋服店、セブンスミストですの！！』

黒子は一瞬言うべきか逡巡するが、今言わなければ、初春が動きそうにないので答える。

黒子の返答に、三人は、はつとする。

それは、自分達が居る、この建物の名前では無かったか？

「……丁度いいです！ 私、今そこに居ます。今すぐ避難誘導を行いますっ！」

初春は黒子からの返答を待たずに通話を切る。

「……話の通り、犯人の標的はこの店、『セブンスミスト』です。すみませんが御坂さん、避難誘導の協力をしてください」

「分かったわ」

「佐天さんは、避難を」

佐天は、不満の表情になるが、初春は気付かない。
彼女は佐天の身を案じたつもりなのだが、佐天からすれば、こ
言ってるようにしか聞き取れなかった。

無能力者は引っ込んでろ、と。

「う……うん。初春も気をつけてね」

初春は力強く頷くと、美琴とは別々の方向へ駆けて行った。
初春と美琴を見送り、一人取り残された佐天は思う。

やっぱり無能力者と能力者じゃ住む世界が違うのか、と。

* * *

白井黒子は、連続で空間移動をする事で、物凄い速度で、初春達
の居るセブンスミストへと向かっていた。その表情には焦りがある。
もし、虚空爆破事件の犯人の狙いが風紀委員だとしたら辻褄が合
う。

今までの全く関連性のない現場での事件と被害。
しかし、どの事件においても風紀委員が負傷していた。
いや、人的被害は結果だけ見ても風紀委員しかないのだ。
そして今回狙われたセブンスミストには、初春飾利が居る。

つまり、

（今回のターゲットは……）

頭に浮かぶ、最悪の事態が起こった場合のビジョンが打ち消せない。

これを否定するには、風紀委員は事件の被害に遭い過ぎていた。

* * *

セブンスミスト店内では、電気系統の故障が発生した為閉店させていただきます、とアナウンスが流れていた。

竜野は、誰ひとり居なくなったセブンスミスト店内を奥へ奥へと進んでいた。

「クソッ！ 見つからねえ」

竜野はピンクの花柄の鞆を持った小さな女の子を探していた。

別の場所でも、上条当麻が探しているだろう。

人が一人でも居れば直ぐにでも気付きそうなものだが、見当たらない。

（上条の方で見つかったのか？）

それにしても、大事過ぎるなと思った。

たかが電気系統の異常ごときで閉店しなければならぬ程なのか。いや、それ以前に一体どこで異常が起きているのか。

もしかして、もっとなにか別の――。

嫌な何かを想像しそうになった瞬間、十数メートル先を鞆の女の子が走っているのが見えた。

カエルのぬいぐるみを両手で抱えて。

（いたあー、マジで良かった……）

竜野は女の子の走って行く、その先によく知る少女が居る事に気付いた。

* * *

上条は、お互いが気付かぬ内に竜野と同じフロアに来ていた。

隣には、避難し遅れた人がいないか確認していた御坂美琴がいる。

「今思っただけけどアンタ、どこかで見なかったけ？」

「コンビニで一度だけな」

あの時竜野の方に注意を向けていた美琴にとっては視界の隅に入っただ程度の人物だったので当然思いだせるわけがなく。

「ゴメン、まったく覚えてない」

「ですよー。上条さんは分かってましたよ、はい」

そんな二人の前の通路をピンクの花柄の鞆の女の子が横切った。ぬいぐるみを抱えて走る女の子の姿を見て、全てが繋がった気がした。

美琴は、女の子を見つけて安堵している上条を置き去りにして、走りだした。

* * *

一般人を避難させた初春は、携帯電話で黒子に避難は終えたと知らせようとしていた。

もう、これで事件の危機から逃れる事が出来た筈。
だが、携帯電話の向こうから聞える黒子の声は焦燥していた。

『今すぐ、そこを離れなさいっ！』

「え？」

『過去の事件の人的被害は、風紀委員だけですの！ 犯人の真の狙いは、観測地点周辺に居る風紀委員！今回の事件のターゲットは、貴方ですよ初春ッ！』

「へっ！？」

「おねーちゃん」

黒子がそう告げると同時に、後ろから女の子の声が聞えた。

この場では、不似合いな程元気そうに穢れ無い笑顔と共に駆け寄ってきた。

カエルの変なぬいぐるみを持って。

このピンクの花柄の鞆を持った女の子には見覚えがある。

初春は、女の子の顔を見て、安心する。

爆発物になりそうな物はない。

「メガネのお兄ちゃんがおねーちゃんに渡してって」

そう言って、初春にカエルのぬいぐるみを渡そうとした瞬間だった。

ぬいぐるみを基点にぐにやり、と空間が歪んだ。

初春はそこまで見て気付く。

そう言えば、虚空爆破事件に使われる道具は、子供が好きそうなぬいぐるみや鞆など、警戒心を削ぐ物ではなかったか。

その中に爆破させる為のアルミが仕込まれていたのではなかったか。

「——ッ!？」

初春は、ぬいぐるみを掴んで自身の背後に投げ捨て、鞆の女の子を守る様に抱きしめる。

せめて、彼女だけでも守るように。

そんな初春の視界の隅に美琴と、見知らぬツンツン頭の少年が映った。

「逃げてくださいッ! あれが爆弾ですっ!」

初春が言いきる前にいち早く事に気付いた美琴は、これから強力な爆弾と化すであろうぬいぐるみと初春達との間に割って入る。

(超電磁砲^{レールガン}で爆弾ごとっ!)

美琴は自身の異名になっている必殺技『超電磁砲^{レールガン}』を放つ為、スカートのポケットからメダルゲームのコインを取り出す。

だが、焦りのせいで摘んだコインは、美琴の指の腹を滑って落ちる。

（しま——ッ！？）

もう一度コインを取り出す時間はない。ツンツン頭の少年に期待をしたい所だが、彼が何らかの力を持っていたても、初春の言葉を聞いてから反応したのでは遅い。

重力子が加速して、圧縮したぬいぐるみを睨む美琴の耳にピン、と床にコインが落ちた音がした直後、紅蓮の炎と化した莫大なエネルギーがセブンスミストの一角を飲み込み、破壊した。

チカラ

美琴は、ぶつぶつと何かを呟いているメガネの少年を追っていた。犯人である確率が高いからだ。

実はセブンスミスとで、爆弾に使われたカエルのぬいぐるみを持っているメガネの冴えない少年を美琴は目撃している。

その少年に気付かれぬように、足音を忍ばせながら、忌々しげに思う。

（またあの馬鹿に借りができた……）

セブンスミスとの一角を破壊した爆発を、美琴達は無傷で切り抜けた。

正確には、あのム力つく無能力者^{レベル。}の少年が一人で防ぎきった。

あの莫大なエネルギーを持った紅蓮の炎を、右手で切り裂き、後ろに立っていた美琴達を守ったのだ。

結果、ツンツン頭の少年も、初春飾利^{ういはるかざり}も、御坂美琴^{みさかみこと}も、鞆の女の子も、誰一人、傷一つ無く助けられてしまった。

あの忌々しい十一月の喧嘩——美琴すら敵わなかった能力者の前に立ち塞がって、逃げ切った時のように。

しかも今回は、その場に居た全員が、美琴が防いだと思っていて、竜野も名乗り出ない事がム力ついていた。

人気の無い、狭い路地裏に入ってしまったら歩く少年は一際大きな声で。

「くっふふふ！ もうすぐだあ。後少し数をこなせば無能な風紀委員^{ジャッジメン}もあの不良どももみんなまとめて吹きとばあッ！？」

真後ろにいるというのにまったく気付かない少年に後ろ回し蹴りをかましてやる。

御坂の蹴り一発で少年は薄汚い路地裏に派手に倒れた。落ちていたペットボトルや空き缶が衝撃で一瞬宙に浮く。

宙に浮いておちてきた空き缶が御坂の足元まで転がってきた。

「ぐあ……っ!? 一体……何が」
「はあゝい」

この状況の場合十人聞いたら十人イラッと来るであろう口調で美琴は少年を呼ぶ。

しかし、ム力ついているのは御坂美琴も同じだ。

「用件は言わなくてもわかるわよね。爆弾魔さん」

「な、何の事だか僕にはさっぱり」まあ、威力は大したもんよねえ。でも残念、死傷者どころか、誰ひとりかすり傷一つ負ってないわよ」

美琴は、少年の顔をみず、明後日の方を向いて言う。
もちろんこの言葉は誘いだ、事実でもあるが。

「そ、そんな馬鹿な! アレは僕の最大出力だぞ!」

その言葉を聞いて御坂の予想は確信へと変わった。
この少年が犯人であると言う確信に。

「へー」

「え? いやー外から見ても凄い爆発だったんで……」――

少年、介旅初矢は自分の鞆を見る。その中にはアルミ製のスプーンが何十本も入っている。

その鞆の中にさりげなく手を入れてしつかりとそのスプーンの本を掴む。

彼の能力は『量子変速』^{シンクトロン}。

アルミを基点に重力子を加速させて、爆破する能力。

（勝った！）

介旅は武器を持ち、そう確信した。

目の前の少女はまだ油断をしている。コイツになら勝てる、と。

「――……中の人はとても助からないんじゃないかって……え！？」

スプーンをその少女に投げるため投球モーションに入った瞬間。

御坂美琴の指先から放たれた、光の槍がスプーンを一瞬で溶かした。

少し遅れて雷鳴が鳴り、そのさらに後に物凄い衝撃波と共に轟音が鳴り響いた。

その衝撃波だけで路地裏の通路は所々碎け、その石片が衝撃の余波で数秒浮く。

圧倒的な一撃。

たった一人で軍隊を相手にできるとすら言われている超能力者^{レベル5}の必殺技^{レイルガン}。

介旅の爆破とは比較などするまでもない。

御坂はやろうと思えばこの超電磁砲が通る一直線にある建物を幾

つも貫通させ、その中に居る人や物を衝撃波だけで薙ぎ払う事すらできるのだ。

「れ、『^{レールガン}超電磁砲』……今度は常盤台のエース様か……」

今回はかなり弱めに撃ったので少年も無事だ。

それでも五、六メートル程は飛ばされたので身体が痛くないハズはない。

「いつもこうだ……何をやっても力で地面に捻じ伏せられる。殺してやるう……お前らみたいなのが悪いんだよ……!」

御坂美琴は歩きだす。

介旅初矢の元へゆつくりと歩き出す。

こんな奴には能力なんて、使う必要などないと言うように。

「風紀委員だつて同じだ!! 力のある奴は皆……そうだろうがあッッ!……!」

介旅初矢は吠えるように叫ぶ。

この世界の現実から目を背けたく仕方がないように。

不良に虐げられ、誰からも救いの手を差し伸べてもらえなかった自分の気持ち、超能力者に分かるのかとも言うように。

「^{ちから}能力、チカラって……」

美琴は額付近からバチバチと火花を散らす。怒りの象徴。感情が高まると起きる現象。

がッ！と介旅の襟首を掴んで自身の顔に近づけて、殴る為に右腕を引く。

その右拳は強く握られている。

「歯を喰いしばれえ！！」

その拳が振り下ろされる。だが、その拳が介旅の顔に突き刺さる事はなかった。

「……………」

美琴は歯軋りさせて振り向く。

美琴の拳は介旅に届かなかった。

そう、ムカつく無能力者、竜野勇輔りゅうのゆうすけのせいだ。

「……………何で、何でアンタがここに居るのよ…………ッ！」

その言葉に返事は無かった、竜野は無言で美琴の前に出る。

介旅を睨みつけて。

「なっ……………何だよ……………僕は僕を救うんだっ！ それの何が悪いってんだよオオオオオオオオオオオオオオオオッッ！！！！」

介旅は咆哮する。

自身は間違っていないと言うように、咆哮する。

この世界で自身が救われるのなら、何をしてもいいだろう、と。

「そう言うのなら、勝手に救えばいい。誰も救ってくれないなんて思ってたんなら、勝手にそうすれば良いじゃねえか……………でも、アンタは一体何をした！？ その手でどれほどの人を傷付けてきた！？

今回みたいにアンタはそうやって人を傷付けてきたんだろうがっ！」

「違うっ！ あいつ等が悪いんだ、僕を救ってくれない、風紀委員が悪いんだろおがあっ！」

「じゃあ、もし、本当に風紀委員が悪かったとしても、アンタは一步間違えればもっと他の人を傷付けていた、もし風紀委員が一般人を庇っていなかったら、アンタはアンタを傷付けてきた奴らと何一つ変わらねえ。それを分かった上でやってんのかよ」

今回だつてそうだ。

初春がぬいぐるみの変化を察して、投げ捨てていなければ、竜野も何もできずに終わっていた。

美琴や上条、竜野はともかく、初春と鞆の女の子は確実に死んでいた。

「……ッ!？」

介旅は言葉を詰まらせる。

「そうだよな。分からねえよな、自分が救われるのは当然だつて顔で、自分しか救われようと思わないような奴に分かる訳がねえよな……、つまりそう言う事なんだよ。自分の事しか考えないで、他人を救おうなんて一瞬も考えようもしないような奴を、誰が助けようだなんて思うモンか」

竜野は言いながら、馬鹿馬鹿しいと思っていた。

こんな事、いちいち言わなくても誰にだつて分かる事だろうに。

「ち、ちが……う……」

介旅の口から、そんな一言が漏れた。
その短く、漏れた一言が介旅の全て。

「ぼ、僕だって力を持っていたらそうしていたっ！ そうだっ！
僕に力さえあればっ！！」

介旅の虚しい叫びを聞きながら、竜野はとある少女を思い出して
いた。

その少女も似たような事を言っていた。

能力さえあれば毎日が変わるかも、と無能力者の少女は言ってい
た。

竜野の勝手な想像だが、彼女は、今の自分に不満があるのだろう。
辛いハズだ。周りに対して自分は一体何をしているんだ、と劣等感
を覚えているかもしれない。

だけど、だからと言って、力を言い訳にして誰かを傷つけようと
はしなかった。力が無いから誰も助けようとしない、なんて事は無
かった。

現に彼女は銀行での事件の時、男の子を助ける為に強盗犯の前に
立ち塞がったではないか。何とか助けようと、自分を変えようと、
必死に戦っていたではないか。

それを——この目の前にいるヤツは——ッ！

「だったら、アンタは今持つてる、あれだけの事件を起こせる程の
力を誰かを助ける方へ少しでも向けようとした事があるのかよ？」

竜野は問う。

その答えは否だ。介旅はそのチカラを使って誰かを助けようだな

んて考えた事も無い。

余裕さえあれば、その余裕を全て自身の幸せの為に費やしていたはずだ。

だから、こんな事が出来るのだろう。

そうでなく、ただ人を傷付けるのを楽しんでいるのなら、本当に救いようがない。

「……うるさいっ！ お前のような人間に、僕の気持ちがあつてたまるかああああああああッッッ！」

先程、美琴の超電磁砲で吹き飛ばされた際に、鞆から零れ落ちたアルミ製のスプーン。

それを介旅は掴み取り、叫びと共に放る。

自身の最大出力で爆破させる為に。

介旅の能力は、近くに居れば能力を使った本人にも危害を加えるので、このような近距離の戦闘では実用的ではない。

「——ッ!？」

竜野の後ろに居る美琴は驚愕するが、介旅は止めない。

自身の全てを否定されたような気がした介旅は、自身の肉体の危険に構わず全力で能力を発動する。

宙に放られたスプーンが、圧縮していく。後一秒もあれば、大爆発が起きるだろう。

「分かるかよっ！」

竜野の右手が、介旅の圧縮されていくスプーンを掴み、握り締める。

同時に、スプーンの圧縮が止まり、加速していくはずの重力子は

分散されてしまった。

相殺、打ち消し、と言うよりは圧倒的な力が下回る力を捻じ伏せるようだった。

「アンタの気持ちなんざ、一生かかっても分かるか。自分の事しか考えねえような、そんなヤツの気持ちなんざ知るかつ！ でもよ、オレは知ってるぞ、アンタのような力を持っていなくても、誰かを助けようと思えるヤツを」

竜野は原型を留めていないスプーンを投げ捨てる。

介旅は頂垂れた。

もう彼の手元に爆弾となる、武器は無い。

いや、それ以上にもうこの少年と張り合えるような気がしなかった。

この少年の言う事が、全て正しいとは思わない。

だが、介旅と竜野とでは、考え方も理想も違った。

介旅の理想は自分が救われる、それだけの世界。

見ず知らずの誰かの為に動ける竜野とは、根本的な所から違った。

「あー……白井？ ソイツを頼む」

「あら、気付いてましたの？」

黒子が、風を切り裂く様な音と共に介旅の背後に飛んできた。

美琴も気付いていたらしく、特に驚かなかった。

だが、黒子は竜野が自分に気付いたのが意外だったらしく、驚いたような顔をしていた。

「いや、偶然。行こーぜ、御坂」

「……分かつてるわよ」

竜野は殴る訳でもなく、ただ、その場を立ち去った。

* * *

竜野と美琴はとある公園の自動販売機の前に居た。

「……まったく、良いトコだけ持っていきやがって……都合の良いヒーローかアンタは」

「はは、んな訳ねーよ。なれるモンなら、なってみてーけど」

竜野は、自動販売機に百円玉を投入しながら答える。

「なら、名乗り出れば？ みんな私がやったと思ってるわよ」

美琴は、常盤台中学内伝、おばーちゃん式ナナメ四十五度からの打撃による故障機械再生法なる、必殺技を使って、見事ヤシの実サイダーを当て、一口飲んでから提案する。

正直な話、これ以上この少年に借りを作るのは美琴が許せない。案外、本人はそう思っていないらしいし、それを理由に何かしろ、と言う訳でもないのだが。

ちなみにこの技を見た竜野の感想は「それが原因でこの自動販売機ぶっ壊れたんじゃない？」だった。

たとか届かなかったとか。

チカラ（後書き）

はい、上条さんばりの説教の回でした。

今回は、救われない介旅の為の話です。

原作でもアニメでも、美琴に殴られて終わりのキャラだったので、こんな形になりました。

次回、介旅初矢と釧路帷子、二人の量子変速が交差する時、物語は始ま——りません。

夏休み前日（前書き）

最初に一言……——俺の文章に常識は通用しねえ。

夏休み前日

「うむ……………」

白井黒子^{しらいくろこ}は、頭から蒸気を発する程考え込んでいた。
夏の炎天下の中で、虚空爆破事件^{クラッシュ}について考えているのだ。

「どうしたのよ、難しい顔して……………」

凄い形相で考え込んでいる黒子に、隣にいる御坂美琴^{みさかみこと}は少し心配
そうな顔をして聞く。

「お姉様、昨日の虚空爆破事件の犯人、本当にあの男で間違いない
んですの?」

黒子が美琴を疑うような口調で言った。

「そうだけど、どうして?」

「『書庫^{バンク}』の登録データでは、あの容疑者の能力は……………異能力者判
定となっているんですの」
「うそっ!?! 明らかに大能力者^{レベル4}クラスの破壊力だったわよ」

美琴はその威力を目の前で見たし、本人も自身がやったと認めて
いたので間違いないはず。

だから信じられなかった。
あれ程の威力を持つ能力が異能力者どまりだとは思えない。
というより、有り得ない。

「ええ、ですから、これはつまり……………」

言葉に詰まった黒子は手を顎に当てて、考える。

美琴は黒子が答えるのを待つように、その姿を見る。

沈黙する事数秒、その時間の間、あちこちから聞こえる蝉の鳴き声で、さらに暑くなった二人。

そしてしばらくして、黒子は困ったような顔で言った。

「どう言う事でしょう？」

「今私がそれを聞いた所なんですけどねー」

「……………」

正直、無駄な時間を過ごした観が歪めないのも、少し苛立った美琴だった。

「ま、まあ、煮詰まってるんなら一度休んで頭切り替えましょ」

美琴はそう言って少し離れた場所にある、かき氷を売っている移動販売店指を指した。

「不思議なものですわね」

黒子はかき氷店に装飾されている風鈴の音を聞きながら、先ほどとは打って変わって涼しげな顔でそう言った。

美琴は、黒子と自分の分の二つのイチゴのかき氷を注文しながら聞く。

「気温自体は変わらないのに、風鈴の音色を聞くと、少し涼しく感じますの」

「あー、共感性ってやつね」

美琴の口から出た単語に、黒子は首を傾げる。

「一つの刺激で二つの感覚を得る事よ。例えば普通、色を視たら人間の脳みそって五感の内、視覚のみを得る訳じゃない。でも赤系の色を視たら温かく感じたり、青系の色を視たら涼しく感じたり、視覚以外にも色んな影響があるでしょ」

ここら辺の知識が豊富なのは、やはりエリート校たる常盤台中学の生徒であると言う事だろう。
というより、中学生がこんなハイレベルな会話をする事自体が驚きだ。

「暖色』『寒色』というものですわね」

美琴は店員から手渡された注文したかき氷を見る。

「これなんかもそうよね」

イチゴの赤に、メロンの緑、レモンの黄色と補足説明する。
美琴の説明を受けた黒子はなるほど、と言う顔で。

「シロップの味で色をイメージしてますですね」

「人間の頭って意外とカンタンっつーか」

「ユーモアがわかるんですのよ」

美琴の言い方を訂正するように口をはさむ。
そんなやり取りをする二人を呼ぶ声が聞えた。

「御坂さん、白井さん。昨日はお世話になりました」

「佐天さん？」

声の主は佐天涙子。さてんるいこ

いつも通りの明るい笑顔でおいしそうですねー、と一言。

意外そうな顔をしている美琴の隣では、かき氷を一口放り込んだ黒子はあまりの冷たさのせいか、体をキイイイイインと震わせている。

その後、佐天もかき氷を購入し、美琴と食べ比べしたりなど色々なイベントがあり、しばらくした所で美琴は佐天に最も言いたかった事を口にする。

「あ、そう言えば昨日言ってた『レベルアップ幻想御手』っての、もう一度詳しく黒子に説明してやってくれない？」

美琴はセブンスミストでの会話を思い出して言う。

佐天は都市伝説の類が好きで、美琴達にも教えていたのだ。

「え？ いいですけど……ただの噂ですよ？」

* * *

「能力のレベルを格段に上げる？ 使うだけで簡単に？」

黒子の、佐天から幻想御手について聞いた後の感想はこんな言葉

だった。

しかも今の黒子の顔は、胡散臭い深夜の通販でも見てるような顔であった。

「いやっ！ だから噂ですって！ あたしが言ってる訳じゃないですよ？ 実態もよく分からない代物ですし！」

何故か必死に語る佐天は、はあとゆっくりと息を吐くと。

「それに噂はどっかの学者の遺した論文だとか、実は料理のレシピだとか、色んなのがあって……」

「まあ、普通有能力開発って学校で何年もかけてするもんだし、そんな都合のいい話があるのかって思うけど……」

美琴は、かき氷のからになった器を三つ、適当な所に放り捨てる。そのゴミを清掃ロボが吸い込んで回収する。

便利な街だ、と最初こそ思うが、しばらくするとこれが当たり前になってしまふのは少し怖い。

訝しむような顔をして、美琴は口を開いた。

「タイミングが良すぎるのが気にならない？」

「そうなんです。実は、犯人の登録されたレベルと、被害状況に食い違いがあるケース……今回が初めてじゃありませんの。数件ですが、全てここ最近、立て続けに起こっていますの」

そう幻想御手の噂が流れ始めた時期と、登録されたレベルと被害状況の食い違いのケース、これらが多くなった時期が、重なってしまふのだ。

だから美琴は言った。

タイミングが良すぎないか、と。

佐天はまったくついていけないようで、首を傾げている。

「佐天さんっ！ 他に何か知ってる事ない？」

美琴と黒子が、今にも喰らいついて来そうな勢いで佐天に迫る。

黒子に関しては、獲物を狩る獣のような目になっている。

佐天はうるたえながらも、人差し指を顎にあてて答える。

「自称ですけど、『幻想御手』を使っただけで奴らが、ネットに書き込みしてるみたいですけど……ただ怪しい連中ってゆーか、不良っぽいのかでどこまで信用できるのやら……」

「信じられませんが、そう言った物があるのが事実なら、調べて見る価値はあるかもしれせんわね」

そう呟くと、黒子は身を翻して駆けだした。

「ありがとねー佐天さん」

「あっ！？ いえ……………え？ 『幻想御手』ってマジモンなの？」

やけに真剣に聞き入っていた二人を見て、思わずそう思ってしまった佐天は、取り敢えず初春の看病に行く事にした。

* * *

その同時刻。

竜野勇輔りゅうのゆうすけは学校の帰り道の道中で、戸惑っていた。

明日からは夏休み、とルンルンな気分であへと帰宅する途中で、目の前に居るいつの日か会った明らかに偽名だろ！？ な銀髪シスター、インデックスが、がっくりと項垂れていたからだ。というか、生き倒れていたからだ。清掃ロボに引っかかって。

「ねえ。聞ってる？ おなかすいたっていつてるんだよ」

「.....え？」

たった一度会っただけの人に、遠回しに何か食わせろ、と言っインデックスを見て竜野は思う。

（うん、いらねー予想はするもんじゃないな）

また出会えると良いと思った事を今更ながら後悔する竜野だった。

* * *

とあるファミレスの一角に、一人の少年と一人の少女が向かい合
って座っていた。

『幻想造り』竜野勇輔と『禁書目録』インデックスの二人である。
簡潔に言おう。

インデックスの生き倒れ現場を見た竜野は、目を擦りながらその
場を立ち去ろうとすると、制服の裾をぎゅっ、と掴まれ、引きずり
回す事、約四時間。

その間、周囲の学生達からは不審な目で見られる事となった竜野
は、四時間にも及ぶ時間を費やして気付く。

うん、何か食べさせてやらない限りずっと付いてくるつもりだよ
この人、と。

そんなこんなで行き着いた場所がこのファミレスだった。

「あー、まだ食べる気か？」

「うん、まだまだ食べるから安心して待ってて！ ゆうすけ！」

「いやっ！ 何も安心できる要素ないんですけどっ！ これから夏
休みだつてのにオレの財布の中が氷河期に突入しそうな勢いなんだ
けどっ！」

がつがつと食べ続ける事約一時間、そんなに腹が減っていた
のか？ 仕方ない、ちよっとくらいなら払ってやるよ、と最初こそ
思っていたが、今となつては、もう止めてください、と土下座した
いくらいだ。

インデックスの側のテーブルには、皿が既に数枚重なっているの
だが、未だに止まる様子はない。

いや、時折店員が皿を回収してくれるので、目の前にある皿の枚
数より遥かに多い数を食している。

たまに来る店員の目が哀れみの視線を帯びているのが堪らなく辛
かったりする。

「都合の悪いトコのスルースキルは相変わらずだな……………」

かわいい孫に何か買ってあげる位のつもりで、連れてきたファミレスだったが、このままの勢いでは手持ちで足りない。

目の前でがつがつ食べるインデックスの姿は可愛らしく、心が和むのが唯一の救いだろう。

どっかの電撃姫にも見習ってほしい所だ。アイツも遠巻きに見ている分には可愛いトコはあると思うんだけどな、と竜野は思ったが、絶対に本人には言わないでおこうと内心誓った。

インデックスに関しても、これだけ美味しそうに食べてくれるなら、まだ食べさせて良かったと思える。

「くそお…………目から汗が止まらねえ」

そうは言ってもやはり無能力者は貧乏学生だったと言うのが現実だった。

ついに涙腺崩壊した竜野の目からは滝のように涙が流れており、その涙を拭きながら目の前にある注文したジュースをストローを使って飲む。

今夜の飯はジュース一杯か…………と、絶望している竜野の前では、今も店員さんに、これと…………これもいいかも、と注文しているインデックスの姿があった。

目の前の現実から目を背ける為、何気なく通りの奥のテーブルを見てみると、ブツ！？と飲み物を逆噴射している白井黒子の姿が視界に入った。

今までは、竜野の席の死角になっていたせいで見えなかったが、更に奥の、大人数用の大テーブルの前で、三人の不良を前に、はっちゃけている美琴の姿があった。

普段の美琴の姿からは想像できない程のぶりっ子と化している。

台詞で言うなら、語尾にハートが付く様な感じた。

「てゅーか、何してんだ？ 御坂のヤツ」

本当にそんな疑問しか浮かばない竜野だった。

猫かぶりにしても、よくあそこまで演じる事が出来るものだ。

役者にでもなったらどうだろうか、と思った竜野はよからぬモノを目撃する。

スキンヘッドの男が、猫かぶりモードの美琴の下半身……少年誌とかで載せたら苦情が来そうなダメな部分を、ひどくイヤらしい目で見ている所を。

竜野は直感的に思った。

これって描写的に不味くね？ とそして同時に思った。描写的につて何？

何かに突き動かせるように動き始めた竜野の行動は早かった。

「あー……インデックス？ オレ、盛り時の不良に用が出来たから、待ってる」

「うん！」

竜野は目の前に並ぶ食事に夢中のインデックスを横目に、席から立ち上がり、スキンヘッドの男の元へ歩み始めた。

* * *

「金もいけどこう言う時はやっぱり“こっち”の方がねえ」

スキンヘッドの男が、馬鹿丸出しのイヤらしい目をして、猫かぶりモードの美琴を抱こうとした時だった。美琴の手が誰かに掴まれた。

（そっちにも！？　まず―――）

思いつきり引つ張られ、バランスを崩しそうになりつつも、何とか転ぶ事だけは防いだ美琴は、スキンヘッドの男の腕からは逃れた。だが、美琴の腕を引つ張った誰かのせいで、その場から言い逃がれると言う行動は出来なくなってしまった。

多少荒事になるのも覚悟して振り返り、美琴は自身の腕を引つ張った誰かを確認すると。

そこには、例によってム力つく無能力者の少年が立っていた。

（つて、アンタかい！！）

「おー御坂。こんなトコに居たのかよー、ほらさっさと行くぞ。ウチのツレがどうもすみませんねー」

滅茶苦茶下手くそな、というより相手の機嫌を取る気すら感じられない愛想笑いをして竜野は不良三人から美琴の手を引いて抜けだそうとする。

「いやっ！？　違ッ！　待っ！？」

手を握られた事が、それとも単純に焦っているのか、赤面している美琴を無視して、インデックスの座る席へ竜野は進む。

「よーし、インデックスも帰ろーか？」

「え？ まだ食べ足りないかも」

「それだけ食べれば充分だろ。今から全力で盛り時の不良から逃走劇を繰り出すんだから」

あまりの唐突な出来事に、しばらく固まっていた不良の一人が口を開いた。

「オイ、テメエら。グルだな」

「……………へ？」

竜野が、不良の言葉をよく理解できずに振り返る。

話の脈路を辿ると実は美琴達は『幻想御手』の情報を掴む為に不良達に近づいたのだが、当然竜野はそんな事は知らない。

後ろには先程まで三人しかいなかった不良達が九人に増えていた。焦って視線を元に戻すと、何故だか既にインデックスの姿はなかった。

彼女のモットーは忽然と現われて忽然と去るなのか、と疑問を思い浮かべたくなる光景だった。

（あの子どっか逃げやがった——ッ！？）

一足先に逃亡したインデックスに心の内で驚愕していると、背後から不良達の声が聞えた。

「そうやって『幻想御手』を騙し取ろうとしてんだな。きたねえ手使いやがって、ボコボコにしちまおうぜ」

スキンヘッドの男が後ろに居る八人の不良を見ながら竜野を指差す。

よく状況を理解できない竜野は、無言でインデックスの手元に置かれている伝票を手にとり、スキンヘッドの男の手を取って無理矢

理手渡す。

そして身体を出口へ向けて、同時に美琴の手を取ると。

「よく分かんないけど、会計お願いしますうううウウウウウウウウッ!!」

清々しい程全力疾走で、ファミレスから飛び出した。

訳の分からない不良は取り敢えず手渡された伝票を視て言った。

「ゲッ!? あの野郎、食事代全部押しつけて行きやがった!?
信じられねー!!」

「ちょ……これ見ろよ」

不良の一人が金額を見て驚愕する。

そこには確かにこう記されていた。

五万八六〇〇円と。

金額もそうだが、その九割以上がインデックスの所業なので驚きだ。

押しつけておいてなんだが、可哀想だなー、と走りながら思った
竜野だった。

竜野に引つ張られている美琴の方は思考回路がショートしている
ようだった。

* * *

強引に不良に支払いを任せた……押しつけた竜野は、美琴を引き

ずり回して行き着いた場所は、大きな川に架かっている鉄橋だった。鉄橋についてからようやく竜野に解放された美琴の顔はしばらく真っ赤だったが、時間と共にいつも通りの表情に戻ってしまっていた。

竜野と向かい合うように立つ美琴は頭を掻きながら、忌々しげに口を開いた。

「……まったく、アンタのせいで情報取り逃しちゃったじゃない……」
「情報？」

「『幻想御手』よ。あの不良共も言ってたでしょ。ズルして才能を補う裏技の噂よ」

「あー……佐天が言ってたな。確か登校してる時」

「女子と一緒に登校とはいい御身分ね」

「いや、別にそういうつもりではないんだけど……ってか御坂の中でも流行ってるのか？　そういう都市伝説みたいなの」

美琴は、はあ、と大きく呆れたような溜め息を吐く。

「まあ頭の開発を時間割りに組み込んでいる学園都市には『神様の頭脳』の副産物の噂がたくさんあるのよ」

「あー、『神様の頭脳』ってアレか、超能力者^{レベル5}の先に在るモノとか何とか……」

竜野は曖昧な記憶を辿る様にして言葉を出していく。

「まあ、超能力者の電撃を受けても立ってるアンタも都市伝説クラス^{バケモノ}の天災じゃない」

「はは、オレは本当にただの無能力者だって。気にすんな。どう考えても御坂の方が強えよ」

直後、美琴の周囲が帯電し、竜野に向けて電撃が飛んだ。

「——ッ!？」

竜野は咄嗟に右手を突き出す。

電撃は右手に触れると、切り裂かれたように分散して攻撃としての機能を失う。

最近まったく役立たずになった『幻想造り』だけど、この“右手”は健在でよかったー、と感涙しそうな竜野は言う。

「うん、ごめん。オレの方が強いからもうヤメテ」

竜野は両手を前に出してブンブン振ってストップの意思を示す。

「ほうほう……なら——ッ!！」

しかし美琴は、興味深げな顔をして体中に青白い電撃を帯電させる。

美琴の姿を見て、嫌な予感がした竜野は焦って上空を見上げると、黒雲が空を埋め尽くしていた。

簡単なお話だった。

この場合、どの選択肢を選んでも結果は美琴との強制戦闘へと突入するイベントだった訳だ。

あー、死んだな、と竜野が思った時、美琴が好戦的な笑みを浮かべて言った。

「いつぞやの決着、今日こそ着けてやろうじゃないッ!」

「だから、お前と話すのは嫌なんだよ! いつの間にか会話が戦闘にすり変わるからな!」

チックシヨオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ！
！！ という竜野の叫びは美琴の起こす自然現象——落雷によつて掻き消された。

夏休み前日（後書き）

ファミレスの場面は半ばギャグのつもりでやってしまいました。インデックスが姿を消したのはちゃんとした理由はあるんですけどね。こっから先はずっとシリアスなお話が続くような気がしたので、一回やってみよう……。どうだったか気になるので、感想書いて貰えると嬉しいです。

超能力者と無能力者

「初春はさ、高レベルの能力者になりたいと思わない？」

「へ？」

佐天^{さてん}涙子^{なみこ}は現在、熱を出した初春^{はつはる}飾利^{かざり}の看病をするために、初春の住む寮へ訪れていた。佐天が初春の背中を拭きながら言ったのが、高レベルの能力者になりたいと思わない？ の一言だった。

「んー、そりゃ能力は高い事に越した事は無いですし、進学でも断然有利ですけど」

「やっぱさ……」

人差し指を顎に当てて答える初春が言葉を止めた所で佐天が口をはさむ。

「普通の学生生活なら学園都市の外でもできるし、超能力に憧れて学園都市に来たって人多いでしょ。あたしもさ、自分の能力って何なんだろう？ あたしにはどんな力が秘められてるんだろうって……ここに来る前日はドキドキして寝れなかったよ」

タオルを絞りながら、昔を懐かしむように佐天は言った。
今の自分は何なんだろう、とでも言いたげな様子だった。

「それが最初の身体検査で『あなたには全く才能がありません』だもん。正直へこんだ」

佐天が言うと、初春は考え込むように一瞬、俯くと顔を上げて言った。

「私は能力の強度は大した事ありませんけど、白井さんと仕事したり、佐天さんと遊んだり、毎日楽しいですよ。ここに来なければ皆さんと出会う事も無かった訳ですから、それだけでも学園都市^{「ユ」}に来た意味はあると思うんです」

初春はそう言って、微笑む。

その笑顔に偽りはなく、きっと彼女の心の中にあつたものがそのまま言葉になったようだった。

「初春……」

「？」

「あー！！ もうかわいいーこと言ってくれちゃって！」

後ろから初春に抱きつく佐天は、どつかのお姉様至上主義の風紀^{ジャッ}委員とその姿が重なっていた。

キヤーキヤー悲鳴をあげる初春のもとに助けが来た。

部屋が真っ暗になったのだ。雷が落ちる音がしたので、きっとそれが原因で停電したのだろう。

正直な話、本当に助かった、と思った初春だった。

ちなみにこの落雷は、御坂美琴の仕業であつたりするのだが、その事実を初春達が知る由は無かった。

* * *

七月二十日。

夏休み初日の真昼間。

水穂機構病院に御坂美琴と白井黒子の二人は居た。

この病院も、落雷による停電のせいで、電子機器がおかしくなっ
てしまい、クーラーが効いていない為うだるような暑さなのだが、
そんな病院内に何故二人が居るかと言うと。

美琴は、竜野を追いかけ疲れて、さっさと帰って寝ようと思い、
ふらふらと危ない足取りで横断歩道を渡っていた所、急に黒子が空
間移動で現れた。

話を聞けば、虚空爆破事件の容疑者である、介旅初矢が、警備員
グラビトン
の事情聴取を受けていた所、いきなり倒れたそうだ。そこで、介旅
の容態を知る為、二人で介旅の運ばれたという水穂機構病院に来た
という訳だ。

そこで院長から、大脳生理学の専門チームを呼んだと言う話を聞
いていた所、とある通路に立っている美琴達の背後から複数の足音
が聞えた。

「お待ちせしました」

その言葉に美琴達は振り返ると、プロフェッショナル観漂わせる
科学者らしき集団が居た。

先頭に立つ、茶髪で、何より特徴的なのは、目の下に大きなクマ
が出来ている女性。クマは研究のせいだろう、きっと。

その残念美的女性が口を開いた。

「水穂機構病院院長から招聘を受けた、木山春生です」
きやまはるみ

同時刻。

佐天涙子は、パソコンに向かい合っていた。

「あー見つからないかなあ。『^{レベルアップ}幻想御手』。やっぱ噂は噂なのかなー」

座っている椅子を傾けながら、そう言う佐天は何気なく床に置いてある音楽プレイヤーを視ていると。

バランスを崩して床に崩れ落ちる。

いてて、と言いながら、音楽プレイヤーを拾って椅子をたてなおす。その顔はとても眠たそうで、今日どこかで美琴達と邂逅している残念美人ほどではないが、目の下に少しクマが出来ている。

「……コイツにも何か新曲入れとくかねえ……ん？」

どうやら椅子から落ちた際、机に積み上げていたプリントの山が崩れたせいで偶然、マウスを押したらしく、佐天の開いていたページから移動していた。

「何だろう？ 隠しページ？」

そう言つて、画面をよく見るとこう表示されていた。

Levelupper。

Artist UNKNOWN。

そう、佐天がずっと望んでいた、能力者になる夢。

美琴曰く、才能の不足をズルして補う裏技。

能力者になる夢をかなえてくれる都市伝説上の噂に過ぎないアイテムだった。

それが今、確かに佐天の目の前にあった。

あまりにも簡単に手に入ってしまったせいか、実感がわかないようだった。

普通なら、叫ぶように喜んだっていいハズの展開だが、佐天は意外そうな顔で言った。

「こ、これって……」

しかし、確かに存在した。

噂に過ぎないと思っていた『幻想御手』は確かに存在していた。

佐天は、初春にもサプライズ的に教えてやろうと携帯電話でメールを送るのだった。

メールを送りながら、あの少年も誘おうかな、と思った佐天だった。

* * *

「んー、極めてメンドクサ……」

いっせいのめっすけ

竜野勇輔は、寮の自室のベッドに寝転がりながら携帯電話の画面を見てそう呟いた。部屋は昼間だと言うのに真っ暗で、ダメ人間が生きていきそうな部屋と化していた。

佐天涙子からのメールだった。

簡略すると、見せたいものがあるんだけど会えないか？ との事だ。

結局、夜が明けるまで美琴との決闘……もとい理不尽な暴力は続き、その上美琴の落雷のせいでクーラーがぶっ壊れてしまったようで、一睡もできなかった。ちなみに午前、停電が原因の電子機器の故障でどこかのツンツン頭の少年は不幸だぁーっ！ と叫んでいたとかいなかったとか。そんな少年の寮のベランダに銀髪碧眼のシスターさんが引つかかっていたとかいないとか。

蒸し暑い部屋の中でうだーうだー、言っていたら既に昼間。

ようやくクーラーが復活したと思った瞬間に届いたのがこのメールだったりする。

眠いし、そして何よりメンドクサイので（ココ重要）、懇切丁寧に断ろうと、思った竜野が返信しようとした瞬間だった。

ピンポン、とインターホンの単調な音が鳴った。

『竜野さーん、いますかー？ 返信待ちきれなかったので来ちゃいました！』

元気で元気で、活発過ぎて困る後輩の声が聞えた。

というより、メールして三分も経たないのに待ちきれないってどういう事？ と問いたくなった竜野は取り敢えず言った。

「……………、いませんよー」

直後、ガチャ、とドアが開けられた。

うん、戸締りはしっかりしよう、と決意する少年の目の下にはクマがあった。

* * *

御坂美琴と白井黒子、木山春生の三人は病院からとあるファミレスに場を移して話していた。

主な理由……、原因は、美琴の落とした雷の起こす電波障害で、クーラーの全く効かない病院で話していると暑い、の一言同時に木山がイキナリ脱ぎ始めたからだ。

実は木山春生は都市伝説の脱ぎ女だとか何とか。簡潔に言っと、常盤台の誇る電撃姫が原因だ。

そんなこんなでファミレスに来た三人の内の一入である木山春生が、やけに真剣な表情で両手を顎に当てながら口を開いた。

「さて、先程の話の続きだが……、同程度の露出でも、何故水着は良くて、下着はダメなのか……」

同意を求めるように視線を、向かいの席に座る美琴と黒子へ向ける。

「いや、そつちではなく」

始めて美琴と黒子の二人が、心の底から意見が合致した瞬間だった。

二人の表情は残念な人を視るようだった。狙っていた訳ではないようなので、病院で最も聞きたかった『幻想御手』の話を面倒くさそうにもう一度する黒子達だった。

「『幻想御手』……それはどういったシステムなんだ？ 形状はどうやって使う」

木山が少し、興味を持ったような面持ちで言った。

だが、その問いに答えるだけの知識を美琴も黒子も持っていない。

「まだ……分かりませんの」

黒子は申し訳なさそうに言った。

「とにかく君たちは、それが昏睡した学生たちに関係しているのではないかと、そう考えてる訳だ」

そう、それこそが美琴と黒子なりに、考えて行き着いた答えだった。

全てを言った訳ではないのだが、木山はそれだけの情報を与えられただけなのに、黒子達の意図を理解したようだった。

「はい」

「では、何故そんな話を私に？」

「能力を向上させるという事は、脳に干渉するシステムの可能性が高いと思いますの。だから、もし『幻想御手』が見つかったら専門家である先生に、ぜひ調べていただきたいんですの」

「……むしろこちらから協力をお願いしたいくらいだ。大脳生理学者として、興味がある……ところで、さっきから気になっていたのだが……」

木山は神妙そうな顔で、ファミレスのガラス越しに見える外をおもむろに見る。

「あの子たちは知り合いかね」

美琴達も見てみると、そこにはガラスにべったり張り付くようにしている佐天と、それを笑顔で見守っている初春と苦笑いをしている竜野の姿があった。

思わぬ所で邂逅した一人の少年と四人の少女と一人の脱ぎ女は、テーブル席に座っている。というより、元々三人だったテーブル席に、竜野ら三人が入ってきたというだけなのだが。

「へー、脳学者さんなんですかー。はっ！？ 白井さんの脳に何か問題がっ！」

「大丈夫だ初春。白井に関しては問題がある事が通常だからな。問題が無くなったその時こそが異常だ」

「『幻想御手』の件ですの。それと竜野さん？ それはどういう意味ですの？」

「な……ナンノコトヤラ」

佐天は、注文したケーキをパクついていたのだが、『幻想御手』という言葉聞いて反応する。

実は、竜野や初春に言った、見せたいものとはその、『幻想御手』なのだ。どうせ驚かせるなら多い方が面白い、そう思って佐天はポケットから『幻想御手』の音楽ファイルが入っている音楽プレイヤーを取り出そうとする。

だが、その行動はすぐに止める事となる。

御坂美琴の一言によって。

「黒子が言うには、『幻想御手』の所有者を保護するんだって」

その一言を聞いて、佐天は携帯電話を取り出すその手が止まり、全身が固まった。

「何でだ？ 『幻想御手』ってレベルを簡単に上げる、青いアンチクシヨウとかが、ポケットから取り出すような道具並の性能なんだろう？ それが何か問題でもあんのか？」

「……副作用がありますの。……それに、容易に犯罪にはしる傾向が見受けられますので」

「？ どうかしました佐天さん？」

固まっている佐天を見て、初春がそう言った。

佐天は初春の声を聞いて自身が呼ばれている事に気付き、はっとしたように音楽プレイヤーをポケットにしまう。

「！？ あ、いや……別に……」

佐天が、手をブンブン振って何でもない事を知らせる。

直後、注文していたジュースの器が倒れた。

それは、器の中身が漏れた事を示しており、偶然にも木山のストッキングにかかってしまった。

「あ……」

「す、すみませんっ！」

木山は、特に何も言う事なく、無言で立ちると。

「いや、気にしないでいい。かかったのはストッキングだけだ。脱いでしまえばも「問題あるわっ！」何故だ？ ストッキングすらも許されないのか」

「お、おおお、オレは何も見えてないんだなー」

そう言う竜野は、顔を両手で覆っているが、丁度、覗き込めるくらいに指と指の間をあけている。

黒子と佐天が説得力の無い説教を木山にする中、美琴はそんな竜野を見て。

「なに指の隙間から覗き込んでんのよっ！ アンタはっ！」

青白い火花を散らした。

「ち、違うッ！？ これは断じてそう言う事では無いぞぉー。きつと違うぞぉー。そうだと良いとオレは思うぞぉー。というか中三の男子なんだから仕方なくね？」

「……ッ！？ アンタはあ——っ！」

否定からだんだん自身の犯行を認める竜野に美琴の電撃が飛んだ。美琴は必要以上にひどく怒っており、竜野は電撃をモロにもらい、絶叫をしながらゴロゴロと床を転げ回っている。

ちなみに木山は。

「しかし、起伏に乏しい私の体を見て、劣情を催す男性など……」
「趣味嗜好は人それぞれですよっ！ それに殿方になくとも、歪んだ情欲を抱く同性もいますのよっ！」

それはきつとお前の事だ、と竜野と美琴はいつも通りの赤裸々な戦闘けんかをしながら思った。

「そうですよっ！ 人前で衣服を脱ぐなんて信じられませんっ！」

佐天の一言は説得力の欠片も無かった。

彼女自身、初春のスカートを毎度のようにめくっているのだから。ちなみに今日初春と会った時もスカートをめくっていた。

結局後半は、そんな喜劇的な会話のみで終わった。

そのままの意味、と言おうとした竜野の体が、いつの間にか十メートル程上空に立っていた。

というより、空間移動テレポートで飛ばされた、白井黒子によって。

竜野がそう認識した頃には時既に遅し。

自由落下していく竜野は悲鳴を上げながら、学園都市の大地に叩きつけられた。

正確には、叩きつけられそうになった。ギリギリの所で、黒子が空間移動してくれて、気付けば普通に地に立たされていた。

微妙に感動してしまった竜野は心の底から言った。

「すみませんでしたッ!!」

二つも年下の女子相手に全力で土下座をする竜野。

そのあまりにも完成度の高い土下座をする竜野の姿を見て、黒子は呆れたように溜め息をついて振り返る。

「? お姉様と佐天さんは……?」

何気なく黒子と初春が後ろに振り返ったその先には、さっきまで居たはずの佐天と美琴の姿がなくなっていた。

* * *

(黙っていれば……いいよね)

その場に居る事がつらくて思わず逃げ出してしまった。

とにかく走って走って着いた先は陸橋の下。走り疲れた佐天は橋を支えている柱に体重を預ける。

「はぁ……はぁ……せつかく見つけたんだもん」

手放してたまるか、と幻想御手の音楽ファイルの入った音楽プレイヤーを強く握る。大切そうに。

最後の希望と言っても、佐天のような無能力者にとっては過言ではない。

その時だった。

「どうしたのー？」

不意に横から声が聞こえた。

「み、御坂さん！？ …… どうして？」

声だけで分かった、御坂美琴だ。でもここに来た理由が分からないせいで驚いてしまう。

「だって急にいなくなるんだもん。心配するでしょ」

御坂が佐天に歩み寄ろうとする。しかし佐天は避けるように歩く。別に嫌いなわけではない。始めこそお嬢様と超能力者のイメージで嫌な奴だと思っていたけれど、ずっといい人だった。けど近づかれたくなかった。幻想御手を持っている事がばれるのが怖かった、反射的に音楽プレイヤーをポケットにしまいながら言う。

「別になんでもありません」

「で、でもっ」だ、だってあたしだけ事件とかそういうの関係無いじゃないですか「……」

美琴が何か言おうとしたが、それを佐天の一言が遮った。

「……能力者でも風紀委員でもないし」

ポケットに音楽プレイヤーをしまつと手を伸ばして暗に何も持っていない事を知らせる。

疑われている可能性を拭いきれなかったからだ。偶然、その代わりにポケットから御守りが落ちてしまった。

「あ……」

佐天が驚いたような顔をして、美琴がその御守りを拾って渡す。

「すみません……」

「それいつも鞆に提げてるやつでしょ」

「ええ……そうなんです。母に貰ったんです」

言いながら御守りを遠いものでも眺めるように見る。

「御守りなんて科学的根拠、何にもないのに……」

ほんの少しだけ嬉しそうに言った。

——ほんの、少しだけ。

『ねえちゃん、超能力者になるの？ カッケーッ！』

『へっへーん』

『涙子。お母さんは本当は今でも反対なんだからね』

『……………』

『はっははは。母さんは心配性だからな』

『頭の中弄られるなんて、やっぱり怖いわ』

『全然そんな事ないってえ』

『はい、御守り』

『わあ…非科学的』

——何かあつたらすぐに戻ってきていいんだからね。あなたの体が一番大事なんだから。

「ホント迷信深いんです。あたしのお母さん。こんな物で体を守れる訳ないですよ、バリアじゃないんですから」

「優しいお母さんじゃない。佐天さんを氣遣って御守りくれたんでしょ」

「分かってます。でも……その期待が重い時もあるんですよ。いつまで経っても、無能力者のままだし」

さてんるい
無能力者は^{みさかみこ}超能力者から目を逸らして言った。

みさかみこ
対して超能力者は無能力者から目を逸らさず、思ったままの気持ちを言葉に変えて放った。

「——レベルなんて、どうでもいい事じゃない」

佐天涙子の表情が曇った。

これが超能力者の本音。一切の偽りが無いからこそ、一瞬の逡巡も無く出た一言だった。

佐天は思った。

自分は一体、どんな答えを期待していたのだろうか？ と。
きつと分かった。分かったたはずなのだ。

——きつと世界も、友人を含めた他人は自分の為_に在る訳ではない。

そんな事くらい、ずっと前から分かった。

超能力者^{てんさい}に、無能力者^{ぼんじん}の世界など理解できる訳が無い事くらい。
他人が他人を理解できないように、誰も佐天涙子の全てを理解できる訳が無い事くらい。

——例え、同じ無能力者あっても。

能力者へ――Level upper

七月二十一日。

「『レベルアップバー幻想御手』、私でも能力者になれる夢のようなアイテム……だけれど得体の知れない物は怖いし、よく……ないよね」

さっちゃん佐天涙子は人が盛んに行き来する場所とは少し離れた、街の外れに居た。その手に自身の最後の希望とも言える――能力を得る事の出来る、今の佐天が喉から手が出る程ほしかったアイテム――
――『幻想御手』。

音楽プレイヤーに入れられたその曲のデータ編集を開いて、画面には削除するか否か。

指が曲の削除を選択して触れようとする。

（でも……、努力してもどうにもならない壁。生まれた持った才能は受け入れなきゃダメって事？）

気付けば、佐天の指は曲を削除する事を拒み、キャンセルの方へ指がいつていた。

その時だった。

「幻想御手、譲ってくれるんじゃないのか！？」

「――？」

その声は今、幻想御手に関わっている佐天に投げられた言葉かと思いい、そのままキャンセルを選んで、素早くポケットに戻す。

しばらくして、その声が自分に向けられたものではないと知り、その場を立ち去ろうと思ったが気になって声の聞こえた方へ向かつ

た。

声のした方へ向かい、行き着いたその現場は酷いものだった。

「十万で『幻想御手』を譲歩するって言ったじゃないか。冗談はよしてくれ……」

「悪いね、これついさっき値上げしてさ。ほしかったらもう十万もつてこいや」

幻想御手を手に入れようとしている青痣だらけの男と、その周りには幻想御手を使って強度を上げたと思われる不良が三人いた。

そしてその不良達はおそらく幻想御手を譲る気はないのだと佐天は直感的に理解した。これはあくまで外から見たからこそ理解できた訳で、おそらくあの男はそれに気付いていない。

「だ、だったらその金は返してくれ！」

男は、金だけもらって立ち去ろうとする不良の一人にしがみつく。しかし、その直後不良の膝が、男の鳩尾に入る。

「う、げえゝっ!？」

もがくように地面に転がる男を不良は容赦なく蹴りつける。

そして集団の中のボスと思われる一人がこんな事を言った。

「お前らのレベルがどれくらい上がったのか、ソイツで試してみるかあ？」

佐天はその光景を見て、すぐさまそこから逃げた。

理由は一つ、自分にはあの不良達を止める力が無い、単純に怖かった。

佐天は、レールガン超電磁砲でもジャッジメント風紀委員でもない。学園都市の住民の約六むのうりよ分

割の一人なのだから。

佐天は走りながら思う。

（し、しょうがないよね……あたしに…何かできるわけじゃないし、あつちはいかにもって連中が三人。こっちは数ヶ月まで小学生やってたんだし……、からまれてるのはまったく面識のない赤の他人。ここは見なかった事に……）

風紀委員に連絡しようにも運悪く、狙ったようなタイミングで携帯電話の電源は切れてしまった。

所詮、無能力者である佐天には助けられるはずもない。
でも同じ無能力者のあの少年ならどうしただろう、と佐天は思う。

「もっ、もうやめなさいよ！」

気付けば佐天は不良達にそんな言葉を放っていた。

何でこの場に戻ってきたかなんて佐天にも分からない。

こんな事をしなくたって近くににいるかもしれない風紀委員や警備員を探して助けを求める方が常識的だ。

さっさと謝って立ち去ってしまえば佐天は傷付かずに済む。見て見ぬふりをしてしまえばいい。

こんなことは御坂美琴や白井黒子等の無能力者とは住んでる世界がまるで違う能力者がする事だ。
（みやかみこ、しろくろこ）

こんな事するのは佐天涙子の世界とはかけ離れている。
（ものがたり）
それくらいは分かっていた。怖くて仕方がないのに、

ここで何かをしなければいけないような気がした。

しかし、そんな佐天の想いなどを全て無視されるに決まっていた。ストレス発散の相手が増えた程度にしか不良は思っていないだろう。限界まで勇気を振り絞って出した声は、直後の蹴りで意味を為さなくなっていた。

顔の横に鋭く重い蹴りが突き刺さる様に繰り出された。

その蹴り一発でどういう訳か、素材は分からないが、鉄かなんかでできていそうな壁がへこんだ。

その蹴りだけで佐天はビクツと肩を震わせた。

「今、なんつった？」

「あ、あ……」

「ガキが生意気言うじゃねーか。何の力もねえ非力な奴にゴチャゴチャ指図する権利はねーんだよ」

そう言ってリーダー格らしき不良は、佐天の長い黒髪を鷲掴みして引き寄せる。

佐天は今更ながら後悔する。

怖くてか、悔しくてか、どちらかは分からないが、涙が流れた。

—— やっぱりこんなのは佐天涙子の物語とは程遠い。

そう思った時だった。

「貰い物の力を自分の実力と勘違いしているあなた方に、彼女を笑う資格はありませんわ」

佐天とは違って、能力を持った才能ある人間の声が聞えた。

「風紀委員ですの。暴行傷害の現行犯で拘束します」

「し、白井さん……」

大能力者の空間移動能力者は、一分も経たない内に三人の不良の、二人を撃破した。

無傷で、余裕の態度で、圧倒的な力の差を見せつけて。

一体三だと言うのに、いとも簡単に不良二人を撃破した黒子を見て、ボスらしき不良が一人で喋り始めた。

「俺達はよ——盗みや恐喝、暴行やクスリ、他にも色々あくどい事楽しんでやってきたけどよー、最後はいつも風紀委員や警備員に追われてな、ウザってー目に遭わされてきたんだ」

だからよー、とボスらしき不良は言うと、地面を強く蹴った。

「でけえ力があればよ、一遍ギツタギタにしてやりてーって思ってたんだぜー!!」

能力を使うのかと思えば、不良是一直線に黒子の方へ駆けて行く。

「まったく……最近は逆恨みが流行なんですか?」

白井はあまりにも直線的に攻撃を仕掛けてくる不良を見て、その背後に座標を合わせ、空間移動する。

空気を裂く様な音と共に“黒子には目の前まで来たように見えた”不良の後ろへ移動する。

「???? 消えた……」

姿を消した事に驚いたのは不良ではなく、黒子の方だった。

黒子が出てきた座標に狂いはなかった。なのに元からその場にはいなかったようにあの不良の姿が見当たらない。

「白井さん、後ろっ!」

佐天が叫ぶのに反応して、鞆を盾にしながら振り向く。

しかし、その時には黒子と不良の間にそこまで距離はなく、直後鋭い蹴りが盾にした鞆ごと貫きそうな勢いで放たれた。

間一髪の所で鞆を盾にした黒子は蹴りの威力で吹き飛ばされそうになるもこらえて少し後ろに下がる。

いや、威力の強さに衝撃を受け止めきる事ができなかったのだ。

黒子の顔から余裕が消えた。

対して不良はこの戦闘を楽しんでいるような気さえする。

「おもしれえー能力だな。空間移動ってやつか？ 始めて見たぜえ
！！」

また馬鹿正直に飛び込むように直線的な近接を持ちかけてこようと近づく不良のボス。

(……まずは金属矢^{こいつ}で左肩に傷を負わせて戦意を削ぐ……)

太ももに捲かれた帯のような物にひっかけてある金属矢を取り出し空間移動させる。

左肩を貫くように座標を合わせて。

だが、その金属矢はまるで見当違いな方向に空気を裂く様な音と共に出現した。

最初は自身の目を疑ったが、キンという金属がアスファルトの地面に落ちる音と聞いて、改めて気付く。

金属矢が外れたのだと。

(……っ！？ 外した？ この距離で座標指定を誤るはずが……)

そこまで外した原因を探ると同時に不良はナイフをポケットから

引き抜き容赦なく振り回される。

それを黒子は上体を反らして避ける。

ナイフは黒子の髪をほんの僅かにかすめるとヒュン、と空気を裂く音がした。

空間移動で数メートル先に飛んで、不良から離れる。

（何で予測と違う場所に飛ぶのか……見極めますの！）

不良がガンガン突っ込んでくるのに対して黒子は紙一重で攻撃を避け、鞆を盾に攻撃を受け止める。

（何ですの。この至近距離での戦闘による妙な違和感は……）

直後、もう慣れてくる程もらった、強烈な蹴りが来た。そろそろ慣れてきた動作で防ごうとしたその時、ゴキツと嫌な音が聞こえた。別に黒子が油断した訳ではない。鞆を構えた場所とは明らかに違う方向へ蹴りが曲がったのだ。

不自然なその蹴りは白井の脇腹に。金属バットでぶん殴られたような鈍い痛みが襲った。

「——っ!？」

激しい痛みにも声にならない声を出して、らしくないが、顔を歪める。

威力のあまり吹き飛ばされた白井は脇腹からミシミシと骨に異常が起きたとしか思えない音を聞いた。

吹き飛ばされて、窓ガラスを突き破って白井はようやくそこで地面に転がる。想像以上の痛みにも、そのまま寝てしまおうかとさえ思ってしまう。

「今のはいい感触だったぜー。アバラが何本かいったかなー？」

不良は余裕の勝者の表情で割れた窓ガラスを踏みつぶしながら白井に近づく。

対する白井は今までにない、惨めな気持ちで胸がいっぱいだった。たかが不良に

とはいえ、まだ諦める訳がないのだが。

「はあ… はあ、……」

白井の呼吸は聞いただけで苦しくなるようなものだった。

息を吸うのが上手くいかない程の痛み。呼吸をしている事に、ここまで違和感を覚えたのは黒子にとっては始めてだった。気を抜けばすぐにでも膝から崩れ落ちる。

そんな状態の身体を無理矢理動かして、残り一本となった金属矢を帯から引き抜く。

引き抜いた金属矢を、不良に投げつける。当たっても致命傷になるような威力も、殺傷力もない。

これは黒子が、あの不良がどんな能力トリックを使っているのかを調べる為の物。

すると、通常なら直撃するはずの金属矢が、不自然に曲がった。

そこで、何かを確信した黒子は、不良に背を向けて、廃ビルの中を駆け始めた。

* * *

佐天涙子と幻想御手を手に入れようとしていた男は、黒子が廃ビルの中に入って行ったのを見送って自分達がどうすべきか悩んでい

た。

いや、悩んでいたのは佐天だけだったらしい。

「きみ」

今も中に居るであろう二人が入って行った廃ビルを佐天が見ていると、男が話をかけてきた。

後ろから聞こえた声に反応して振り返ると助けてもらった恩人が言うとは思えない一言を放った。

「今の内に逃げよう」

その殴られて痣だらけの顔で男は言った。

「そんな！ まだ白井さんがっ！」

佐天は何もできない代わりにせめてここで待っている事が普通なハズだ。

だが男は言う。

佐天が最も逃げたい現実を言葉に変えて。

「君も……無能力者^{レベル}なんだろう？ 見ただろさっきの。あの人は僕等、無能力者とは住んでる世界が違うんだ。ここに居ても僕らではただの足手まとい」

男は暴力より酷いかもしれない“現実”を述べる。
だが、それは彼なりの優しさ。

真実を言つて、出来る限り自分のように怪我をさせないように気を遣った言葉。

現実を突き付けて、本当の痛みを知らずに何とか目の前の痛みから逃れようとする為の冷たい優しさだった。

「——こんな時、無能力者に出来る事なんて何もないんだ」

男の言葉を聞いて、佐天の能力の渴望による幻想御手使用に歯止めをかけていた、何かが失われた。

* * *

（よかった……白井さん、無事だった）

佐天涙子は結局あの男の言うがまま、あの場を離れた。

とりあえず警備員アンチスキルを呼んでおいたので無事だと言う事だけ伝えられた。

結果だけ言ってしまうえば、黒子があ不良に勝利した。

（何かイヤだな……この気持ち。あたしと同じ中学生で、あたしと同じ年齢で、あたしと同じ女の子なのに……。あたしとは違う世界に住んでいる人がいる。能力者と無能力者では何もかもが違う）

電源の切れた携帯電話を握りしめる。

「——ルイコー！やっほー」

佐天の友達の声がした。

元気よく手を振っている、風紀委員ではない友達。

佐天と同じ世界に住む友達。

言ってしまうえば、同類。

「アケミ！ むーちゃん、マコチンも！」

「一人で何してんの？ 買い物？」

佐天は何をしていたかなんて正直に答えなかったのだからそれに合わせる事にする。

「うん、そんなとこ。アケミたちはプール？」

「それがスンゲー混んでてさ、全然泳げんかったんよ。できれば海とか行きたいけど補習あるし。あれさ——勉強の補習なら分かるけど、能力の補習って納得いかないんだよねー。あんな才能じゃん」

「あ、でもさ聞いた『幻想御手』っての」

友人の一人が出した話題で盛り上がり始めた。佐天以外は。

『こんな時、無能力者に出来る事なんて何もないんだ』

『何の力もねえ非力な奴にゴチャゴチャ指図する権利はねーんだよ』

二つの言葉がやけに佐天の耳に残っていた。

「あ、あたし……それ、持ってるんだけど………」

友達が欲しがっているのだから、とどこかで思う自分がいた。

——幻想御手を使えば、何かが変わるかもしれない。

能力者へ―Level upper（後書き）

ほぼ原作まんまの回でした。

そこまで重要じゃないと思った所は色々と端折ったんですけど（白井の廃ビルでの戦闘）こういうのって全部書いた方がいいんでしょうか？

意見、指摘をしてくれると助かります。

全部書いた方がいいのなら、書きたそうと思っているので、お願いします。

一步を踏み出す時

佐天涙子さてんるいこはとある公園にいた。

佐天の後ろの方には佐天の友達、アケミ、むーちゃん、マコチンが『幻想御手』レベルアップバーで上がった能力を使っている。既にアケミ達はレベル2〜3程度の力を使えるようになっていた。

対する佐天は両の掌の上に能力によって生まれた風が吹いている。小さな小さな能力。おそらくレベル1程度だろう。

（わ、わ、どうしよう……能力だあ）

でも。

（白井さんや御坂さんに比べたらささやかな力だけど、他人から見れば何という事もない力だけど）

それでも。

「……っ！！」

願いが叶った。どんなに努力しても越える事ができなかった才能の壁。

それは確かに佐天が願っていた能力。

憧れは憧れでしかなかった能力が、ずっと欲しかった能力が手に入った。

（――あたしっ、能力者になったんだ！！）

――世界が変わったような気がした。

＊ ＊ ＊

「完了っ」と

風紀委員である白井黒子と初春飾利は手に入れた情報をもとに幻想御手をダウンロードし終えた所だ。

使う為ではなく、情報が本当かどうかを確認する為。

「……、でも曲を聴くだけでレベルアップ何て、そんな事あるんですかねえ？」

どうにも胡散臭い話だと初春は思う。

どういう仕組みで出来ているのか知らないが、ただ曲を聴くだけでレベルが上がると言うなら学園都市がとくに開発していてもおかしくはない。

少し考えれば『幻想御手』には何かありそうだ、というくらいは一般人でも気付きそうなものだが。

それでも力を手に入れたと思う心がそういった正常な思考を奪うのかもしれない。

「善意の情報提供者は、そう言っていましたわ」

ついさっき、黒子が手に入れた『幻想御手』の情報。

あの不良のボスは、『幻想御手』が曲だと言う事を吐くと、それ以上の情報を渡さないように意図的に狂わされてしまっていた。

黒子から見るとそれはまるで、雑な洗脳そのものだった。

「正直、眉唾というか……はっ！？ これを使ってもし白井さん以上の能力者になったら今までの仕返しにあんな事やこんな事……」

初春はさっきダウンロードした『幻想御手』が入っている音楽プレイヤーを見ながら強く握りしめてニヤニヤし始める。

「思考がだだ漏れですよ」

白井が初春に囁くように言うと、初春は妄想の世界から戻ってくる。

「わたくしに恨みを晴らしたいのならぜひ！」

イヤホンを音楽プレイヤーに取りつけて、初春の両耳にもっていき。黒子は笑顔のせいで恐怖倍増だ。

「はうあっ！ 嘘です！ 嘘ですよー！」

耳に装着せんとするイヤホンを持つ黒子の腕をギリギリの所で受け止めた、涙目で抵抗する。

その時丁度、黒子の小さすぎて逆に使いにくい、小型ハイテク携帯電話が鳴った。

その音を聞いて初春は助かったというように。

「携帯なってますよ。携帯！」

手に持つというよりは耳につけるようなサイズの携帯電話を白井は取り出し、指で押すにしても小さな携帯電話で通話する。

後ろでは初春がはあゝ、と胸をなでおろしている。

「はい……はい、はい！ 分かりました」

それは通報で救助要請だった。

「また学生が暴れているらしいですの。初春は木山先生に連絡を」「分かりました！」

最近のほぼ毎日と言っていいほど起こる幻想御手の使用者と思われる能力者の起こす事件で風紀委員はかなり忙しい。

風紀委員の一日は長い。

AIM拡散力場解析研究所。

「ああ、現物は届いているよ」

木山春生きやまはるみは自分に与えられたもはや資料室と言っていいほど本やらレポートやら参考資料で埋め尽くされている部屋のデスクに座っていた。

埋め尽くされていると言ってもそこらじゅうに散らばっている訳ではなく、木山なりにきちんと整理整頓もされていてどこに何があ

るかは木山本人ならではの、分かるようになってい
取り敢えず『幻想御手』を解析している木山の通話相手は初春飾
利。

『音楽ソフトで能力を上げる……なんて事、可能なんでしょうか？』

携帯電話の向こうから飴玉でも転がしているような甘ったるい声
が聞こえる。

木山は目の前の幻想御手が入った音楽プレイヤーのイヤホンの特
に意味もなく摘むように手に取る。

「……難しいね。『^{テストメント}学習装置』ならいざ知らず……」

『あ……そうですか。そうですよね……』

「大丈夫だ。絶対に学生達は目覚めさせるよ」

その声には確信めいたように聞こえた。そう、まるではじめから
そうなるようになっていたというようなそんな風に聞こえたかもし
れない。

『はい、すみません。ありがとうございました』

ピッ、という音と一緒に通話が切れた。

木山は、自分のやるべき事への下準備を始める。そう、子供達を
恢復させるという、自身の命さえ懸けてでも、達成すべき事が。

（やっぱり、音楽ソフトなんて、見当違いなんでしょうか？）

初春は、幻想御手をダウンロードした音楽プレイヤーを見ながら思う。

そう言えば佐天さんも音楽プレイヤーを見せていた、と。

あの時はスカートをめくられた後だから恥ずかしさで注意深く見ていなかったけれども、もしかしたらあの時にはすでに佐天は『幻想御手』にまで辿り着いていたのかもしれない。

気になって初春は携帯電話を開いて、佐天に電話する。

だが、プルルルルと虚しく音が鳴り続け、電話に出たと思っていた音の後に電波の届かない場所にあるか……とお決まりの声が聞こえてきた。

佐天は出てくれない。

連絡が、とれなくなった。

不安がよぎったが、取り敢えずは『幻想御手』の危険性を知らせる為、竜野に連絡を入れておこうと思った初春だった。

* * *

七月二十四日。

柵川中学校内にある風紀委員第一七七支部に、御坂美琴、白井黒子、初春飾利の三人は集まっていた。

初春は現在、紅茶を淹れに行っているので、正確には黒子と美琴の二人だけなのだが。

「ふーん……『テストメント学習装置』かあ……」

美琴は初春からの話を聞いて興味深そうに呟いた。

「五感すべてに働く機材が無い事には能力開発はできないのですが……」

黒子は『学習装置』と聞いて、能力開発の基本を口にするがそれでは何も変わらない。

「……逆に、仮の話だけど『幻想御手』という曲自体に五感に働かせる作用がある可能性はないかしら？」
「？　　どういう意味でしょうか？」
「前にかき氷食べた時の会話覚えない？」

黒子が頭を最大限に活用すること数秒。
出た言葉は――

「……食べ比べ？」

黒子が真面目にボケた。

「いやそつちでなく」

「……！　共感性？」

二人は顔を合わせて言うと、紅茶を淹れに行っていた初春が戻ってくる。

「何ですか？」

「共感性ですよ！ 一つの刺激で複数の感覚を得る事ですわ」

「ある種の方法で感覚を刺激する事によって別の感覚も刺激される
ことよ」

黒子の言葉を美琴がより丁寧に説明する。

初春は天井を見て、少し考えると

「つまり、音で五感を刺激し『学習装置』と同じような効果を出している……」

初春はそう呟くと、携帯電話を取り出した。

* * *

『ふむ、なるほど。共感性か……その可能性はあるな。見落としていた』

初春は木山に連絡をして、新たに発見した可能性を木山に知らせていた。

「はい、その線でもう一度調査をお願いしたいんですけど……」

『ああ、そう言う事なら樹形図ツリーダイアグラムの設立者の使用許可も下りるだろう』

初春はその会話に出てきた一つの単語を聞いて、瞳をキラっキラさせて食らいつく様な勢いで言う。

「樹形図の設立者！？ 学園都市一のスーパーコンピューターならすぐですね！」

興奮気味の初春に対して木山の声はいつも通りの声だった。

『結果が出たら知らせるよ』

「じゃあ、今からそっちに行ってもいいですか？？？ 樹形図の設立者を使う所、私も見てみたいんですよ！」

木山は無邪気な子供のような初春の声を聞いてフッと、何かを思い出したように笑う。

『ああ、構わんよ』

携帯電話を閉じて、嬉しそうに支部を出て行く初春だった。

* * *

竜野勇輔りゅうのゆうすけは、柵川中学の生徒用の寮の前に出て、コンビニに向かっていた。

特に理由も無く、ただやる事が無い、夏休みの宿題はやる気にならない。正直な話、暇だからと言っても宿題をやるくらいなら、ダ

ラダラー日を過ごせばいいや、という思考に至っている竜野は、本当にダラダラ過ごしてしまったのだった。

この三日間を物凄く無駄に過ごしてしまった、と心の底から思う。クラスメイトでも誘えばいいのだろうが、不幸か、竜野の住まう寮は後輩やら別のクラスの学生が多く同じクラスの生徒の住んでいる寮とは結構な距離がある。

そんな所にわざわざ出向こうとは思えないのも事実。

まあ、簡単に言ってしまうえば、竜野はこのクソ暑いなか、外に出るのが億劫なのだ。

コンビ二に行く事は別、と補足が入る。

上条とどこか行くにしても、何故だか電話が繋がらないし、メールも届かない。

携帯電話を踏みつぶしたんじゃないだろうな、と思う竜野の予想は見事到的中しているのはまた別の話。

「はあーっ。暇だ」

そう言つて、肩を落としながら歩く竜野の横を誰かが走って通り過ぎた。

夏休みなのだし、大抵の学生は外に出ているので、特に珍しくも無い事なのだが、何気なく振り返ってみると、その人物は佐天涙子だった。

「ん？」

一見しただけなので、何とも言えないが、いつもと様子が違うようだった。

何となくだが気になったので、追いかけてみる事にする。

こういうのって、ストーカーだと思われるだろうか、と少し思いつつ全力疾走で走る佐天を追う竜野は、気付く。

相当暇なんだなオレ、と。

* * *

A I M 拡散力場解析研究所の近場のバス停で降りた時、初春の携帯電話が鳴った。

初春は携帯電話を取りだし、誰からかを確認すると、画面には佐天涙子と表示されていた。

最近は顔も見えてないし、連絡も取っていない佐天の方も事件と同じくらい気になっていたのだにかく無事で安心した。

「佐天さん、心配してたんですよ。電話は繋がらないし、顔も見えてないし何してたんですか？」

『……れちゃった』

「はい？」

『アケミが急に倒れちゃったの』

電話越しに聞こえた言葉と佐天の様子がおかしい事に気付き初春の顔から笑顔が消える。

『幻想御手を使ったら倒れちゃうなんて、あたし知らなくて……何で、こんな事に……』

聞こえたのはいつもの活発で明るい佐天の声ではなく、今にも消

えそつな弱々しい声だった。

* * *

「な、何だよ……どうなってんだ？」

竜野に、何か得体の知れない嫌な予感が襲った。

どこか様子のおかしい佐天を追いかけて、開けられたままの玄関のドアの前に居る。

玄関からでも見える佐天は膝を抱え込んで床に座り込み、誰かと電話をしていた。声はとても弱弱しかったり、自身を追いつめるように声を張り上げたりして、どこか違うのは明白だった。

携帯電話の相手は初春だろう。

詳しく何を言ってるかまでは聞えないが、彼女の声が聞える。

その声のはつきりと聞えた。

『佐天さんは欠陥品なんかじゃありませんっ！ 能力なんか使えな
くたって、いつも私を引っ張ってくれるじゃないですか！ 力がな
くてもあっても、佐天さんは佐天さんですっ……私の親友なんだか
らっ……だから……だからっ
。』

最後の方は竜野には聞き取れなかった。

「あと、よろしくね……」

佐天が通話を切った。

それを確認にして、竜野は駆け込む。

「ちくしょうッ！　どうなってんだよ！　この状況はっ」

佐天が竜野の声を聞いてはっとしたように振り返った。

「り……竜野さん……？」

何でもここに、とても言いたげな佐天を無視して傍らに置かれている、音楽プレイヤーを手に取る。

音楽プレイヤーに表示されている曲名は、今、風紀委員や警備員を困惑させているアイテムの名前だった。

ああ、そうか、と竜野は説明されずとも理解した。
理解してしまった。

「佐天………」

その言葉を聞くと、佐天は申し訳なさそうに俯いた。

黒子の言っていた副作用。

三日の内に、随分と物語は進んでいた訳か。

幻想御手の使用者は昏睡する、と黒子や初春から貰った情報があった。

どこか、一線を引かれて進んでいたような出来事だったので、あまり実感が湧かなかったが、こういう形となって目の前に現れると、

最悪のビジョンが浮かんでしまう。

竜野は、自分はいつからこんなにマイナス思考になってしまったのだろうかと思った。

ただ昏睡状態になるだけなのに。

直ぐに目覚めるかもしれない、だけど、最悪一生目が覚めないかもしれない。

もしかしたら、死ぬかもしれない。

幻想御手の事件が解決し、開発者が捕まっても、倒れた人を救う手段はなかったりはしないだろうか。

そんな楽しくも、嬉しくも、幸せでもない最低最悪のビジョンが竜野の脳裏を駆け巡る。

たった一言、口を開く事がこんなにも苦しいと感じたのは初めてだ。

今まで竜野は、人が苦しんでいる様な嫌ってほど見てきた、その上で原因となるモノを倒してきたり避けたりしてきた。

だが、それはあくまで喧嘩の領域でしかなかったという事だ。

竜野はこういう形で他人が傷付いているのを救った事が無い。

当然だ。

だって、どんな綺麗な言葉で飾ったって、結局は人を傷付ける、喧嘩という形で解決してきたのだから。簡単な話、目の前の敵を倒してしまえば終わる、その場から救いたい人物を連れて逃げる、自身が犠牲になって逃げる、そんな、今どきゲームでもないような単純な物語しか解決したことが無い。

単純に複数人の不良を相手に隙を見つけて逃げまくってきただけなのだから。

知り合いを、友人を失うかもしれないという、この現実がたまらなく怖かった。

そして悔しかった。

何も知らずにいたらだと過ごしていた自分が。

何もできない自分が。

風紀委員でもない竜野は、解決の糸口など一切知らないし、解決した所で昏睡した学生は助からないという可能性すら残っているこの事態を前にして、被害者でもないのに竜野は震えてしまっただけ弱かった。

ここでヒーローなら颯爽と登場して、キザな台詞を吐いて、約束をしてそれを実現させるのだろっとな、と竜野は思った。

だが竜野は、そんな風になれるほど強くない、そういう風に自身を偽る事すらできないくらいに弱かった。

自分がどんな顔をしているかなんて分からない。

だが、この場で泣く事など許されない。

同情を誘うなど、卑怯。

今一番苦しんでいる人の前で、その事実を嘆くなど、愚行も愚行、愚の骨頂。

なら、今言すべき事は何か。

約一ヶ月ほど前、一人の少女を不良達から助けた。

それで満足していた患者は、今何を言うべきなのか。

「……、ゴメン」

その少女の苦悩など一切知らず、知ろうとせず、ただ不良から助けたと言ふ事実だけで満足していた自分は今何をいうべきなのか。

「——次は絶対、完璧に助け出して見せるから。お前が笑って
ものがたりいられる、そんな最高の世界を……いはしよ幻想を造ってみせるから」

やっとの想いで出たのは、幻想。こころ

それがどういう風に映っていたのか。

それがどういう風に聞えたのか。

予想外の言葉だったのだろう、佐天の顔から数秒、表情が消えた。それでもその後、クスツと小さな笑い。そして小さな声で、今にも意識を失いそうな程辛いくせに、苦しいくせに言った。——怖いくせに言った。

何で竜野さんが謝るんですか？ と言って続ける。

「……待ってます」

絞り出すような声だったけれど、佐天は笑っていた。

一言の後、まるで電池が切れたおもちゃのように動かなくなり、床にぱたり、と倒れた。

だが、竜野は何となく分かった気がした。

——あらゆる異能の力を生み出し、神様の奇跡ですら造

ると謳われながら、役に立たないこの力が何の為にあるのかを。

* * *

初春は、AIM拡散力場解析研究所の木山春生きやまはるみが研究に使っている個室に来ていた。

竜野から連絡が来て、佐天を病院に送ったと聞いた。木山との『樹形図の設立者』を使う現場に連れて行ってもらった約束を破つても、付き添っていたくらいだが、竜野の一言が初春を病院へ向かわせなかった。

たった一言。

初春には初春のやるべき事があるだろ、と。

目の前に居る木山春生に幻想御手の使用者の昏睡した学生や、個人的な話だったが、佐天が倒れた事も伝えた。

初春なりに、悠長にしている暇はなくなったから伝えたのだ。

「そうか、この間の彼女まで……だが、あまり自分を責めるものじゃない」

そう言って座っていた席を木山は立ち上がる。

「少し休みなさい。コーヒーでも淹れてこよう」

「そんな悠長な事をしている場合はッ……！」

ない、と言おうした所で木山の手が初春の肩にポン、と置かれた。

「お友達が目覚めた時に君が倒れていては元も子もないだろう？
大丈夫。きっと最後はうまくいくさ」

木山はまだ、そう断言できるだけの根拠が無いハズなのに、どこか確信めいた顔で言って部屋を出て行った。

涙が溜まっていた目を一度腕で拭って部屋を落ち着いて見ると、一枚の書類が初春の視界に入った。

* * *

とある病院に、御坂美琴と白井黒子は来ていた。

カエル顔の医者と呼ばれてある一室にいる。ちなみにカエル顔の医者は美琴曰く「リアルゲコ太」らしい。

そのリアルゲコ太と美琴に称された医者は『幻想御手』使用者の脳波パターンをパソコンの画面に表示させて言った。

「『幻想御手』の患者の脳波パターンに共通するパターンが見つかったんだよ？ 人間の脳波は活動によって波が揺らぐんだね？ そ

れを無駄に正せば……まあ、人体に多大な影響が出るだろうね？」

何故か語尾が疑問形なカエル顔の医者は、パソコンの画面に向かったまま、座った席の後ろに立つ美琴達に振り返りもせず言う。

「被害者は『幻想御手』に無理矢理脳波をいじられて植物状態になった……ってこと？」

美琴は頭を悩ませるように人差し指で額の辺りを搔く。

「誰が、何のつもりでそんなことを……」

カエル顔の医者は少し黙ると、しばらくして口を開いた。

「僕は職業柄色々なセキュリティを構築していてね？ その中の一つに人間の脳波をキーにするロックがあるんだね？ ソレに登録されているある人物の脳波が植物患者のものと同じなんだね？」

そう言っただけ画面に映し出された人物は、初春や黒子達と協力関係を築いている人物だった。

A I M 拡散力場研究所。

その研究所の、とある一室で、初春は驚愕していた。その手にはファイリングされた大量の書類がある。

「『音楽を利用した脳への干渉』！？ さっきの今で何故こんなモノを……他にも共感性に関する論文がたくさん……」

それは、先程、風紀委員の第一七七支部で美琴と黒子と初春の三人で行き着いた答えの**はず**。
これではまるで。

「『An Involuntary Movement』？ これは……」

それは——通称『AIM拡散力場』と言われて、学園都市の学生なら無能力者から超能力者まで、全ての学生が無意識の内に発している特殊な力場。^{ファイルド}

初春が何か嫌な予感を感じ取り、戦慄した瞬間。

「いけないな。他人の研究成果を盗み見しては……」

初春が逃げだそうと思った時には、肩を掴まれて逃げる事は不可能となっていた。

「——登録者名……木山……春生！？」

幻想御手

学園都市第七学区のとある病院のとあるフロア。

『冥土^{ヘヴンキャンセラー}帰し』と呼ばれている程、凄腕の医者であるカエル顔の医者と御坂美琴^{みさかみこと}が話し合っていた。

「脳波のネットワーク？」

「うん。最強の電撃使いである君に相談したいんだけど、同一の脳波をもつ人達の脳波の波形パターンを電気信号に変換したら」

そう言つて、カエル顔の医者、『冥土帰し』は髪の毛の抜け切つた頭をトントン、と指で叩いて、

「その人達の脳と脳を繋ぐ、ネットワークのようなものを構築できるかな？」

「そりゃ脳波を一定に保つ事ができるなら可能かもしれないけど……そんな事を木山先生が？」

幻想御手使用者の脳波パターンが、木山春生^{きやまはるみ}のと酷似しているのは先程分かった。だが、そうするだけの理由が見当たらない。能力者でもない彼女がそんなモノを作ったとして、一体何が目的なのだろうか。

いや、それ以前に、もし、仮に木山が幻想御手の開発者だとしたら、だったら何故彼女は美琴達との協力関係を築いた？

そう思つた時だった。

「お姉様！」

白井黒子^{しらいくろこ}が、息を切らして病院内を駆けてきた、その表情からは動揺が見てとれて、何かがあつたのは明らかだった。黒子は初春^{ついはるか}飾利と連絡を取りに、院内の携帯電話の使用許可エリアに行っていたはずなのだが。

「木山春生の所へ行つた初春に連絡が取れませんの！」

それは、木山春生が幻想御手の開発者だという事が確定した瞬間だった。

「まいったよ……私の部屋は普段誰も立ち入れないようになっているし来客もほとんどなかったからね」

木山は愛車である、青のランボルギーニ・ガヤルドを運転しながら、言い始めた。現在は初春と連絡が取れない事に気付いているかもしれないという可能性を考慮して、警備員と呼ばれる前に研究所を出てきて、車道を突っ走っていた。

「少々不用心だったかな。……ところで、以前から気になっていたんだが、その頭の花はなんだい？ 君の能力に関係があるのかな？」

もちろん隣の助手席には初春が座っている。初春程度では、暴れても木山の手で止める事くらいは出来る。だが、時間を稼がれては面倒なので、念のために両手を手錠で拘束している。

「お答えする義理はありません。そんな事より『幻想御手』^{レベルアップ}って何なんですか？ どうしてこんな事をしたんですか？ 眠った人達はどうなるんですか？」

初春は強気で言う。木山の所持している拳銃でも使って脅せばその態度も一転しそうだが、木山にそのつもりはない。

「矢継ぎ早だな……」

こちらの質問には答えてくれないのに……、と木山はボソツと呟いて、

「……まず、『幻想御手』があれば複数の人間の脳波を繋げる事で、高度な演算を可能とする物だ」

「繋げる……？」

つまり、幻想御手とは“使用者の能力値を引き上げる”のではなく、同じネットワークに取りこまれる事で“一時的に能力の幅と演算能力を高めているだけ”。

つまり、使用者が増えれば増えるほど、同じ能力を持つ能力者の思考パターンを参考にしたり、演算能力を上げてくれるため、後に使った使用者程、大きな効果が生まれる。

だが、問題はずっと他人の脳波になっただけになるという事。幻想御手を使っただけの人が完全にその脳波に同調、つまりネットワークに脳波を奪われた時に昏睡する。

「どうしてこんな事を……か。……あるシュミレーションをするために『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』の使用許可を申請したのだが、どう言う訳か断られてね、代わりにになる能力者が必要なんだが……」

「そこで、能力者を？」

「ああ、一万人ほど集まった」

「——ッ!?」

初春が珍しく険しい表情になった。その視線は木山を睨んでいる。驚きと怒りが同時に込み上げてきたのだ。この学園都市には、佐天のように、“能力者への憧れ”や事件を起こした人たちのように“力を求める学生”が一万人も居る事に驚き、そんな人達の想いを利用する木山春生に怒りが、だ。

「そんな怖い顔をしないでくれ」

木山はしれっとした顔で返す。

「シュミレーションが終われば全員解放するのだから。嘘だと思っかい？」

そう言うのと、木山はポケットから何かを取り出して、初春に向けて手を差し出した。

「君に預けておくのも面白いかもしれないな」

「……？」

「『幻想御手』をアンインストールする、治療用のプログラムだ。後遺症はない。全て元に戻る」

「信用できません！ 臨床実験が充分でない物を安全だなんて言われても何の保障も無いじゃないですか！」

「はは、手厳しいな」

木山は初春が何を言っても動じはしなかった。おそらく治療用プログラムを渡しても、こういう返答が来るのは分かっていたのだらう。

特に反論する訳でもなく、責められて当然だ、という感じだった。「それに、一人暮らしやお風呂に入っていた人なんかはどうなるんですか」

発見が遅れたら命にかかりますよ、と初春が補足説明すると同時に、運転技術はかなりあったのだらう、安定した運転をしていた木山が動揺したのか、車体が大きく揺れた。車はギャギャー、と嫌な音を鳴らして道を滑る。

あまりに唐突な激しい揺れに初春は目を回して、ぐわんぐわんする。先程までの、態度はどこに行つたのやら木山は小さくなって言つた。

「……まずいな。学園都市統括理事会に連絡して、全学生寮を見回らせなければ」

木山の顔からは大量に汗が噴き出しており、「冗談ではないようで初春は、

「想定してなかったんですか!？」

本当に大丈夫なのだろうか、と思つた。

「警備員から通信があつたのですが、初春も木山も消息不明だそうです」

風紀委員第一七七支部に美琴と黒子は戻っていた。

パソコンに真剣な面持ちで向かつている二人の後ろでは、拳を握りしめている竜野勇輔りゅうのゆうすけの姿があつた。

黒子と美琴の向かい側に配置されているパソコンを操作しているのは固法美偉このりみい。

「ッ……」

爪がくい込んで、今にも血が出そうな程の力で、その右拳を握りしめていた。その表情は明るいとは言えない。

「オレは行くけど、お前らはどうする？」

取り敢えずは行くべきだ。確かに、木山を捕えた所で状況は変わらない、なんていう可能性もあるが、動かなければ何も変わらない。測定不能の意味で無能力者の分類に入ってるとはいえ、相手が悪ければ、不良一人にすら負けてしまうような自分だ。現場に行っても役に立たないかもしれない。

だが、こちらにも約束がある。

誰に止められようが事件を解決する方法があるのなら、それを優先する。それが、昏睡状態の学生達を目覚めさせる近道にもなるはず。

「私も出るわ。ジツとしてんのは性じゃないし、黒子は警備員からの情報を回してちょうだい。固法先輩、黒子の事お願いします」

「ええ、よろしくね。御坂さん」

「お姉様っ!？」

バツと席を立ちあがって、美琴に詰め寄る黒子。確かにこれ以上美琴や竜野に迷惑をかけていたら、風紀委員白井黒子の面子は丸つぶれだ。

それ以上に、ここ数日、美琴の手を借りずに幻想御手使用者の起こす事件を解決……対応してきたのは美琴の負担を少なくするように行っていたのだから、この場面を美琴に託すのは黒子の中の何かおこいが許さない。

美琴が行くなら自分も、という姿勢で詰め寄る黒子の肩に美琴は、ゆっくりと手を置いた。

「おぐッ!？」

たったそれだけで、黒子は体のあちこちが悲鳴をあげるようにビ

キビキと嫌な音が鳴った。連日、幻想御手使用者との戦闘を繰り返していた黒子は限界に近かったというわけだ。

黒子は、痛みよりも自分の体の傷に気付いていた美琴を驚いたように見る。

「お、お姉様……、気付かれて……」「当たり前でしょ」

美琴は黒子の額に指をツン、と当てる。

「アンタは私の後輩なんだから……こんな時くらい『お姉様』に頼んなさい」

直後、何を勘違いしたのか。美琴に抱きつこうとした黒子に、拳が突き刺さった。

「もう踏みこまれたのか」

木山は、車内の、おそらく『幻想御手』のデータが保存されている機材と連動して動いている車内のモニターの画面を見て言った。

「君との交信が途絶えてからだとすれば早過ぎる。別ルートで私にまで辿り着いたな」

ひとりでに喋り始める木山の言葉に初春は首を傾げる。

「所定の手続きを踏まずに機材を起動させると、セキュリティが作動するようにプログラムしてある。これで『幻想御手』に関するデータは全て失われてしまった。もはや『幻想御手』の使用者を起こせるのは君のそれだけだ」

木山は、初春が大事そうに持っている治療用プログラムを横目で見ると、データが失われた事も予想通りだったといった様子の木山に、

初春は疑問を持った。

何故、そんな大事な物を自分に渡したのだろうか、と。

「大切にしまえ」

しばらく進むと、十数人の警備員が道を塞いでいた。

銃器を装備しているが、使用されているのは実弾では無くゴム弾だろう、と木山は推測する。

ある程度の距離を置いて、車を停止させると、ハンドルに体重を乗せるように体を前に傾ける。そしてメンドクサそうに言った。

「上から命令があつた時だけ動きの早い奴らだな」

『「幻想御手」配布の被疑者として勾留する。直ちに降車するじゃん』

初春は、予想していたより早く事件が終わってしまいそうなので、少し意外そうな顔で。

「どうするんです？ 年貢の納め時みたいですよ」

だが、木山の顔には一切の焦りも恐怖もなかった。むしろ何か、この状況を打破する根拠でもあるかのような確信めいた顔で、小さく笑って。

「『幻想御手』は人間の脳を使った演算機器を作るためのプログラムだ。……だが、同時に使用者に面白い副産物^{もたら}を齎す物でもあるのだよ」

何かしらのアクションを起こすと思ったのだが、木山は降車するとあっさりと両手を上げた。しばらくして、目が不自然に赤く染まった。同時に、警戒している警備員の一人の女性が、確保！ と指示を出した。その指示を聞いてか否か、何故か警備員の内の一人の銃の引き金が引かれた。

短い音が鳴った。それは確実に銃の引き金が引かれ、銃口から銃弾が放たれた音。

だが、銃弾をもらったのは木山ではない、同じ、警備員の脚に直

撃した。撃たれた警備員は痛みで地面に倒れこみ、周囲の警備員も何が起こったのか理解できずに驚いている。だが、銃を撃った本人も驚いており、仲間に疑われるなか、必死に弁解している。

そこで、初春と警備員の数人が気付いた。木山が右腕を前に突き出している。だが、注目すべきはそこではない。突き出したその右手に、学生でもない学園都市の科学者には起こせない超常現象――

――ゴオオ！ と風が渦巻いている。

そしてその場に居た誰かが、木山のその姿を見て言った。

「能力者……!?」

警備員、初春飾利、その場に居た全員が、学生でも無いのに能力を使用する木山の姿に息を呑んだ。それと同時に、ドオンッ！！という爆音が鳴った。

現在、美琴と竜野はタクシーに乗って、木山と警備員が激突しているであろう現場に向かっていった。固法に止められそうになった竜野だが、制止を無視して来てしまった。

もう既に、タクシーはその現場の近くを走っている。黒子の指示通りなら、警備員と木山春生は既に交戦中。木山が何らかの能力を使っているとの事なので、二人とも相応の覚悟を持って事態に挑もうと、心の準備をしているところだった。

高速路の方から、大きな爆発が見えた。二人は驚いたように爆発が起きた方を確認する。中年の太り気味の運転手は爆音を聞いて、焦ってタクシーを停車させる。

「もついいわ！　ここで降ろして」

「ちよっ……!!」

現場を見て、それ以上近づくの躊躇っている運転手。何を言っても、これ以上は進んでくれないだろうと判断した美琴はタクシーから飛び出した。竜野も追おうとするのだが、運転手が早く金を払え、と視線を向けている事に気付く。

あーっ！ もう、思わぬ出費ッ！ と叫んで、頭を掻いて、財布を取り出す。財布からあまり多くはないお札全て運転手に手渡して。「釣りはいらねえ——ッ！」

「お客さん！？」

一回言ってみたかったんだよねー、だけと思わぬ出費、と思って全力で走り始めようとする竜野にまた運転手の声が聞えた。

「お金足りないんですけど——ッ！！」

「.....え？」

ちよつとカッコよく現場に向かうつもりだった竜野の財布にはもうお札がないので、最終的にちまちまと小銭を手渡す羽目になったのだった。

幻想御手（後書き）

今回は詰めて書いてみたんですけど、どうでしたか？

これから数話は詰めて書いてみようと思います。

詰めて書くか、今まで通りにするかで迷っているのですが、どちらの方がいいか、答えてもらえると助かります。

更新が遅くなった言い訳をさせてもらいますと、学校のテストだった。

その内にも書きためてはいたので、今日一気に更新しようと思います。

二、三時間おきくらいで掲載しようと思います。

時間を空けるのは、掲載するまでの間に、詰めて書いた方がいいかどうかの返答があつたら、そちらに合わせようというのが理由です。二度目ですが、詰めて書くかどうかは本気で迷っているのですが、答えてもらえると、本当に助かります。

多才能力者

「黒子ッ！ 一体何が起こってんの？」

御坂美琴は高架道路の下の道を走りながら、携帯電話で黒子と連絡を取り合っていた。木山が何らかの能力を使っているとは聞いていたが、上で断続的に起こる爆音は一体何なのだろうか。

木山が例え、能力を持っていたとしてもレベルが低ければ、警備員相手ではそうはもたないはず。

なのに、何だ。この嫌な予感ほ。

「木山は明らかに「複数の能力」を使用しているとしたかと思えませんの！」

「どういう事！？ それこそありえないじゃない！ 能力つてのは一人に一つだけ、例外はないハズよ！」

美琴は高架道路に昇る階段を見つけて、駆けながら聞く。黒子はパソコンで上の状況を見ているのだろう。息を呑み込む音が聞えるあたり、よほど異常な現象が起きていると予想できる。

「状況から推測するしかないのですが、木山の能力は『幻想御手^{レベルアップ}』を利用したモノではないでしょうか。何千人もの能力者の脳とネットワークという名のシナプスで出来た——『一つの巨大な脳』——

——もしそれを操れるなら、人間の脳では有り得ない事も起こし得ますの。この推測が正しいなら今の木山は実現不可能と言われた幻^{デュアルスキル}の存在——『多重能力者^{デューアルスキル}』」

そう言い終わると同時に、美琴は高架道路に辿り着いた。その光景は悲惨なものだった。警備員は薙ぎ払われたようにあちこちに倒れており、警備員の使用する乗り物も全て薙ぎ倒されている。それこそ、戦争の跡地のような光景だった。

見渡すと、一つだけ傷の少ない車があった。

木山の車だろうか、と美琴は首を傾げて近づいてみるとその助手

席には、初春飾利が木山にやられたのか、戦闘での攻撃の余波でか、とにかく気を失って座らされていた。

「初春さんッ！　しっかりして！」

ダンダン、と車の窓を叩いて呼びかける美琴の背後から、声が聞えた。

「安心していい。戦闘の余波を受けて気絶しているだけだ。命に別状はない」

木山春生の声だった。振り返ると、灰色の粉塵ではっきりとは見えないものの、粉塵の、その向こうに見えるシルエツトで、佇んでいる人物が木山だと分かった。

灰色の粉塵の向こうから、確かに木山の声が聞えた。

「御坂美琴……学園都市にも七人しかいない超能力者か。それとこの少年も」

美琴は言われて振り返ると、そこには竜野の姿があつた。チクシヨ！財布の中がすっからかんじゃねえか、とぼやいているのは敢えて気にしない事にする。

「私のネットワークに超能力者は生まれませんが、君たちも、私のような相手と戦った事はあるまい」

二人に背を向けて空を見上げていた木山が、ゆつくりと竜野と美琴の見る。

「君達に、一万の脳を統べる私を止められるかな？」

その目は赤く染まっていた。

木山の目を見た二人が戦慄する。

それと同時に、轟ッ！！という爆発音が響いた。

『イマジンリライザー　レールガン　デューアルスキル
『幻想造り』・『超電磁砲』VS『多重能力者？』の戦いが始まった。』

とある高架道路では、断続的に、能力の余波による衝撃波や爆発が起こっていた。ゴオオン！と爆発が起きて、粉塵が吹き上げる。その、灰色の粉塵の中から、美琴はバックステップで出てきて、竜野は命からがら逃げてくるように、飛び出してきた。

「ゲホッ、ゲホッ！ 死ぬ。マジで死にそうなんですけどっ！」

横で、本格的にヤバくなってきた竜野を無視して美琴は、
「驚いたわ。本当に能力が使えるのね……しかも」

美琴は木山を睨んで。

「——『デュアルスキル多重能力者』！」

「——それは呼称は適切では無いな、私の能力は理論上不可能とされるアレとは公式が違う」

言いながら、木山は指を弾く。弾くと同時に、車道にピシ、と小さなヒビがはいり、直後、ゴバツ！と轟音を発しながら衝撃波が地面を走った。

おそらく軽く人体など切断してしまうのであろう一撃は二人に向けて放たれた。

「言うなれば、『マルチスキル多才能力者』だ」

美琴は、向かってくる衝撃波に対し、半歩横に移動してソレを避ける。竜野は異能の力を掻き分ける右手を前に突き出す。右手にぶつかった衝撃波は、竜野を避けるように二つに分断される。竜野の横を通り抜ける衝撃波の突風を頬に感じて、ブルツと竜野は体を震わせる。

（——毎度のことだけだよっぱ怖ッ！？）

異能を打ち消す訳ではなく、掻き分ける右手は、下手に向かつてくる異能の力に触れれば、直撃する恐れもある上、あくまで掻き分けるだけなので、その攻撃が消える訳ではないし、あまりにも強大な能力の場合、その余波に巻き込まれる危険だっている。

なので、やっぱり自分の近くに拡散していく異能の力を見ると、体が震えてしまう。勝手に恐怖してしまう。まあ、いい加減慣れてきたので、ソレにビビって動けなくなる、なんていう事は無くなったのだが。

美琴が電撃を、木山の頭上から落とす。手加減はしているのだろうが、充分に人体を傷付ける威力は持っている。だが、木山は避ける動作を全くしなかった。何らかの力場のようなモノが出現し、電撃が分散された。

木山は驚く美琴を見て、僅かに口元を歪めると、
「どうした。複数の能力を同時に使う事はできないと踏んでいたのかね？」

同時に、木山の足元に何らかの力が弧を描いて、ヴォン、という不自然な音が聞えた。木山の足元から何らかの力が円形状に一瞬で広がり、美琴や竜野、更には木山自身を含む、高架道路の一部が円状に一気に崩れた。

美琴と竜野はほぼ同時に。

「げっ!?!」

「いつ!?!」

ゴトン、と足元が崩れて、自由落下していく美琴は磁力を使って、陸橋を支える柱に張り付く。木山も落ちるわけなのだが、念動力を使って、ゆっくりと瓦礫の山を降り立つ。

（何て奴——ッ！ 自分を巻き込むのもお構いなしに能力を使ってくる……!）

木山の能力を振るう事への躊躇の無さに美琴は舌打ちする。

ちなみに竜野は。

「ん？」

.....ギャアあああああ——

ッ!?!」

最近ではどういう訳か使い物にならなくなってしまった『幻想造り』は—— 当たりハズレ以前にくじそのモノがないようなもの

—— 当然何の能力も発現できないので、普通の人間と同じ。瓦

礫の破片が身を打って鈍い痛みが体中に走る。宙で体勢を崩して、背中から下に落ちそうになる。

「って、アンタは何やってんのよ！」

その姿を見た美琴は焦って磁力を操り、竜野を手繰り寄せる。何かに吸い込まれるような、不思議な浮遊感を得た竜野は下に落ちないように美琴へしがみつく。通常なら意識しそうな体勢だが、竜野は何とか下に落ちないように、少しでも自分を磁力で繋いでいる美琴に近づこうと必死になるので、必然的に二人の密着度は高くなる。「ヤバイッ！ 死ぬ！ 死にそう、離さないでッ！ 離さないで御坂さんいえ御坂様ッ！」

お互いの顔がすぐ目の前にある。つまり、抱きつく様な姿勢になっているのだが、竜野としては下に落ちる恐怖がそんな事を忘れさせている。

「ちよつ、ち……ちちちち、近いのよアンタはっ！！」

「え？ ちよつ、御坂！？ があつ……！？」

美琴は顔を林檎のように赤くさせてから、吠えた。動揺のせいか、能力が不安定になり、竜野と美琴を繋いでいた磁力の糸が切れて、へ？ という間抜けな声と共に竜野は美琴の腕から離れ、地面に背中から落ちた。

「い、痛え……」

まだ低い位置だったのが幸いし、声を出して痛いというくらいに余裕は残っていた。背中に走る痛みを何とか堪えて、竜野は齒を食いしばって立ち上がる。

「ご、ゴメンっ！」

「ふっ、面白い少年だな」

木山が言うと、宙に十数の水の珠が発現する。それらは、銃弾のように柱に張り付いている美琴に撃ちだされる。美琴に集中させて撃っているという事は撃破する優先人物は美琴に向いたと言う事なのだろうか。

竜野が離れたことで、彼には悪いが頭が冷えきた美琴は磁力で足

を柱に引き寄せながら垂直に走って水の珠を避ける。

（さすが『多才能力者』何でもアリかい。能力の正体が分からないだけでも不利なのに、状況に応じて能力を変えてくるなんて反則だわ！）

柱を垂直に駆け下りながら、電撃を放つ。バチィ！と音を鳴らして木山を襲うが、例によって力場で当たらない。

（やっぱり電撃が誘導されている？ さっきの台詞からすると、いくつかの能力を組み合わせで避雷針のようなモノを作り出してるみたいね）

まあ、そんなモノ、美琴が全力で電撃を放てば何とかかなりそんなものだが。そうしては木山を殺してしまう可能性がある。

木山は竜野はそれほど危険ではないと判断したのか、注意が美琴に向いているが、彼女は知らない——竜野勇輔は神懸かっているとはいえ、超電磁砲に勝利した事がある程の無能力者だということを。「電撃を攻略したくらいでいい気にならない方がいいわよ。あと、ソイツ、ム力つく事に強いから」

「この少年がかい？　だとしたら……」

竜野は木山に向かって走り出す。利き腕である右腕の右手を強く硬く握り締めて。木山は特に焦ることなく、掌から、能力で剣が形成される。そして拳を振ろうとする竜野にその剣を横一線に薙ぐ。

「君の目は節穴だな」

それだけで、人体を切り裂くはずだった。その剣を振り抜けば、少年の、筋肉があまりついていない胴体など容易く真っ二つに出来る。

剣に対し、竜野は避ける動作など一切せずに右拳を能力で作られた剣にぶつける。それだけで、真っ直ぐ伸びていた剣が、真っ二つに折れる。そしてもう一度、拳を放つ為に拳を引く。

剣が折れた事には驚いたようだが、その後の木山の対応は冷静そ

のものだった。

唐突にもう一度拳を振るおうとする竜野に向かってボオオオオオオッ！！という轟音と共に強力な風が襲った。拳を引いていた為右手で掻き分ける事もできずに、竜野は吹き飛ばされた。

「がつ、ごっ……！？」

竜野は落ちている瓦礫に何度も身を打ちつけ、五回程バウンドすると、ようやく止まった。激しく石片に身を打ちつけられた痛みは想像以上に大きい。

そのせいか、竜野は立ち上がる事ができずに、その場に伏せたままの状態になってしまった。

美琴は竜野の身が心配なのか注意がそちらへいつていた。それを木山は横目で見ていたのだが、その僅かな隙を逃さなかった。

すると、これも念動力なのか、美琴の張り付いていた柱のその部分だけ抜け落ちた。

「えっ！？　しまっ……ッ！？」

美琴は、足場を失い、真つ逆さまに地に落ちる。背中から落ちた美琴は、次の攻撃を警戒して、咳き込むのを無理矢理止める。そんな美琴を見て、木山は呟くように言った。

「……もう止めにしないか？」

木山からの停戦の提案に美琴と竜野は驚いたように顔を上げて木山を見る。二人とも、特に竜野のダメージは大きく、木山に視線を向けるだけで限界だった。

木山はそれらを理解したうえで、口を開く。

「私はある事柄について調べてみたいだけなんだ。それが終われば全員解放する。誰も犠牲にはしない……」「ふざけんじゃないわよっ！！」

返ってきた言葉は、否定の言葉だった。

美琴は、思ったよりダメージが無いようで、立ち上がりながら叫んだ。

「誰も犠牲にはしない？　アンタの身勝手な目的にあれだけの人達

を巻き込んでおいて、人の心を弄んで……こんな事しないと成り立たない研究なんてロクなもんじゃない！！ そんなモノ見過ごせる訳ないでしょうがっ！！！！」

幻想御手はある意味で、能力に悩む学生達の希望とも言えるアイテムだっただろう。佐天のような無能力者にとっても、能力に伸び悩む低能力者にとっても、さらなる高みを目指そうとしていた能力者達にとっても。

ガラの悪い連中が幻想御手を手に入れて有頂天になるあまりに引き起こした事件で怪我をした人たちだっていたはずだ。幻想御手を手に入れるために多額の金を消費して、不良達から手に入れた人も居るだろうし、それをいい事に騙されて、金だけとられて暴力を受けるなんていう事もあったはずだ。虚空爆破事件では風紀委員が何人も大きな傷を負っているし、下手すれば初春や、美琴だって死んでいてもおかしくはなかったのだ。

そんな事までしないと成り立たない研究など、何の価値があるというのだ。

美琴の叫びに対して木山は、はあ——と頭を掻きながら、大きな溜息をついた。

「ヤレヤレ、超能力者とは言え、所詮は世間知らずのお嬢様か」

「アンタにだけは言われたくない台詞だわ」

「学園都市で君たちが日常的に受けている『能力開発』アレが安全で人道的な物だと本気で思っているのか？ 学園都市は『能力』について重大な何かを我々から隠している。学園都市の教師たちはそれを知らずに百八十万人にも及ぶ学生たちの脳を『開発』しているんだ。それがどんなに危険な事かわかるだろう？」

確かに、興味深い話だが、それは美琴が止まる理由にはならない。……なかなか面白そうな話じゃない……」

膝をついた姿勢で、美琴は地面に手を寄せる。すると、地面から黒い粒子のようなモノが吹き上げてきた。黒い粒子の正体は砂鉄、美琴が操る磁力の使い道の一つでもある。

それが漆黒の槍になって、木山に放たれる。それは人の体など容易に貫通させる一撃。

しかし、木山には届かない。念動力を使ったのだろう、盛り上がった地面が砂鉄の一撃を防いだ。

「調べる……か。それもいいだろう」

君が関わっているのも少くはないしな、と木山は小さく呟いた。それは美琴の耳には届かない。人差し指を立てると、空き缶が浮いて、滞空した。

「だが、それも君がここから無事帰れたらの話だ」

木山の一言と同時に、空き缶が、ぐにやりと不自然に圧縮した。

美琴は空き缶を見て思い出す。虚空爆破事件の犯人——かいたひは介旅初矢つやの能力『量子変速』シンクトロン——アルミを基点に重力子を加速させる能力。

簡単に言つと、アルミを爆弾に変えてしまう能力。

それを思い出し、はっとすると同時にドオオンッ！ と爆発した。

煙が吹きあげる。通常なら、重傷は間逃れない一撃。それだけの威力を持っていた。だが、木山は爆破の余波が生み出した煙の奥で、確かな生を感じさせる人影を発見した。

美琴は喰らっていなかった。美琴と爆破した場所との間を割って盾のようなものが出来あがっている。マンホールなどを磁力で引き寄せて盾として使用し、防いだという訳だ。

耳を塞いでいた美琴は手を放して、
「知ってる能力で助かったわ……」

虚空爆破事件での経験が無かったら、おそらく美琴は対処できなかった。皮肉なことだが、あの事件のおかげで美琴は助かった。

「なら」

木山は、腕を伸ばす。腕を伸ばしたその先には、空き缶などが捨てられるごみ箱があった。念動力によってそのゴミ箱が浮く。宙に浮いた大量に空き缶が入っているのである。ゴミ箱がひっくり返る。

そこからは数十にもなる空き缶が飛び出す。

数で勝負と言う事だろうか。

「そんな即席の盾で防ぎきれるかな」

木山は念動力を使って、空き缶をばら撒きながら、試すような口調で言う。確かに単体なら先程のような砂鉄やマンホールなどを集める、磁力で組み立てた盾で防がれてしまうだろう。だが、これだけの爆発物^{アルミ}があれば防ぎきれない。木山はそう踏んで、この手を打った。

だが。

「ハッ！ だったら爆発前に全部吹き飛ばせばいいだけでしょーが！」

超能力者に、そんな小手先など通用しない。

美琴の起こした行動は単純だった。額の辺りから一度、青白い火花を散らし、ゴバツ！ という爆音と共に電撃を放つ。

その電撃は数秒も経たない内に、宙にばら撒かれた空き缶を破裂させた。

（凄まじいな。正攻法で攻略するのは不可能……か）

だが、と小さく呟いた木山の手には一つ、アルミ缶があった。

それを空間移動させる。

大量の空き缶に集中している美琴の背後に。

「どうっ？ ざっとこんなもんよ」

ふーっと息を吐く美琴の横から、喉を引き裂くような声が聞えた。

「御坂——ッ！」

「な——ッ!？」

それは竜野の声。気付けば既に美琴の方へ向かって走り、手を伸ばしていた。

倒れていたはずの少年だった。意識があっても動くことは困難だったはずだ。その場から動かないで欲しかった。

ドオオオオオッ！！ と背後から、莫大なエネルギーを持った一撃が、手を伸ばす竜野と美琴を呑み込んだ。その光景を、しっかりと見届けた木山は勝利を確信した。

今の一撃は、確実に御坂美琴を倒した。あのタイミングでは気付いたとしても、遅すぎる。倒れていた少年が立ち上がり、迷わず突っ込んできたことには驚愕せざるを得ないが、アレで確実に病院送りだろう。病院送りなのは、御坂美琴も同じだ。

こちらは超能力者と命がけで戦っている状況でも、命を奪わない程度に加減しておいたのだから、むしろ感謝をしてほしいものだ。

「正面がダメなら搦め手に回るまで。もっととてこずると思っていたが……」

黒煙がたちこめるなか、爆破で砂塵のように粉々になった瓦礫に埋もれる美琴と竜野を見下すような視線を向けて、木山は言った。

「意外に大したことなかったな……超能力者^{レベル5}」

木山春生

木山は、思っていたよりあっさり撃破してしまった超能力者を見ながら、忌々しい過去を思い出していた。とある学生の実験での暴走事故。明らかに関係者が故意に起こしたとは思えなかった結果だった。返って来た言葉それは。

『学園都市のお荷物である「置き去り」チャイルドエラが科学の発展に貢献したんだ。いい事じゃないか』

ある目的を完遂する為の過程で、超能力者を倒したわけだが、超能力者の撃破が目的ではない。木山にはまだやるべき事がある。

地に倒れ伏せている超能力者を一瞥して、身を翻す。

もう自身を止めるものはいない。

警備員も相手ではない。どれだけ人数を用意しようが、この『多才能力』の前では大した戦力にはなりえない。

「恨んでもらって構わんよ。手荒な真似はしたくなかったが、統括理事会が動く前に片を付けなければいけない。邪魔をするものは、何人たろうと叩いて潰す」

勝利を手にしたものと、木山は思っていた。既に超能力者、御坂美琴は視界にも入っていない。

その時だった。

誰かが木山に抱きついてきた。それは好意によるものではない、木山を絶対に逃がさないようにするための行為。

はっとした木山の、耳に、撃破したはずの超能力者の声が聞えた。

「つーかまーえた——」
「なっ!？」

自身の目と耳を疑った。あの一撃にどうやって反応した。反応したとして、爆発する瞬間に気付いたのでは遅い。だとしたら、どの時点で気付いていた。

疑念が渦巻く木山の視界に先程までは美琴が砂塵に埋もれていたはずの場所が、ぽっかり空いている事に気付く。防がれた。おそろくは、磁力を操る事でできる、即席の盾で。

死角からの奇襲をどうやって――？ と木山が疑問を抱くと、まるで心を読んでいるかのように超能力者の口が開かれた。

「AIM拡散力場の専門家に説明するのはアレだけど、私の体からは常に電磁波が出ているの。妙な動きがあつたら反射波で察知できるから死角とか関係ないのよ。アイツが突っ込んでくるのは本当に意外だったけど」

微弱な電磁波による空間把握。つまり、電磁波を使ったレーダー。超電磁砲などの必殺技とも呼べる一撃に目がいきがちだが、彼女の能力の本当の魅力は、その応用性にあるのだと木山は思わされる。

「手加減はしてくれていたようだけど、あのバカの仇、討たせてもらうわよ」

焦って能力を発動させるより早く、電撃が落ちた。零距离からの電撃は、木山の反撃よりもずつと速い。木山の衣服は焦げ、短い叫びと共に、倒れた。

「これでもう戦闘不能なはず」

勝利を確実なものとした美琴の頭の中に直接、声が流れてきた。

――センサー。

――木山センサー。

美琴の頭に何かが流れ込んできた。
科学者である、木山は『置き去り』の教師になることになった。

実験を成功させるために詳細な成長データを取るために。

あくまで、実験をする者と、実験の道具になる者、ただ、それだけの関係だった。

『厄介な事になった。だが、とにかくこの実験を成功させるまでの辛抱だ』

明確に流れ込んでくる、映像。それは木山春生の過去だった。

『子供は嫌いだ』

それは子供たちとの時間。

木山にとっては実験を成功させる為の、統括理事会肝入りの実験に参加するための、くだらない時間。

『騒がしいし、デリカシーがないし、失礼だし、悪戯するし、論理的じゃないし、ならならしいし、すぐに懐いてくるし————本当にいい迷惑だ。』

誕生日を祝ってもらった。夏が過ぎた。子供たちにいたずらされた。秋が過ぎた。雪合戦をしたり、似顔絵を描いてもらったりもした。冬が過ぎた。

そして——。

『AIM拡散力場制御実験。長い時間をかけて、何度も何度も計算を繰り返して準備をしてきた。何も問題はない。————これで先生ゴッコモおしまいだ』

被験者である置き去りの女の子に、怖くないか？ と聞いた。
女の子は笑顔で言った。

『センサーの事信じてるもん。怖くないよ』

ようやく子供達から解放された。

『これでおしまい……』

結果は失敗。確実に成功するはずの実験内容だった。

例え失敗したとしても、実験をする者と、実験の道具になる者――そこに感情が入る余地などなかったはずだ。ただそれだけの関係だった――はずなのに。

美琴の頭の中にそこまで記憶が流れ込んでくると、木山は派手に地面に倒れた。

木山の意識が戻った。だが、呼吸が安定しないようだ。美琴の電撃は意識を確実に絶つだけの威力があったのだ。ダメージがあつて当然だろう。だが、そんな事は今の美琴にとっては些細なことではない。

「い……今のは……」

何なんだ？ あれは、あんな実験が本当に行われていたのなら、警備員にでも通報すればいいはずだ。木山の背負っているモノは、あの子供たちだったのか。

「……観られたのか……！？」

能力を使おうとしたのだろう、吐き捨てるように言葉を放つが、美琴の電撃が相当を尾を引いているのか、上手く発動できずに木山の動きが途中で止まる。

驚愕する美琴を見て、木山は口元を歪めた。

「くっ、フッフッフ……。あの実験の正体は『暴走能力の法則解析用誘爆実験』能力者のAIM拡散力場を刺激して暴走の条件を探るものだったんだ」

木山は、何とか立ち上がろうとするが、地に膝をつく。

「あの子達を実験のモルモットにしてね」

涙を目に溜めながら、超能力者の電撃を受けても尚、立ち上がるとする。美琴や竜野とは抱えているモノの差があり過ぎた。少なくとも、美琴にはそう感じられた。

だが、決着はすでについていた。

この状況では、美琴が断然有利。なのに、木山の放つ言葉の重みとその異様なまでの執念に、威圧されていた。無意識の内に美琴は後ずさりしていた。

「人体……実験……」

目の前がいきなり暗くなったような気さえた。木山から、炎が放たれた。能力を使用するどころか、立ち上がることもすら困難なその身体でも未だに木山から戦意は失せてはいない。

「だ……だったら……それこそ警備員に」

「二十三回……」

木山は、歯を食いしばって、奥歯を噛み締めて立ち上がる。

「あの子達の恢復手段を探るため、そして事故の原因を究明するシミュレーションを行う為に樹形図の設計者の使用を申請した回数だ」電撃のダメージはかなり大きかったようで、立ち上がった木山はよろけた。同時にズキン、と激しい頭痛がした。

「統括理事会がグルなんだ。警備員が動く訳が無い」

「でも、それじゃアンタのやってる事も同じなんじゃ……」

美琴は自身の耳を疑った。学園都市がそんな実験を行っているなんて、想像もしたことがなかった。

確かに、軍一つを相手にする超能力者ですら、どの組織にも所属していなければ、一般人として扱われるこの街はとんでもないとは思っていた。

だが。

木山の言っている事は、トンデモないなんていうレベルを超えている。

「君に何が分かるッ!!」

掠れるような美琴の声は、木山の咆哮にも、絶叫にも似た叫びに掻き消された。

「あんな悲劇、二度と繰り返させはしない! あの子達を救うためなら私は何だってする! この街の全てを敵に回しても、止める訳にはいかないんだあああああああ!!」

頭痛に耐えながら叫ぶ木山に、声が聞えた。

「ふざけんなよっ!」

木山と美琴の二人が声の聞えた方へ振り向いた。その視線の先には美琴と違って確実に爆発を喰らったはずの少年。即、病院送りにされてもおかしくない傷だったはず。

なのに、どうして立っている。

あの爆発をどうやって耐えた。

あの時、彼は何の能力も使ってはいなかった。

例の、異能の力を掻き分ける右手も、広範囲の爆撃の場合、爆発に対して真正面から受け止めなければ、直撃を避ける事はできない。つまり、あの体勢から防ぐ術など持ち合わせてはいないはず。

そんな少年が危なげな、フラフラとした足取りで木山のもとへ歩く。

そして、木山の襟首をつかんだ。

「アンタの過去はよく知らない。けど、アンタが何としてもその子供達を救いたいのは分かった。でもよ、子供達が望んだのは、アンタと笑って幸せに毎日を過ごす、そんな結末じゃないのか?」

襟首をつかむ、その手に込められる力が増していく。

「もう一遍その頭で考えろよ。子供達が回復したその時、アンタが居なかったら悲しむのは一体誰だ!? アンタが今、子供達を失っ

「て悲しんでいるように、子供達もアンタを失ったら悲しむんだよつ！ 何でそんな簡単な事が分からねえんだよ！」

叫び。ただの中学生の、何も知らない子供の理屈でしかない言葉に、木山は言葉を詰まらせた。何も知らないからこそその糾弾。

「ア？」

竜野の視界が急に暗転した。既に肉体へのダメージが限界を超えていたのだ。まるで、ギャグ漫画のような光景だったが、数メートルある高さから落ちたのだ。さらには能力によつて吹き飛ばされ、瓦礫に何度もその身を打ちつけ、爆発まで喰らったのだ。それは当然ともいえる結果だった。

本来なら彼は、真つ先に病院へ行くべき状態だった。襟首を掴んでいた手に込められていた力が全て抜け、呆気なく地面に倒れた。木山は、自分の足元に倒れた竜野を見る。

（そんな結末は、現実に塗り潰される幻想ではない）

一度、少年の言葉に詰まらせた木山だが、少年は倒れた。その事実が物語っている。そんな幻想は呆気なく目の前の現実に潰される。なら、どんな手を使ってでもあの子供達を助けるしかないではないか。

そう改めて確信した。

確信という言葉がここまで絶望的な意味すら持つということを知った。

直後、木山の頭に今までにない痛みが走った。

[illegible]

喉を引き裂く様な絶叫。

「が、ぐっ！？　こ、これは……ネットワークの暴走？　いや、これは虚数学区《AIM》……の」

そこまで言って、木山は頭が割れそうな程の痛みで倒れた。いきなり色々ありすぎて、戸惑う美琴をさらに戸惑わせる現象が起きた。木山のつむじの辺りから、気持ちの悪い、嫌な音と共に何かが飛び出した。

木山から飛び出してきたそれは、胎児を思わせる形状をしていた。これを人体と同じように扱っていいのかは美琴には分からない。頭の上には、不安定な天使の輪のようなモノが出現した。

「は……？」

美琴の動きが止まった。目の前の現象を受け止められない。アレが木山の『多才能力』の一部だとは思えない。学園都市の超能力者でもある美琴は、それなりに能力については知識がある。ある程度なら、知らない能力も、こういう仕組みなのかを見抜くだけの知識を持ち合わせていたはずだ。

だが、能力による、どの超常現象を思い返しても、こんな現象が起きる能力など、美琴は知らない。

得たいの知れない目の前の胎児のような形状の化け物を見て、美琴は体を強張らせる。

直後、声というには抵抗のある音が、胎児のような化け物から発せられた。

ドオツ！ ガァン！ と高架道路の下では、連続して爆発が起きていた。

多数の爆発を、砂鉄や周囲の物を磁力で集めて組み立てる、即席の盾で防ぐ。

目の前に居る化け物に混乱する。一体どうしてこんな風になったのか、それすら分からない。

受け身のままでは埒があかないので、届くかどうか不安が残るが、取り敢えず電撃を飛ばす。

どうせ防がれるんだろうな、という気持ちで放った電撃は、美琴の予想をいい意味で裏切り、胎児のような化け物に直撃し、爆ぜた。
(血が出てない？ 生物じゃないの！?)

胎児の化け物の爆ぜて失った部位が、ブクブクと気持ちの悪い、嫌な音をたてて再生した。目のようなモノがギョロリと美琴を睨みつける。同時に、先端の鋭い氷の槍が宙に出現した。それは、美琴に向かって放たれる。

全力疾走で後ろに引きさがって、何とか氷の槍を避け、追撃に備える美琴だが、胎児のような化け物は攻撃をしてくる訳でも、追ってくる訳でもなく鼓膜を突き破りそんな悲鳴のような声を辺りに喚き散らしながら、その場から動かなかった。

「御坂さん！」

認めたくないが、胎児のような化け物から逃げる御坂に向けて、誰からか声をかけられた。声の主は白井黒子の風紀委員の同僚、初春飾利。いつの間にか目を覚ました初春が、高速道の下まで降りて来た。

「初春さん！？ 何で？」

このままでは初春も巻き込まれかねないと判断した美琴は、胎児のような化け物の方へ振り向いて雷撃を放とうと周囲に帯電させる。だが、その場から動きもしなければ、追撃もしてこない。

「追ってこない……ただ闇雲に暴れてるだけなの？」

胎児のような化け物は、高くも低くも、大きくも小さくもある、音を喚き散らしている。腕のようなものをもがくように振り回すその姿は。

「——まるで、何かに苦しんでるみたい……」

胎児のような化け物の様子を見て、初春はそう言った。一旦下が

ろつと、歩き出す美琴の足に、何かがぶつかった。はっとしたように美琴が足元を見ると、そこには、木山と竜野が倒れていた。

同時刻。

水穂機構病院では幻想御手を使用して、昏睡した患者が暴れ出した。まるで、何か悪い夢にうなされているかのように。

幻想猛獣

美琴達の居る場所の上にある高架道路では、銃声が鳴り響いていた。

警備員の一人、黄泉川愛穂よみかわあいははこの状況に、焦りや恐怖に似た感情をいだいていた。車道に倒れていた型便の数名も既に木山から受けた傷から立ち上がっている。中には仲間達に手を貸してもらっているものもいて、どんなによく見ても、戦闘を続けられる状況ではない。だが、目の前のアレは何だ？

警備員は『幻想御手』の開発者である木山春生を拘束しようと、この現場に来ていたはず。

確かに。

幻想御手の副作用のようなモノが齎した超能力には驚愕した。

だが。

そんな事は、まだこの学園都市内で現実にかかるものとして受け止められた。

あれは。

目の前を浮遊している、あの胎児のような化け物はなんだ？

そんな、不安や恐怖に警備員全員が襲われながらも、引き金を引き続けた。ゴム弾も実弾に替えた。通常の生物なら、これだけ撃てば死んでいてもおかしくないはず。

（これはどういう……）

撃て、と指示を出している黄泉川自身、撃ち続けてどうにかなるのだろうかという疑念が渦巻く。それに、この化け物……。

そう不安を覚えた黄泉川と同じ事を思った同僚。メガネをかけていて、お世辞にも気が強いとは言えない人物。鉄装綴里てつそうづりが呻くように呟いた。

「な、何か……大きくなってる？」

そう、あの胎児のような化け物が大きくなっている。体表と言っ

ていいのか分からないが、アレの体表は傷付くたびに再生ではなく、肥大している。

こんな銃撃をしていて、この化け物を倒せるかどうかなんて分からない。

だが、あの化け物はどこかへ向かおうとしている。そして、その先には……。

木山は、狂ったような、それなのに力の無い笑い声をあげていた。傍らには、例の少年、竜野勇輔が倒れている。おそらく、超電磁砲がここまで運んでくれてくれたのだろう。化け物と警備員が交戦している場所からは一〇〇メートルくらいは離れている。まあ、絶対に安全と言える場所を確保するなら、この車道から遠く離れなければならないのだろうが。

あの化け物、大きくなっている。

もはや、怪獣映画のワンシーンにも見えるその光景は、本当に笑う事しかできない。

「凄いな……、まさか、あんなものが生まれるとは……学会で発表すれば、表彰ものだ。もはやアレは私のネットワークから離れた。

あの子達を取り戻す事も恢復させる事もかなわなくなったか………
…終わりだな」

隣で倒れている少年は、そんなやり方で迎える結末なんてダメだと言った。子供達と自分、双方が無事で、笑って過ごす、そんな誰もが望む幸せな結末を迎えなければ意味が無い、と。

木山だってそんな結末の方が良いに決まってる。だが、そんなモノは幻想でしかない。木山は知っている。この街の大きな『闇』の前では、この現実の前では、そんな幻想など黒く塗り潰される。

何となくだが、学園都市にはもっと深い闇があるということとは分

かっている。

木山が苦悩しているソレはまだまだ甘いかもしれないということも。

自身がどうなっても構わないという姿勢で臨んだ今回の計画。そして、誰かを巻き込むような、そんな手段を選んだのにも関わらず、計画は打ち破られた。

本当に終わりだ。

他人を巻き込んで、自身の身すら投げ出す覚悟で臨んだ手段でさえ挫かれた今となつては、どうすればいいのかわからない。

もう、前を進もうという気持ちすら失われた。

学園都市の『闇』にただの科学者でしかない木山が打ち勝てるわけがなかったのだ。

もう、諦めるしかないのか、と木山は『多才能力者』であることを力モフラージュする為に用意した拳銃を引きぬく。

そして頭へ突きつけた。引き金を引こうとしたその瞬間だった。

「諦めないでください！」

隣に倒れている少年に意識があれば、そんな事を言っていたかもしれないな、と思う木山の視線の先には。木山春生の命すら懸けて臨んだ計画を挫いた超能力者と、大した力も持っていない風紀委員の花飾りの女の子。学園都市の『闇』など知らない二人の少女が立っていた。

「AIM拡散力場の集合体？」

「ああ、そうだな……仮に、『幻想猛獣《A I Mバースト》』とでも呼んでおこうか……幻想御手のネットワークによって束ねられた一〇〇〇〇人のA I M拡散力場それらが触媒となって生まれた潜在意識の怪物。言い換えれば……アレは一〇〇〇〇〇人の子供達の思念の塊だ」

つまり、あの胎児のような化け物——『幻想猛獣』の使っている能力自体は木山の『多才能力』と同じ。だが、相手がああやって再生、肥大化している時点で木山より厄介。

幻想御手使用者の思念。不満や劣等感、敗北感や下位感、引け目、コンプレックスの、負の思念の塊。

そんな、負を表現するような、喉を引き裂く様な鳴き声が、幻想猛獣から放たれた。

「何か、可哀想……」

初春は、ポツリ、とそう呟いた。初春を行動的にしていたのは風紀委員ということもあった。だが、何よりの原動力は佐天の回復のため。

佐天の気持ちに気付けなかった初春の落ち度。“気付けない”と思っている時点で初春を含む、能力者が無能力者を無意識の内に見下しているということなのかもしれないのだが。

「どうすれば、アレを止められるの？」

美琴は木山に問う。散々木山の計画の邪魔をした身で言うのもなんだが、そんな事を気にしている暇はない。美琴の優先順位は幻想猛獣を止めること。

こんな誰かの心を傷付けるような、くだらない事件をさっさと終わらせる。

「それを私に聞くかね？ 今の私が何を言っても、君たちは信じ……」

……
ないだろう、と言おうとした木山の顔の前に手が差し出された。それは初春の手。はっとしたように木山は初春を見る。

「……私の手錠。外してくれたの、木山先生が外してくれたんですよ」

「ただの気まぐれだよ……そんな事で私を信用する「それに」初春は微笑んで、

「木山先生が子供達を助ける為に嘘を吐くハズがありませんから。信じます」

『センサーの事信じてるもん』

子供達との記憶。

もう、取り戻せるか、どうかすら分からない。でも。

目の前の少女は、あの時の子供達と同じく、木山を信じると言つてのけた。

これだから……。

「まったく……。『幻想猛獣』はレベルアップのネットワークが生み出した怪物だ。ネットワークを破壊すれば止められるかもしれない」

美琴は、初春が木山の過去の話聞いていた事に驚いていたが、初春は、木山に言われて気付く。手の中にある。木山から渡された、治療用プログラム。

これを使えば。

「……試してみる価値はあるはずだ」

木山と初春が話し合う中、美琴は上で『幻想猛獣』と交戦している警備員を見る。治療用プログラムは情報操作などの機械の扱いに長けている初春がやってくれるだろう。

なら、美琴がやるべき事は一つ。

『幻想猛獣』の撃破、もしくは足止め。

初春と美琴の視線が交わった。

言葉を交わさずともそれだけで互いの意思は通じた。決心した二人はすれ違い、自身の独壇場へと向かう。初春は、治療用プログラムを、美琴は幻想猛獣を。

事件の解決へ向けて二人の少女が走りだした。

「本当に……」

子供は嫌いだ……。

「根拠も無く人を信用する人間が多くて困る」

警備員のほとんどは幻想猛獣によって薙ぎ倒された。圧倒的な能力だけでは無い。限りなく再生するのだから、倒しようがない。何度撃つても再生し、巨大化していく幻想猛獣に打つ手が無い。

気付けば立つて銃を握り、引き金を引き続けているのは鉄装綴里てつそうじりと黄泉川愛穂よみかわあいほの二人だけになっていた。

「隊長ッ!？」

幻想猛獣の触手のようなものが、黄泉川愛穂を薙ぎ払った。吹き飛ばされた黄泉川は車道のレールに激突する。警備員専用の防護服を身に纏っている為、死ぬ、なんていう事はないだろうが、それでも体のあちこちに鈍い痛みが残る。

残るは鉄装一人。

恐怖を紛らわすように引き金を引き続けるが、銃弾が尽きた。

「ひっ……ッ」

幻想猛獣の触手が眼前に迫り、その先端から、赤い目玉が出てきた。足が震えて体が動かない。危険だと理解しているのに、恐怖が体を強張らせ、動かなくしている。

直後、車道が、砕かれた。

念動力によるものだろうか。

この一撃はいかに警備員専用の防護服を纏っていても、鉄装の肉体を、防護服ごと骨を砕く。

だが、その一撃は鉄装に直撃する事はなかった。彼女が避けたのではない。弾丸のように飛んできたガードレールの一部が彼女の身体を飛ばしたのだ。

幻想猛獣がやったのではない。

「何ぼさつとしてんのよ！ 死んでも知らないわよ！」

飛ばされた先に、常盤台中学の制服を身に纏った少女が居た。能力者である彼女が鉄装を助けたと言う事なのだろうか。

「あなたは……誰？ 一般人がこんな所で、何してるの!？」

鉄装が、そう言うのと、少女はダルそうに肩を落として溜め息を吐くと、

「どいつもこいつも一般人一般人って……」

「とにかく！ 今すぐここから、ひゃっ!？」

少女、御坂美琴が鉄装を引きずるように横へ移動すると、直前まで二人の居た場所が幻想猛獣の念動力によって破壊された。

「……ッ！」

美琴は、伸びてきた幻想猛獣の触手のようなモノに電撃を放つ。

電撃をもらった体表は、炸裂する。痛みを感じるのかどうかは分からないが、電撃を喰らった幻想猛獣は、悲鳴のような声をあげる。

「アイツは、こっちが攻撃しなきゃ寄ってこないんだから」

美琴は、幻想猛獣を一瞥して言うのと、鉄装からではなく、先に吹っ飛ばされた黄泉川から言葉が返ってきた。

「それでも……撤退するわけにはいかないじゃんよ……」

体が痛むのか、震える手で、ゆっくりと幻想猛獣が向かうその先を指した。そう、その先にある物が警備員を撤退させなかった。

「アレが何か分かるか？」

「え……?」

「原子力実験炉じゃん」

そう、それが警備員が必死になっていた理由。引き下がれなかった理由。あの建物に何かあれば、学園都市そのものが終わる可能性だってある。

その事実を知った美琴は、奥歯を噛み締める。

「何やってるの！？ あの子！」

幻想猛獣を睨む美琴の横に居る鉄装が声を張り上げた。美琴が振り返り、鉄装が指を向けていた方を見ると、そこには階段を昇る初春飾利の姿があった。

その手は強く握り締められている。きっとその手の中には幻想御手事件解決のキーアイテム、治療用プログラムがあるのだろう。

「あの子は木山の人質になっていた……くっ、この混乱のせいで、逃げ遅れてるじゃん」

くそっ、と吐き捨てるように黄泉川は言う。

「違う」

だが。それを美琴は一秒も経たない内に否定した。

「初春さんはもう、人質でも逃げ遅れてるんでもない」

彼女は、佐天涙子という少女を助けるために今も戦っているのだ。ただ、能力を振りかざすのではなく初春自身にしかできない事を成そうとしている。

彼女には彼女の成すべき事があるように美琴には美琴の成すべき事がある。

そして、能力を振りかざし、ああいう化け物と戦うのは、超能力者である『レベルガン超電磁砲』御坂美琴の役割だ。

「頼みがあるの」

超能力者の本気

どういう理由かは分からないが、原子力実験炉を目指す幻想猛獣。その巨大な姿は、怪獣と言っても過言ではないだろう。

そして、数本ある触手の一つを黒い刃が切り裂いた。正体は、御坂美琴の能力を応用して作る砂鉄の剣。鞭のようにしなる砂鉄の剣が幻想猛獣を切り裂いたのだ。

直後、幻想猛獣の、悲鳴のような叫び。

御坂美琴が叫ぶ幻想猛獣の前に立ち塞がる。

「アンタの相手はこの私よ！」

言って、美琴はその場から逃げるように走る。しばらくして、美琴の居た地面が何かに押しつぶされるように碎けた。幻想猛獣は何かを言おうとする美琴を無視して次々と文字通り多才な能力を使う。

「少しは人の話を……って」

幻想猛獣の頭上に光が集束され、何十の光の矢となって放たれた。

「やばっ!？」

それは美琴には当たらなかった。

美琴の背後の車道。治療用プログラムを持った少女の方へ飛んでいった。

（早く……御坂さんが引きつけてくれてる間に……）

初春飾利は全力で高架道路へ昇る階段を駆け上がる。戦闘が行われている以上、初春にも被害が及ぶ可能性もあるのだが、美琴と幻想猛獣を見ながら移動するような事はしなかった。

全力で走っているとはいえ、お世辞にも運動能力が高いとは言えない初春のスピードはただでさえ他人より遅い。

その時間の口入を埋めるには、多少のリスクを背負ってでも走る必要がある。

後数段この足を進めれば、車道に出る事ができる。ようやく車道に昇ったと思った瞬間だった。

横から、何かが炸裂し、階段が爆発した。余波で吹き飛ばされた初春は、背中を強く打ちつける。階段から落ちなかっただけ、まだ幸いだった。

それでも痛いと同じで、その目にはうつすらと涙が浮かんでいる。「痛あ……っ……っ……」

初春は出血や痛む体より先に、手の中にある治療用プログラムの無事を確認する。砕けていたら今度こそ幻想猛獣を止める術がなくなってしまう。

「よかった……壊れてない……。急がないと、みんな手遅れに……」
初春は立ち上がり、歩みを進める。幻想猛獣を倒すため、幻想御手事件を解決するため、そして……。

（私だって風紀委員なんだからっ！ みんなを……佐天さんをつ！）

佐天涙子を助けるために。

歯を食いしばって階段を昇り、初春が車道を一気に駆け抜けようとしたその時。

またしても、幻想猛獣の放つ能力が初春の行く手を阻んだ。

光の弾が、初春の横で炸裂した。

だが、それは初春に当たる事はなかった。

「大丈夫！？」

「まったく、最近の若いのは無茶するじゃん！」

二人の女性警備員、黄泉川愛穂と鉄装綴里が初春を守った。初春を襲った光の弾を二人がかりで一つの盾で防いでいる。

何で、とでも言いそうな初春。

二人は、御坂美琴に頼まれたのだ。

治療用プログラムを持った初春飾利を援護してくれと。

幻想猛獣は、治療用プログラムを持つ初春を狙っているようだ。美琴のミスで、二回光の矢を放たせてしまったが、もうさせはしない。

高架道路に居る初春に追撃を加えようとする幻想猛獣に電撃を頭上から落とす。

「シカトしてんじゃないわよ。アンタの相手はこの私だって言うたでしょ。みつともなく鳴き叫んでないで、真っ直ぐ私に向かって来なさい！」

怪物同士の視線がぶつかった。

幻想猛獣と超電磁砲。

二つの怪物の戦いを見ながら、木山春生はその戦場に少しずつだが近づいていく。恐怖で少ししか進めないのではない。美琴からもらった電撃が想像以上にダメージとなって木山の体の自由を奪っているのだ。

治療用プログラム。つまり、ワクチンソフトを花飾りの少女、初春飾利が学園都市に流す事ができれば、確かに幻想御手のネットワークを破壊する事ができる。そうすれば、幻想猛獣の暴走も止められる。

今、幻想御手の治療用プログラムの曲が流れていると言う事は、初春飾利が上手くやってくれたのだろう。

だが。

あの、『幻想猛獣』は一万人の能力者の思念の塊、その上『多才能力』を持つ。

確かに超能力と比較すれば大した力ではない。だがそれは威力だけなら、の話だ。確かに御坂美琴の能力は応用性に長けている。だが、様々な能力を組み合わせることが可能な『多才能力』に比べれば格段に劣る。

何より、木山と違って『幻想猛獣』は本当に容赦がない。どうしてもセーブしてしまう木山とでは能力の使い方が変わってきてもおかしくはない。

さらに、あの巨体。

本当に人間がどうにかできるのだろうか。

そんな不安を抱いた木山の前で、御坂美琴が幻想猛獣の触手を掴んで、電流を流した。その一撃で、焼け焦げた幻想猛獣はあまりの重量のせいか地響きを鳴らしてダウンする。

美琴がほっとしたように、

「何とかギリギリで止めたようね」

汗を拭いながら、背後に建つ原子力実験炉を見る。初春が流したと思われる曲の後、幻想猛獣の再生能力は失われた。これで一先ず安心なはず。

いや、まだだ！ と木山は思った。

「気を抜くな！ まだ終わっていない！」

木山が叫ぶと同時に、幻想猛獣が再び動き出した。美琴は、二人を薙ぎ払おうと振るわれた幻想猛獣の触手を跳んで避ける。

「ちょ、何でアレを喰らって動けるのよ！？」

木山の声を聞いてからでは避けられなかった。電磁波によるレーダーで幻想猛獣の動きを察知したからこそ避けられたのだ。本当にこの能力で良かったと思う。

「アレはA I M拡散力場の塊だ。普通の生物の常識は通用しない。体表にダメージを与えても本質には影響しないんだ」

「そんなのどうしろって言うのよ!」

「力場の塊を自立させている核のようなものがあるはずだ」

木山は、悲鳴のような声をあげる幻想猛獣を忌々しげに睨んで

「それを破壊できれば……」

それだけ聞いた美琴は、小さく呟くように言った。

「退がって。巻き込まれるわよ」

そう言われても、木山には事を起こした責任がある。ここで逃げる訳にはいかない。幻想猛獣と超能力者の戦闘に巻き込まれる事になって

そう、幻想猛獣に巻き込まれようと退がるわけにはいかない。

「構わない。アレを産み出した責任がある。私はどうなっても……」

美琴は木山の言葉を遮って口を開いた。

「アンタはよくても教え子はどうすんのよ。アイツも言ってたけど、恢復した時、アンタが居なかったらそれは、その子たちが救われた事にはならないわ。あとね——」

幻想猛獣の触手が美琴に貫く様な勢いで、伸びた。それに振り向きもせず、美琴の電撃が盾となつて防ぎ、触手が焼かれた。

十億ボルトにもなる御坂美琴の電撃。

「アイツに巻き込まれるんじゃないで、私が巻き込んだじゃうって……
…言ってるのよ!」

幻想猛獣に振り返ると同時に、美琴の腕が思い切り振るわれる。その腕からは高圧電流が放たれ、『幻想猛獣』を焼く。だが、木山の使っていた電流を誘導する能力が、それを防ぐ。それでも美琴は電撃を放つのを止めはしなかった。

超能力者とはいえ、幻想猛獣を倒すのは不可能だと思っていた木山の予測は大きく外れる。幻想猛獣の体表が焼き剥がれ始めてきたのだ。

木山は驚愕する。

（電撃は直撃していない……。強引にねじ込んだ電気抵抗の熱で体表が消し飛んでいく）

その姿こそ、本来の超能力者の姿。

そこでようやく木山は気付く。

彼女は、自分との戦闘時、本気を出していなかったのだと。

何本もの触手が複雑に絡み合い、大きな触手となる。巨大な鞭のようなそれが御坂美琴に向かって振るわれる。

だが。

地面から砂鉄が巻き上げられた。それらは、巨大な竜巻のようになり、触手を全て切り裂く。

悲鳴があがった。

同時に大量の巨大な氷の槍が放たれた。

だが、それらは電撃や砂鉄の竜巻がいとも容易く防ぎきる。

つまり。

これが御坂美琴……。超能力者の全力。『多才能力』では敵う訳が無かった。もう、それは応用性とか、どれだけ上手く能力を扱うとか……。そういう次元では無い。

どれだけ手札を揃えようと、その圧倒的な力で捻じ伏せる。

学園都市に七人しかいない、軍一つとやりあえる超能力者が本気を出せばこんなものなのだ。

氷の槍だろうが、風の刃だろうが、水の弾だろうが、光の矢だろうが、巨大な触手だろうが。

超能力者でない限り、相手にすらならない。

「悪いけど、他人に『パーソナルリアリティ自分だけの現実』を委ねるような人達には負

ける気がしないわ」

美琴は、スカートからゲームセンターでよく使われるメダルを取り出す。周囲に電流が帯電する。

ピン、と気味の良い音と共に、放物線を描いて、コインが宙に弾かれた。

御坂美琴の異名にもなっている、『^{レールガン}超電磁砲』。

圧倒的な力をもって、その場に君臨する超能力者の勝利。

これが放たれれば、再生能力を失った幻想猛獣など易々と貫く。

「こんなところで苦しんでないでとつと帰んなさい」

指先から、光の槍のようにすら見える、超電磁砲が放たれた。超能力者の一撃は幻想猛獣を撃破する。

はずだった。

幻想猛獣が呻き声のような声をあげると、見えない何かしらの力が超電磁砲を掻き消した。

腕のようにも、翼のようにも、剣のようになら見える、いや、思いこんでしまえばそう見えてしまいそうな正しく認識できない『何か』が、美琴の、超能力者の全力の一撃を引き裂いた。

幻想猛獣のどこからか出てきた『チカラ』。

（何なんだ……。アレは……。！？）

幻想猛獣すら寄せ付けない超能力者、その姿に木山は驚愕していた。だが、幻想猛獣の『何か』がその圧倒的な超能力者の必殺の一撃すらも掻き消した。

圧倒的な力を、さらに圧倒的な……。莫大な力で捻じ伏せた。

あんな能力は、『多才能力』には無い。

では、どこからあんな能力を得た？

警備員でも初春飾利でもないだろう。超能力者でも、木山でもない……。

そもそも、この場に超能力者の全力すら捻じ伏せる程の力の持ち主が、この場に居たのだろうか。そんな力を持つ人間が、この場に居るのなら、木山などまるで敵わなかった筈。この場に居る人間では有り得ない。

では、一体誰が……。

（まずっ！？ 能力を使い過ぎた……っ！）

美琴は力を使い過ぎた。しばらくすれば、回復すらだろうが、今は地面から立ち上がる事すらできない。木山との戦いの時から、今まで、ずっと力を振るい続けてきたのだ。いわゆる電池切れ状態になって当然だった。

地に伏せたまま、美琴は奥歯を噛み締める。

もう、幻想猛獣に対抗するだけの力を持つ人間がいない。

初春も警備員も、木山も、無理。

そして今、超能力者である美琴もその力を振るう事はできなくなってしまった。

あの少年なら何とかしてくれそうな気がするが、あの傷では意識が戻っても立ち上がる事すら困難。

そのはずなのに。

荒れ狂ったように能力を辺りに散らす幻想猛獣。

視界の隅で、僅かだが、少年が動いた。

「アンタ……何やってんのよ……ッ！？」

小さな声だった、今にも消え入りそうな声。

なのに、やけにクリアに聞えた。

「……っせ……だよ」

ゆっくりと、立ち上がった。

「——ゴチャゴチャうるせえっつてんだよ！」

その瞳に確かな光を宿して。

その拳を握り締める

真っ暗なはずの視界に、幻想御手使用者の過去の映像が流れている。

意識を手放し、何も聞こえないはずの耳には、幻想御手使用者の声が聞える。

『この街で、俺は能力者になる夢を叶えるはずだった……だけど、夢は夢でしかなかった』

どこかで聞いた男の声だったような気がした。

『どんなに努力を続けようと、この街では才能という壁が邪魔をする……惨めな日常だけが残った、踏みつけにされ見て見ぬふりをされるという……日常だけが』

いつの日のかの気弱な爆弾魔の声がした。

『……だったら、手に入れるしかないじゃないか。どんな事をしても……力を手に入れるしかないじゃないかっ！』

そんな、一人にも及ぶ、負の思念。

必死に努力して、積み上げてきたものが、能力者との対戦で打ち砕かれて諦めてしまったとある少年の物語。能力のコツを教えた後輩が、自分を抜いて、才能の有無を知ったとある少女の物語。超能力者を目指していた少年は、本物の超能力者に出会い、その高く、厚い壁を知り、下を見る事しかできなくなったとある少年の物語。

そんな、一人にも及ぶ、過去。

それらが、竜野の立ち上がりとする意思を奪いかけていた。そんな時とある少女の声が聞えた。

（レベル0って欠陥品……）

何だよそりゃ……。

（だと思ってやがる）

何でそんなの決めつけてんだよ。

（それが許せない）

ふざけんなよ……。

（ダメだ）

——うるせえ……。

（レベル0……）

——うるせえ！

（所詮、レベル0なんて……）

「……っせ……だよ」

体のあちこちが悲鳴があげている。

ドロドロとした汗が止まらない。

腕が震える。

足が震える。

痛みが恐怖になつて全身を震わせている。

だが、それでも竜野は拳を握り締める。

本能的にあの胎児のような化け物を倒せば終わるのだと理解した。
どうすれば、いいのかも何故か理解できた。

未だに声が聞える。

（……ったく、どいつもこいつも、無理だ嫌だ所詮レベル0だ諦めるだ、好き勝手言いやがって……）

耳障りな声を黙らせるため、竜野は叫ぶ。

「——ゴチャゴチャうるせえつつてんだよ！ 何勝手に人を値踏みしてんだよ。いいか？ 分っかんねえようなら教えてやる。アンタらが逃げたいなら勝手に逃げだせばいい。諦めたいなら勝手に諦めりゃいい。でもな、全員そうだと思つなよ」

言つて、駆けだす。幻想猛獣も竜野の居る、高架道路の方へ体を向ける。

さらに強く、拳を握り締める。

両者の視線がぶつかった。

幻想猛獣が、様々な能力を振るう。

数十にもなる、氷の槍、風の刃、炎の渦、水の弾、光の矢、念動力、爆発。

人一人など、いとも容易く貫く氷の槍。人を容易く切断する風。

全身を焼く炎。撃ち抜く水。炸裂する光の矢。広範囲を呑みこむ爆発。

それがただ一点。竜野に向けて放たれた。

竜野は異能の力を掻き分け、直撃を避ける右手を使わない。

ただ、走る。

それだけで、全ての氷の槍を避ける。風は空気を切り裂くが、少年を傷付けない。炎は地面を焼き焦がすが少年を焼く事ができない。水は、地を撃ち抜くが、少年には当たらない。光の矢は炸裂するも、少年を巻き込めない。念動力は地面を砕くが、少年の体を壊せない。クレーターすら残す爆発は、少年を呑みこめない。

ただ逃げているのであれば、それも難しくはないだろう。だが、竜野は幻想猛獣に向かって走りながらもそれら全てを避けきっている。

「オレは逃げもしねえし、諦めもしねえ！ 何遍失敗しようが、何遍倒されようが、その数だけ立ち上がってやる。何遍叩きつぶされようが這い上がってやる」

直後、幻想猛獣から放たれた光の矢が炸裂した。直撃こそしなかったが、衝撃の余波が、竜野を吹き飛ばした。ごろごろと地面を転がる。

痛みが全身を襲う。

だが、立ち上がる。

少年の瞳から光が消えない。

握り締めた拳は緩まない。

痛みのせいか、足が上手く動かせない。

立ち止ってしまった竜野に、追い打ちをかけるように幾つもの声が聞えた。

（そんなのは強者の理屈だ）

幾つもの声の中の一つにそんな言葉が聞えた。確かに竜野は『幻想造り』という力がある。あらゆる異能の力を生み出す能力と謳われる力を持つ竜野は、学園都市中に溢れている無能力者とは少し違うかもしれない。

でも、だからと言って。

何故、無能力者は諦めなければいけない？

確かにこの学園都市において、無能力者というのは、優遇されにくい。シビアな環境に陥りやすく、大きなハンデを抱えているのも事実だ。

だが、力が無かったとはいえ、才能が無かったからとはいえ、他にいくらかでも日々を過ごしていく方法はあったはずだ。

例えば、初春飾利は決してレベルの高い能力者ではない。その上、平均的な運動能力はそこら辺に居る中学生のそれを下回っている。不良どころか、同じ女子相手にだって喧嘩をすれば軽く負けてしまつくらいだろう。支援サポートの面では優秀だが、きつと実際に体を動かす、現場での仕事では失敗もあつただろう。周りの風紀委員と比べれば、現場での行動力は劣っているかもしれない。

だが、彼女はそれを理由に、大きな力が無い事を理由に何もしなかっただろうか。

その答えは否だったはずだ。

現に彼女は、友人のために幻想御手事件を解決しようと尽力している。そして何より、風紀委員になったと言う事実が、彼女が前へ進もうとしていることを証明している。

別に全員がそうなれとは言わない。だが、それは語っているはずだ。

重要なのは最初の環境の良い悪いではなく、そこからどうやって前へ進むかだということを。

自分の今の現状を認めた上で、そこから前へ進めばいい。

御坂美琴だってそうだろう。

いくら才能が秘められていたとしても、努力を怠ればあれ程の力を手にする事はかなわなかったかもしれない。

彼女のスタート地点、最初の環境は周りの人間と大差ない、低能力者（レベル1）だったのだ。

もし、彼女が超能力者になると分かっている、優遇された環境を用意されていたのだとしても、彼女自身が低能力者という結果を目の前に諦めていれば、超能力者になれなかったかもしれない。

そこから努力し続けた彼女に、超能力者になるだけの才能があっただけ。

つまり、そういう事なのだ。

力が無い事が諦める理由にもならなければ、才能があるからその人が凄くなるという理由にもならない。だってそうだろう。才能の有無で全てが決まってしまうのなら、今この場で立ち上がっているのは竜野ではなく、才能のある、もっと別の人間だろうから。

約束がある。

助けたい人が居る、守りたい人が居る。

それだけで、もう理由なんていらぬ。力の有る無しだなんて小さな事ではないか。

泣いてほしくない人が泣いている。傷付いてほしくない人が傷付いている。

もう、それだけで、何だって誰だって、立ち上がればいいではな

いか。

何回地に伏せられようが、何十回失敗しようが、何百回倒されようが、何千回叩き潰されようが、その分だけ立ち上がればいい。

だから、現在^{いま}、立ち上がるうとしている自分を否定される覚えもないし、立ち上がるうとする事をどうこう言われる筋合いも無い。

確かに生まれ持った才能で人生は大きく変わる。

結局、無能力者は無能力者のままかもしれないし、超能力者は超能力者になるように世界は出来ていたのかもしれない。

だけど、最初の環境からどう生きるかだけで、人は大きく変われるのだと思う。周りからも、自分でさえ気付かなくても、必死に前へ進み続けた人間の人生の価値は、大きなものになるはずだから。それは周りの人間に決められるようなものではないはずだから。

だから、こんなちっぽけな中学生でも言える。

無能力者は決して価値の無い人間ではないということを。

だから、竜野はたった一つ問う。

この世界が才能だけで、力だけで全てが決まると思い込んでいる学園都市の学生達に、勝手に絶望してやがる学生達に、たった一つだけ問う。

「なら……才能の有無がどうだなんて言わねえ。たった一つだけ答えろよ……アンタらは、投げ出したままでもいいのかよ？」

言葉を詰まらせるような声が多々聞えた。

それは、まだ諦めていないということを証明していた。

「本当は、アンタらだってずっと立ち上がりたかったんじゃないのかよ？ 悔しかったんだろ、辛かったんだろ、苦しかったんだろ、ずっとずっと、周りの評価や目なんて、その場の環境なんて気にせずは何度だって立ち上がりたかったんじゃないのかよ？」

だったら、と竜野は続ける。

「それは今からでも遅くなんかねえ。きっと今からだって間に合うんだ！　こんなつまらねえ物語なんざさっさと終わらせて、いい加減始めようぜ、能力者！」

ぶるっ、と竜野の体が震えた。原因は恐怖ではない。

今から、佐天涙子が、無能力者が欠陥品なんかでは無いという事を証明できるのだ。あの時、ちゃんと返してやる言葉を持ち合わせていなかった竜野が幻想猛獣を倒す事で、超能力者ですら倒せなかった化け物を倒す事で。

無能力者に分類されている、自分のその手で、証明する事ができる。

それはとても素晴らしいことではないか。

そう思った竜野は、武者震いしてしまったのだ。

竜野の止まった足が、動き出す。

立ち止まるにも、倒れるにも早い。

放つ言葉の一つ一つが、竜野自身を突き動かしているようだった。

まだ、足が動く、拳を握れる、言葉を吐ける。

風、水、炎、氷、雷、念動力、光の弾。多種多様な能力が竜野に牙をむく。だが、どれも竜野に直撃する事はなかった。

特殊な能力を使っているわけではない。満身創痕のその身体では、ただ走ることすら危うく見える。

なのに、連続して放たれる、一方的にすら見える幻想猛獣の攻撃を全て避け続ける。

幻想猛獣の、超電磁砲すら掻き消した『何か』が縦に振るわれた。巨大な剣で切ったように地面が割れ、砂塵が舞う。その『何か』が及ぼす一撃の余波や衝撃波ですら、少年を潰すには十分な威力を持つていただろう。一直線に走る衝撃波は、竜野の背後の車道を真っ二つに切り裂いた。運の良い事に、初春や警備員の居る所とは距離

があった。『何か』がぶつかった地面は直径数十メートルにもなる大きなクレータが出来あがっていた。原子力実験炉から離れた場所で起きたから良かったものの、下手をすれば学園都市が終わっていただかもしれない。

その代わり、確実に少年は死んだはず。

生き残る道理が無い。

幻想猛獣のどこからか、幻想御手使用者の諦めの声が聞えた。なのに。

「――アンタらの為に、ちょっとした幻想を造ってやる」

声と同時に、ドバツ！ と砂塵から竜野が飛び出してきた。

「アンタらがまだ立ち上がりたいて思ってたんなら、手を差し伸べてやる。だから、そこから先は自分で選べよ！ 自分でどうにかしようとするのもいいし、投げ出したいならそうすればいい。誰かに任せるんじゃない、アンタらがアンタら自身で自分^{テキエ}に向き合ってみる！」

跳躍。

握り締めた拳を、幻想猛獣へとぶつける。たったそれだけで幻想猛獣の体表が引き裂かれていく。

触手が竜野を倒すために伸びてきた。それを見て、ありがたい、と竜野は思う。普通の人間の脚力では、どうしても幻想猛獣の存在を支えている核まで届かない。

槍のように向かってくる触手を左手で掴む。しがみつくようにして離れない竜野を振り落とそうするように乱雑に触手が振るわれる。

振り落とされ、竜野の体が十メートル近くの高さに投げだされる。そして、向かい側からもう一本。宙に投げだした竜野に追い打ち

を掛けて、薙ぎ払おうと鞭のように触手が振るわれた。

能力が発動しない限り、どうしても逃げられない絶望的な状況な
はずだった。

「お

だが、竜野は振るわれた触手さえも踏み台にした。

本来なら、これは竜野の圧倒的不利だっただろう。

だが、後は右手を幻想猛獣に向けて突き出し、自由落下するこの身体を幻想猛獣の所に落とせば。その体表を引き裂き、核を殴ることができる。もう戦闘を続ける余力が無いこの状況ではこのような捨て身の戦法の方が有効。

「おおおおおおおおおおおおおおお
 おおおおおおおおおおおおおお
 おおおおおおおおおおおおおお
 おおおおおおおおおおおおおお
 おおおおおおおおおおおおッ！！！！！」

異能の力を掻き分ける右手は、異能の力の塊である幻想猛獣の体表を引き裂いた。

それこそ、金魚すくいの紙を破る様に、あっさりと。

竜野の視線の先には幻想猛獣の存在を支えている、三角柱状の核。

ガラスが割れるような音が響いた。

それは竜野の拳が核を砕いた音だった。

垣間見えたもの（前書き）

更新・感想の返信共にかたいぐ遅れてしまつてすみません。

垣間見えたもの

「あーあ、あの野郎、いいトコだけ持っていきやがって……、どうすんの？　今の私にアンタを止める力は残ってないけど……アイツも含めてね」

美琴はへたり、と地面に座り込んだまま、あの化け物を倒してしまった無能力者の少年を見る。

例の少年は、憎たらしい事に笑ったまま気を失っている。

結局、あの少年が幻想猛獣を倒してしまった。……というか、あの少年は、本当に後先を考えずに行動し過ぎて困る。空中から幻想猛獣の核まで落下して核を砕いた所までは良かった。だが、それはつまり、何メートルの高さから、ダイレクトに地面に落ちるということになる。あの少年の満身創痍の身体で地面に叩きつけられたら、最悪死んでもおかしくはなかったというのに、最初から最期まで心臓に悪い少年だ。

美琴が残った力で、竜野の手持ちにある金属を利用して、磁力で衝撃を和らげていなければ今頃どうなっていたことやら。

それ以上に気になった事がある。

少年の異様なまでの回避率についてだ。幻想猛獣からは軽く十を超えるほどの能力を振るわれたはずだ。だが少年はそれら全てを避けきってしまった。

あの右手が、万能ではないということが分かった。

仕組みまでは分からないが、どうやらあの右手はあくまで直撃を避けるためにあるようで、異能の力を掻き分けるだけのようだ。

広範囲に及ぶ爆発に対しては、真正面から右手を突きださなければ、竜野の身は守られない。つまり、向かってくる能力に対して直線に右手と竜野の体がなければいけない。今回のように、斜めや横から手を出すと、例え、異能の力を掻き分けても、コースが変わった場所に竜野が居るというケースがあるようだ。

そう考えると、虚空爆破事件の時のも結構危険だったのかもしれない。

異能の力を打ち消されていると思っていた美琴からすれば、つけこめる隙ができたという事なんだろうが、そうになると、なおさらあの少年の異常が際立ってしまう。

今まで、真面目な勝負の時は、美琴の電撃が竜野に届いたことがない。

それはつまり、向かってくる電撃に対して、掻き分けるコースを予測してから右手を突き出していたという事なのだ。

では、どうやって右手をぶつけた後のコースと、電撃の軌道を測った？

美琴の雷撃の槍は雷速で突き進む。それは見ってから反応できるような速度では無い。放たれてから判断するには遅すぎるのだ。

つまり、美琴が電撃を撃つ前からその軌道を把握していたことになる。

それが幻想猛獣の能力を避け続けていたことに繋がっているかもしれない。

それが、あの少年の能力の正体……？

それとももっと別の……

そこまで考えたところで、警備員が駆けつけてきたのが美琴の視界の隅に入った。

「……いや、今の私に警備員から逃れる術はないからな……」

だが、と木山は続ける。

「あの子達を諦めた訳じゃない。あの少年は諦めずに幻想猛獣に倒し、一万人の学生を救った。彼が成し遂げてみたこの結果を裏切る訳にはいかないからな。……もう一度やり直さ。理論を組み立てる事は、どこでもできるからな」

警備員に捕まり、しばらくは子供達を助けることはかなわなかったというのに、木山の顔には僅かな笑みすらあった。

「刑務所の中だろうと世界の果てだろうと、私の頭脳は、常にここにあるのだから」

ただし、と木山は付け加える。

「今後も手段を選ぶつもりはないぞ。気に入らなければ、その時また邪魔しにきたまえ」

本当に呆れた先生だ、と美琴は思う。

警備員に手錠をかけられ、両手を拘束されているというのに、まだこんな言葉が出てくるのだから。

「しつかし……脳波のネットワークを構築するなんて、突拍子もないアイデアをよく実行にうつそうと思ったわね」

呆れた、という意味で皮肉気味に言った言葉に、思いもよらない言葉が返ってきた。

「複数の脳を繋ぐ、電磁的ネットワーク。『学習装置』を使って製糖された脳構造……これらは全て、君から得たものだ」

は、と美琴は思わず言ってしまった。

「私そんな論文書いた覚えはないわよ」

「そうじゃない……君のその圧倒的な力をもつてしても抗えない……」

……君も私と同じ——」

警備員の輸送車に足を踏み入れる木山は告げる。

「——限りなく絶望に近い運命を背負っているということだ」

第七学区のとある病院の屋上。夕日が街を紅く染め上げている。昏睡状態から目が覚めた佐天涙子はそんな光景を前にしながら、両手を体の前に出していた。

手が変わっているのではない。幻想御手によって発現した風の能

力がまだ使え得るかどうか、確認していたのだ。その掌の上には、何も無い。

もう、その力は失われてしまったらしい。
体調に異常はない。

（元通り……か）

本当に全て元通りだ。良い意味でも、悪い意味でも。
能力が使えたあの幻想のようなひと時。

夢から醒め、現実に取り戻された。

ただそれだけの話。
だが。

佐天涙子は僅かに笑う事が出来た。
だって。

「佐天さんっ！」

自分のために必死に頑張ってくれた親友の声が聞えた。屋上の扉を開けた初春飾利の息はあがっていることから、全力疾走で駆けつけてくれたのだろうと佐天は思う。

「やあ、初春」

「やあじゃありません！ 病室にいないから探したじゃないですか！ 立ち上がって大丈夫なんですか？ どうか具合が悪いとかつ！ 言いながら、心配そうな顔で走り寄る初春に対して、佐天は声をあげて笑う。

「ちよつと寝ただけだもん。すっかり元通り」

そう、全部元通りだ。

「……能力が使えない所までね……でも」

佐天は、一度、息を吸って。

「———そんなのは気にしないよ」

きつと、ここから先は、御坂美琴でもなければ、初春飾利でもない、佐天涙子という一人の人間が自分自身と向き合って、歩み始め

なければいけない。

その上で、もう絶対に投げ出したりはしない。

これは佐天涙子の決定事項。

どんな現実とだって向き合ってやる。

失いかけた居場所を取り戻してくれた誰かのためにも。

だから。

まずは全力で頭を下げよう。

「……ゴメン。つまらない事に拘って、内緒でズルして、初春をこんな目に遭わせて……」

「そんなこと……」

「もう少しで、能力なんかより、ずっと大切な物を失うところだった……で」

それから。

いつも通り、スカートをめくってやるう。

「たっただいまーっ！」

『冥土帰し』は、部屋の中で『誰か』と話していた。普段は語尾が疑問形で、飄々とした感じの彼は、いつになく真面目な声音だった。

「あの子は君に関係してるのかい、アレイスター？ 常人だったらとうに死んでいたよ？」

「……『幻想造り』のことか。アレは常人とは少しばかり出来が違ってね、疑問がそれだけなら切ってもいいかな。今から『幻想殺し』の方が面白くなる所だ」

冥土帰しの話し相手はアレイスター・クロウリー。回線を通じて会話しているとは思えないほどクリアに声が返って来た。

「アレは学園都市に来るべくして来て、生まれるべくして生まれた。アレの存在は科学が否定するべき『奇跡』によって生まれたんだがね」

「君が彼をどうするつもりなのかは知らない。だが、ここで宣言しておくよ？　ここに来た以上、彼は僕の患者だからね」

「……好きにしてくれて構わない。アレはオカルトからすれば多少は稀少だが、科学にとってはどうでもいいからね。『保管』してお価値はあっても『利用』する価値はないんだよ。真実を知った時、それでもまだ『幻想造り』を救えるのなら、救ってみるといい」

「いまさら何を言っているんだい、アレイスター。僕は医者だよ？」

「……ふ、そうだったな。健闘を祈るよ、私の友人よ」

アレイスターが言い終わると、言葉を返す間もなく通信は切れた。通話を終えた冥土帰しはいつになく気力に満ち溢れた表情で、とある少年の病室へと向かった。

盛夏祭

暗い部屋からは、少女の声だけが聞えた。

少女に焦りは無かった。だが、驚きはあった。自身の利益のために捕えるはずの人物が、中々捕えられなかったからだ。仲間というには、信頼関係も友好関係も築けていないが、部下や配下とは言える連中を送った。だが、全て退けられてしまった。部下、と言っても洗練された『獵犬部隊』のような組織ではない、むしろ、不良の一線を少し超えた程度の連中だ、仕方ないとも言える。

（『オートリバー再生』しかないと思って甘く見ていたのかしら……）

だが、まあいいだろう。

部下も所詮は金で雇っただけの連中だ。目的のためなら金銭を気にしなどはしない。それに目標をクリアするのにはある程度の手応えがなければ。個人的な話だが、今やっている事全てが、自分の為にしている事なのだから構わないだろう。

正直他人を利用する事には何の躊躇いも感じない。学園都市の裏側なんてものは大体そんなものだ。自身の望みのために、欲のために。もしくは墮とされた者達。

電話の向こうから『女性』の声が聞える。無論、学園都市の裏側の人間だ。組織の中では上司にあたる人物だろう。

学園都市には裏に潜む組織が幾つも存在する。本来ならば、学園都市の不穏分子の抹消が役割の組織だが、今回は標的の捕縛の依頼を承諾してもらった。

あくまで、生きた状態で。

死んでもらうては困る。

かつては『置き去り』チャイルドエラーとして、同じ『実験』を受けていた友達だとか仲間だとか言える間柄ではあったが、そんなのは関係ない。通話が切れた電話を仕舞い、部屋のソファに腰掛ける。

「さて、私の超能力者になる『レベル5実験』に協力してもらいましょーか」

少女の名前は荒幡玲水あらはたれみと言う。

まるで、友達を遊びにでも誘うような調子で言う荒幡の口元は不気味に歪み、異常さを際立たせていた。

（まさかこんな贅沢ができる日がこようとは）

髪の毛のてっぺんを寝癖ではねさせたままの竜野勇輔は、目の前にある物を、喰らいつくように見ていた。竜野が座る、古い洋式風のテーブルにはそれはそれは豪華な料理が並んでいた。普段の竜野では、一日でこれほどの量の食事を摂れることはまずないだろう。毎回の言うが、竜野勇輔は無能力者で、手持ちの金銭は少ないのだ。油断しているとすぐにすっからかんになってしまいうくらいに。それを今から無料で食べれると考えると、金銭的にも救われるようだ。

ちなみに、竜野は今日まで入院していて、ようやく退院した。何故入院していたかというと、幻想御手事件での、非日常的戦闘で負った傷が原因だったりする。正直に言くと、死ぬかと思った。そして、本当に危険な状態ではあったらしい。『冥土帰し』と呼ばれている力エル顔の医者が診てくれたらしい。らしい、というのは、竜野自身あまり事件の時の事を覚えていないからだ。

「はっはー、病院食から卒業オメデトウ！」

入院中、色々溜りようりまっていたものを言葉と共に吐きだし、がつがつと目の前にある獲物を喰らう。ちなみにこの言葉の中には、入院費として消え去った、所持金への悲しい想いもあったことに、誰が気付くだろうか。

竜野の大声に反応して、周りの客の視線が一斉に向いてきたが、後悔はしていない。

ここは常盤台中学女子寮。

外観は洋館じみっていて、古めかしい。全体には貴族の邸宅みたい

な雰囲気になっている。ここの寮生は皆、午前七時に起床して以後三十分以内に身だしなみを整え、点呼、朝食を摂るらしい。休日の竜野では有り得ない生活リズムだ。

普段は、一般向けに解放はされていないのだが、今日は、この寮に携わる人から招待券を受け取る事で入場ができる。周りを見るだけでも結構な人数がいることから、それなりに大きなイベントなのだろう。

常盤台中学女子寮盛夏祭。

年に一度、外部に解放される、文化祭のようなイベントだ。

さて、ここで誰が招待券を竜野に送ったのかという話だ。

自分も良く憶えていない内に入院していた竜野は、後に知らされた入院費とその他諸々の金額を聞き、一気に憂鬱になっていた所に来たのが、御坂美琴。他愛もない話をして、とっとと帰ってしまったと思つたら、招待券がベッドの横にあったという。

（こんなに美味しいもんが食えたんだから、後で御坂に礼言つとかなくちゃな）

ちなみに食事はバイキング形式で料理を摂ってくるようになってる。竜野が、まるごと皿に入れて持ってきたケーキを頬張つてると。

「ねえねえゆうすけ、そのケーキ貰っていい？」

「え？」

少し驚いたように顔を上げると、いつかの銀髪シスターさんが、向かい側の席に、皿をスパゲッティでんこ盛りにして座っていた。随分と久しぶりに会った気がするが、あのファミレスの日から――不良の方々は代金をちゃんと払えたんだろうか？――まだそう経つてはいない。

「いやいや、ダメですよって、オレのケーキ以外の皿が！？ まさか、イン、デックス……っ？」

テーブルいっぱいに広げて、占拠していた料理達が綺麗になくなっており、食い散らかされた残りかすと、皿しか残っていないかった。

目を見開いて、暴飲暴食シスターこと、インデックスを見ると。

「美味しかったよ」

気持ちの良いくらい、いい笑顔が返ってきた。神聖とも感じ取れそうな優しい微笑みに、普段なら仕方ない、とそう思えただろうが、今はその笑顔すらも憎たらしい。そして本人に悪気がなさそうな感じがやるせない。

何というか、本気で怒りにくい雰囲気を漂わせているのだ、この少女は。

「ギャ——ッ！ 何やってくれてんのっ！？ ファミレスで飯を驕った時もそうだけど、誰かこの子を止めてくれっ！」
だが。

折角周りの視線を気にしながらも取って来た大量の料理を食われるのは、何か、やっぱり嫌だ。

席から立ち上がって、ケーキすらも喰らい尽くそうとするインデックスの腕をがっちりロックする。あと数瞬遅かったら、このケーキもかす程しか残らなかっただろう。

腹ペコシスターの食に対する想いは、男女の体格差による力の差を無視して体をぐいぐい寄せてくる。

（くそう、普通ならこの密着状態は嬉しいはずなのに全然、嬉しくねえっ）

竜野とインデックスにしてみれば壮絶な、周りの招待客からすれば果てしなくどうでもいい、争いをしていると、

「あれー、何してるの、竜野君」

弾むような、陽気な声が聞えた。聞いただけでああ、この人って明るそうだな、と思わせれそうな声だった。はて、こんなボイスを発する知り合いなどいたっけか、と思いながらも声の聞いた方へ振り返る。

そこに居たのは、周りの常盤台のお嬢様たちにも、美少女に入るインデックスともまったく引けを取らない少女。
セミロングの茶髪、整った顔立ち。

一見して、美少女と判断できる容貌。

「んー、シスターさんとケーキを争奪戦をやっている途中。こっちが防衛だな……って、奪われたっ!？」

少し目を逸らしたのが致命的になったのか、ケーキはすでにインデックスの手に渡り、食されていた。

「ゆうすけ、あの子は誰？」

インデックスが、ケーキをぱくぱくと頬張りながら聞く。

「雨崎だよ。あまのきそらは雨崎天葉」

インデックスに説明するような口調で言いながら、同時に意外な人物と会ったものだ、と竜野は思う。

目の前の少女とは、クラスメイトではあるが、ぶっちゃけると、雨崎とはそんなに話した事はない。一応クラスメイトという事で、互いの連絡先くらいは知っているが、使った記憶はない。特別仲が悪いと言う訳ではないが、良くもなかったはずだ。それこそ、街中で見かけてもスルーしてしまう程度の。

クラスの中でも級長とかとは別に中心に居る存在であり、非常に活発かつ行動的な性格。勉強、運動共に優秀、というより柵川中じやトップクラス。その上、能力の成績も強能力者レベル3をキープで一度だけ、大能力者レベル4を取ったことがあるとか。

正直彼女には色んな部分でついていけない。竜野に言わせれば、何故常盤台中学に行かなかったんだと聞きたいくらいだ。

「竜野君、そっちの子は？ その服装は竜野君の趣味？」

雨崎はインデックスのことを不思議そうに見て言う。

「えーっと、偽名っぽく聞えるけど、こっちはインデックス。珍しいよな、学園都市でシスターさんってのは」

あとな、と竜野は真剣な表情をして。

「これは断じて俺の趣味ではない。シスターにするくらいだったらな——」

そこまで言うのと周りを見渡して、指をさした。指でさした方を見ると、メイド服を来た女生徒——お嬢様——が招待客に案内したり

している。何故メイド服なのかは分からないが、盛夏祭中は、ここに住む寮生はあの格好になるらしい。

「俺はメイドさんを勧める」

きっぱりと言い放った一言だった。

何故だろう、空気が凍ったような気がする。そして指さした寮生メイドから、滅茶苦茶冷たい視線が竜野を射ているような気がするが、きつと気のせいだろう。

そして発言の場は選ぶべきだと思った。

「それは私に対する、ううん、全世界の修道女に対する冒瀆なんだよ！」

「は……はは」

若干顔を引き攣らせて何とか笑いを作る雨崎だが、笑えない。

インデックスはむきー、と地団駄を踏んで、魔術がどうこうという話をし始めている。魔術やら修道女がどうたら、語り始めたインデックスの話を適当に笑って聞き流しているうちに、竜野は雨崎にちよっとした違和感を覚えた。

「てゆうーかお前、なんか服が微妙に汚れてないか？」

今更なんだが、よくよく見るとそこら中に小さな傷や、擦ったような跡がある。

竜野自身も不良との喧嘩という名の逃走劇を繰り広げた経験があるので分かるのだが、路地裏でも走って来たのだろうか。今までは気付かなかったが、彼女の表情はどこか疲れているような気さえる。

まさか喧嘩でもしてきたんじゃないだろうな、と竜野は内心思うが、口に出したら後が怖いので止めておくことにする。いや、もしかしたら彼女なら不良の一人や二人倒してしまいそうな気もするが「えっ、あ、ああ。これね、ちよっと転んじゃってね」

ははは、と気恥ずかしいのか、誤魔化すように笑う。

「へー、雨崎でもそんなことあるもんなんだな」

「それ、どういう意味？」

「いえいえ、文武両道才色兼備の完璧少女の雨崎天葉さんがねーって」

竜野の言葉を聞くと、雨崎は胸を張って。

「ふふーん」

「否定しないのな」

適当に褒めてるような言葉を並べたが、それで雨崎は満足のように、うんうん、と首を頷いている。それにまあ、事実のようなものでもあるし。

そしてその隣では小さなシスターが、その身長と同じく全く無い（ように見える）胸を誇らしげに張って言った

「——そうやって、私達修道女は教えを広めたんだよ！——
ねえ、聞いている？ 聞いてないよね。……ゆうすけもとうまと同じ^{スル}事するんだね……」

どうでもいい話だが、格好良い、や、可愛いって本人に自覚があったほうが良いんだろうか？

そんな思考に一瞬入った竜野は額に指を当てて考えていたのだが、突如、とんでもない悪寒を感じた。

その発信源は、もちろん向かいの席の——。

「——え？」

竜野が先程まで誇らしげに語っていたインデックスの方を振り向くと、そこには洋館じみた寮をバックにした彼女の姿は無く、その代わりに彼女の着ている金刺繍の現代日本どこに居ても目立ちそうな修道服が眼前一杯に広がっていた。

（何をして、る？）

よく分からずに、竜野の思考が停止した。直後——
ぐしゃりと。

とてもとても不快で、嫌な音が竜野の耳に聞こえてきた。さつきまで話していた雨崎を見てみると、どうリアクションを取ればいいのか迷ったような、複雑な表情をして竜野の顔を見ている。

いや、顔、というより頭？

遅れて、激痛がやってきた。

「う——、ぎゃあああッ！ 頭痛で頭が痛いイイイイイイイイイイイイッ!?」

竜野は人生で初めて少女から頭から噛みつかれるという、非常に珍しい体験をした。もうこの子に対してスルーはしないでおこうと思った。

出来ればもう二度と体験したくない。

女の子頭噛みつかれるのなんて、人類初なんじゃね、とくだらない事を思ってる内に、竜野の意識は闇の中へダイブするのだった。

「はつくしよんッ!? ……? なぜだろう、今誰か俺の事を言っていたような気が……」

ツンツン頭が特徴的な少年、上条当麻は風邪かな、と思いながら周りを見渡した。

上条当麻は不幸だ。気付けば病室のベッドの上に居て、魔術だの何だの訳の分からない話を聞かされた。一人の少女を救う悲しくてとても幸せな物語を知った。それは全て、自分の事だと言うのだが、何も覚えてはいなくて、自分の事なのに自分の事では無くて、自身の名前すらも知らなくて。意識が覚醒した時から体中がボロボロで、何も覚えていなかった。

そう、上条当麻は、記憶を失った。

記憶喪失。そして、もっと言うのなら、記憶破壊。

カエル顔の、語尾が何故か疑問形のヘンテコな医者からは、頭の中に直接スタンガンでもぶち込んだのかい? とまで言われた程だ。一生涯の中でそんなことを医師から言われるのは、世界広しと言えども、そうは居ないだろう。

そして、一人の少女の為に、嘘を吐くことから『上条当麻』の物語は始まった。

一人の少女の笑顔を壊さないために。

そんな初っ端から不幸全開の上条当麻のもとに、招待券が届いた。何故か気付いた時から同居していた少女——インデックスと交流が多少ある？　らしい（上条とも知り合いらしいが記憶が無いのでよく分からないのだが）お隣さんの義理の妹である土御門舞夏からのだという。

何の招待券かと見てみると、お嬢様学校で有名な常盤台中学の寮の盛夏祭の招待券だったのだ。どういう人脈を築いていたんだ『上条当麻』と、内心自分にツツコミながらも、ありがたい、と思い常盤台中学女子寮へと訪れることになった。

ありがたい、と言うのは、上条家の家計がかなり崖っぷちだったのが理由だ。退院していざ寮生活を始めるに至って必要なのは生活費だった。なので、通帳を見てみたところ、もはや惨劇クラスの残金しかなかった。そして同居人にかかる食費が上条の何倍にもなるのに寮生活一日目で気付き、さらなる上条宅の家計は危機へ。そして、盛夏祭に行くに至って、上条はある武器を携帯していくことにした。

それは、『タッパーウェア食品用密閉容器』。盛夏祭では招待客の食事は『セルフサービス方式』いわゆる『食べ放題』だという。

つまり、上条の思惑は単純かつ明快。

詰め込んで、持ち帰っちゃえ。

それで今月は持ち堪えようとする上条だったのだが。

「無い……だと……っ!？」

無いのだ。

皿いっぱいに盛り付けられているはずの料理が、綺麗になくなっているのだ。誰なんだこれ全部喰いやがった迷惑野郎は、と上条は思うが、実は自分もそれと大差ない事をしようとしていたことは忘

れてしまったようだ

「くそう、昼時ちよつと前を狙った完璧な計画が、どこだ、どこで間違っただんだ!？」

上条がそうこう言いながら、頭を抱えていると。

「ぐちゃぐちゃうるせーんだよ。テメエしょっぴかれてえのか」

「へ？」

男性特有の低い声が後ろから聞えた。

上条はビビりながらも振り向くと、めっちゃ気だるそうにしている警備員アンチスキルの男が居た。警備をしている警備員は、常盤台中学関係

の行事のせい、それなりの装備をしているのだが、目の前に居る男は全身ジャージ姿に、取り敢えず教師っぽく見せようとしたのか、白衣という、滅茶苦茶な服装をしている。そして腕には『警備員』と汚い字で書き殴ってある腕章を着けていた。髪の毛はぼさぼさで、所々白髪が生えているのが分かる。

「あーメンドクセー。やべえよ超メンドクセーんだけど。特別手当が出るつつから警備員になったのに、基本は給料なしのボランティアって何ですか？ これはもう詐欺だよ。これ訴えたら勝てるよね。勝てるよね、ウニ頭君」

知るかボケ、と喉まで出かかった上条だが、何とか呑みこんで。

「えーと……警備員の人？」

「つたりめーだろーがボケがッ！」

「ひーっ、何なんですかこの人はーっ!？」

服装からして警備員が怪しい男に聞いてみると、何故かキレて履いていたスリッパを手に持ち、思いつき振りかぶった後、叩かれた。

スパーン、と快音を鳴らすスリッパ。

それを忌々しげに見ながら、上条は呻くように言った。

「……不幸だ？」

『上条当麻』は本日不幸である。

雨崎天葉は、手をぼん、と叩くと名案を思いついたと言わんばかりに口を開いた。

「……あ、そうだ。どうせ竜野君も一人でしょ、一緒に回る？」

目が覚めると既にインデックスの姿は無かった。話を聞き流していた事を怒ったらしい。だが、スルーしたくなるのも致し方ないだろう。あの歳で魔術がどうこう言うような魔法少女の言う事をいちいち本気で聞いていたらこちらの頭がおかしくなってしまう。ここは超能力なんていう、超常現象すら科学で証明、開発してしまう学園都市——科学の街なのだ。

つまり、だ。

魔術なんてモノはこの学園都市内ではおおそ“偶然”と呼ばれる存在と同じだ。学園都市の外なら、そういうのに惹かれる人もいるだろうが、ここ、学園都市内では深夜の怪しい通販の番組並に胡散臭いものでしかない。

確かに、魔術に憧れた時期が無いと言ったらウソになる。学園都市のような脳を開発せずに奇跡のような力を扱える。それはとても魅力的であるし、出来たらいいなとは思っていた。

まあ、それもこの学園都市に慣れてしまふと結果的に信じられなくなるのだが。

竜野の能力は“記録の上では”無能力者。目の前に居る少女、雨崎は能力抜きでも物凄い才能を持っていて強能力者。その上、人間関係も充実していて、容姿も。神様ってのはどうしてこう、不公平なパラメータの振り分けをしたんだろうか。

「どうせって……いいんだけどさ」

答えた頃には既に雨崎は、さあ行くぞーっと、歩き始めていた。断られたらどうするつもりなんだろうか。断るつもりは毛頭ないが。

答えを待たずして前へずいずい行くあたり、何となく雨崎天葉という人物の人柄や性質をあらわしているな気がする。良い意味で人を巻き込むタイプってところでいいだろう。

笑ってしまいそうになりながら、後ろから早歩きで竜野は追おうとしたところで、ちよつとした疑問を覚えた。

（……竜野君も？）

雨崎のような奴には、どこ行ったって誰かが周りに居るイメージがあつたのだが、どうやらそうではないらしい。まあ、たまたま一人で来たって可能性もあるわけだが。

「だーっ！ 不幸だーっ！」

上条当麻は絶賛不幸中だったりする。理由は一つ。

「いやー、知ってたからね。世の中上手い話なんてないってこと。決して騙された訳じゃないから、違うからね」

変な警備員おっさんに絡まれたからだ。

（さっきから何を言ってるんだこの人は……）

何度も叩かれたくはないので、大人しく話を聞いている上条だが、いい加減にしてほしいと思い始めていた頃だった。絶対酔ってるだろ、というくらい支離滅裂な言動が目立つ。何となく警備員になつたことを後悔しているのだろうとは分かるのだが、それ以上が理解できない。

「あのー、ツレを探してるんでそろそろ解放してくれませんかーっ？」

少し低姿勢になって上条は戦線離脱を謀るが。

「バッキヤローッ！ まだまだ話は続くんだよ！ んでよー、黄泉川の奴がさ、良い仕事があるっつーからやってみたらこれだよ！」

特別手当手当詐欺かつ！」

がつしい！ と肩を掴まれ失敗に終わる。

「いや、警備員なら持ち場に帰った方がよろしいのではーっと、上条さんはあなた様の事を想い言ってみるんですけど！」

「ああ！ テメエもあれか、黄泉川と同じであれか、働くじゃんよ、とか言うのか、じゃんじゃんうるせーんだよ！」

超至近距離で警備員の息を喰らい、うわー酒クセー、と顔を引き攣らせる上条。そんな上条に周囲からは可哀想に……と残念な視線が降り注ぐ。

ここまで来ると本格的に泣きなくなってくる上条当麻十五歳だった。

「くそう、今日テレビで占いのお姉さんが水瓶座の運勢は最良です、って言ってるランキング一位を飾っていたのに何故こんな目に……」

嘆きながら、上条は自身の右手へ視線をやる。

幻想殺し。

何でも、上条の右手はあらゆる異能の力を打ち消す右手らしい。

らしい、と言うのは、目が覚めた時から知識としては存在していたが、上条はその右手をまだ実際に使って異能の力を打ち消したことが無いのだ。

上条の記憶喪失、もとい記憶破壊は、少々特殊なのだ。

例えば、カレーライスは、飯の上にカレースープをかけて出来あがり、日本では人気のある料理であり辛い、という知識はあるのだが、それが『美味しいか』は実際に食べてみなければ分からない。

それと同じで、この右手についての知識はあっても経験を失っているので、イマイチ信じられない。

他にも、自身の名前は知られるまで分からなかったし、両親の名前も分からない、友人の名前も、インデックスの名前も実際に聞くまで分からなかった。自分がどんな性格なのかも分からなかった。

何も分ならず、知識だけ残り、経験は失われた。

つまり、上条は『思い出』を失ったのだ。

「おー、ここに居たじゃん」

上条が少し自身の右手について考えていると、女性の声が聞えた。

「あア？ 何だよ黄泉川かよ」

「そのあからさまに嫌な顔すんのはやめろ。さっさと持ち場に戻るじゃん」

「何だとおー！ 俺はな、今青少年の悩みを聞いてやってんだよ。」

これは警備員の仕事じゃねえ、一教師として、人生の先輩として当然の仕事だ。そしてこれは警備員の仕事より優先して行すべき事項だと俺は主張する」

何かイイコト言ってるみたいに偉そうな口ぶりだが、上条にとつては邪魔でしかなかったたので。

「この人連れてってください」

退場してもらう事にした。

「言われなくても。お、君、子萌先生の生徒（せいと）じゃん。話はよく聞いているよ、子萌先生によろしくじゃん」

引きずられていく警備員の男に内心ざまーみろ、と毒づきながら上条はいつのまにやら居なくなってしまったインデックスを探すため、歩を進める。

（俺の知っている人だったか？）

知らない名前だが、話しかけてきたという事はおそらく上条の知り合いなのだろう。ボロを出さないようにしなければ。

自分はこれから『上条当麻』を演じていくのだから。

「……あー、疲れた。寝ていい？」

「既に顔を伏せている人が言う言葉じゃないよね、それ」

生け花やシュガークラフトなどの作品を見たり、ピースで指輪を作る等の、体験教室のようなのに参加したりしながら――その度に雨崎の完璧さを思い知らされながら――寮の中を幾つか見て回って、現在は図書館に居る。さすが、常盤台中学の女子寮だ。外ではオーケションらしいのが開かれているし、ステージをするための、専用艇のような広場まである。領内にも結構な広さの図書館があり、疲れ果てた竜野は、常盤台の財力に驚かされながら、図書館について早々古めかしく見えるテーブルに突っ伏した。

雨崎のような女子が相手のせいかもしれないが、どんどん先へ行くため、落ち着く場がなかったのだ。存外、女子と二人きりというのも疲れるものだ。

「うだー、寝ます、誰に何と言われようが寝ますよ」

充分に寝たとは思っていたが、しばらく病院のベッドの上だったと言う事で体力が落ちているのかもしれない。というより、病院に運ばれて来た時には死にかけだったという体が、一週間ほどで回復してしまうのだから驚く他ない。

「それが女子とデート中の男子の行動かね」

「うっさいやい。オレは今日ようやく病院から出て来たんだよ。出てきて早々シスターさんに襲撃されたんだよ。身も心もボロボロなんだよ」

「それは……ドンマイ!」

言葉を詰まらせて、本当に困ったような顔をして言う雨崎に、気にせずにはいられねえよ、と小さく言う。

すると、外からおおーっ! という驚きにも、関心にも似た声が聞えてきた。

気になったのか、雨崎は早足で窓に寄って、身を乗り出して外を見る。そこから見えたのは、盛り上がってる様子の数十人の招待客と、寮生。

競り売りをしているようだが、聞えて来る金額はそこまで高くな

い。これなら確かに手持ちの金銭が少ない学生だとしても、気軽に参加できそうだし、面白いかもしれない。

「ん？　どうかした、雨さ——」

「下へ行こう！」

「へ？」

それだけ言うと、雨崎は竜野の手を取って、強引に席から引き剥がして走り始めた。

「いや、オレが行ってもしかた——」

「いいからいいから」

「めんどくさ——」

「いいからいいから」

その後も文句を垂れ続ける竜野だが、その表情は満更でもなさそうだったりするのだった。

暗部の影

とある路地裏では、四人の少女達がその場を支配していた。彼女らの足元には、黒服のいかにも怪しそうな男達が転がっている。これは、彼女らが立ち入った路地裏に倒れていたのではなく、彼女らが立ち入り、完膚なきまでに叩き潰され地を這わせられているのだ。背丈からして十二歳くらいに見える、フードを深くかぶった少女は、拳を握り路地裏の壁にぶつけていた。そんな事をしても、普通なら少女が拳を痛めるだけなのだが、その拳に傷は無く、むしろ壁にめり込んでいる。

「今回も超楽勝でしたね」

そのすぐ斜め後ろで、金髪碧眼の少女がその場に合わない、可愛らしい人形をぶら下げながら言った。

「結局、どんなに数を揃えても雑魚は雑魚な訳よ」

路地裏のど真ん中には、肩の辺りで綺麗に切りそろえられた黒髪の少女が、ピンクのジャージ姿で、ブーツと突っ立っている。この場に居ても、ボーっとしているせいか、何か変な電波でも受信しているのではないだろうかとすら疑われる。

そして、最後の一人。

ぱんぱん、と手を叩きながらお嬢様のような気品を漂わせている少女が口を開いた。

「はいはい静かに。次の『仕事』が入ったわよ」

彼女の声に応じて、それぞれの視線が彼女一人に向けて集まった。どうやら彼女は、この集団の中でのリーダーの役をしているのかもしれない。

「またですか。これで超連戦ですよ、この後映画を見に行く予定だったんですけどね」

フードを深くかぶった少女は、握った拳を何かを確かめるように開閉して、言う。

「何とかならないの、麦野。ねえ、滝壺？」

彼女の密かな反論に続き、金髪碧眼の少女はピンクのジャージ姿の少女に賛同を求めるように問う。

「……どっちでもいいかも」

滝壺と呼ばれたジャージ姿の少女は問いかけに対し、何を考えていたのか分からない間のあと、賛否のどちらでもない答えを返す。

「文句言わない、この『仕事』終わったらご飯連れてってあげるから」

リーダーであると思われる麦野が、それだけ言々と、反論を述べていた二人は、即座に真剣な表情に切り替わり、短く言った。

「で、内容は？」

どうやら麦野は彼女らの制御の仕方を心得ているようだ。

二人の反応に対してか、これからこなす仕事を楽しもうとしているのか、麦野は笑みを浮かべて言った。

「とある人物を攫う。ただそれだけの簡単な仕事よ」

彼女ら集団は、警備員や風紀委員のように学園都市に正式に認められた集団ではない。学園都市の裏側の組織、言うならば暗部。彼女らは学園都市に潜む多くの暗部組織の一つ『アイテム』

『アイテム』は今日も学園都市の闇を駆ける。

「どうしたんですか、佐天さん？ ぼーっとして」

「……え！？ あ、何でもない、何でもないよ初春」

佐天涙子と初春飾利と、固法美偉は競り売りの会場に居た。偶然立ち寄ったのだが、そこで固法美偉がにやけ顔でブランド物のバッグを勝ち取っているのを見て、話していただけなので、二人は参加はしていない。

三人で話していたのだが、いつの間にか佐天が喋らなくなってい

たので、初春がはなしかけたとこだったりする。

何でもないとは言ったが、佐天には少し気になる事があった。

それは、とある少年にまだお礼を言っていないことだった。

お礼、というのは、もちろん幻想御手事件の時のことである。あの事件は、御坂美琴が解決したことになっている。化け物を倒したのも、御坂美琴。

確かに、あの事件の時に居た人物の立場からすれば、彼女しか考えられないのだが、どうも佐天には納得がいかないのだ。

気になって、幻想御手を使って倒れた友人にも聞いてみたところ、佐天と同じで、何となく納得いかないらしい。

まあ、佐天にしろ友人たちにしろ、何となく、なのだが。

彼はしばらく入院していたから、いつでも感謝の言葉を届ける機会があったのだが、行けなかった。

病室で二人きりになった場合、どう話を切り出そうか悩んでいる内に日が過ぎて、気付けば今日にまでなって、退院してしまった。

だが、今日。

盛夏祭という、お礼を言うには丁度いい機会がある。これを一緒に回ってその際お礼を言えればいい。

そう、思っていた。

だが、よくよく考えると、御坂美琴が招待券をあげたとは言っていたが、一緒に回るとまで約束していなかった事に気付く。常盤台寮内を回っているうちにも彼の姿を探しはしたが、見つからない。

あの少年は別に礼などいらないと言うかもしれないが、こちらとしては重要なことなので、真剣に考えていたところ、初春に声をかけられたのだ。

何でもないといった理由は簡単で、少年の事を考えていたと言うのは、何か恥ずかしかったから。

もやもやした気持ちを抱えたままのせいか、あまり盛夏祭を楽しめてないような気もするし。

「……はあ」

佐天は本日何度目かの溜め息を吐くと同時に。

「一万円ッ!!」

「……え?」

その場の三人が同じように驚いた。実はそれも当然で、つい先ほど固法の口から、比較的安い値でも参加できると聞いていたので、そのやけに気合の入った声に驚くのは、当然のリアクションと言えるだろう。

しかも、現在競り売りの対象となっている商品はキルグマーの文具セットで、普通に文具店に行けば今声のあがった一割の金銭があれば充分だろう。

もちろんそんな高額な金を払って文具セットを買おうとする人の顔を見てみたくなる訳で、三人は手を上げている人物に視線を移動させる。

そこに居たのは、今から戦場にも赴くのかってほど得体の知れない緊張感を周囲に捲き散らす白井黒子だった。人ごみの中に居るのと、遠巻きから見ているので顔は確認できないが、あの茶髪のツインテールは彼女に違いないだろう。現在ステージに向かって歩きながら周りを威圧しているところだ。

「一体何をやってるのよあの子は……」

「白井さん、目が血走っていきそうですね」

「ははは、目に浮かぶ」

大抵黒子が奇行にはしるときは御坂美琴関連の事であることから考えて、あの文具セットは美琴が出品したのではないだろうかと思される。というよりはば確定だ。

よくやるなー、と佐天は他人事のように、遠目で黒子とその周りを見ていると、意外な人物を視界に捉えた。

（……って竜野さん!?）

見つけた。

驚きのせいで、少し声が出てしまい口を押さえながら、佐天は黒子と対峙している少女の傍で、人ごみに混じっている竜野の姿を改

めてしっかりと確認する。

「佐天さん、いつになくニヤついてて気持ち悪いですよ」

「うるさいっ」

「はうわっ!？　しゃてんしゃん、にやにするんでしゅか!」

初春に言われて始めて自分の顔が歪んでいることに気付き、恥ずかしさで顔が赤くなるのを隠すために初春の頬を引っ張る。

固法はそのすぐ横で、オークションで手に入れたブランド物のバッグを見てニヤついていた。

一見するだけだと、堅物委員長キャラのイメージがある固法だが、この姿を見ると何とも言えない。

「一万円ッ!」

雨崎にオークション会場まで連れて——半ば強制だったが——こられた竜野は、人ごみの中から聞いた鬼気迫るような、妙に威圧的な声に身震いさせた。

その隣では、誰かの一万円発言前に、五百円、と声を上げた雨崎がおもしろくなさそうな顔をしている。

「文具セツトに一万て……」

もし裕福さを自慢しているのなら、その余裕の分こちらに分けて欲しい物である。まあ、声が本気だったので、よほどあの文具セツトが欲しかったのだろう。

隣でおもしろくなさそうにしている雨崎には悪いが、彼女は面白そうだから参加しようかなー、くらいの気分で参加した奴が、本気でその品を狙ってる奴の邪魔をしてしまうのはその人が可哀想なので、一言言っただけの品を狙わせるように説得に出る事にする。

「諦めよう雨崎、別に本当に欲しい訳じゃないんだろ、だったら——」

「一百万円ッ!」

「いや聞けよ」

どうやら彼女は、自分の思い通りに事が運ばないのは気に入らないようだ。いや、違うか。普段何でもこなしてしまうから、思い通りにいかない事には本気で熱中しているようにも見える。

どちらにしろ、負けず嫌いであることは間違いないだろう。

「一万二百ッー!!」

「一万三百ッー!!」

「一万四百ッー!!」

よく頑張るなー、と竜野は雨崎とその名前も知らぬ相手を賞賛する。こんだけ張り合うのは、一体どんな奴なんだ、と少し気になったので見てみると。

「……白井？」

そこには白井黒子が鬼気迫るような険しい表情で声を張り上げていた。眼球を全開にして、拳手するその姿は、誰がどう見ても変人である。言うまでも無く、周りの参加者は退いていき、雨崎と白井の一騎打ちのような形になった。

数秒の間の後、キルグマーの文具セットは、三万円という、まさかの高額で売れた。もちろん勝ちとったのは白井黒子で、招待客に常盤台のお嬢様の経済力を見せつける事になった（決して良い意味では無い）。余談だが、比較的低い金銭でも参加でき、ブランド品も低額で手に入れることが可能なこのオークションでは、キルグマーの文具セットが最高額を記録したらしい。

「しかし、貴方がわたくし達の知らない異性と、しかも二人で居るとは……少々竜野さんの認識を改めなくてはいけないようです」

黒子は、オークションで手に入れた、美琴が出品したらしいキルグマーの文具セットを大事そうに抱えながら言った。

文具セットで三万も儲かるなら、竜野だって出品しただろうに。

「それはオレの交友関係が狭いと思っていたのか、女子との交流などありえないと思っていたのか、どっち？ 正直に答える。拳骨一発で済ませてやるから」

「……いいんですの？ 自分のヘタレっぷりを知ることになりますわよ」

そう言っ、一瞬の沈黙の後、白井は竜野の正面に立って、手を両手で持つと、真正面から結構な近距離に顔を寄せる。それから、特別なアクションをとるわけでもなく、ただじっと見つめるだけだった。

「……ッ！」

数秒、沈黙の時間が続いたが、竜野は黒子からの意図がまったく読み取れない視線に耐えられず、思わず顔をそらす。その顔は少し赤くなっているように見える。この程度のこと、ギクシヤクしてしまうようでは、とてもじゃないが異性と上手くいくとは思えない。概ね予想通りのヘタレだ。

「そういう事ですよ。ああ、お連れの方に自己紹介はまだでしたわ」「？」

竜野が顔をそらすと、自身の予想通りだったのか、僅かに笑みを作りながら、雨崎へと向き直る。竜野は意味が分からず首を傾げている。

「常盤台中学一年の白井黒子ですわ」

特に変わったことをしている訳でもないのだが、黒子はやはりお嬢様だったと言う事だろう、自己紹介一つでも気品を感じさせるのだ。お嬢様言葉のせいかもしれないが。

完全に蚊帳の外になっていたせいか、雨崎は少々不機嫌そうな顔をしていたが、黒子から自己紹介すると、即社交的な笑みに切り替わる。

「柵川中学三年の雨崎天葉よ。彼……竜野君のクラスメイトやります」

「やっぱりご友人でしたの。まあ、あの方に限って彼女なんてものが居るとは思いませんでしたか……」

黒子は、雨崎と正面に向き合って話しながら、竜野を横目に見る。「どうかした？」

「いえいえ、彼はクラスの中でもあんな感じなんですか？」

「え？」

「お姉様から聞いた話も多くあったり、風紀委員の通報でよく竜野さんを見るんですの。主に不良との喧嘩で」

お姉様こと、美琴曰く『困ってる奴が居たら、そいつを全力で助けに行つて、その原因を何とかしていくバカ』とのことだ。これだけ聞くと、悪行を行う者を懲らしめるヒーローのように聞こえるが、実はそうでもないことを黒子は知っている。

いつの日だったか、風紀委員の通報で駆け付けると、そこには竜野が裏路地を上手く使つて、不意打ちのようなやり方で倒している姿があった。まあ、そもそも真正面から多人数とやるのに無理があるためそこら辺は目を瞑るとして、始めて彼を見た印象は『弱そう』だった。

被害者にしろ加害者にしろ、喧嘩は喧嘩なので、竜野を連行した黒子が見たのは、震えている姿だった。勝利したと言うのに、まだ手も足も震えていて、正直に言わせてもらつと、情けない、と思った。

きつと彼は、美琴が思っている程強くは無いのだと推測する。單純に怖いなら、自分の体が傷付くのが怖いのなら逃げればいいだけ。彼は風紀委員でもないのだから、むしろ守られる側の立場なのだし。それでも彼が動くのは、誰にでもある、普段は恥ずかしくて、見せびらかす必要もないくらいの、正義感、勇氣。おそらくは、たったそれだけのものが、土壇場で、目の前の見て見ぬふりをしてしまえば自分が傷付く事は無いような事に向かつて、彼を突き動かしているのではないだろうか。

だが、それでも彼をただの一般人として認識することは黒子には

出来そうもない。何たって、超電磁砲御坂美琴の電撃を受けて、今も生きている人間でもあるのだから。

結局、確認したいのは、どっちが竜野の姿であるか、ということだ。

黒子が実際に見た、震えて怯えながらも、自身の僅かな勇氣と正義感を振り絞って立ち上がる、人間くさい人物なのか。

美琴が語る、美琴の電撃を防ぎ切り、先日起きた、幻想御手事件に出現したという化け物を、勇敢である意味残酷に、ヒーローのよう倒してしまう気味の悪い人物なのか。

「んー、どうって言われてもね、竜野君とは今日までそんなに交流無かったし、そもそも今日ここで会ったのも実は偶然だし」

「そう、なんですの？」

黒子はがくつと肩を落とす。彼女彼氏の関係では無いにしろ、盛夏祭に二人で来ているような仲なのだから、てつきり友人以上恋人未満くらいの関係は築いていると予想していたのだが、どうやら違うらしい。

「けど……」

雨崎は、少し離れたところで未だにさっきの黒子の行動を不思議がっている竜野を見て、続ける。

「喧嘩なんてするようには見えないけどなあ。助ける側だとしても、どんな理由でも」

「どうしてそう思うんですの？」

「印象としては普通、だよな、彼。運動にしても勉強にしてもそこまで出来る訳では無かった気がするし正直喧嘩とかしても即効負けそう」

黒子から見ても、印象は正義感バリバリの熱血主人公という訳ではない。揉め事の際は少しその気が見えるが、普段はむしろ少しだらしないイメージがある。

雨崎は、空を見上げながら、考えるように人差し指を顎の辺りにあてて、しばらくすると、何かを思い出したように手をぼん、と叩

いた。

「あ、そう言えばこんな話知ってる？　一時柵川中の一部で噂になつてたんだよね、竜野勇輔の能力は特殊な物で、その事実が洩れるのを防ぐために無能力者認定を受けているって」

「もつと、具体的なものはありませんの？」

「都市伝説の多重能力者説とかが有力だったかな。測定する度に能力が変わって、その強度、種類全てがばらばらっていう。最近是不発らしいけどね」

「それは……初耳ですわ」

それは興味深いことを聞いた、と思つた黒子は一つ、今の言葉に疑問を覚えた。測定する度に能力が変わるのは、噂である多重能力者で、不本意ながらも納得できるとしよう。だが、最近是不発とはどういうことだろうか。

パーソナルリアリティ

（『自分だけの現実』を把握しきれていない？　もしかして、ただそれだけの話でしたの？）

推測されるのはそれくらいだ。残る可能性として、AIM拡散力場に干渉する能力の可能性があるが、それなら学園都市はまず放っておかない。

佐天や初春、目の前に居る雨崎には悪いが、『AIM拡散力場干渉系』の能力者は、まず柵川中に置かれるなんてことは無いと思う。率先して能力の開発が行われるはずだ。

良い環境を整えて、常盤台クラスの設備の学校にはならなくても、それなり以上の設備の学校への入学を薦められるだろう。

だが、自分だけの現実の把握が出来ていないだけなのなら、能力の種類が変わるといふのはおかしい。

強度が不安定なのは有り得る事かも知れないが、能力そのものが変わることは有り得ない。

つまり、だ。

「つまり……どういふことですか？」

「本人に聞いたら？」

「その本人もイマイチ理解できてないようなんです」

白井黒子と雨崎天葉は竜野を見る。いつの間にか、初春や佐天、固法まで来ていたようで、そこそこに盛り上がっているようである。人に囲まれて、話している竜野のその姿からは、拳を握って戦う彼の姿など、まるで想像もできない。

「何なん（でしょうね）だろうね。竜野（さん）君って」

「さすが常盤台中学！　って感じてしたよー。竜野さんはもう回ったんですか？」

竜野の目の前では、憧れのお嬢様たちを実際に見たせいか、普段の初春からでは想像の出来ないハイテンションで物語り終えた所で、ようやく落ち着いた所だ。

ついさっき、何か和風メイドとか言って、洋風なのか和風なのかよく分からない服を着た、何か勘違いしてる高飛車系お嬢様が居たのだが、危機は去った。

あのお嬢様と会った感想は、実に訳が分からなかった。

二人、常盤台中学の生徒を連れていたが、その二人は割と常識人なようで、高飛車系和服メイド着装お嬢様を気にして恥ずかしがっていた。まあ、一人は美琴を探しているようで、美琴の話をするとき恍惚としていたので黒子のような、百合の気があるのかもしれない。おそろべし常盤台中学である。彼女がノーマルのままで居られることを祈ろう。

「うん、同じクラスの雨崎天葉って奴と一緒に……」

「どんな方なんですか？」

「えっと……あそこに居る奴」

言いながら、竜野は雨崎と黒子の二人が話しているところに視線

をやる。

竜野の視線の先を二人は追う。固法にとってはどうでもいいのか、手に入れたバッグを見て顔を綻ばせている。

「……えーと、竜野さんの言ってる雨崎さんって、あの白井さんと話している人ですか？」

「うん」

「「……えーっ！？」」

しばらくの沈黙の後、二人とも似たような顔をして驚いた。信じられない、とでも言うような顔をして佐天が口を開いた。

「あ、あの可愛い人がですか！？　もしかして……竜野さんの……彼女さんだったり？」

「……え？」

そんな不安そうな顔をして聞かれても困るんだけど、というより、そんなに意外なのだろうか。

「どうなんですか？」

興味津津と言ったように初春も、瞳を輝かせて詰め寄って来た。

「どうって言われても、雨崎とは偶然会って、一緒に回ってただけだし——」

「嘘じゃないですよね!？」

「嘘じゃないよ……それに」

「「それに？」」

竜野は雨崎と自分を交互に一回ずつ指差して。

「どう見ても釣り合わくない？」

「確かに……」

佐天は眉をひそめて、まるで難問でも解いているかのように、深く考えるような表情をする。

「何よりも説得力のある言葉ですね」

「自分で言っておいてなんだけど、何気に酷い事言うよね初春っ!？」

佐天に続けるように言った初春の言葉に衝撃を受けた竜野は初春

の表情から、本気で言っている事を読み取り、さらに衝撃を受けたのだった。

「まあ彼女さんじゃなかったんらしいんです！ それより知ってます？ 御坂さんが何かサプライズをしてくれるそうなんですよ」

「そ、そうなんです！ 常盤台のお嬢様のサプライズ……。きつと何か素晴らしいことに違いありませんよ！ そう思いますよね竜野さん！」

「別にお嬢様だからって何か特別なことがあるって訳じゃないんじゃない……」

「そうですねー、やっぱり楽しみですよね、竜野さんも」

「ダメだ！ この子お嬢様が関わりと暴走するうーっ!？」

頭の上と同様に、頭の中までお花畑になってしまった初春は、友人である佐天ですら止められないのだから、竜野が止められるわけが無かったのであった。

「くそう、インデックスが見つからねえ」

上条当麻は、自分のツンツン頭を困ったような顔をして掻きむしりながら、常盤台中学女子寮敷地内を歩いていた。何に困っているのかは、上条から半ば投げやりに吐かれた言葉の通り、気付いた時から同居人であった、はらぺこシスターインデックスを探してるところだった。

彼女とは盛夏祭に訪れてしばらくしてはぐれてしまい、今までずっと探していたのだが、まったく見つからないのだ。

（これもまたある種の不幸……か？）

まあ、あの変な警備員に絡まれた時点で上条の不幸は決定だろう。そう思い、もはや口癖になってしまった言葉を吐くことにする。

「はあ、不幸だ……」

一通り常盤台中学女子寮の建物の中を回ってインデックスを探したのだが、見つからなかったので、建物の周りを探すことにしたのだ。

が。

「ここは一体どこだ？」

いやはや、迷子のインデックスを探して歩き回っていたのに、自分もどこに居るか分からなくなるとは。困り果てたように歩いていると、一人の少女が見えた。

茶髪のショートカットの少女は、他の寮生のようなメイド服も、常盤台の制服も着てはいなかったが纏う雰囲気のようなものから常盤台のお嬢様なんだろうな、と上条は思う。

高そうな服装をしているが、落ち着かない様子である。

だが、上条としては助かった。インデックスについて、何か聞けるかもしれないと思い声をかけてみることにする。

「あのー、すみません……」

「え……？ あれ、アンタ……」

（げっ！？ やべ、知り合いだったのか？）

「あー、そうそうあの時の。名前なんだったっけ？」

茶髪の少女は、上条のことを知っているようだが、名前を知らないことから、そこまで仲が良い訳では無いのだろうと思い、それらしく名乗ることにする。

「俺は上条当麻。そっちは？」

「御坂美琴よ。名前くらいは聞いたことあるんじゃない？」

そう聞かれて、上条はどう答えるべきか迷う。もしかして学園都市では有名な名前かもしれないからだ。もし誰でも知っているような名前なら、知っていなければ怪しまれるかもしれない。

だが、知らないというのは誤魔化しが効かないので、そのままを答えることにする。

「いや、知らなかったんだけど……」

「ふーん。で、何か用があったんでしょ。言ってみ？」

彼女にとって自分の名前を知っているかなどはどうでもよかったようで、上条は少し安堵するが、本来の目的を思い出し、口を開く。「人を探してるんだけど……えーと、身長はこれくらいで、銀色の長髪でシスターみたいな格好をしてるんだけど」

上条は自分の手を、胸の高さ辺りで上下させて説明する。

「ん——……知らないわね。そんな恰好してるんだったら、一回見たら忘れないだろうし」

「そっか。ありがとな」

「こっちこそ、力になれなくて悪いわね」

たったそれだけ言って、二人は別れた。

美琴は、上条が立ち去って行ったあとに気付く。

実は、周りから変な期待を持たれてしまったせいで、かなりテンパっていたのだが、いつの間にかそれはなくなり、気持ちがずっと楽になっていた。

変な奴、と美琴は僅かに笑みを浮かべながら、ヴァイオリンを手に取りステージへと向かった。

「しかし、まあ御坂にヴァイオリンなんていうお嬢様スキルがあるとは知らなかったよ」

「何よそれ、じゃあアンタは普段は私が不良少女にでも見えてるわけ？」

「いや、純粹にすげーと思ったよ、本当に」

竜野は心からそう思う。竜野自身は詳しい音楽知識などはないが、素人でも凄いと感ずるほどだったし、聞き入っていたのだから。

竜野の言葉が信用できないなら、それは黒子が証明してくれるだろう。演奏する美琴を撮るために、いつも通り変態っぽくカメラを構えていた黒子だが、演奏中は、時間が止まってしまったかのよう

に動きが止まって、カメラは一度もシャッターを切ることはなかったほどのだから。

この場合、音楽じゃなく美琴に見とれていただけの可能性もあるが、黒子はそのままで変態じゃない事を祈りたい。

かくいう竜野はじめは茶化してやろうかな、と思っていたがいざ演奏が始まると、そんな事は忘れてしまっていたのだが。

現在は日も傾いており、盛夏祭も終わって、いつもの四人組と竜野と雨崎、固法の七人で女子寮の前に居る。

「じゃあ私達はこれで」

「今日は楽しかったです。本当にご招待ありがとうございます白井さん」

「楽しんでいただけたのなら光栄ですの」

固法が言くと、佐天と初春も七人の輪から外れて、四人となった。

「じゃあオレも帰るか。雨崎は？ よかったら送ってくけど」

「んー……別にいいよ、竜野君が着いて来たいのなら構わないけど」

悪戯っぽい笑みを浮かべて雨崎は言う。その横で黒子はあらら、と嘲るように言って、その隣的美琴は竜野の発言次第では電撃をぶつけることも止む無い、という表情で見ている。

「そーゆー言い方すんならいいや、じゃあなー」

手をぶらぶらと振ると、雨崎らに背を向けて、同じ方角に寮がある佐天達の跡を追うように去って行った。

「じゃ、私もこれで。ありがとねー白井さん。オークションは楽しかったよ」

にこにここと、笑顔で手を振って別れの言葉を放つと早々にその場を離れる。

「元気な人ね」

「ええ、また会ってお話するのが楽しみですわ」

雨崎を見ながら二人は寮の中に戻り、雨崎もまたそれを見て、もう一度別れの言葉を口にした。

「ばいばい」

雨崎が呟くように言ったその声は誰に言ったのかも分からないまま、誰にも届くことななかった。

表と裏の接触

竜野勇輔は、携帯電話片手に真剣な表情をして、学園都市を歩いていた。

今日は、朝目覚めるといつも通りコンビニで買える適当な物を朝食にして、やる気も無いのに夏休みの宿題をテーブルの上に出してみたりしていた。そうやって無駄な時間を過ごしている時、携帯電話が音を鳴らしたのだ。

開いてみると佐天からの呼び出しで、他にやる事も無かったので現在歩き回って佐天探索中だ。

（セブンスミスト付近って、言われてもな……）

竜野は困まり果てた顔で、目の前の人ばかりを見る。なんたつて今は夏休みなのだ。学園都市の総人口の八割が学生の学園都市は平日の昼こそ通行人が一気に消え失せるが、休日には溢れかえるのは当然の話で、特にセブンスミストの辺りは人が集まりやすい。

竜野は携帯電話で「まったく佐天の姿が見当たらないんだけど」と打ってメールを送る。そして携帯電話を閉じようとすると、すぐ携帯電話が鳴った。

「って、早いなおい」

メールを見ると同時に、画面が学園都市の地図に変わった。一瞬ぶっ壊れたかと思ったが、すぐに佐天から送られて来た位置情報だと気付く。

ちなみに情報は、個人情報が第三者に渡るのを防ぐため、三十分毎に新しいものに変わる。

相手がどこに居るか地図まであって三十分もかかるとは思わなかったが、また位置情報を貰うのは面倒くさいし、通信料が高くなるので、竜野は少し早足で探すことに決める。

かなり細かく相手の位置が分かるようで、画面の示す通りに見てみると人だかりの向こう側に、佐天を見つけた。割と近い。

（これなら別にしなくてもよかったんじゃ……）

携帯電話の画面を恨めしく見て、GPS関連を使うのは控えよう
と思いながら、雑踏を避けて佐天の元まで辿り着く。

「お、竜野さん。ちゃんと見つ付けてくれたんですね」

「ちーす、と軽い挨拶をお互い交わしてから。」

「ここに来るだけで結構疲れたけどな。……てゆーか、待ち合わせ
ならこんな所じゃなく、どっちかの寮の前でよかったんじゃ？」

「こういうのは雰囲気作りが重要なんですよ」

「んー、よく分かんないけどそんなもん？」

「そういうものです！」

佐天はちよつとむきになったように言ってから。

「じゃ、行きましょー」

「おー」

取り敢えず気の入っていない返事をしてから、どこに？ と思い
つつ竜野は佐天と歩き出した。

とある暗部組織のメンバーの一人である見た目十二歳くらいの少
女、絹旗最愛は、溜め息を吐いて肩を落とした。
しくじった。

彼女のチームが請け負っていた仕事は簡単に言えば、人攫いであ
る。標的を殺さずに依頼主のもとに届けるのが今回の『依頼』だっ
た。標的が再生能力系と聞いて、楽勝だと高を括っていた。

理由は簡単で『肉体再生』を持つ能力者は非常に珍しく、貴重な
種類の能力なのだ。それ故か、強度^{レベル}の高い能力者は少なく、最上位
に位置するのは強能力者だと聞いている。

『肉体再生』は文字通り、肉体の損傷を回復させる能力。逆に言
えば、その程度の能力でしかない。仮に、大能力者や超能力者が現
れようものなら、十八禁もののグロテスクな再生をみせてくれるだ

ろうが。

つまり、強能力者以下となると直接的な戦闘能力は無いに等しいのだ。強能力者でも、軽度の切り傷や打撲だったら即座に回復させられるので、日常生活では多少便利かもしれないが。

だが、実際に追跡して思った。

アレは本当に強能力者なんていう雑魚だったのか、と。

絹旗の仲間であるフレンダの爆弾で足を使わせなくする程度の火傷を負わせたはずなのに、すぐさま立ちあがって逃走。最初こそ足を引きずっていたが、立ちあがって数分で再生したようで、皮膚までもが元通り。絹旗は『肉体再生』については詳しくは無いが、再生を直接見ると、どちらがバケモノなのか分からなくなってしまっただった。

フレンダの爆弾は、殺さない程度の殺傷力にしていたためあまり効果を発揮せず、絹旗のチームのリーダーであるむぎのしずり麦野沈利の能力は、当たれば高確率で死ぬので、威嚇程度。絹旗には『オフエンスアーマー窒素装甲』があるが、近接戦闘に特化しているので逃げられ続けると、他の援護がなければ相手を捕えるのは一気に難易度が跳ね上がる。

AIM拡散力場干渉系の『AIMストーカー能力追跡』を持つたきつぼり滝壺理后はこの手のことで真価を発揮するが、その能力を発揮するのには『クリスタル体晶』という意図的に能力者を暴走させる薬品を使わなくてはならないので、高負荷がかかる前に決着をつけるのがベターであり、必要以上に負荷をかければ滝壺が壊れる。

つまり、今回の追跡戦は相性が悪かったのと、こちらの見通しの甘さで失敗した。

それに向こうも中々頭が回るようで、なるべく人が多い場所を選び、こちらを動きにくくしている。夏休みの為、朝から夕方にかけては学生たちがそこら中に溢れているのもあって、こちらは手を出せず、日中監視してるのも馬鹿らしいので、交代制で動きを見張り、基本的には夜間に捕える方針に切り替えた。

まあプラスに考えれば、休日ができたということになるのだが。

最近は何故か仕事が増え、ろくな休憩時間が無かったので絹旗としては大助かりと言う訳だ。そういう訳で、絹旗は現在趣味のB、C級映画鑑賞に来ている。

映画のタイトルから外れっぽい予感しかしなが、絹旗は特に気にせず席へと座る。映画のタイトルからアレなので、映画館内はガラガラで、僅かに居る、珍しい趣味を持った来場客は自由に席を選んで座っているようだ。

絹旗は中央の席を一人で陣取っていると、男女のカップルのような二人が絹旗と同じ列の席にやって来た。絹旗は特に気にすることなく、手にしたポップコーンを口に頼り込んでいると、肩の辺りを軽く叩かれた。

自分の時間を邪魔されているような感じがして、少し苛立ちながら絹旗は席から見上げると、二人組の男の方が話しかけてきた。男に違いはないが、表現としては少年の方が合ってるか。背丈からして絹旗より二つ三つほど年上と推測できる。寝癖なのか、頭のとっぺんの髪が立ってアホ毛のようになっている。

「隣座つてもいいかな？」

「ナンパなら超お断りです。それより彼女を放っておいていいんですか？」

「いや、そういうんではないんだけど……どっちの意味においてもほら、君の席真ん中よりじゃん。できればオレらもーって、それだけなんだけど」

それなら他の列を選べよ、と絹旗は思うが少年の方も口調には気をつけているし、邪魔さえしないのならいいか、と思い許可することにする。

「構わないですけど……暗いからってイチヤイチャすんのはやめてくださいよ。超腹立ちますんで」

「だから、そういう仲じゃね……ないって」

絹旗の隣の席に、腰をおろした少年は一瞬素の口調を出す、初対面の相手なのを気にしているのか言い直した。

「あと口調は丁寧にしないでいいです、超似合ってますから」

絹旗の言葉に、少年は苦笑いをする。だが、絹旗としては別に本当に敬っているわけでもないのに下手に出られる方がムカつくのだ。
「あー、そう？」

「そうです。それよりツレの方の相手をしてください。こっちが超困ります」

何で、とても言いいたげな顔を少年はするが、少年の連れている少女が物凄い嫌な物を見る目で絹旗を見てくるのだ、こちらが何でと言いたいくらいだ。それに、話しかけてきたのは少年の方からだというのに。

絹旗が、出そうになる溜息を呑みこむと同時に場内が暗くなって、大画面が明るくなった。

（ん？）

絹旗の頭の中で、何かが引つかかった。あの少年は絹旗に触れた？ だが、絹旗はすぐにその考えを有り得ないと首を振って否定し、打ち消す。

（そんな事は超有り得ないはず……）

何たつて絹旗には『オフエンスアーマー窒素装甲』があるのだ。例え不意打ちで銃を撃たれても自動で無意識に防ぐ、窒素の装甲が。

もし、仮にあの時少年がナイフを突き刺そうとしていたら、ナイフの方がひしゃげるだろう、そんな能力なのだ、絹旗の『窒素装甲』は。

つまり、絹旗が意識して能力を解かない限り、直接触れることはありえないのだ。

何かの力で突破したのだとしても、普段なら纏った窒素に触れた時点で気付くはず。

とにかく、絹旗が『窒素装甲』を解いていた、ということはないとだけ今は言える。

そして、学園都市の裏側の住人であり、いつ狙われるような事があってもおかしくはない絹旗は、『窒素装甲』を解くことはない。

解くメリットなど一切ないからだ。

（ま、まあ彼自身、超悪意があつてやった訳ではなさそうですし……）

気にするべきではない、か。

（……………って、超気になる！）

映画が終わると、絹旗は隣の席に座る少年に話しかけてみることにした。

「絹旗最愛です。同じC級映画観賞趣味者同士、超仲良く連絡先交換はどうですか？」

絹旗が名乗ると、二人は驚いたような顔をして固まってしまった。絹旗も口にしてから、しまった、と気付いた。明らかに映画を観る前と態度が違つし、その言葉に至るまでの経緯がまるで見当たらない。

今の発言はいきなり過ぎた。絹旗は自分の中で、今は映画を観た後の妙なテンションのせいということにしておく。それを目の前の二人がどう思つかは分からないが。

意外なことに、少年は驚きそうな顔はしたものの、一切嫌そうな顔をせずに携帯電話を差し出した。手早く連絡先の交換を済ませて、少年に携帯電話を返すと、少年は右手を差し出してきた。

「オレは竜野勇輔。よろしく」

「あたしは佐天涙子です」

学園都市の裏側に居るせい、か、好意で出してきたくている手にも、反射的に身構えてしまえそうになるのを何とか堪える。

本当に『窒素装甲』が効かないのか試すために、敢えて能力を解かず握手を交わした。すると、肌と肌が触れ合う感覚を絹旗は手に感じた。

当然のことなのに、絹旗はそれだけで、らしくないが感銘を受けた。

学園都市の闇に浸かってきた絹旗には、もうそうは感じることはできないであろう光の側の人間にしかない温もり。

そして少年——竜野とは、能力のことを考えなくとも触れることができる。彼は絹旗の能力を破るが、この関係である限り脅威になることはない。そして彼らは絹旗が闇に浸かっていることを知らない、闇の人間という前提の無い対等な関係。それは、絹旗にとって何にも換え難い、そして間違いなく光だった。

そこで、絹旗の携帯電話が鳴った。

メールの着信音だったが、内容は見ずとも分かった。時間だ。

予定より早まったが、標的を追跡する時間が来たようだ。闇に戻る、時間が訪れたのだ。

「携帯、鳴ってますよ」

少女——佐天の方は、初対面相手のせいか未だに丁寧語を使ってくるが、仕方が無いか。

「いえ、内容は見なくても超大丈夫です。では、私は用事があるんで超行ってきます」

「そっか、またな」

「さよならー」

絹旗は別れの言葉を交わすと映画館を早足で出た。携帯電話を開いてメールを確認して、指定された場所へ歩を進める。

（一体何を考えてるんでしょね私は……）

いまさら光との繋がりを求めるなんて、でも。

光というのは、こんなにも心地の良いものだったのか。

日が傾き、夕陽が西の空を茜色に染まる頃、雨崎天葉は、路地裏

の汚い通路を駆けていた。ガラの悪い連中から逃れるためでは無く、ここ最近雨崎を追う者と決着をつけるためだ。そのために、敢えて人目のつかない場所を選んだ。夏休み前から始まり、一昨日までは武装無能力集団らし連中が追ってだったが、昨日から急に四人の少女の集団が追ってになっていた。もしかしたら、雨崎を引き戻しに来たのかもしれない。あの、忌々しい研究所に。

雨崎が親に捨てられ『置き去り』だった時、拾ってくれたのが、置き去り養護施設だった。拾ってくれた人達は皆優しそうな顔をして雨崎を歓迎し、施設に入った瞬間、人が変わったように狂氣的で、それこそ実験の為の道具としか見てないような目に変わっていた。つまり、置き去り養護施設とは名ばかりの、置き去りを使った、非人道的な実験所だったということだ。

雨崎には何らかの素養があったらしく、殺される事はなかったが、何らかの薬品を服用させられ能力が暴走して死ぬような思いをしたことはある。その際は、雨崎自身信じられない『再生』をしたらしく、気がつけば肉体的損傷は全てなくなっていて、血を失い過ぎて貧血状態になっていただけだった。

施設での生活は恐怖でしかなかった。同じ部屋に居た『置き去り』は日に日に数を減らしていった。そんな中、雨崎に話をかけてきた少女がいた。

「ねえねえ、あなたも殺されないの？」

不思議な少女だった。周りで同じ『置き去り』が死んで行くのを何にも感じていないようにも見えた。

「あなたの名前は？」

「雨崎天葉。あなたは？」

荒幡玲水。

それが彼女の名前だった。

荒幡は、いきなりこう言ったのだ。

「ここから出たい？」

まだ小学生の低学年だった雨崎は特に深く考えずに、首を縦に振った。しかし、だからと言って彼女は何かをしてくれる訳でもなく、その日が過ぎた。

翌日、血生臭い強烈な臭いで雨崎は目を覚ました。いつもなら鍵が閉められ、逃走できなくなっている部屋のドアが壊されていた。周りを見渡しても誰も居なかったのだとにかく、雨崎はこれはチャンスだと、思い切って外へ駆け出た。

すると、足が何かどろどろとしたモノに浸かるのを感じた。おそろおそろ足元を見ると、そこには昨日まで雨崎たち『置き去り』を玩具のように見て、扱い、殺してきた研究者たちの無残な死体。その死体から溢れた血で出来た血だまりに雨崎は浸かっていた。

「あ、え？」

悲鳴もあがらなかった。訳が分からず血だまりに座り込んでしまう。血に浸かった足や尻にどろどろとした気持ちの悪い感覚を感じながらもそこから動けなかった。

雨崎は分からなかった。今、自分は恐怖しているのか、歓喜しているのか。

足音が聞えた。研究者たちの声と、足音だ。血だまりに座り込む雨崎の目の前に駆けつけた研究者たちは拳銃を雨崎に突き付けた。

研究者たちが何か叫んでいたが、覚えていない。

状況からしておそらく、貴様がやったのか、とかそんな事を言っていたのだらうと思う。

自分は驚きも、恐怖も、焦りも、悲しみも、憎しみも感じず、その瞬間、ある意味で真っ白になっていたと思う。

モウ、ドウダッテイヤ。

それが、その時雨崎が感じた感情だった。

気付けば自分は警備員に保護されていて、気付けばとある高校教

師をやっている男の家に居候していた。何と云うか、何事にも無關心というか、適当というか、そんな感じの人だった。中学に上がってから、寮に住まうようになった。でも、ソイツのおかげで今の雨崎が居るのだから感謝はしている。

当初は常盤台中学へ進もうとも考えていたが、常盤台中学に進学してしまうと、ほぼエリートコース決定なので、敢えて柵川中学へ入学した。

世話になった教師の務めているとある高校に行って、少しでも恩返しをしようと考えている。そのことを伝えると、いらねーよ、そんなモンより金にして恩を返せ、と言われたが。

それから中学に上がって、徐々に徐々に忘れていったのに。

「こい……つらはあ——ッ！」

四人組の内の一人の、小柄なフードを深くかぶった少女が突撃してきた。それに応じて、雨崎も全力で当たりに行く。雨崎が思い切り地面を蹴ると、常人では有り得ないスピードで突撃した。

フードをかぶった少女は驚いたのか、一瞬拳動が遅れる。

「——ッ!？」

雨崎は突撃したスピードを殺さずに思い切り殴ると、小柄な少女の体が、吹っ飛び、何度もバウンドした。少女の飛んでいく先を確認していると、腕に激痛が走った。雨崎の方が少女を吹っ飛ばしたというのに、握った拳が砕けていた。

雨崎が鈍痛に顔を苦しげに歪ませていると、路地裏の影の方から、閃光のようなモノが走った。その光の光線は障害となる物を易々と貫き、雨崎の足元に突き刺さった。路地裏の通路が溶解して、不快な臭いを放つ。

（回復するまで、逃げなきゃ……）

路地裏の影に消える少女に踵を返して、雨崎は走る。

昨日の戦闘で、相手の戦法は大体理解した。どうやらあちらは雨

崎を殺す気はなく、あくまで捕える方針らしい。その為にはあの遠距離から放たれる、あらゆるものを貫く謎の光線は、雨崎に当てる訳にはいかず、牽制、威嚇の一撃なので楽に避けることが可能。爆弾を使用する者が居るようだが、火薬の量は調整されていて、『再生』が可能な雨崎にとつては、さして脅威ではない。

そして、謎の防御力と攻撃力を持つが、近距離でしか戦えない少女と、特に何かしているようには見えない少女が二人。突破できる。

逃げ切る事も不可能ではない。

雨崎のさっきの身体能力は、所謂、心理的限界を無視し、生理的限界を超えたことにより可能になった荒業だ。基本、『身体能力強化系』の能力は、脳からの指令による自動運動の限界——所謂、火事場の馬鹿力——を伸ばす事で常人以上の筋力を得る。自動運動の限界を十と捉えると普通の人間は七の力しか出せないが、身体能力強化系は、その自動運動の限界を二十、三十と伸ばしていくことで、能力使用時の力が常人を越える。

だが、雨崎は外部的刺激による筋収縮を十と捉え、普段を二の力として、その外部的刺激による筋収縮を意識して起こす事で、常人離れた筋力を得ている。本来なら電極を用いたりするが、皮肉なことに幼いころから、実験で脳を弄られている雨崎にとつては、再生能力との併用で不可能ではなかった。

どちらも、雨崎のやっている方は、筋力のリミッターを完全に外す行為であり、通常なら体が崩壊する。

だが、再生能力を持つ雨崎にはそれが可能。

筋力のリミッターを外す行為は、再生能力を持ってしても激しく疲労するので普段は絶対に使わないが、今回ばかりは仕方がないだろう。

さつさと、終わらせて帰ろう。

これが終わったら、きつともっと楽しくなる、毎日が。

そのためにも、今を生きよう。

そう思つてさらに一步踏み出すと、ピーという機械的な音がしたて、雨崎の視界が眩い光で覆われた。

(しまつ……!?)

直後、爆音が路地裏に轟いた。

竜野と佐天は第七学区をぶらぶらと、何の当ても無く歩いてきた。結局、今日二人でした事と言えば、映画館へ行つて、マイナーな映画を観たくらいしか覚えが無い竜野は、少し佐天に申し訳ないと思う。

少し、服のセンスがあつたり、面白い場所を知っていたりすれば出来る事は増えただろうに。

それでも竜野の隣で佐天は笑つて話してくれるのだから、ますます情けない気分になる。竜野でも出来そうなことと言えば、何か欲しい物でも買つてやるくらいだろうか。

そこで、竜野は飯を奢るのはどうだろうか、と思いつき口を開く。「なあ佐天。今日、楽しかった?」

口を開くと、自分でも驚くくらい考えていた事と違う言葉が出てきた。何言つてんだろう、オレ、と思うが、佐天は一秒も経たぬ間に答えを返した。

「楽しかったに決まつてるじゃないですか。こうやって歩いて、話するだけでも充分ですよ」

すぐに答えが返つてくるところからして、それは佐天の本心で、ありのままの言葉なんだろうな、と思う。すると、急に恥ずかしくなつて、視線を佐天から逸らす。何と言うか、自分のしていることを肯定してくれる人が居ると、急に意識してしまうのだ。照れ臭い、というやつだ。

「……飯、食いに行く? 奢るよ」

「え? いいんですか? 気持ちは嬉しいですけど、竜野さん、た

だでさえお金が無いって言うてるのに、この前入院したばかりだし、大丈夫なんですか？」

「はっはー、どうせオレは自分で飯作るの苦手だし、コンビニで飯買ってるんだから今更少し食費が高んだくらいじゃ変わんないって」「それって投げやりってやつじゃ……」

「そこら辺は気にしたら負けってやつだな」

家計のことを思い出して、少し気にしつつ竜野がそう言うと、佐天が落ち着かない様子で何かを言おうとする。そして、数秒の間を空けて、佐天がようやく言葉をこぼした。

「……だつたら」

「ん？」

「だつたら、夏休みの間くらいあたしがご飯作って竜野さんに――」
続きの言葉は、何かの爆発音によって掻き消された。

竜野を含め、周りの歩行者や佐天もはっとしたように爆発音が聞えた方角を見る。だが、その危険な臭いを撒き散らす爆発音の聞こえた方へ身を投げたそうとする者はおらず、ただ、逃げる様に、まるで始めから何もなかったかのように、周囲の歩行者は歩き出し、街が動き出した。

竜野は特に何も考えずに、言うなら反射的に、無意識的に動こうとしていた。腕をぎゅっと掴まれ、動こうとしていた足が止まる。

（え？）

竜野を止めたのは、佐天だった。だが、竜野が驚いたのは佐天に止められたからではない。

（今、オレ――）

竜野は今、どこへ向かおうと足を動かしたのか。そもそも、竜野は一体。

（何をしようとしてたんだ？）

そう思った途端、まるで、積み上げてきた物が一気に崩れ落ちるように、体が拒絶反応でも起こしているのかというくらい震えだした。

佐天の方を振り返ると、何も言わずに竜野から顔を逸らした。行って欲しくないのだろうか、と竜野は佐天の表情から読み取る。

「……ごめん」

それだけ言うと、佐天は諦めたように手を放した。

許可をしてくれたのだろうか、と考えたところには、竜野は既に走りだしていた。今まで、感じる事を忘れていたかのようなだった、得体の知れない体の震えを克服できぬまま。

雨崎の足は完全に止まっていた。逃げなければいけないのに、雨崎を闇に引きずり降ろそうとする者を倒さなくてはいけないのに、平穏な日常を過ごしていくために、生きなくてはいけないのに。

視界が揺らぐ。路地裏の真っ直ぐな通路が、ぐねぐねと歪んで見え、今少しでも動けば意識を失うことが、何となく理解出来た。

（血が……）

血が足りない。予想以上の威力の爆弾にやられた雨崎は、足を引きずって、複雑で、入りくんだ通路を選んで何とか今までやりきっていた。肉体の損傷は全て再生し、衣服を除けば、雨崎の見た目は怪我らしい怪我はない。だが、血を失い過ぎたのだ。だが、あれだけの爆音がなったのだから、風紀委員や警備員が動いてくれるかもしれないという僅かな希望に縋って何とか逃げ回ってはいたが、どうやら限界らしい。

路地裏の壁に体重を預けるように立っていた雨崎は、足音を聞いて、敵がどちらから来るのも分からないまま歩く。

少しずつ近づいてくる足音が、ついに止まった。揺らぐ視界の中に人影が見えた。誰かが分からない今、警戒を解くわけにはいかないのだが、もう抵抗する手段が無い。

「雨……雨……？」

その人影が出した声は、昨日、盛夏祭でよく聞いた声だった。す

ぐに、雨崎はダメだと思った。

「竜——野くん？」

「雨崎、どうした？ 服がぼろぼろだぞ……それよりこちら辺から爆発音みたいなのが聞えなかったか？」

何も知らない竜野は、見た目だけならどこも異常の無い雨崎に昨日と同じように話をかけてくる。いつも通りの彼でよかったと思った。教室で見る姿と同じで、友達に声をかけるような雰囲気です。自然と、涙が流れた。

それを見た竜野は困ったような顔をしてから優しげな声で。

「どうかしたのか？ いじめとかか？」

そんな程度だったらただけ良かったか、と思う雨崎は、いつもと何も変わらない平穩の雰囲気運んでくれた竜野に心の中で礼を言う。少しだけ笑う事が出来た。不覚にも流してしまった涙をこしこしと拭っていると、竜野の背後にもう一つ、人影が見えた。

「——ッ！？ 逃げて！」

雨崎が、悲鳴のように上げた言葉で、竜野ははっとしたように振り返った。直後、光の閃光が迸った。全ての障害を貫き、破壊して突き進む光線が。

「あ——、う……」

死んでしまった。竜野にあの殺人光線を防ぐ術があるとは思えない。すぐに死んでしまった、という言葉を否定する。死んでしまったのではない、殺したのだ、雨崎が。雨崎が巻き込んだのだ。全部、自分のせいだ——。

「なるほどな」

竜野の声が聞えた。雨崎は、はっとしたように竜野を見る。そこにあったのは、光線に貫かれ死体と化した彼の姿では無く、拳を構え、雨崎を追う追跡者たちと対峙する竜野の姿。

「昨日、雨崎を見た時から、何かおかしいとは思っていたんだ。何で、雨崎みたいな奴が盛夏祭に来て、ただの知り合い程度でしかないオレに話をかけてきたのか。何で、雨崎の衣服が傷だらけだった

のか、『再生能力』がある雨崎が、何で小さな傷を残したままにしていたのか。つまり、雨崎は――」

竜野は体を震わせながらも、強く言った。自分のすることを確かに認識するために言葉を並べる。

そして最後に、今一度、拳を強く握り締めて言い放った。

「――誰かに助けて欲しかったってわけか」

歩みを止めるな

絹旗最愛は、仕事を終えた時の達成感のようなものを感じていた。というより、後数分もすれば、仕事は完遂するだろう。標的の捕縛に成功すれば、こちらの仕事は、取り敢えず終わるのだ。今日は何だか気分が良いのだ。それもこれも映画館で光の側の少年と少女二人と、知り合ったからかもしれない。

標的の近くに誰かを発見した麦野沈利がその人物に、彼女の能力である『原子崩し』^{マルチタウナー}を放った。おそらく、彼女の放つ光線に貫かれ死んだだろう。当然だ。本人にその意思があつたかどうかに関わらずこの光景を見られた以上消すのが暗部組織というものであり、そういう汚い事をするのも、絹旗達の役割なのだ。まあ、絹旗達のチーム『アイテム』の本来の指針は学園都市の不穏分子の排除なのだが。麦野沈利の『原子崩し』に貫かれて死んだかと思われた人物から、声が聞えた。

「——誰かに助けて欲しかったってわけか」

どういうことだ、と麦野を含める『アイテム』^{レベル5}全員が驚愕した。麦野は学園都市に七人しかいない超能力者の一人であり、その一撃は真正面から防ぐことなど、同じ超能力者でもなければ不可能。だが、謎の人物は無事だった。それが表わすことは一つ。

つまり、標的側に超能力者が付いた可能性があるということだ。

だが、絹旗には、もう一つ気になる事があつた。

（あ、れ？ この声、どこかで聞き覚えが……）

それは、絹旗の言葉を使うなら、超最近のこと。正体不明の人物の声は、今日、映画館で会った竜野勇輔という少年の声にあまりにも似ている！

「——ッ！」

「絹旗？」

絹旗は、堪らずに飛び出した。麦野が制止の声を飛ばすが、無視

する。信じたくない。ようやく、後ろめたいことのない、対等な関係を築ける相手が出来たというのに。確認しなければ、この目で。

あの人物が、竜野勇輔であるかどうか。

絹旗が飛び出してくるのを見て、向こう側の人物が身構えるのが見えた。両者の距離が縮まるにつれ、互いの姿が浮き彫りになっていく。そして、二人の距離が数メートルにまで近づいたところで相手の顔が

分かった。

そこには、最も居て欲しくない顔があった。

竜野は驚きのせいか、啞然としている。信じられないという顔をする竜野に向けて、絹旗は怒りをぶつけたいのを我慢して、静かに告げる。

「どいてください」

竜野は退かずに答えた。

「どかない」

その瞳は揺るがない。

「あなたが今麦野さんの攻撃を受けても生きていたのは超奇跡と言っても過言じゃありません。ですが次はありません。今なら見逃します、退いてください」

その言葉に敏感に反応したのは今なら命が助かる竜野では無く、むしろ竜野が居なくなればほぼ確実に身の安全が無くなる標的の方だった。しかも、それが言ったのは竜野を引き留める言葉では無かった。

「行つて。竜野君が私のために傷つく必要なんて、ないんだから」

「その人の言うとおりです。襲われている本人が超そう言ってるんです、退いてください。できれば竜野とは戦いたくありません」

「……何でだよ。絹旗達がそうやって人のことを想う事ができる奴らなら、何で雨崎は追われなくちゃいけないんだよ。何で」

奥歯を噛み締めて竜野は悔しそうに言った。

「——戦おうとするんだよ」

その問いの答えは一つ。絹旗最愛らは、学園都市の裏側の組織の一員だから。そして絹旗らは学園都市の闇から逃れることはできないから。一度捕まれば、もう光に戻るなどできないのだ。あとは底なし沼にはまったように沈んでいき、抗えばより一層自身を危機にさらすだけ。

「そうですか」

絹旗は問いに対する答えを返さずに、たったそれだけ言ってその小さな拳を握り締めた。振るっても大した速度は出ない、だがアスファルトを砕き、自動車も粉碎する。絹旗は常人なら持ち上げられない重い物を持ち上げることができる、それは決して彼女自身が怪力なわけではない。ついでに言わせてもらうと、絹旗の身体能力の基礎はどこにでも居る女子中学生と変わらない。しかし、その圧倒的な破壊と銃弾すら防ぐ防御力を彼女が生むことができる要因はたった一つ。

『室素装甲』

この小さな拳を絹旗が思い切り振るって、竜野にぶつければそれだけで決着が着く。この拳をぶつけるだけで、見かけからして華奢な体つきの竜野を粉碎できる。例え拳銃を持っていようが、この『室素装甲』は拳銃程度で撃ち抜かれるほど軟では無い。

「超残念です」

絹旗は拳を振るった。その拳自体はボクサーのように鋭くはないが、それが生む破壊力はボクサーのそれを遙かに上回っている。

拳を振るいながら絹旗は、やっぱり表の人間と仲良くなるなんて無理なんだな、とぼんやり考えていた。

だが、拳を振るった結果は絹旗の予想できるすべての結末と違った。竜野の華奢な体が潰れる様、十数メートルをノーバウンドで吹っ飛び死ぬ様、それなりにグロテスクな死体が生まれると考えていた絹旗の予想は、ぱし、という手と手がぶつかる、小さな音によって覆された。

何となく、ぼんやりと視界に映る景色を見ていた絹旗は、はっと

する。竜野が絹旗の拳を手で振り払ったのだ。

（圧縮した窒素の塊が、何らかの干渉により分散させられた？）

そう考えながら、絹旗はバックステップをして距離をとる。そして背後の壁に拳をぶち込み、砕けた石材を掴み取る。拳大の石片を投げ飛ばす。今度も何かされると思ったが、それもまたある意味で予想を裏切った。

近距離からそここの速度で投げ飛ばされた拳大の石片は、竜野の腹に直撃したのだ。

「お、うえ——ッ！」

竜野は何かを吐きだしそうになるのを堪えて、標的の手を取って走りだした。絹旗はその姿をただ眺めるようにしていた。すると、苛立ちの混じった声が飛んできた。

「何やってんのよ絹旗」

麦野沈利の声だった。

「せっかく標的を動けなくして追い詰めたのに、何やってんだか」だが、麦野は特に絹旗のミスに対して言及せずと言った。

「こんな面倒くさい仕事はさっさと終わらせるに限るわ」

彼女がそう発言すると同時に、光線を一筋放った。その正体は特殊な電子線だ。電子は状況に応じて『粒子』と『波形』の双方の性質を示す。電撃使い最強と謳われる、第三位の超電磁砲はこの二つの性質を最大限に活かして、様々な方向に応用を利かせている。だが、麦野の『原子崩し』はこの二つの中間にあたる『曖昧なままの電子』を強制的に操る能力らしい。正式な分類は粒機波形高速砲。波も粒子も使わずに電子を操る超能力者。

その圧倒的な威力を誇る光線が、背を向けて走る二人に向けて放たれたのだ。

雨崎を引っ張る様にして走っていた竜野は光線が放たれたのを確認するや否や、すぐに雨崎を自分の背後に隠れさせ、右手を光線に向けて突き出した。

光線が右手にぶつかっただように見えた瞬間だった。

光線が屈折するように弾かれた。

「なっ——ッ!？」

声を洩らしたのは自身の能力に絶対の自信を持っている麦野だけだったが、『アイテム』のメンバー全員がその光景に目を見開いた。さつきまでは、最初の一撃を生き延びたのは麦野が偶然狙いを外しただけだと思っていた。元々、麦野の『原子崩し』はその圧倒的な破壊力ゆえに細かい狙いをつける必要がある。しっかりと演算をしなければ、自分をも巻き込んでしまう恐れがあるからだ。

だから、その所為で『原子崩し』が偶然に外れたのだと。だが、違うのだ。

今ので証明された。

あの竜野勇輔という少年は超能力者、麦野沈利の『原子崩し』に對抗するだけの力を有している。

そして、今回の仕事の最大の脅威になる人物であると。

(今、弾いた、のか?)

雨崎の追跡者の一人から放たれる光線を、何とかやりきったという一瞬の安堵を感じると同時に、竜野は一つの疑問が浮かんた。

竜野の右手は、異能の力ならそれが電撃であれ炎であれエネルギーの塊であれ、掻き分けるように引き裂く力があつた。始めて異能の力に右手がぶつかった時からそうだったので、特に疑問を持たずに使用してきたが、今になって弾くという形で防いだ。

まるで、相手の能力に最も適切な対処法を与えるのが、この力だったとも言うように。

だが、今の力の働きに対して深く考える時間は与えられず、すぐに人影の方から数本の光線が飛んできた。

あらゆる遮蔽物を崩して突き進む真っ白な光線が、四本だ。

(やっば。右手一本じゃ、処理しきれない——ッ!?)

だが後ろに雨崎が居る以上、避ける事は出来ない。「雨崎を見捨てて保身に走るなんて、そんなことは竜野が許さない。」

一瞬後退しようとした自分の考えを振り払うように。

「ああ……くっそおおおおおおおおおッッ！！！」

呻き声から、咆哮へ。

同時に、未だにどういう条件で能力が発現しているのか分からない『幻想造り』を発動させる。右手の辺りに、不健康な真つ白な塊が発現した。どういう使い方をするのかすら理解できないまま、なりふり構わずに腕を振るう。

すると、追跡者から放たれるものと同質の力だと思われる光線が五本、竜野の右手の辺りに発現した光の塊から放たれた。五本のうちの四本が、追跡者の一人が放った光線と撃ちあい、ぶつかって衝撃波を生み出した。

遅れて放った竜野の近くで八つの光線が炸裂したため、衝撃波で竜野と雨崎は吹き飛ばされ、地面に転がる。勢いが止まらず、転がり続けて、曲がり角で二つに分かれる通路の壁にぶつかることでようやく止まる。

「い、っ痛」

雨崎が呻き声をあげているが、取り敢えずの無事を確認して竜野はほっとする。そして、視線を追跡者たちに移す。残った一本の光線でどうにかなったのかな、と見てみるが四人とも傷一つないようだ。

「行って来いフレンド」

「え、麦野！？ 結局、そういう使い方は良くないって」

本当に自分たちは戦闘をしているのかという疑問を抱く声の交わり合いの後、金髪の少女——フレンドが不本意ながらも竜野達に突っ込んできた。

竜野は地面に膝をつきながら、フレンドも何らかの能力を持っているんだろぅなと考えるが、いつまでたってもその様子はない。

（……能力を使ってこない？ なら——ッ！）

竜野は恐怖と痛みのどちらにも震えている足で、何とか立ち上がり、走り込んでくるフレンダとの戦闘態勢を整える。不良同士の喧嘩のような殴り合いに出るのかと思ったら、フレンダは間合いを無視して蹴りを放った。だが、距離からして僅かに届かないと踏んだ竜野は蹴りの直後の隙を狙おうとする。

だが、その蹴りは放った足に、正確には履いている靴に違和感を感じた。ついさっきまではただの革製の靴だったが、そのつま先から鋭利な刃が飛び出したのだ。ただでさえ革靴のつま先蹴りは、喧嘩の中でなら武器として使えるのだが、それに刃物が追加された事で完全な凶器と化した。

「——ッ!？」

急遽、体を捻じって回避行動をとるが、それでも少し遅かったようで浅く脇腹を切り込んだ。鋭い痛みが竜野を襲い、血がだらだらと流れてきた。流れる血は、竜野の衣服を少しずつ赤黒く染めていく。

（馬鹿ね。得体の知れない相手にただ喧嘩を吹っ掛けるだけなんて愚かなことをこのフレンダちゃんがするとでも思ったの？ 結局、心理的な掛け合いが勝負を決める訳よ!）

怯んだ竜野にフレンダは追撃し、止めを刺そうとする。痛みが顔を歪めている竜野を見て、もっと愉快な顔にしてやるよという気概で蹴りを放つ。フレンダ自慢の脚線美を披露しながら放った蹴りは、確実に竜野に突き刺さった。

終わった、とフレンダは思ったが直後に蹴りを放った足に違和感を覚える。

（ん?）

見てみると、竜野に突き刺さって無ければおかしい刃物が曲がり、刃物としての機能を失っていた。それどころか、蹴りが竜野に届いていないのだ。

竜野はフレンダの足を掴む。

「どけえ……っ!」

言葉と同時に片腕で、フレンドの体を持ち上げて投げ飛ばした。麦野達の方へ放り投げられたフレンドは麦野に掴まれることでようやく止まる。おそらくあのまま飛んでいたら無事ではすまなかっただろう。

「チツ、役に立たない」

「超重要な所で失敗するんですね」

「あなた達ちよつと酷くない!？」

フレンドは少し泣いてやろうかという気持ちで叫ぶと、肩に手が置かれた。

「大丈夫、そんなフレンドを私は応援してる」

「私が超決着をつけます」

そうこうしていると、絹旗が前へ出た。

「しくじらないですよ。三日も連続であんな雑魚追いかけんのは嫌よ」

「超理解しているつもりです。今度は手加減なしで超ぶつ潰しますんで。それに、向こうの能力は今なのでおおよそ分かりましたから」

次に駆けてきたのは絹旗だった。竜野は拳を握り締める。

（絹旗の能力も未だに良く分かんないけど、さっき拳を払った時に驚いていたところを見ると、近接でしか使えない能力なのは間違いない、はず!）

絹旗の小さな拳が竜野に向けて振るわれる。先程と同じように振り払おうと、右手を振るう。拳と拳がぶつかって竜野の予想通り絹旗の腕が弾かれて、隙を生む。

そこに間髪いれずに右拳を叩きこむ。

竜野の右手なら、異能の力による防御は効かない。その防御すら掻き分ける様にして突破するからだ。

そして、見かけ十二歳くらいの絹旗との体格差を考えれば、上手くいけば一撃で沈められるかもしれない。

そう考えた竜野は、一切の加減無く振るった。

なのに。

絹旗にまで、拳は届いていなかった。何かにぶつかった感触を手に感じるのに、だ。

「運が良かったですね。本当なら竜野の拳は使い物にならなくなっていたところですね。そう、私と同じ『窒素装甲』を使っていなければ」

絹旗の竜野の能力に関する推測はこうだ。彼の力是对峙した相手の能力を扱う力なのではないかと。そして、同系統の能力者同士は、互いの能力に干渉し相手の能力を弾いたりすることが可能。つまり同系統の能力を扱う事で竜野は相手の攻撃を弾く。

だが、他人の能力の把握は難しい。なので、その複雑な演算を相手の能力に右手で触れるという行動に置き換えているのではないかと。そうすれば麦野の『原子崩し』を弾いた理由も説明がつくし、『原子崩し』の能力を使って光線を放つことができる。

まあ、本当に恐れるべきなのは『相手の能力を自身の能力にする力』ではなく、得た他人の『自分だけの現実』を把握して操っている彼自身なのだが。

だがそれには一つ大きな弱点がある。それは、絹旗のように周りに自身の能力を纏わりつかせているタイプだ。この場合、干渉するのは非常に難しくなる。何故なら、雷撃の槍や『原子崩し』のような演算をしてから放つタイプは、放たれてからは能力者の手を離れるため、一度干渉して弾いてしまえばもう制御を乗っ取られる事は無い。

だが、絹旗のように常に身の周りに纏わせて能力を持続させるタイプ相手には干渉しても、こちらでも干渉が出来る以上、能力の無力化は働かないのだ。そうなるともう単純に能力の演算の速さで勝負は決する。

演算での勝負になった時、不利なのは竜野。彼は特異な能力を持

っているはいるが、頭の良さは大能力者や超能力者を越えるほどだとは到底思えない。

確かに絹旗のような相手にも、能力が干渉されていることが気付かれていない状態の一度や二度なら通用するかもしれないが、場数を踏んでいる相手とだと三度目には今の絹旗がやったように竜野の干渉を打ち破るだろう。

「これが最終警告です。諦めて超退いてください。あなたの能力では私を倒すのは不可能です」

「逃げてよ……っ！？ まだこう言ってくれてるんだよ！ そこまでする価値が私にあると思ってるの！ 殺されたっておかしく無い相手に、まだ生きるチャンスを貰ってるんだから——」

「オレは逃げないし、絶対に死なない。でも、雨崎も絶対に見捨てない！」

竜野が退く気はないのは、彼の揺らない瞳で絹旗は理解した。

それから、勝ち負けを決定するまでは数秒だった。竜野の『室素装甲』を完全に絹旗の制御化に置き、防御の無くなった彼の体に拳をぶち込んだ。その一撃で竜野は地に倒れる。

（ちく、しょう……まだ、何か……——ッ！？）

地にひれ伏せられて、歪んだ視界の中で竜野はたった一つだけ雨崎を助け出す手段を、すぐ傍でやめてくれ、逃げてくれと訴えかけている雨崎の足元に落ちている雨崎の携帯電話を見て思いついた。

例え竜野の意識が失われたとしても、この手段なら。

「が、ああっ！」

残った僅かな体力と気力で立ち上がった竜野の得体の知れない何かに、絹旗は肩をビクンと震わせる。

すぐに絹旗は竜野の意識を奪おうとするが、竜野が立ち上がって、真っ先に向かったのは倒すべき敵である絹旗では無く、守るべき雨崎の方へ。

転がり込むようにして彼が手にしたのは携帯電話で、雨崎を庇うように覆い被さった竜野が使用したのは携帯電話だった。

「警備員や風紀委員を呼ぼうとしているなら超無駄ですよ。そういった手段をとらせないように対策をしてありますので」

絹旗が竜野にそう伝えると、諦めたのか携帯電話を雨崎に返した。そして、無謀にもまた絹旗たいと戦う意思を失っていないかった。狂っている、と絹旗は思った。

『暗闇の五月計画』の生き残りである絹旗は知っている。その計画で絹旗の能力は『窒素装甲』という形になったが、その結果を残すまでにどれだけの人間が死んだか。『プロデュース』に参加させられた被験者は脳みそをクリスマスケーキのように切り分けられたりしたというのだから、ここの研究者たちは狂っているとしが言いようが無い。

学園都市には狂人、変人がたくさん居ると思っていた。

だが、竜野のそれはその狂人とは違った狂人だ。

言うならば『狂氣的な善意』

得体の知れない恐怖を感じた絹旗は向かってくる竜野を、今度こそ一切の手加減なしに殴る。絹旗の小さな拳が竜野の腹に突き刺さり、物凄い勢いで壁に打ちつけられた。

ぐしゃり、と不快な音を鳴らして、竜野の体がずるずると崩れ落ちる。

「竜野君……？ う、そでしょ」

鮮血が裏路地にある種の芸術的なアートを描いた。血だまりの真ん中で倒れる少年は動かない、いや動いたとしたら、それはもう人間ではない。

なのに。

「あう……」

ゆつくりと立ち上がる。がたがたと震える、少し押したら崩れ落ちそうなほど弱そうな両脚を支えにして、壁に手を置いて体重を預けながら、もう死んでいるのではないかという程の血に濡れ

ながら、それでも立ち上がった。

口から溢れるように出る大量の胃液や唾液の混じった血を袖口の周りで拭って、もう見えているかすら分らない目で、確かに絹旗を射ぬき、ふらふらとした足取りながらも確実に絹旗最愛に近づいてくる。

絹旗の目の前で立ち止まり、竜野は拳を握った。

だが。

そこで竜野は呆気なく倒れてしまった。

「で、結局これは処分するの、麦野」

「いや、いらないでしょ。どうせほっとけば下部組織の人間が処分してくれるだろうし」

「そうですね。私達が処分する必要は超無いと思います」

「さっさとコレを依頼主のところに連れてってご飯にでも行きましょ。」

そうね、シャケ弁が良いわねシャケ弁」

倒れている竜野を雨崎にはどうすることも出来なかった。

雨崎はもう、逃げることにすら忘れていた。

竜野が目が覚めるとそこは、病室だった。しかも、昨日まで入院していた第七学区のカエル顔の医者 of 病院だった。

目が覚めてからしばらくぼーっとしていたが、ベッドの隣に置かれていた携帯電話を見て、頭の中が一気に覚醒する。

すぐに竜野は自分の携帯電話を手にとって、画面を確認する。そこには、学園都市の地図と雨崎天葉の居場所があるはずだ。

あの時、竜野が雨崎の携帯電話を使っていたことは警備員や風紀委員に助けを求めたのではない、自分の携帯電話に雨崎の位置情報を送ったのだ。といっても、三十分すれば情報は更新されなくなるので、半ば賭けのようなものだったわけだが。

雨崎の居場所を確認すると、地図に名前の無い建物が示されていた。おそらく、警備員に潰された非人道的な研究を行っていた研究所の跡地か廃墟、もしくは建築途中の建物の場所だろう。

そう言った場所に丁度雨崎の位置が示されているのだから、賭けには勝ったのかもしれない。病院内でも携帯電話の通信が繋がりはなしなのは、おそらくカエル顔の医者が手をまわしてくれたのだろう。

とにかく、急ごう。

そう思っただけでベッドから起きて、立つとがくんと足が折れた。どうやら怪我は相当深刻らしい。だが、助けに行かなければ。そう思い、病室のドアに手をかけようとした瞬間。

ドアが廊下側から開けられた。

「竜野……さん？」

「佐天……」

「どこに、行こうとしてるんですか？」

佐天が心配そうな顔で、そう言った。正直に言うわけにもいかなないので、適当な言葉で誤魔化すことにする。

「トイレだよ、トイレ。どうかしたのか、着いて来たいと言っただよ？」

そう言っただけで、竜野が佐天の横を通って病室の外へ出ようとする。

「嘘、ですよ。それ」

小さな声で、ぼつりと言って、病室から出て行こうとする竜野の手を掴んだ。夕方のように今度は絶対に離さないとも言っように、強く。

「何で、あたしに嘘を吐いてまで竜野さんが行かなくちゃいけないんですか？　どっかの誰かを助けに行く度にボロボロになって、そこまでしたってせいぜい返ってくるのは感謝の言葉くらい……。そんな事に何か意味があるんですか？」

「意味なんて、ないのかもしれない」

「だったら——！」

一度、強く言いかけた佐天は、言葉を止める。

「だったら、竜野さんが傷つく必要なんてないじゃないですか。竜野さんが正義の味方みたいな、ヒーローみたいな何でもこなせるような人じゃないのは知ってるんです。こうやって無理をしてまで竜野さんが誰かに手を差し伸べる必要なんてないんです。怖いなら誰かに頼ってくれたっていいじゃないですか！」

行つて欲しくない。それが佐天の率直な想いだ。

とにかく、止めなければ。下手すれば今度こそ竜野が死んでしまふ。

なのに。

「確かに、俺が絶対に行かなきゃいけない理由なんてないんかもしれない。けどさ、それが、ヒーローじゃないから手を差し伸べなくていいってことにはならないんじゃないかな」

「それは、……じゃあせめて私を、御坂さんを、初春を、白井さんを、私達を頼ってくれたっていいじゃないですか……」

「……俺は、誰かに言われたからしてるんじゃないんだ。俺という人間がただ単に目の前で苦しんでる知り合いが居るのに放っておくのが許せないだけなんだよ。俺は、今きつと自分の意志で動こうとしてる。勝手かもしれないけど、それに佐天達を巻き込みたくないだから、お願いだ」

それは、竜野自身に言い聞かせるような言葉だった。自分のこぼす言葉の意味を理解しながら、そしてそれは佐天への言葉に変わった。

「——俺が歩くのを止めないでくれ」

佐天が竜野を繋ぎ止めていた手が、離れた。

自分のために

荒幡玲水の目の前には、雨崎が絶望して力なく項垂れて床に座り込んでいた。そんな雨崎を見ても、荒幡は特に気に留める事もせず、愉快そうに手で仕草をしながら口を開いた。

「いやあ、これって懐かしい再会ってやつ？ 研究者を片っ端からぶっ殺して、貴方を外の世界に返した恩人^{わたし}が、今度は貴方を実験に使って自分の利にしようとしているんだから、数奇な運命ってヤツかな。まあ、私が夏休み前からずっと、貴方の事を攫^{さら}ってくるよう雑魚に命令したり、暗部組織に依頼したりして『置き去り養護施設』に連れて来させられたんだから、必然なんだけどね」

雨崎は何か諦めたように、口を開けたままぼかんとして、ただ床を見つめている。

今、二人が居る場所は、実験に使われる置き去り達が幽閉されていた場所だ。大人数を閉じ込めていたため、昔は窮屈に感じていたものの今思えばかなり広い。といっても、昔、最後まで残ったのは、研究者を虐殺した荒幡とそれによって研究所から脱出できた雨崎の二人だけだったが。

「まあ、貴方がそれなりの平穩^{へいあん}ってやつを手に入れて、毎日楽しくやってたのは知ってたよね。まあ、逆に私は私の『超能力者化^{レベルアップ}』の為にちよこちよこ雑魚を実験に使って生きてきたんだけど。でさあ、ある時気付いちやったわけよ、こんな方法じゃいつまで経っても超能力者にはなれないってさ」

まるで、自分の自慢話でも聞かせるような口調で話す荒幡はさらっとんでも無い事を言うが、雨崎にはそれについて何か言うほどの気力はない。

「私の能力は『能力模倣^{AIMスチール}』って言ってさ、他人のAIM拡散力場に干渉して他人の能力を『盗む』って力なただけどさ、この能力の超能力者入りの条件がおかしいんだよね。私は一応大能力者認定を受

けていて、相手が大能力者以下の能力ならどんな稀少な能力でも『盗める』ってのが売り文句なんだけど、その超能力者になる条件ってやつがさ、超能力者の能力の取得、なんだよね」

荒幡は心底苛立ったような顔をして続ける。

「おかしいよね。前提がさ。超能力者の能力が取得できないから大能力者止まりだったのに、できなきゃ超能力者になれないって。で、私は考えた。考えて考えて考えて考えて、一つだけ答えを見つけた。『超能力者に成長する瞬間の大能力者のAIM拡散力場を取得する』っていう答えを。だけど、通常長い時間をかけて能力は上昇する、けどさ——そこまで待てないよね。何ヶ月何年って時間ずっと、大能力者に張り付いてる訳にもいかないし、もしソイツが『超能力者になるだけのポテンシャル』を持つてなかったら時間の無駄になるで、私は『体晶』に目をつけた。あ、『体晶』ってのは意図的に能力者のAIM拡散力場を乱して能力暴走させる薬品のことね。そこに目をつけた途端に貴方のことを思い出したわけよ」

荒幡は、口元を歪ませながら白衣のポケットから『体晶』のケースを取り出して、手の上で弄ぶ。そしてゆっくりと、雨崎との距離を限りなく零に近い距離まで詰める。

「これは本当に偶然だよ。まさかさ、気まぐれで助けた女の子がさ、能力の暴走で強度が上がる『体晶』の素質を持つていて。表沙汰に出来ず、自分の研究所の被験者っていう多少の贖罪目はあったんだろうけど、暫定、超能力者認定を受けていたなんてね」

というわけでさ、と言いながら荒幡はしゃがみ込む。

「もう一回使つてよ。命の恩人のお願いだから拒否権はなしで」

それだけ言うと荒幡は、にっこりと笑いながら『体晶』を雨崎の口の中に押し込んだ。

瞬間、雨崎の体が拒絶反応を起こし、能力の暴走のせいか、体の穴という穴から血がゆっくりと流れ始めた。

激しい痛みで、絶叫を上げなくなるはずなのに、雨崎は呻き声一つ上げない。全身から流れる脂汗と血が混じり、体内に流れている

血が急速に減っていくのを雨崎は感じた。

体がぐったりとしてきた。

痛みが全身を突き抜ける。

息をしているのすら苦しいと感じる。

流れる血に体を染められながら何となく雨崎は、死ぬのかなとぼんやり考えていた。

同時に、死ぬのならそれで構わないと思った。

例え生きても、自分の所為で誰かを殺してしまったという罪悪感を背負って行く気にはなれない。

それ以前に生き残ったところで元の生活にすら戻れるのか分らない。ならいつその事、死んでしまった方が楽なのではないのだろうか。

「はは、AIM拡散力場の取得は成功。もういいや、精々苦しんでって」

ただでさえ少なくなっていた血液が、さらに流れたせいか既に視界は少しずつ暗くなっていき、辛うじて意識がある状態。

だが、目の前に居る荒幡の事を憎くは思わない。

元々彼女が居なければ、雨崎はこの研究所から出る事さえ叶わなかったのだから。期限付きの外への切符を貰って、ついにそれが今日切れたのだと考えれば、むしろ良かったのかもしれない。

ただ、こんな自分のせいで死んでしまった竜野に対して、何も出来なかったのが悔いと言えば悔いだろうか。もし、生きているのなら、雨崎のことなんて構わずに平穩に生きて欲しい。

意識が薄れていくなか、ただそれだけを願っていると。

「——雨崎イーーーーiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiッ!」

咆哮のように雨崎の名を呼ぶ声と同時に、ガンッ! とドアが思い切り開けられる音がした。視線を動かすのすら苦しい状態で、声の聞えた方を見る。

力を精一杯出して、わずかに開けた視界に映ったのは、雨崎が最も生きていて欲しかった少年の姿だった。

竜野はそれを見て焦って駆けだす。雨崎の落下地点に近づくと、なるべく衝撃を抑えるよう自分をクッションにする為に、スライディングをして下から受け止める。竜野自身も体がボロボロなため、たったそれだけの事でも激痛が走ったが、それでも構わずに受け止めた。

受け止めて、なるべく優しく地面に寝かせてやると、竜野は立ち上がって荒幡に向き直る。

「へー、ヒロイン回収して逃走するもんかと思ってたんだけど、挑むつもり？」

自身を睨みつける少年は口を開いた。

「こんな事を続けるのは、許せない。雨崎みたいな扱いを受ける奴がこれ以上増えないようにするためにも、アンタは俺がここで止める！」

「ふーん。まあ止めはしないけど、じゃあ早速、超能力者の力を試してみようじゃない。ちよつとは耐えてよ正義の味方君ッ！」

荒幡には、勝てるという絶対の自信があった。どう言葉に表せばいいか分からないなら、今ならどんな能力者にも負ける気がしない。演算にも絶対の自信があるから、他人の能力だからと言って失敗するとも思えない。後は全超能力者の能力を『盗む』だけ。それだけで荒幡は超能力者の頂点に立てる。

学園都市を掌握する。

超能力全てを統べる。

目の前の雑魚になんて、まるで負ける気など、しない！

言い放つと同時に、ずっと昔に殺した発電能力者のAIM拡散力場に切り替える。即座に演算公式をたて、発電能力を発現できる『自分だけの現実』を模倣する。

荒幡に電撃が帯電する。荒幡は腕を天井に掲げると、そこに電撃が集束した。

バチバチィ！ と激しい音を鳴らすそれは。

雷撃の槍。

御坂美琴には及ばないものの、確実に人を焼き殺すだけの威力を持った電撃の塊が荒幡の手元から発射された。竜野はモーシヨンに入った時点でその攻撃を予測して、右手を突き出す。雷撃の槍に右手が触れた瞬間、雷撃の槍が急にコースを変え、弾かれたように明後日の方へ飛んでいった。

（な、能力への干渉？ 面倒くさい真似をつ！）

荒幡は一瞬驚いたように目を見開くも、『盗んだ』能力を使い、次は掌の上に巨大な炎の塊を生み出した。

重い物でも投げるように勢いよく腕を振るって投げる炎の塊。低い伸びをあげて竜野の元へ飛ぶ巨大な炎の塊は、彼のもとへ届く事は無かった。

なぜなら。

荒幡がA I M拡散力場を風系の能力に模倣して、炎の塊が竜野に届くより早く風を炎の塊にぶつけたからだ。

最初の一撃で、能力に干渉されて外されていると判断した荒幡は、ただ単に能力を放つだけでは無駄だと考えたのだ。

だが、複数の能力を組み合わせた能力ならどうだろうか。

風と炎の両方に干渉して弾くのは難しいだろう。どちらの演算公式も同時に読み取らなければいけないからだ。

つまり、あの右手に触れる瞬間に『自分だけの現実』二人分を歪めなければいけないのだから。

そして、両方に干渉できなかった場合、彼らは死ぬだろう。

荒幡が生み出して放った炎の熱は、生身の人間を一瞬で焼き尽くすし、放った風は、容易に人間を切り裂く。

そしてどちらにも干渉できなかった場合。

炎の塊に風をぶつけて、熱風に変わった攻撃は、竜野と雨崎の皮膚を焼くはずだ。何か遮蔽物を盾にしなければ、苦しみながら死ぬことになるだろう。

つまり、炎も風もどちらも対処できなければ竜野は死ぬのだ。もちろん、その後ろで意識を失い倒れている雨崎天葉も。

ズバツ！ と凄まじい音が室内のあらゆる音を掻き消した。

熱風は確実に竜野と雨崎の方へと突き進む。

「おおおおおおおッッ！！！」

だが、竜野は構わずに前進した。一瞬の逡巡も無く一步を踏み出すと、右手を盾のようにして、熱風を掻き分けながら走って突っ込んできた。

（やっぱり超能力の類の攻撃は干渉されて届かない……）

荒幡は違和感を感じていた。AIM拡散力場に関する能力だから気付いたのかもしれない。AIM拡散力場に干渉する能力で、今まで竜野のしてきた防御法は一応出来る。だが、ただ単にAIM拡散力場に干渉しているだけではないような、不思議な違和感を感じていた。

例えるなら、この世の非現実的な現象、非常識そのものに干渉しているような。

荒幡は苛立つて言う。焦り始めた。

上手いじゃないことに。

「何で雨崎天葉はいつも救われる……何で救ったはずの私がこんなにも何もうまくいかないんだよぉ！」

雨崎が平穏な生活が送れていたのは、昔自分が研究者を殺して、逃げるチャンスを作ったからではないのか。自分が動かなければ、今だって実験が行われていたはずだ。自分がしたことが正しいとは思わない。やり方だってとてもじゃないが綺麗ではないことくらいは分かっている。

だけど、それでも雨崎天葉を一度、平穏な生活へと逃がしたやつたのは荒幡のはず。雨崎をどう使おうと荒幡の勝手なはず。

そもそも、雨崎に人間関係が築けているなんて、予想もしていなかった。『置き去り』から始まった奴にまともな人間関係を築けるわけがない。

なのに、何でここにきてこんな障害が現れる。何で、雨崎天葉のために命を賭すような奴まで居る。何で、荒幡には不幸が降りかかってくる。

荒幡の呻き声のような言葉に対して、竜野から言葉返ってきた。

「んなもんアンタがその後どうやって生きたかの違いだろうが。知るかよッ！」

竜野が荒幡の前に辿り着く。

「アンタが今までどんな風に生きてきたなんか知らないし、雨崎とアンタがどんな関係で、どんな過去があるのかなんて知らないけど、俺は知ってるよ。雨崎は毎日必死に生きてきたんだよ。学校行つて友達作つて……そういう努力を雨崎はしてきたんだよ。不幸なんて大抵元を辿れば自分のせいなんだ……そうなるようにアンタはしてきたんじゃないのか？」

何を言っているのだ、この少年は。今を不幸だと言うならば、自分がそうなるようにしてきてそうだったと。

つまり、なんだ、荒幡がしてきたことは……何一つ荒幡のためになつていなかったとでも言うのか。

超能力者になるため、少しでも大きな力を得るためにこんなクソツたれな『実験』をし続けてきた。そしてそれは少しずつ段階を踏んで、荒幡を強くしていったはずだ。

それを目の前の少年は否定するのか。

否定などさせて堪るか。

荒幡は幼い頃から、AIM拡散力場干渉系の能力を超能力者までに伸ばすまでの『素養』を持っていたのだ。確かに条件こそ困難だったが、それでも『八人目』の素質を持った人間だったのだ。

そして同じく『八人目』の素質を持つ、滝壺理后とかいう少女よりも条件は簡単だったため荒幡は、率先して開発に付き合わされた。荒幡自身は『体晶』を服用せずとも大能力者へと成長したのだ。

そして今。暫定的とはいえ、超能力者に進化したはずなのだ。

『八人目』となったはずなのだ。

だから、誰か荒幡を優遇しろ。崇めろ。敬え。救えよ。

——誰か、自分を認めてくれ！

「な……にを？ ……馬鹿にするなあっ！」

追い詰められた荒幡は素人丸出しでも、とにかく拳を振るった。

「そして何より俺がアンタを許せないのは……」

そんな荒幡の拳を、竜野はクモの巣でも振り払うように弾いた。

軽く体勢が崩れた荒幡には、されど決定的な隙ができていた。

「アンタの勝手な都合に雨崎を巻き込んでることだッ……！」

荒幡の懐へ大きく踏み込む。そして、自身の怒りと共に全身の力を拳に乗せて振るう。竜野の握り締めた拳が、荒幡の顔面を正確に捉えた。

ゴンッ！ と鈍い音と同時に荒幡の体が少しのけ反る。だが、ひるむどころか、一歩だけ後退しただけでそこまでの威力は無かった。

「……？」

竜野は違和感を覚えた。今振るった拳はクリーンヒットしたはずだ。今までにどうしても拳を振るわなければ解決できないことがあった。そして、それらの事で得た経験を全て活かした拳だったはず。確かに竜野の拳は相手を一発や二発、三発で沈めるほどではないが、これほどまでに効果がなかったのは初めてだった。

なのに。だけど。そんなはずは。

（相手は日中部屋に籠もってそんな奴だぞ？ 何で……——ッ！？）

何でだと思ってから、すぐに竜野は気付く。

考えてみれば簡単なことだった。

そもそも、つい一時間ほど前までは、死んでいたっておかしくなかったのだ。それを佐天に無理言って、無理矢理体を動かしてここまで来たのだ。

道中、くらくらする視界を何とか正しながら、自分の意思についてこない足を無理矢理動かしながらここまで来たのだ。

つまり、ここが竜野の限界だった。

竜野がだいぶ弱っていることに気付いたのか、荒幡は顔を不気味に歪めると、能力を使わずに蹴りを放った。その蹴りは洗練されたプロのような鋭い蹴りではなかった。

素人がただ足を振るっただけの蹴り。力が伝わっているとも思えない蹴りなのに、竜野の体はおもいきり倒れた。

背中に衝撃を受ける。それは竜野の全身へと伝わり、激痛が走る。その様子を見た荒幡は、竜野が弱っていることを確信し、倒れ込んだ竜野を新しい玩具でも見つけたような目で見下ろす。

「く、ははははははっ！！　なるほどね……なるほどねえ！」

それから是一方的な攻撃が続いた。ただただ荒幡が竜野を蹴って蹴って蹴って蹴るだけ。鈍い音が静かな研究所に響いて、そこに荒幡の狂ったような笑い声。

「いやいや最高だねえ！　能力で相手を有無を言わずに潰すのもいいけど、やっぱり相手を潰す感覚は体で感じなくちゃねえ！　さっきまでの威勢はどうしたヒーローっ！」

素人くさい蹴りで、それから何度も何度も蹴りをいれると、ついに飽きたのか荒幡の笑い声が止まる。

「……はあ、じゃあ最後に能力を『盗んで』終わりにしますか」

クソ苛立つ説教をした竜野を忌々しげに見ながら荒幡は、能力を発動する。景色が変わる。AIM拡散力場が目視できる。しかし、竜野を見たところで違和感を感じた。

（AIM拡散力場が……観測できない？）

どういうことだ。学園都市で生徒をやっている、そして能力を使っている以上AIM拡散力場が観測できないなんて有り得ないのだ。じゃあ、荒幡の足元に転がっている少年は、今までどうやって異能の力を使っていたのだろうか。竜野に触れて、本来あるはずのAIM拡散力場に干渉するのと同じように能力を操作する。

瞬間。

どうしようもないほどの危機感を感じた。

背筋にゾクリ、と冷たいモノが走ったのだ。

「——ッ——！」

竜野から、何か莫大な力が溢れだした。ただのA I M拡散力場では無い。何かがおかしい。それに荒幡の行動のどこに、こんな展開を繰り広げてしまうようなものがあつたのだろうか。

まさか。

荒幡は余計なことをしてしまったのではなからうか。

そう、今の竜野から溢れる力を塞ぎ止めていたような栓のようなものがあつて、もしかして荒幡はそれを外すなどという愚行を犯してしまったのでは。

荒幡が竜野のA I M拡散力場に干渉しようとしたとき、とか。

推測が恐怖を呼び、違う推測をするとそれがまた新たな恐怖を呼ぶ。

そして、荒幡が竜野の得体の知れない力に恐怖している間にゆらりと竜野が立ち上がった。さっきまであんなに蹴られてぼろぼろだったのにも関わらず、だ。

「……………」

俯いたままだった竜野の顔が上がり、荒幡の方を向いた。そして、竜野の瞳は確かに荒幡を見ていた。

ゆつくりと。ゆらりゆらりとおぼつかない足取りだが、確かに荒幡へとその足を進めていく。

（何に怯えてるのよ私は……相手はボロ雑巾みたいに蹴られまくって、今歩くのだっておぼつかない野郎に、何を……っ！？）

竜野の足が一步地を踏む度に荒幡はビクンと肩を大きく震わせた。異様な緊張感が荒幡の体を強張らせる。彼の一挙手一動作を見逃せば、荒幡の身が危険だと本能が知らせていた。

「あああ……あああああああああ……！！！」

堪らずに荒幡は、電撃を放った。隙を与えずに炎の塊を。さらに

は風を。大きな空気の弾を。とにかく荒幡が盗んで手に入れた、ありとあらゆる能力を間髪いれずに連続で放つ。

行動自体は馬鹿そのものだが、それは普段の竜野相手にだったら正解だった。相手の異能の攻撃に右手で触れなければ干渉して弾くことの出来ない竜野は多数の攻撃を一度に処理できない。

普段の竜野だったら。

もくもくとあがる粉塵がはれた時、出てくるのは少年の無残な死体のはず。そうでなければおかしいのに。部屋の中は、炎のせいで熱を感じる。雷撃が部屋を焼いて、嫌な臭いが鼻孔を突き刺す。風が、部屋の壁をずたずたに切り裂いた。空気の塊が、部屋の壁に大きな穴を空けた。

なのに。

「何で……よ？ 何で無傷なのよ正義の味方あッ！！」

竜野だけは無傷だった。電撃や炎で焼かれもせず、風で切り裂かれない。どういった力を使えば、こんな結果が残るのだ。

そこで、荒幡は竜野を中心に発現した謎の力が、AIM拡散力場を見るようにしなくても普通に目視できることを知った。いや、正確には不可視なのだが、何故かそこにあるのが分かるのだ。

異様な存在感を放つ『夢』や『幻想』のような謎の莫大な力。

まるで、この世のものではないと荒幡は思った。オカルトを信じているわけではないが、天界や神界とか言われそうな、この地上世界より高次な上位の世界のモノ。科学の研究を突き詰めると、時折生じる『偶然』^{きせき}と呼ばれるもの。

そういう荒幡の知識^{かがく}だけでは『説明のつかないもの』が竜野勇輔を中心に渦巻いていた。

もしや、目の前の少年はそんな、奇跡のような力を造りだしているのか。

そこで荒幡は、ダメだ、と嘆くように言った。散々目の前の少年の言葉に心を揺らされ、今は常識から外れた思考をしている。

（こんな思考に至っている時点で、もうダメだ……）

恐怖がある地点を越えたせいか、今の荒幡は、自分で思ってる以上に冷静になっていた。

目の前の存在に対して泣くわけでも、笑うわけでも、呻くわけでも、自身の不幸を嘆くわけでもなく、ただ諦めたように手を顔に当てて、荒幡はバケモノでも見るような目で竜野に向かって言った。

「は、はは。貴方、本当に人間なの？」

その問いに答えは返ってこなかった。

その代わりに、竜野が右手を伸ばして、僅かに手首を動かした。大した拳動では無かった。まるで、手招きでもするような仕草だった。たったそれだけの取るに足らない動き。

喧嘩においても、殺し合いにおいても、意味など一切持ちそうにない動作。

にも関わらず、だ。

直後、荒幡は意識を失って、音も無く倒れた。

「風紀委員ですの！ 報告を受けて参りました！ 大人しくお縄……に……？」

白井黒子は、待ちうける敵に舐められぬように威勢よく言葉を放った、が、そこに居たのは、ボロボロになって倒れている竜野と、大量の血を流し、その身を赤黒く染める雨崎。そして、おそらく今回の事件の犯人と思われる何故か無傷で意識を失っている女だった。まだ二人がボロボロなのは分かる、それで犯人を倒して疲労や怪我で意識を失ったと充分考えられるからだ。だが、倒した犯人が無傷なのは理解できない。どうやったらこんな風になるというのだ。

黒子は佐天に連絡を受けてこの、もう使われなくなった研究所に来了。だが、いざ来てみると既に戦闘を終えた三人がそれぞれの形で意識を失っていたのだ。

危険な戦闘が起これと予想していたので、警備員も呼んだのだが、

これなら先に呼ぶべきだったのは医者の方だったのかもしれない。
黒子が下手に動かすのも不味いので、警備員の救護班を待つことにする。

（それにしても……）

黒子はもう一度、事件の犯人である女を見る。

（一体どんな能力があればこんな倒し方ができるんですの？）

様子を見る限り竜野が解決したのだろうが、彼にそんな力は無いはずだ。

黒子は今回の事件のせいで、また竜野勇輔という人間が分からなくなっただった。

人間的にも能力的にも。

竜野が目覚ますと、そこは本日二度目の病室だった。

と、思ったがどうやら日にちは一つ進んでいたらしい。病室の窓から日が差して、風がカーテンを揺らしている。まるで映画のワンシーンのようだ。

結局、雨崎は助かったのだろうか。そして、竜野はどうしてここに居るのだろうか。色々疑問が頭の中で湧いてくる。

まだ働かない頭で、気になるなー、と考えていると、病室のドアが勢いよく開けられた。

「やつほー」

「やつほーって……どんだけ元気なんだよ……雨崎は」

「ふっふーん。あの時は血が足りなくなってただけだし、まあだけど、一日でここまで回復するなんて、流石学園都市の医療技術プラス天葉ちゃん驚異の回復力！」

お見舞いに来たのはそれはそれは元気な病人、雨崎天葉だった。にこにこ笑顔で病室に入ってきてくれるのは嬉しいのだが、騒ぎに来たのなら即返って欲しいと思った竜野だったりする。

「だって雨崎は再生能力系じゃん……まあ、無事でよかったよ。正直全然覚えてなくてさ、途中から記憶がぶつつり」

竜野の言葉を聞いて、雨崎は申し訳なさそうな顔で言う。

「怖かった？」

理由がなんであれ、雨崎が竜野を巻き込んでしまったのだ。それで怖い、と思わせてしまったのなら雨崎は謝るべきだと思ったのだ。「怖かった。うん、超怖いー」

「……ごめ——」

「だけど、あのまま雨崎を見捨ててたことを考えると、もっと怖い。あと、謝るなよな。雨崎が俺を巻き込んだんじゃないんだ、俺が勝手に首突っ込んだだけなんだからさ」

「それは……私のために？」

「残念、俺のためにだね」

即答した。

雨崎は驚いたように目を見開くと、しばらくしてクスッとわずかに顔を綻ばせた。

「そっかぁ。自分のためか、それは残念だな」

雨崎の笑顔につられる様に竜野も笑みを浮かべる。

そう、自分の為に走ったのだ。雨崎のところへ向かったのだ。下手踏めば死んでもおかしくない場所にまで首を突っ込んだのだ。ただ単に学校が始まったとき、そこに雨崎がいなくなっていた、なんてことが嫌だったから。

単に『繋がり』っていうのを一つでも失うのが嫌だったから。

自分勝手に佐天を悩ませて、自分勝手にやって傷付いたのだ。それを雨崎が引け目に思う必要はない。

自己満足でこちらが一方的に思っているだけかもしれないけど、雨崎天葉との『繋がり』がまだ断ち切れていない、そう思えるだけで竜野勇輔は充分だ。

「ああ、そうだよ。自分のためだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3991o/>

とある少年の英雄目録

2011年3月24日20時35分発行